
リリカルなのはStrikerS ~黒炎竜を従える者~

夢月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはStrikers ～黒炎竜を従える者～

【Nコード】

N94580

【作者名】

夢月

【あらすじ】

非日常への転換、発覚する力。

将来に悩む主人公すみたにひろあき墨谷広暁。

そんな彼がミッドチルダで見つけたものとは？

そして、彼が見つけた将来の在り方とは？

広暁のミッドチルダでの生活が、今始まる。

この小説ではオリジナル設定が出て来ます。また、オリジナル主人公です。

プロローグ（前書き）

今までは読むだけだったのですが、皆様の作品に感化されて私も書き始めることにしました。若輩者ではありますが、何卒よろしくお願いたします。

プロローグ

その日、彼に一体何が起きたのだろうか？

大学の後期が始まる日。

彼はオリエンテーションへと向かい話を聞き終わると、いつもつるんでいる学友と共に早々に帰宅した。

講義は何をとるか、どの研究室を希望するか、就職活動はどうするか。

大学3年生の後期に相応しい会話をしながら。

そして、家に着いた後、いつものように車でアルバイトに向かう。就業中はきっちり働いた。

その後着替え終わると、バイト仲間と別れて駐車場へと向かった。

「家に帰ったらどうするかな？」

機械族デッキが作りかけだから完成させようかな？

あ、講義の履修登録もしないといけないよな。

帰りにコンビニに寄って、菓子買うのもいいな。」

彼はそんなことを考えながら車の鍵を開け、助手席に着替えの入ったカバンを放り投げた。

そして自身も運転席に座った瞬間……

真昼間の公園のベンチに座っていた。

先に述べておくが、彼はこのような不可思議な現象には慣れていない。

超能力者でなければ、幽霊や妖怪を見たことがあるわけでも、ましてや時空間をとぶことが出来るわけでもない。

ちよつと探せばいそうな大学生である。

そんな彼が開口一番言ったことは…

「どついつことなの…」

まあ、当然の反応だろう。

車に乗ろうとしたら、公園のベンチに座っていた。

驚かない方がおかしい。

そんな状況でも、彼は持ち前の冷静さと俯瞰的な思考で今の状況を考察する。

今日は大学に行った。

帰った後、家で少しゲームをやり、車でアルバイトに向かった。

そして、アルバイトが終わり駐車場へと向かっていた。

ここまでではいい、問題はここからだ。

車に乗り込み、運転席に座った瞬間：公園のベンチに座っていた。どう考えてもここがおかしい。

なぜ車の運転席からいきなりベンチに移動するのだ？

これは夢か？幻か？

そんなことは分からないが、考えて分かるものでもないのでこれらの思考は放置。

現状に至るまでの過程に対する考察はここで終了。

現状での考察を始めよう。

まずは自身の状態だ。

体は別段変わったところはないようだ。

服装は白いノースリーブの上から、赤地に白や青の線が入った上着を2回ほど腕捲りして着ており、七分丈風。

ズボンカーゴパンツであり、ベルトは白で穴が上下に2つあるタイプ。

靴は防水加工が施してある黒いスポーツシューズ。

右腕には黒のリストバンド、左には銀色のアナログ式の腕時計。問題ない。

カバンの中身も見てみよう。

着替えであるカッターシャツと汗拭き用のタオル。

主にアルバイトの予定が書き綴ってあるポケットサイズの手帳と、手帳サイズの小さいボールペン。

たいして使っていないリップクリームと8×4。

緊急用の折り畳み傘。

問題ない。

ポケットの中身も確認する。

カーゴパンツ特有の大腿部にあるポケットには、

ハンカチ・ティッシュと携帯電話（ちなみに携帯電話は圏外だった）。

そして後ろポケットには財布（中身は15640円）。

ズボンの前部分のベルトを通す穴には、100均で買った銀の笛が飾りとして付いている。

問題ない。

自身と持ち物に変わったところはなかった。

ここで彼は「自分は車に乗った時の状態からこの状況になった」と考える。

もしも服装が変わっていたり、カバンの中に1kg未満価格で数千円するような粉が入っていたら、更に色々考える羽目になっただろう。

そして、これからどうするかについての考察が始まる。

今いる場所はどうかやら海浜公園のようであり、眼前には海が広がっている。

彼の左斜め前方には時計台が建っており、その針は13時50分を指している。

彼が車に乗ろうとしたのはアルバイトが終わった時間から考えて21時20分ぐらいであるから、7時間半程戻っている。

携帯電話と腕時計の時刻表示を直すことにする。

行動するための準備は終わった。

現状をより正確に把握するために情報を集めるとしよう。

昼過ぎの公園は人がいないようで、さつきから誰も通らない。通る人を見てここがどこなのか、どのような情勢か、文化レベルはどの程度か。

ある程度のこととは推測出来るのだが、通らないのなら仕方ない。

今。彼はこの世界で第1歩を踏みしめようとしている。

波乱万丈とはいえないが、ある程度は劇的で、ある程度は平凡な人生を歩んできた彼。

そんな彼がこの世界でどのように過ごし、影響を受けるのか？

それを知るのは彼だけである。

プロローグ（後書き）

文章の固さがいなめませんね…徐々に直していきたいと思いますので、長い目で見守っていただけると嬉しいです。

第1話「偶然と必然」(前書き)

第1話です。主に三人称で話を進めていきますが、<side>となった時は一人称になります。また、sideの切り替え、時間が空く時などは「」を使いますのでそれを目安にして下さい。

第1話「偶然と必然」

ここはミッドチルダ。数多の次元世界の中心地であり、時空管理局の地上本部が置かれている世界。

そこにある古代遺物管理部機動六課、通称機動六課に、次元震の調査の任務が舞いこんだ。

「次元震だつて？はやてちゃん」

「せや。ミッドチルダの郊外にある海浜公園で、小さな次元震が観測されたんや。

規模は小さいし、放つといっても何の問題も無いんやろうけど…。

こんな事でも調べて報告せんとあかんからなあ。

スターズ分隊を連れて調査に行つてくれへん？」

「了解しました。高町なのは一等空尉、以下スターズ分隊3名、出撃します」

こうして、スターズ分隊のメンバーである高町なのは一等空尉、ヴィータ三等空尉、

スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士の出撃が決定した。

この海浜公園はとても広いようで、街中まで行くのにはまだ時間がかかりそうである。

しかし、それでもいくつかが分かったことがある。

1つ目は、ここはもといた惑星、もしくは世界とは違うということ。少なくとも彼がいた国：つまり日本なのだが。

空間にディスプレイが浮いていることは無かった。

ましてや、そのようなことを実現させる技術も存在しなかった。

2つ目。これは1つ目と関連してくるのだが、使われている言語の違い。

公園内にある注意書きや自動販売機の文字を読む限りでは日本語ではないし、

英語でもない。

文の構造を見る限りでは英語と同じようなので、彼は文を携帯電話で撮っておくことにした。

別の文章を読む際に少しでも助けになればと思つてのことである。

3つ目。この世界には魔法があるということ。

彼がディスプレイでニュース番組を見た時、魔法に関する特集をやっていたのだ。

日本語で聞こえたのは魔法の所為だろうか？

しかし彼の想像したような魔法とは違い、この世界の魔法は科学の

発展したものであるようだ。

この時、彼のいた国も数十年経つたらこうなるのかなあと考えたのは内緒だ。

今までに分かったことを手帳に書き込み、彼は公園の芝生に座っていた。

既に20分ほど歩いたのだが、まだ公園を抜けるには至らない。

最初にいた場所から考えて、あと10分ほど歩けば公園を抜ける見込みだ。

彼はそう結論付けると、再び立って歩き出した。

歩き始めて数分。公園にある林の横を歩いていると、何か気配を感じた。

まるで誰かに見られているような、そんな気配。

やっているスポーツ柄、彼は気配を察知するのが得意である。しかし、今感じる気配は何かが違う。

人間の気配ではなく、ましてや犬や猫のような動物の気配でもない。何とも気持ち悪い無機質な感じのする気配なのだ。

そんなことを考えていると、気配の正体が姿を現した。

「なあにこれえ」

彼の目の前に現れたのは、細長いカプセルの形をした

中央に黄色い目があるロボットであった（一瞬ワイズ・コアを思い浮かべた）。

一体このロボットは何なのだろうか？

こんなに文明が発達しているなら、警備用のロボットがいてもおかしくはない。

そんなことを考えていると、中央にある黄色い目が光りだした。何が起ころのかと思いい見ていると…

彼は感覚的に危機を感じ、右に避けた。

すると、彼の後ろ数m、地面に直径1m程のクレーターが出来ているではないか。

目の前のロボットは彼に向かってレーザーの様なものを発射したのだ。

「何すんだこいつ!？」

当然の反応である。いきなりレーザーを発射されたら誰だって驚く。

しかし、彼は逃げる事が出来ない。というより、逃げてても無駄なのだ。

発射されたレーザーのスピードは目算で凡そ時速200km。

彼とロボットの距離はおよそ5m。

つまり、秒速にして約56m/秒。

避けるには、反応速度が0.09m/秒以上でなければならぬ。

彼の反射神経では避けることは不可能だ。

ましてや、背中を向けて走って逃げれば格好の的だろう。

レーザーが発射される時は中央の黄色い目が光るので、

その動きとロボットの向きにさえ気を付けていれば避けることが出来る。

…連射されたら終わりであるが。

彼が思考を巡らせていると、林の奥が少しうるさくなってきた。

嫌な予感がするが、確認せずにはいられない。

すると、さらに数十体ものロボットがでてくるではないか。

「これはさすがに…まずいな」

一体ならいざ知らず、数十体ものロボットのレーザーを避け切る。

そんなことは、可能・不可能を通り越して議論の余地すら無い。

「俺の人生…ここで終わるのかな…」

そんな悲観的なことを考えていた時、彼は違和感を感じた。

「レーザーを…打ってこない？」

ロボットがレーザーを打ってこないのだ。

敵だと認識したならもっとレーザーを打つであろうし、間を置く意味はない。

不審者を追い詰めるには陣計が取れていないし、数が多すぎる。

それとも、レーザーを打てない理由があるのか？

元々連射出来ない構造になっていたり、チャージに時間がかかるのか？

いや、これほどのロボットだ、そんなちんけな構造をしているわけがない。

いくら考えても彼は答を見出すことが出来ない。
しかし…その理由は時機に分かることになる。

彼女達は今、ヘリで海浜公園に向かっている。

「次元震が起きたと思われるポイントまでもうすぐなんで、降下準備頼みますね」

ヘリのパイロットであるヴァイスが確認する。

「分かりました。皆、準備出来てる？」

茶髪にツインテールの少女が確認をとると、

「おう！ばつちりだぜ！！」

と、赤髪にゴスロリ服の少女。

「大丈夫です！！」

と、青髪にどこか格闘士を連想させる服装の少女。

「問題ありません」

と、そっけなく事務的に答えたオレンジ髪にツインテールの少女。

「皆、今回は次元震の調査だけど気を抜かないようにね。何か起きてからじゃ遅いんだから」

「なのはは心配性だなあ。次元震っていつても、結構小さかったんだろう？」

そんなに心配する必要はないんじゃないか？」

「私は早く帰ってお昼を食べたいなあ。訓練が終わったと思ったらいきなり出勤要請がくるんだもん」

「馬鹿スバル！気が抜けるようなことを言ってるんじゃないの！仕事なのよ！？」

ほとんど談笑になっているが、これは気遣いによるもの。
なのはとヴィータが気を利かせてこうゆう雰囲気になるように仕向けたのだ。

彼女達スターズ分隊にとって今回が3回目の出撃である。

1回目や2回目ほど固くはなっていない。

しかし、それでもこの新人2人はまだ自分の緊張を隠し切れていない。

それを考えての言動なのである。

はたから見ている分には可愛い。

もっとも、当の本人達はそんな気遣いに全く気付いていないのだが。

「あれは!?!」

「どうしましたヴァイスさん?」

「ガジェットだな...?型が約30機、一般人を襲ってやがる」

「...何ですって()だって()だと()!?!」

第1話「偶然と必然」(後書き)

1話目です。次話ではあのモンスターが出現します。

第2話「黒炎竜飛翔」(前書き)

第2話です。タイトルで分かる方もいると思いますが、あの竜が登場します。

第2話「黒炎竜飛翔」

ロボットが襲ってこないことに疑問を感じていると、突然後ろ…というか上から声をかけられた。

「大丈夫ですか!？」

驚いて振り向くと、そこには杖を持ち、白い服を着た女性がいた。飛んでいるのには一瞬驚いたが、ロボットも浮いているのですぐにその動揺は消えた。

「早くここから離れてください!ガジエットの相手は私達がします!」

「ガジエット!?!このロボットのことですか!?!」

「そうだ!早く逃げる!」

質問に答えたのは別の女性であった。

手に柄の長いハンマーのような物を持ち、赤いゴスロリのような服を着た小柄…というか若い女性である。

例によって飛んでいる。

色々と聞きたいことはあるが、彼女達はこの地域の警察、もしくは軍隊の様なものに属しているのは何となく分かる。

服装が色々とおかしいのは、魔法という文明があるからだろうか。

「ありがとうございます!」

言うが早いか、彼は一目散に逃げ出した。
どちらかというと短距離ランナーだが、伊達に筋力トレーニングと
してジョギングはしていない。
ガジェットが見えなくなるまで全力疾走した。

「ハアハア…ここまでくれば大丈夫か？」

どうにかしてガジェットが見えない位置まで走ってきた。その距離
約600m。
全力疾走出来るような距離じゃないが、そこは火事場の何とやら。
何とかなるものである。

ガジェットが追ってこないことに彼は疑問を感じたが、彼女達に攻
撃目標を変更したのだろうと納得することにした。

「この際どうしようかな…」

しばらく長考した後、今後の行動を決めた。

「とりあえず時間を見て、彼女達の所に戻るか。色々聞きたいこともあるし」

それが妥当であろう。彼女達は警察や軍隊の様な組織に属しているのは先ほど考えた。

そういった所に勤めている人なら、一般の人よりこの国…いや世界と言った方が正しいか。

この世界の事を分かりやすく説明してくれるはずだ。

「それまでは…こちら辺でじっとしてた方がいいよな。下手に動いて道が分からなくなっても困るし」

彼は今からの行動を決めると、公園に備え付けられている水飲み場へと向かった。

いきなりのワープ、久しぶりにフルに使った頭、そして先ほどの600m全力疾走。

喉がカラカラである。

必要以上に蛇口をひねり、垂直に立ち上る水を飲み続ける。

「はあ…美味しい！水ってこんなに美味かったか？」

その時の本人の状態で、味なんていくらでも変わるものだ。ある程度飲んだ後、彼は芝生に寝っ転がった。

しばらく休もうと考え、目を閉じようとしたが、そうは問屋が卸さない。

気配を感じて起き上がると、先ほど見たのと同じ形のガジェットが5機、

彼の前方10mぐらいのところにいる。

彼女達が倒し損ねたのか、それともさっきのとは別の集団か。考えても分からないが、今の状況は最悪だということが分かる。

「逃げ切る…ってのは無理だよなあ」

本能的にそう感じたが、その考えは間違っていないさそうだ。

ガジェットが五機、一斉に黄色い目を光らせ始める。

距離的に反射神経だけで避け切れないこともない。

しかし、一機だけならともかく五機全部のレーザーを避けるのはまず不可能だろう。

「俺の人生…ここで終わりかな…ってさっきも似たようなこと言っただな俺」

自分に対して突っ込んでる時間が勿体ないような気がするが、気にしないでおこつ。

もう彼の人生は終わるのだから。

そう悟った彼に向かってレーザーが一斉に撃たれた瞬間。

彼の尻、正確にはズボンの尻ポケットに入れた財布が光り始めた。そして彼の目の前に現れたのは…

「ホル…ス…？」

赤みがかった銀色の体躯に雄々しい翼。燃えるような真紅の瞳。額

には青い鉱石。

全長10mは優に超える“ホルスの黒炎竜 LV8”であった。

第2話「黒炎竜飛翔」(後書き)

ホルスの黒炎竜 LV8。かっこいいですね。

第3話「それぞれの戦い」(前書き)

そろそろストックが少なくなってきました…。

第3話「それぞれの戦い」

『ウイングロード』によって空に作られた道を、スバルが速度を上げながらガジェットに突っ込む。

「これで…ラストオ!!」

右手に装着されている『リボルバーナックル』が回転数を上げ、ガジェットのレーザー発射部分を打ち抜く。

衝撃は放射状に広がり、ガジェットはバラバラに砕け散った。

「思ったよりも早く片付いたな」

「それだけスバルとティアナが成長してるってことじゃないかな？」
ガジェットとの戦闘を終え、飛んでいたヴィータとなのはが地上に戻ってきた。

「えへへ…。ティア、なのはさんに褒められたよ〜!」

スバルはティアナに抱きつこうとする。

しかし、ティアナはそれを半歩左に移動することで抱きつき攻撃を避けた。

ちやっかり右足を出してスバルをこけさせたのはさすがである。

「浮かれてるんじゃないの!さっき私の射程線に入ったの忘れたの!？」

危く打つところだったでしょ!」

「あれはガジェットが急にフォーメーションをとったせいで気が動転しちゃって…」

立ち上がりながら弁明しようとするが、ティアナの口撃は止まらない。

「あんだこれで6回目よ、6回目！」

1回目の出撃で3回、2回目の出撃で2回。そして、今回の出撃で1回。

全部私が気付いたから良かったものの、もし私が気付かなかったらどうするのよ！」

「それはティアが悪いんじゃない…」

「何ですって!?!」

2人の口論がただの口喧嘩になってきたところで、

「ほらほら2人共、喧嘩しないの。今回の調査の反省会は戻ってやらねばいいでしょ?」

「はい…」

「はい…」

なのはが仲裁に入った。最早お手の物といった感じである。貫禄が滲み出ているようで怖い。

「さーて、この後どうする?」

ガジェットは破壊したけど、次元震の調査がまだだよな？」

最初に今後の行動を提案したのはヴィータである。元々それが目的で来たのだし、適切な提案であろう。

「さつきガジェットに襲われてた人に話を聞いた方がいいんじゃないかな？」

何か知ってるかもしれないし」

なのはがヴィータの提案に答える。

次元震の調査も大事だが、ここは彼に話を聞くのが先決であると判断したのだ。

「そうですね。」

レリックが無いのにあんなにたくさんガジェットが出てくるのはおかしいですし。

そのガジェットに襲われるというのも気になります」

ティアナもなのはの意見に同意する。

「じゃあ、早く探しに行きましょう！方向は……」

スバルが彼の逃げて行った方向を指さそうとしたその時。

彼女らが行動を示すのを見計らっていたかのように、地鳴りのようなものが響き渡る。

始めは地震かと思ったが、次第に強さを増す揺れは地震で無い事を示している。

「……!?」「……」

4人は、一斉に何かを感じ取った。

「何だ今のは!?!」

ヴィータが驚きながら言う。

いきなりのもので飛ぶことも出来ずに地面に倒れている。

「地震!?!」

一人だけ見当違いのことを考えているスバルが叫ぶ。

「違う!これは…召喚魔法!?!でも何か違うような…!?!」

スバルの意見に反対するようになるのはが答える。

「ちょっと待って下さい!この揺れの方角って…!?!」

「あいつが逃げて行った方角だ!」

ティアナの言わんとしていることに続けるように、ヴィータが叫んだ。

「皆、行くよ!」

「おう!」

「はい!」

< 広暁 s i d e >

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

「尻ポケットにある財布が光ったと思ったたら、目の前にホルスの黒炎竜 LV8 が現れた」

な…何を言ってるのか分からないと思うが、俺も何が起きたか分からない。

頭がどうにかなりそうだ…。

幻覚だとか3D映像だとかそんなチャチなもんじゃ断じてない。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

……と、現実逃避をしている場合じゃない。
目の前にいるのは紛れもなく『ホルスの黒炎竜 L V 8』。
俺の財布に入っていたものだ。
そのカードがどういいうわけか実体化して俺の目の前にいる。

理由は分からないが、カードが実体化してガジェットのレーザーから俺を守ってくれたのだ。
アスファルトの地面を陥没させるレーザーだが、身に堪えている様子は微塵も感じられない。

アニメの世界でならしよっちゆうカードの精霊は出てくるが、まさか現実のものになるとは思わなかった。

そんなことを考えていると、ホルスがこちらを振り返る。
鋭い眼光に、俺は一瞬たじろいだ。

『アレか？見せかけで超ビビってるな？』

そんなことを言っているような眼である。

「ふざけんじゃねーよ」

そんな意思を込めながら、俺はホルスを軽く睨み返した。
色々と考えたいところだが、それはまた後。
今は目の前の敵を倒すことが先だ。

……ってどうやって戦ったらいいんだ？

このままじゃホルスに任せきりってことになるけど。とりあえず…話しかけてみるか。

「一緒に戦ってくれるか？」

「……………」

……沈黙が痛い。何か話してくんねーかな。

「グオオオオオ……」

「え！？ちょ！？何する気！？」

いきなり手で捕まえられた。さすがにこれには驚いた。まさか投げ飛ばれたり…しないよな？

そんなことはなかった。ホルスは俺を自身の肩に乗せたのだ。これは……一緒に戦ってくれるということか？
そうなのか、ホルス？

「グオオオオ……」

俺の考えに答えるかのように、ホルスは短く唸る。そーか。戦ってくれるか。だったら戦うぞ、ホルス。生きるためにも、このガジェット共を粉碎する。

「ホルス、飛べー！！」

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

俺の掛け声と共にホルスは飛び立った。
あまりの加速度に吹き飛ばされそうになるのを、首にしがみついて
必死に耐える。

こいつらを倒すプランは決まっているが。

そのためにはまずこいつらを一か所に集めなければならない。

地上でやってもよかったんだけど、さすがに公園を燃やすのはまず
い。

となると、この広い空中で奴らを一か所に集めなければならない。

……と思っていたのだが。

ガジェットは五機まとまって俺を追いかけて来た。

さすがにこれには驚いた。

攻撃が効かない相手にまとまって突っ込むなど愚の骨頂。

もしかしたらガジェットには戦略といったものがプログラムされて
いないのだろうか？

だったら予定変更だ。

プランの最終段階、もといガジェットを殲滅する。

そーいえば…ホルスの技名って何だったかな？

アニメでやってたけど思い出せない……。

確か、何とかフレームだったような気がするんだけど……。

ダークネス・フレーム。違う。

グラヴィティ・フレーム。違う。

ブラック・フレーム。近い。

ブラック…メガ・ギガ・テラ・ペタ。どれだったかな？

……っておい!？

そんなこと考えてる間にガジェットがすぐそこまで追って来てるし！
こうなれば一か八か、俺の感性に懸ける!!

「ブラック…メガフレイム!!」

「ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

ホルスの口から黒炎が放たれ、ガジェットを焼きつくした。

その炎の勢いは止まるところを知らず、ガジェットを溶解させてしまった。

一体何度何だ？ホルスの吐く炎は。

………技名間違えてなかったみたいでよかった。

溶けたガジェットは海に落ち、その熱で大量の蒸気が発生した。

…ガジェットの始末どうしようか？

地上に降りた後、俺は開口一番ホルスに言った。

「ありがと。お前がいなきゃ俺は死んでた」

「グオオオ……」

どういたしまして、と言ったのだろうか？気にすんなよ、と言ったのだろうか？

この状況で真っ先に感謝の言葉を言えるのは自分の性格故だろう。何かと損する性格だが、こういう時にはこんな性格でよかったな—と思う。

その後、向かい合って話し合うことにした（俺がかなり見上げる感じ）。

……したのだが……。

「何で実体化出来たんだ？」

「グオオオ」

「レーザーくらったけど大丈夫か？」

「グオオオ」

「技名合ってた？」

「グオオオ」

「何で炎黒いんだ？」

「グオオオ」

「ぶっちゃけLV6のが強いよな？」

「グオオ…オオオオオ!?」

ちよつと怒った。でも話は聞いてたみたいで良かった。

いくつか質問したけど、何を言っているのか分からない。

というか、全部同じに聞こえる。

ホルスは俺の言葉が分かるみたいだけど、俺はホルスの言葉が分からない。

これじゃ会話とは言えんよなあ。

さっきは何となくホルスが何を言いたいのか分かったんだけど。

あれは気持ちが昂ぶってたせいだろうか？

俺はどうしても自分の感情、特に驚き・怒り・高揚感といった感情を抑え込もうとしてしまう。

だからこそ、それらの感情は出すところで出しているのだが。

と、いけない。自分の性格について考察している時ではない。

ホルスが俺の言葉を分かるだけまだよしとするか。

そんなことを考えていると……

「機動六課です。話を聞かせてもらえますか？」

先程会った白い服の女性に話しかけられた。

第3話「それぞれの戦い」(後書き)

なんだかんだで第3話。

これからも続けられるように頑張ります。

第4話「非日常への序章」(前書き)

第4話です。

リアルな生活がこれから忙しくなりそうです…。
更新速度が落ちるかもしれませんが、よろしくお願ひします。

第4話「非日常への序章」

<なのはside>

私達は今、さつき感じた魔力震源の方向へと向かっている。
あんなに大きな魔力、リミッターをかけているとはいえ私の魔力以上かもしれない。

最初は召喚魔法と思ったが、どこか違うような気がする。
あの魔力は一体…？

「関係あると思うか？なのは」

「何のこと？ヴィータちゃん」

考えていると隣を飛んでいるヴィータちゃんに話しかけられた。

「さつき逃げたあの民間人のことだよ。」

次元震があった場所に行ったらガジェットに襲われている民間人。
んで、そいつの逃げた方向からでかい魔力反応。どう考えても無関係じゃないだろ」

ヴィータちゃんの言う通り、無関係とは思えない。

本来ガジェットは、レリックがあるところに現れるはず。

だけど今回はただの次元震だから、ガジェットが現れるはずは無い。

次元震があったことを考えると彼が次元漂流者の可能性もある。
だけど、次元漂流者はまだ数えるぐらいしかいないし断言出来ない。

「無関係とは思えないけど、まだはつきりとは言えないよ。それに、彼が召喚獣に襲われてるかもしれないし」

「そうだな。今は最悪の事態を想定して動くとするか」

「そうだね」

あれこれと考えても仕方ない。

ヴィータちゃんの言う通り、今は最悪の事態を想定して動くことにしよう。

そんなことを考えながら飛んでいると、それは突然来た。

「グオオオオオオオオオオ!!!」

「????!?!?!」

空気を震わすほどの大音声。

それが前方で空に飛び上がった竜だと認識するのに時間はかからなかった。

「何ですかあの竜は!?!」

「あれがさっき感じた魔力の正体!?!」

スバルとティアが動揺した声で叫ぶ。

私も思わず叫びそうになったけど、私は彼女達の教導官。

私を取り乱しては彼女達を混乱させることになる。
取り乱してはいけない。」

「どういうことだ、なのは！？竜の肩にさっき逃げたあの民間人が乗ってるぞ！！」

「私にも分からない。
でも竜の肩に乗っているということは、恐らくあの竜は彼が呼び出したもの。」

もしかしたら、彼は魔導師かもしれない」

「だとしたらあいつはさっき何で逃げたんだ？
あんなに強力な魔力を持つ竜だ、ガジェット程度なら簡単に倒せる
だろ？」

ヴィータちゃんの言う通り、あの竜は今の私を超える魔力を持っている。
いる。

ガジェット数十機とはいえ倒すのに時間はかからないはず。
それなのに彼はなぜさっきは召喚しなかったのだろうか？

そんなことを考えていると竜に向かってガジェットが五機、下から
追跡を始めた。

「いけない！皆、行くよ！！」

私がそう言おうとした正にその瞬間。

「ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！！！！！」

竜が黒い炎を吐き、ガジェットを燃やし尽くした。
いや、溶かし尽くした。

あれ程の炎、キャロのフリードですら吐けない。

「私達が出るまでもなかったな」

ヴィータちゃんが半ば諦めるように呟いてるけど、私も同じ気持ちだ。

フリードのブラストレイは炎を吐いて攻撃する技。

けどあの技は高密度に圧縮された炎をぶつけることによる破壊に意味があり、燃烧は二の次だ。

あの竜は直線的かつ断続的に炎を吐いた。

それでいて炎の密度もさることながら、ガジェットを完全に溶かし尽くした。

一体あの竜は何？

そしてその竜を従えている彼は一体…？

「なのは、どうする？あいつら下に降りて何か話し始めたぞ」

「とりあえず、ヴィータちゃんと私で話を聞いてみよう。

スバルとティアはここで待機していて。

まだ彼らが安全だと決まったわけじゃないから念のために…ね」

「はい！」

「行くよ、ヴィータちゃん」

「おう！」

〈接触〉

「機動六課です。話を聞かせてもらえますか？」

「ん？」

彼とホルスが向かい合って話していると、突然声をかけられた。彼にしてみたら完全に面を食らった状態のだが、驚きを顔に出さずに答える。

「単刀直入に聞きます。あなたは何者ですか？」

「何者ですか？ 聞かれても…話すと結構長くなるんですけど…」

「んだとてめえ！？ 自分の状況分かってんのか！？」

彼の至極当然な返答にヴィータが切れる。

彼の言ったことに怒るのももつともだ。

何せ彼は次元震が起きたところでガジェットに襲われていた。

そして今、彼が召喚した竜(?)によってガジェットを溶かし尽くしたのだ。

どう考えても彼は怪しい。

ヴィータが思わずアイゼンを振りかぶろうとすると、なのはがそれを手で軽く制しつつ丁寧な屈調で答えた。

「失礼しました、では私から名乗らせてもらいます。

私は時空管理局機動六課所属、高町なのは一等空尉です。

こちらはヴィータ二等空尉です」

「俺の名前は墨谷広暁。職業は…大学生です」

「「大学生!?!」」

大学生というフレーズに2人が驚く。

それはそうだろう。

何せガジェットをまとめて溶解させる炎を吐く竜を従えている人間がただの大学生なのだ。

2人はてつきり時空管理局所属の魔導師だと思っていたので思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「驚いているみたいなんで、結論から先に言ってもいいですか?」

「「ええ、どうぞ…」」

「俺は…この世界の人間じゃありません」

「「……なるほど」」

「あまり驚きませんか？」

「いえ、納得したんです」

「ん？どういうことですか？」

「あなたは…次元漂流者の可能性があります」

「次元漂流者？」

そして、なのはかが次元漂流者について説明し始めた。彼女の言ったことをあまり理解出来ていかいようだが、自分が別の世界から来た迷子だということは分かったようだ。

しかし、それでも彼はまだ納得出来ないところがある。

「次元震の影響が主な原因なんですよね？」

「实例が少ないのではつきりとは言えませんが、それが一番多いのは確かです」

「俺、車に乗ろうとしたらこっちの世界に飛ばされたんですけど…？」

「私にもそれは分かりかねます。もしかしたら車そのものが次元震の影響を受けた可能性もありますし」

そんな感じで広暁となのはが話していると、突然ヴィータが会話を遮った。

「なあ、広暁…だったか？」

「そうですね？」

「さっきからお前の竜が凄い視線でこっちを睨んでるんだけど…」

言われて広暁が振り返ると、広暁を睨んだ時の比じゃないレベルでなのはとヴィータを睨んでいるホルスに気付いた。

なのはは無視していたようだが、ヴィータはその眼光に耐え切れなくなつたようだ。

「すみません…ホルス、この人達は敵じゃない。警戒しなくてもいい」

広暁が言うと、ホルスは眼光を緩めた。まだ警戒はするようだ。

「話すと長くなりそうですから、一度機動六課まで来てもらえますか？」

私達はあなたを保護します」

「保護、ですか？」

「次元漂流者を保護するのも私達の仕事ですから」

「そうですね…どうせ行く当てもないですからね。よろしく願います」

こうして、広暁と機動六課の2回目の接触は幕を閉じた。
この後、なのはと広暁は意外な共通点を知ることになるが、それを
今の彼らが知る由もない。

第4話「非日常への序章」(後書き)

第4話終了です。

何分未熟なところがありますので、提案・感想・注意点など、
どしお願いします。

第5話「パラレルワールド」(前書き)

今回からオリジナル設定が出て来ます。

そついうのが苦手な方、原作準拠がいい方は、申し訳ありませんが
読まないことをお勧めします。

第5話「パラレルワールド」

「まさかこんなことになるとはなあ〜」

ここは時空管理局機動六課部隊長室。

帰還したなのはの報告を受けたはやてがぼやいた。

「ただの次元震の調査が…まさか竜を召喚する人間を保護することになるとは」

その理由が、先ほど保護された次元漂流者、墨谷広暁である。今までも次元漂流者を保護した実例はいくつかある。

しかし、今までの次元漂流者はただの民間人だったのだ。

それでも、彼ら全員が管理世界の出身だったからまだいい。

もっとも、広暁も管理世界の出身なのだが。

そう。彼女達と同じ…地球の。

「にしても…愛知県に伯氷市うへひこなんてあったかいな？」

「私の知る限りではないと思うんだけど…」

はやての問いになのはが答える。

そう、広暁の出身である伯氷市は彼女達のいた世界。

つまり地球。もっと詳しく言えば日本。

そこに伯氷市が無い可能性が高い。

「まあ、今から調べてみるからちょっと待っててや」

「うん、分かった」

…数分後…

「なのはちゃん、やっぱり愛知県に伯氷市は存在せーへん」

「じゃあやっぱり…」

「せや。彼は平行世界パラレルワールドの地球出身の可能性が高い」

広暁は平行世界の地球出身の可能性が高い。

これにははやくも頭を抱えざるを得ない。

今までの次元漂流者の場合、保護することになっても長くて1月程度だった。

しかし、今回の場合は平行世界である。

時空管理局では、平行世界への干渉はご法度なのだ。

「仮に平行世界の地球出身だとしても、何で竜なんて召喚出来るんや、彼は？」

私達のいた地球でもそんなこと出来る奴おらへんかったやろ？」

「そのことも含めて彼に色々聞いたんだけど…」

く回想中く

「カードが実体化した!？」

「信じてもらえないかもしれませんが…そうです」

行き先を決めた3人は、ヘリが来るまでホルスのことについて話していた。

そして実体化の事を話すと、なのはが信じられないといった言い方で驚いた。

それもそうだろう。魔法が実在するミッドチルダは、竜を召喚出来る魔導師がいる。

彼もその類だと思っていたのだから。

「カードが実体化ねえ…。とてもじゃないが、あたしには信じられ

ないな」

ヴィータも同様に答える。

もつとも、こちらは驚いているというよりは信じられないといった感じだが。

「俺にも分かりません。ただ、これは信じるしかないでしょう？目の前にいるんですから」

「はあ…それもそうですね。目の前にいるのに信じないというわけにもいきませんね」

なのはが渋々といった感じで了承する。

そして会話は、これからの予定についてのことになる。

「それでその…機動六課でしたっけ？どうやって行くんですか？」

「へりで行きます。もう少しで来るので」

機動六課に行くことが決定した広暁は考え事をしていた。

といつても、元の世界に帰れるのかなどといった現実的な話ではない。

（なんでこの二人の服装はこんなにコスプレっぽいんだ？）

そう…目の前にいる二人の服装である。

バリアジャケットという戦闘服らしいが、どう見てもおかしい。

魔力による障壁で守られている云々の話ではない。

（何でミニスカートにニーソックス？ヴィータさんに至ってはもう

ゴスロリじゃん)

彼とてこれらに対する知識がないわけではない。
男である以上、ある程度の興奮も覚える。
もっとも、それを表に出すほど子供ではないが。

しかし、それが戦闘服というのは如何なものだろうか？
もう少し地味な色にして回りに溶け込みやすくするとか、機能性を
考えて下はズボンにするとか、色々あるだろうに。
そんなことを考えていると…

「なのは。スバルとティアナ待機させっぱなしだろ」

「あ…忘れてた」

「おいおい…」

「……………」

なのはが念話を送ると、今まで蚊帳の外だった2人が合流した。
2人共ホルスに驚いているようだ。
が、さっきほど睨んではいけないので気圧されてはいない。

「なのはさん。一体これは…?」

現状を把握できていないようで、ティアナがなのはに質問する。

「彼は墨谷広暁君。次元漂流者みたいだから、保護することにした
の」

「え！？次元漂流者だったんですか！？」

スバルが驚きを含んだ声で聞き返す。

ガジェット数機を一瞬にして退ける竜を召喚した人間が、魔導師じやなく次元漂流者だったことに驚きを隠せないようだ。

「でも…いいんですか、なのはさん？竜を召喚出来る次元漂流者を保護するとなると…」

「そこはまだ私達じゃ決められないよ。戻ってはやて部隊長と話合わない」と

「…そうですね。私が軽率でした」

「いいんだよ。ティアはティアなりに考えて結論をだしたんでしょ？それは間違っていないから」

「はい！」

「……あの…高町さん？こちらの2人は？」

何だか青春ものの学園ドラマみたいな雰囲気だが、その空気に耐え切れず広暁が質問した。

「あ…ごめんなさい。こっちの青い髪の子がスバル・ナカジマ二等陸士で、オレンジの髪の子がティアナ・ランスター・二等陸士。私が隊長を務めるスターズ分隊のメンバーです」

「スバルです・ナカジマ二等陸士です！！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「墨谷広暁です。よろしく」

2人との軽い挨拶を終えたところで、ヘリがやって来た。ところがここで一つ問題が発生した。

「俺はホルスに乗って行けばいいんですかね？」

「それは難しいですね。緊急時を除いては街中での魔法の使用は禁止されているので」

「まあ、そうですね…」

そう、ホルスの移動方法である。体長10mを優に超える竜がへりに収まるはずがないのだ。

「なあ、ホルス。カードには戻れないのか？」

「グオオ…」

「…無理みたいです」

「キャラのフリードみたいに小さけりゃ問題ないんだがなあ。小さくはなれないのか？」

ヴィータが提案する。まず無理だとは思っが、万が一の可能性もある。

広暁は駄目元で聞いてみた。

「小さくなれないか？ホルス」

「グオオオ…」

広暁が尋ねた瞬間。黒い炎が発生したかと思うと、それがホルスの身体を包み始めた。

そして炎が収まるとそこには…

「…小さくなりましたね」

「…そうだな」

小さくなったホルスがいた。大きさは大型の猛禽類と同じくらいである。

「ちょっと可愛いかも…」

「スバル、あなたは空気を読みなさいよ…」

他の4人が驚いているにもかかわらず、スバルは小さくなったホルスを見てそんな一言を漏らす。

ティアナも突っ込む気力が段々と失せてきているようだ。

「まあ、これで移動方法の問題も解決出来たわけですから…」

「そうですね。それでは改めて。機動六課まで同行願えますか？」

「分かりました」

くへりの中

「そういえば、広暁さんはどこから来たんですか？」

へりが飛び立って十分ほど経った頃。スバルがふと思い出したように尋ねた。

「どこ、ですか？うーん…どこ出身と言えはいいんですかね？」

「そうですね。でしたら、あなたがいた国の名前を教えてくださいませんか？」

広暁の問いになのはが答える。

「分かりました。出身は日本です」

「日本！？」

3人が驚いたように叫んだ。

「え!?!?どうしたんですか!?!?」

「星の名前は地球ですか!?!?」

「そうですね?」

「私も日本出身なんですよ!?!?」

なのはが嬉しそうに言う。

「日本のどこ出身なんですか!?!?私は神奈川県うみなりの海鳴市です!?!?」

「海鳴市?!?!?俺は愛知県の伯氷市です」

「あれ?愛知県に伯氷市なんてあったかな?」

「神奈川県に海鳴市なんてありましたっけ?」

「?!?!?!?!?!?」

2人は同時に頭をかしげた。

「まあ、伯氷市は県庁所在地の名古屋市と違ってマイナーかもしれないし…」

「そうですね。海鳴市もそこまで全国的に有名な都市ではないですから…」

2人とも釈然としないが、空気が納得しなければならぬ感じだっ

たので納得することにした。

「それにしても、どうしてカードが実体化したんだ？」

今まで会話に参加していなかったヴィータが割り込んできた。

「俺にも分かりません。ガジェットに襲われると思ったら、財布に入れてたホルスのカードが出て来たんです」

「財布にどうしてカードを入れてるんだよ……」

ヴィータが多少呆れながら答える。

「昔、こいつを主軸にしてデッキを組んで……」

あ、ちなみにこれは遊戯王5D's OCGっていうカードゲームなんですけど。

時代の流れと共に段々とこいつで戦うのが難しくなってきましたね……。

それでホルスで組むのはやめたんです。

それでもホルスは忘れられなくて財布に入れていつも持ち歩いてたんですけど」

「思い出の品……ってことですか？」

「まあ、そんなところです」

ティアナが感慨深げに言った。

その雰囲気には多少の疑問を感じたが、突っ込むのも野暮だと思いつつスルーした。

そして話題は、遊戯王へと移行する。

「遊戯王を題材にしたアニメがあるんです。

その中では、カードが実体化したりカードに精霊が宿っていてそれが出現したりってことはあったんですけど…。

まさか現実のものになるとは」

「私にもそれは分かりませんね。

ミッドチルダは魔法の世界ですけどそのようなことは聞いたことがありません」

広暁となのはは頭に『？マーク』を浮かべたまま悩んでいた。

どうしてホルスが実体化したのか？

いくら考えても彼らには分からない。

ホルスもちよつと頭をかしげている。結構可愛い。

その時、ヘリのパイロットであるヴァイスが呼びかけて来た。

「もうすぐ着くんで、降りる準備をして下さい」

「あ、はい。広暁さん、後でまた部隊長の前で話していただけますか？」

「分かりました」

こうしてヘリは機動六課のヘリポートに着陸した。

「……っつてことを話したよ」

「…結局分かったのは彼の素性だけやないか？」

確かにそうなのだが、広暁本人にさえ分からないことを聞き出せという方が無理な話である。

「私にも分からないよ…。後は直接はやてちゃんが聞いた方がいいんじゃないかな？」

今は空いてる会議室で待ってもらってるから」

「せやな。ここであーだこーだ言ってもしやーない。私が直々に問い詰めたる…!!」

「はやてちゃん…程々にね？」

その頃会議室では………

「何だ？今の寒気は？」

得体の知れない寒気を感じた広暁であった。

第5話「パラレルワールド」（後書き）

やってしまいました……。

広暁の出身地である愛知県伯耆市は完全にオリジナル設定です。
なのはの出身地である海鳴市は、なんとなく街の雰囲気合っているという理由で神奈川県にしました。

これからもこの様なオリジナル設定が出て来ますが、よろしくお願
いします。

第6話「暗闇に差す一筋の光明」(前書き)

リアルな生活が色々と忙しくて間が空いてしまいました…。
主に卒研とか卒研とか卒研とか。

この時期はやること多すぎる

!!

第6話「暗闇に差す一筋の光明」

「失礼します」

「どうぞ」

常套句と共に広暁が部隊長室に入る。

ホルスも一緒のようので、広暁の後ろをちょこちょこ歩いて付いて来る。

飛ばないところを見ると、場をわきまえているようだ。

正面最奥部に重厚な作りの机があり、そこにこの部屋の主であろう女性が鎮座している。

年は広暁と同じぐらいか。

その程度の年齢で部隊の隊長を務めるのは常識的にはあり得ないことだが、広暁は事前に聞いておいたおかげで動揺せずに済んだ。

(部隊長か…どうして19歳でなれるんだ?)

会議室で一人、広暁は考えていた。

この後、自分が挨拶に行く部隊長のことだ。

無論、彼にとってこのようなことは初めてである。

大学教授の前でプレゼンをするのとは訳が違う緊張感が彼を襲っているのだ。

襲っているのだ…。

……………。

襲っているはずなのだが…。

(機動六課の部隊の一つであるスターズ分隊。

さっき聞いた話では、もう一つ『ライトニング分隊』というのがある。

そして『ロングアーチ』と呼ばれる後方支援部隊。この3つで機動六課か)

(ライトニング分隊を統括するのが高町さんの親友の『フェイト・テスタロツサ・ハラウン』さん。

そして機動六課の部隊長が、もう一人の親友の『八神はやて』さん。この3人は10年来の親友か…)

全然緊張している節がみられない。

いや、多少は緊張しているか。

胸元で組んでいる両腕。

右手の人差し指が不定期なリズムで左腕をたたいている。

もしも今の状況が、自動車事故を起こしてその取り調べに行く前だと仮定する。

そうだとしたら、彼はもつと緊張しているだろう。

しかし、今は言うなれば『大規模な迷子』。

その迷子を保護する立場が時空管理局であり、今いる機動六課なのだ。

彼にとって緊張する理由は特にならない。

もつとも、迷惑をかけているという自覚はあるようだが。

（俺だけならともかく、こいつも一緒だもんなあ）

「キユイ？」

そう…：広暁の傍らで羽の手入れをしている『ホルスの黒炎竜 L V 8』である。

ホルスの存在がイレギュラーであることは彼女達の会話や反応である程度は分かっている。

…この可愛い鳴き声のことは、ここでは置いておくことにしよう。

（慣れっつてのは怖いね〜。こつちの世界…ミッドチルダに来ていきなりあんなことがあったら大抵のことじゃ驚かなくなるぞ…）

いきなり別世界に飛ばされて、そこで大量の自立型攻撃機械に襲われる。

それだけでも十分だが、それらを実体化したホルスが『粉碎！玉砕！大喝采！』したのだ。

当然、広暁が驚くことは無いのかもしれない。

（しかし…自分が所属する部隊の概略を俺みたいな奴に話しているのか？）

ヘリポートから今いる会議室に来るまでの間。

広暁は、なのはからある程度のことを聞いていた。

いや、なのはが勝手に話してきたと言った方が正しいか。

その時に上記に述べたようなことを聞いたのだ。

（機動六課のエース2人と部隊長が10年来の幼馴染で全員19歳…。どこのゲームの世界だよ……。つか、何で19歳で部隊長？エースならまだ分かるけど、部隊長はさすがに無理だろ）

エースならともかく、部隊長というのは若さでなれるものではない。人脈は言わずもがな、経験・包容力・英断力。他にも必要な力を挙げれば切りがない。

どうして彼女は19歳という若さで部隊長になれたのか。今の彼には全く分からない。

（考えても分からんな…考えるの止めよ）

広暁は、一度考え込むと深く考え込む性格である。

ただし、考えても分からない場合や無駄だと判断した場合はすぐに思考を止めてしまうのだ。

ある意味潔いが、どっちつかずとも言える性格である。

ちなみに、広暁は『魔法少女リリカルなのはStrikers』に関する知識がない。

アニメは見るし、マンガも読む。もちろん、ネットの動画投稿サイトも見る。

しかし、それら全てが遊戯王や週刊少年ジャンプ系ばかりなのだ。もし広暁の友人がこのことを知ったら、「俺と代われ！！と言って飛んでくるかもしれない。

なお、彼はこの会議室に来てから一言も話していない。

ホルスに話しかけてもいないし、独り言も言っていない。椅子にすわり、腕を組んでじっとしている。

何故かと言うと…

(ドラマとかじゃ部屋に録音機や監視カメラがあつて、変なことを言ったり不審な行動をとると後々証拠になるからな。今はじっとしていよう……無駄かもしれないけど)

テレビの刑事ドラマで得た知識をフル活用して今の状態を保っている。

彼が考えるようなことは無いのだが、如何せん用心深い性格なため行動に移してしまう。

無駄と分かっただけまだマシなのだろうか？

〜十分後〜

コンコン。

「失礼します。広暁さん、部隊長室まで来ていただけますか？」

「はい。分かりました」

なのはが来て広暁を部隊長室まで案内する。

廊下も広いし、天井も高い。

清潔でゴミも見受けられない。

金がかかってるんだな〜と考えていると、隣を歩いているなのはが広暁に話しかけてきた。

「広暁さん？」

「何ですか？」

「あまり緊張しているようには見えませんか？」

「まあ…取り柄みたいなものですから」

「羨ましい取り柄ですね…」

「慣れみたいなものですよ。…すみません。これを高町さんに言ったら失礼ですね」

「いえいえそんなことは。あ、ここが部隊長室です。頑張ってくださいね？」

「はい（何を頑張るんだ…？）」

一度深呼吸をし、胸の前で両方の掌を上に向け、音をたてて合わせる。

パン！

広暁のプリシヨット・ルーティンであり、決意する時に行うものだ。

コンコン。

「失礼します」

「どうぞ」

「あなたが保護された次元漂流者ですか？」

「そうです」

「私は機動六課部隊長、八神はやてです。

あなたにいくつか質問します。

へりの中で高町一等空尉に聞かれたことと被るかもしれませんが、
答えてください」

「はい」

「名前と出身を教えてください」

「墨谷広暁。地球の日本出身です」

「どうしてミッドチルダに？」

「車に乗ろうとしたら、海浜公園にいました」

「その召喚獣について、何か知っていることは？」

「カードが実体化したということぐらいしか分かりません」

…

…

…

…

…

「なるほど…」

はやては悩んでいた。

広暁と話した限りでは、彼は召喚獣のことについてほとんど知らない。

しかし、その召喚獣の魔力量は、なのはの話聞いた限りではAAランク。

リミッターをかけているのはとほほ同じ魔力量を有するのだ。

手放すには惜しい存在だ。

しかしそれ以上に気にかけているのは……

（結構ええ男やないの〜）

……広暁本人のことである。

（顔はまあまあやけど、背は高いなあ。180cm以上あるんやろか？

身体もしっかりしてるし…長年スポーツか武術をやってる身体やな。この身体なら訓練にもついていける。制服のサイズはLよりLLのがええかな？）

（大学生ってこともあるけど、受け答えがしっかり出来る。

言葉の教育は不要やし、まずはミッド文字やな。

デスクワークも出来るようにせんといかんし。ほんでその後は…）

公的なことも考えているだけまだマシなのだろうが。

この空気の中この思考は如何なものだろうか？

「あの…八神部隊長？」

「！？どうしましたか！？」

広暁の問いかけに、はやては一瞬たじろぎながらも仕事用の口調で瞬時に答えた。

さすがは部隊長である。

(ま、まさか…今の考え口に出してた！？だとしたらこれはやばい！！！)

はやての暴走…もとい妄想が加速する。

実際はそんなこと無いのだが、はやての思考はどんどん加速する。

(どう言い訳したらええんや！？いや、ここで言い訳したら私の尊厳に関わる！！)

ここは何としても別方向に逸らさな…！！)

そんなことは露知らず、広暁は

「俺は日本に帰れるのですか？」

と質問した。

(た…助かった…。口には出してなかったみたいや)

「そのことなのですが…広暁さん、私の口調に聞き覚えある？」

「！？そのイントネーションは…関西弁ですか？」

「せや。けど、同じ日本やないんや」

「どづいづいことですか？」

「パラレルワールド
平行世界…って知ってるか？」

|||||||

パラレルワールド
平行世界

ある世界から分岐し、それに並列して存在する別の世界を指す。

異世界とは違い、我々が住んでいる宇宙と同じ次元を持つ。

物理学の世界でも存在する可能性は論じられており、量子力学の多次元解釈が有名。

|||||||

「時空管理局はいろんな世界を管理しとる。でも、それらはあくまで異世界。

第97管理外世界にも地球はあるけど、その地球の日本には伯氷市は存在せーへんのや」

「…平行世界は専門外ということですか？」

「平たく言っと…な。私達も最善の手を尽くすけど、帰れる保証は

……」

「そう…ですか……」

「……」

沈黙が部隊長室を支配する。

帰れる可能性は皆無。

そう判断した彼は様々なことを考えていた。

家族の事。友達の事。そして……なにより自分の事。

一生懸命に生きてきたつもりだが、何か生きる道が見つからない。

そして、岐路である大学3年生の後期にミッドチルダに飛ばされた。

(俺…どうすればいいんだろ?)

見つかるはずの無いはずの答えを必死に探し続ける。

しかし、どんなに考えても答えを見つけることは出来ない。

いや…今の段階では存在しないのだ、答えが。

「なあ、広暁さん…? 私の提案、聞いてくれるか?」

「……何でしょうか?」

「うち…つまり機動六課で働いてみーへんか?」

「…はい？えーと、それはどういうことでしょうか？」

「そのまんまの意味や。機動六課で職員として働くということ。まあ、立場的には民間協力者つちゆう立場にはなるけどな」

「何故俺を勧誘するんですか？デスクワークぐらいしか出来ないと思いますか？」

「あんたがただの次元漂流者なら、な…。でも、あんたは違う。あんたは召喚獣を従えている。それも、ガジェットを簡単に破壊できるほどの…。な。それほどの召喚獣を従えているあんたが魔力を持たないはずもないしな」

そう、広暁はホルスを従えている（実際は従えているわけではないのだが）。

AAクラスの魔力量を持つホルスを従えている広暁が魔力を持たないはずがない。至極当然の推察だ。

「少し…考えさせてもらえますか？」

「ええよ。好きなだけ悩んだらええ」

（別世界に魔法か…。何か見つけられるかな？）

広暁は考えている。この申し出を受け入れるかどうか。確かにはやての申し出は魅力的である。

見知らぬ土地で一人で生きていくとなると、それは元いた世界より
厳しい。

だが申し出を受け入れるとなると、否が応でも魔法を用いた戦闘を
することになる。

彼にはそのような経験は無い。他の職員と自分では明らかに経験が
違う。

そのような自分が果たしてこの申し出を受け入れてよいのだろうか？

(でも…この世界でなら何か見つけれられるかもしれない)

やりたいことを見つけれられず、趣味やスポーツに打ち込んできた自
分。

将来有利そうという理由だけでやってきた勉強と、選んだ大学。

この世界でなら、自分のやりたいことを見つけれられるかもしれない。
ならば、彼の言うことは唯一つ。

「その申し出…受けさせて下さい」

「お！？決まりやな！！」

はやてが両手を叩いて立ち上がる。そして、広暁に右手を出してき
た。

「今日からあなたは機動六課の仲間や。よろしゅーな！」

「こちらこそ、よろしく願いします！」

ガシツ！！

2人の握手が交わされる。背景が夕焼けならさぞ映える光景だろう。

「さてと！ほんなら、今から書類を作成せんとな。

上の方に次元漂流者の滞在ってことで許可をとらんといかんし」

「俺は何をすればいいですか？」

「個人情報を教えてくれるだけでえーよ。さっき聞いたこと、覚えてる？」

「大丈夫ですよ」

「ほな始めよか！」

「はい！」

「機動六課オフィス」

一方その頃…

「次元漂流者を保護したんだって？なのは」

「あ、フェイトちゃん。そうだよ、今は部隊長室ではやてちゃんと話してるよ」

ここは機動六課のオフィス。

なのはがデスクワークをしていると、模擬戦を終えたフェイトが入って来た。

スバルとティアナは自主連で、エリオとキャロはシャワールームに向かっている。

つまり、オフィスには2人しかいない。

「スバル達に聞いたの？」

「うん。召喚魔法を扱える次元漂流者なんて聞いたことがないけど…。しかも竜を召喚したんでしょ？」

「私も聞いたことがないけど、あれを見たら信じるしかないよ」

「その竜、ガジェットを破壊したんだよね？」

「うん。あの炎は、竜魂召喚で本来の姿を取り戻したフリードより強いと思う」

「確かにキャラロはまだまだ未熟な部分があるけど…。
それでも、『白銀の飛竜』とまでいわれるフリードの炎を超えるな
んて…」

「しかも、彼はあれが初めてだったみたいだし」

「一体何者なの？」

「話した感じでは、真面目な好青年って感じだったよ」

「そう…」

フェイトは考える。スバル達に聞いた限りでは、彼は地球出身の可
能性が高い。

それなのになぜ、召喚魔法を扱えるのか？

もしかすると、キャラロと同じ第6管理世界の『ル・ルシエ』一族な
のだろうか？

仮にそうだとしても、別世界である地球にいる説明がつかない。

フェイトが熟考していると…

(2人共、聞こえるか？)

(はやてちゃん？)

(はやて、どうしたの？)

2人に同時に念話 came。どうやらはやてからのようだ。

(例の次元漂流者の彼、機動六課で保護することが決まったさかい。今すぐ部隊長室まで来てや)

(うん、分かった)

(すぐ行くね)

どうやら、広暁を保護することが決まったらしい。
なのは嬉しそうにしているが、フェイトは少し複雑そうだ。

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「う、うん。何でもない。早く行く？」

「?うん、分かった」

2人はオフィスを出て、部隊長室へと歩き出した。

(竜を召喚する者…か。キャロと仲良く出来ればいいけど…。友達にはなれるかな？
でも大学生って言ってたから、結構年上になっちゃうよね……)

親バカ的思考をしているフェイトであった。

その頃部隊長室では…

「ファ〜……。つと、すいません」

「おいおい眠いんか？まだ夕方の4時やで？」

「むこうの世界で飛ばされたのが午後9時半前だったので、体内時計は午後11時半ぐらいなんですよ」

「健全な大学生が11時半で眠いつて可笑しな話やな」

「夏休み明けでしたからね。」

夏休み中は早めに寝てましたし、何よりミッドチルダに飛ばされてあんなことがあったわけですから」

「ならしゃーないか。早くこの書類終わらせるで」

「はい…あの八神さん？」

「どっしたん？」

「さっきからずっと関西弁ですけど？」

「あ、もうええんや。仕事用の口調は疲れるしな。こっちの方が楽でええ」

「はあ…（随分とフランクな人だな）」

「そうゆうあんたもずっと敬語やないか」

「これからお世話になる部隊のトップの人に砕けた話し方は出来ませんよ」

「同じ職場で働く仲間になるんやで？真面目な時はともかく、今は別に構へんて。」

それにあんた、私より年上らしいやないか」

「確かにそうですけど…」

こうゆうのが好かれる上司というのだろうか？そんなことを広暁が考えていると…

「失礼します」

「来たな。どうぞ」

入って来たのは2人の女性。

1人は高町なのはだ。

そしてもう1人、長い金髪を腰より下で一つに結わえた女性。こちらが恐らくフェイト・テストロツサ・ハラオウンだろう。

「八神部隊長。彼が次元漂流者ですか？」

「せや。彼が次元漂流者の墨谷広暁君。あ、それと、敬語やなくてもええで」

どこか値踏みするような視線に気づいたのか、フェイトに言うはやて。

もつとも、フェイトの思考とはやての考えるフェイトの思考はずれているのだが。

「はやて…分かった。初めまして、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。

ライトニング分隊の隊長をやっています。よろしくね？」

フェイトが挨拶と共に右手を差し出した。

この世界の人はやけにフランクだなくと考えながら、広暁も右手を差し出した。

「墨谷広暁です。よろしくお願いします」

さっきの握手ほどではないが、固い握手を交わした2人。

その握手の固さとフェイトの視線に気づいたのか、広暁は聞き返した。

「ホルスがどうかしましたか？」

「えっ!?!いや、その…」

「なんやフェイトちゃん、この子が気になるんか? まあ、フリード以外で竜を見るなんて初めてやからな」

フエイトの視線は飛んでいるホルスへと向けられていた。さっきまでじっとしていた鬱憤を晴らすかのように部屋の中を飛んでいる。

よくはやても許したものだ。

「赤みを帯びた銀色の竜…スバル達の言ってた通りね……」

「フエイトちゃん……まだ信じてなかったの？」

フエイトの眩きになのはが答える。

親友の用心深さというか真面目さというか、そういったものに少し呆れているようだ。

「本当は今日中に軽く検査をしてリンカーコアとか調べたかったんやけどな。

広暁さんがもう眠そうやから、早めに休んでもらって明日の午前中に検査をすることにしたんや」

「そういえばミッドに飛ばされたのって、元いた世界で午後9時20分だっけ？」

へりの中で聞いた話をなのはが思い出しながら答える。

「さて、広暁さん。空いてる部屋に案内させるさかい、今日は休んでもらえるか？」

詳しい事はこちらで決めとくから」

「分かりました。よろしくお願いしますね」

「2人共、案内頼めるか？宿舎にまだ空いてる部屋があったやろ？」

そこが今日から彼の部屋になるから」

「うん、分かった」

「では行きましょうか」

「はい。それじゃ八神さん、失礼します」

「……ちょい待ちや」

部隊長室から出ようとする広暁を、はやてが呼び止めた。

「?どうかしましたか、八神さん？」

何か伝え忘れたことがあったのだろうかと思いつつながら広暁が振り返る。

「……敬語。さつきも言ったけど、敬語使うのやめてくれへんか？それと私の呼び方。八神さんなんて呼ばれたらむず痒くてしゃーないわ。はやてでええで」

「さつきも言いましたけど、部隊長に対して敬語を使うなど言われなくても。しかも名前を呼び捨てなんて出来ませんよ」

「そんな固くならんでええねん、ここでは。そりゃー、公の場ではちゃんと呼んでくれなあかんけど」

「そついうものなのですか？」

「そついうもんなの！」

語気を強くしているはやてに、広暁は驚いた。
機動六課についてはある程度聞いた。

しかし、聞いた限りでは警察・軍隊・裁判所がまとまった司法機関だと考えていた。

そのような職場で上司に対してフランクに話すなどあり得ない。

（八神さんなんて呼ばれたら距離が開く一方や！

なのはちゃんやフェイトちゃんと比べて出遅れとつた私に神様がくれたチャンスなんや、これは！

絶対に名前で呼ばせたる！）

……広暁の思考も知らず、公私混同というか自分勝手なことを考えているはやて。

（でも…郷に入っては郷に従えともいうし。向こうがいろいろならいいんだろうな）

はやての思考も知らず、自分の中で結論付ける広暁。
広暁の中で、リミッターが一つ外れた瞬間であった。

「分かった。じゃあ、はやてって呼ばせてもらつわ」

「よし！それでええねん！上司の言葉は聞かなあかんで」

「……」

「あ、それと。私もあんだのこと広暁って呼ばせてもらつからな」

さっきからはやてに押されっ放しの広暁に、更に追い打ちがかかる。

「だったら私もなのはでいいよ。高町さんて呼ばれるのは慣れてないし」

「私もフェイトで構わないよ」

「はあ…」

どうにもペースを掴めない広暁。

こっちの世界の女性はこうしてこう、フランクというか子供っぽいというか。

異性に対して境界線を引かないのだろうか。

あまりミッドチルダの人に会っていないが、これから会う女性が恐くなった広暁であった。

「宿舎、広暁の部屋の前」

「それじゃあ、今日はここで。明日の朝、迎えに行くからね」

「フォワードの皆には食堂で紹介するから」

なのはとフェイトが言うには、フェイトの所属するライトニング分隊にも新人がいるらしく、よく皆で朝食を食べるらしい。

「分かった。何時に迎えに来る？」

「うーんと…朝の訓練が終わってからだから8時ぐらいかな？」

「オツケー。それまでには起きとくよ」

「ええ。それじゃあまた明日」

「お休み」

夕方に言う言葉ではないような気もするが、今の彼にそんなことを考える余裕もない。

2人が部屋から去った後、彼はベットに座りぼーっとしていた。

「これから頑張らないとな、ホルス」

「キユイ」

広暁の呼び声に答えるかのように、ホルスが鳴く。

大きい時には荘厳だった鳴き声が、この可愛い鳴き声になった時に

は驚いたものだ。
だが、これからはもっと驚くことが待っているだろう。

上着を脱いで机の上に放り投げ、靴を脱ぐ。寝る準備をした広暁はベットに入った。

「お休み〜」

これから起こることに期待と不安を抱きながら、広暁は眠りについた。

「…………おまえはどこで寝るんだ、ホルス？」

「キュイキュイ」

自分が脱いだ上着の中に潜り込むホルス。
外見のわりに結構可愛いところあるんだな〜と思った広暁であった。

第6話「暗闇に差す一筋の光明」（後書き）

第6話終了です。

ここで区切りとなり、次のステップ、機動六課での生活が始まります。

ご意見や感想、提案などよろしくお願いします。

主人公設定（10月15日更新）（前書き）

主人公設定です。なぜこんな設定にしたかつて？
それは後書きをご覧ください！

主人公設定（10月15日更新）

プロフィール：

名前：墨谷広暁すみたにひろあき

身長：184cm

体重：78kg

年齢：20歳

職業：国立大学に在学する大学3年生

趣味：遊戯王5D's OCG、ソフトテニス、読書

一言で言うならば冷静な性格。

外見は物静かで大人しそうに見えるが、芯が強く、妥協が苦手な頑固者。

融通の効かない人間と思われることも多いが、人間的確なアドバイスをしたり、親身になって助ける誠実さを持っているため、嫌われることは少ない。

物事を大局的・俯瞰的に捉えることを得意とする。

テレビ等で見るスポーツ中継の勝敗を高確率で当ててしまうため、家族や友達からは「分かってても絶対に言うなよ!」と言われることもしばしば。

遊戯王OCGは、小学6年生から続けている。

その実力は西日本代表選考会決勝まで勝ち上るほど。

中学校からソフトテニスを始め、ポジションは前衛。

個人戦で全国大会ベスト8まで勝ち上るほどの実力者。
大学ではソフトテニスサークルに所属。市や県の大会に参加している。

身体能力は同年代の中では優れている方で、中でも瞬発力・反射神経が優れている。

筋力トレーニング及びジョギングを中学生の頃から行っており、基礎体力も高い。

国立大学に合格するぐらいの頭脳を持ち、観察力・洞察力に長けている。

オーガナイズ
計画実行力は群を抜いており、大学の講義で演習・実験を行う時、彼のいるグループは常に時間以内に終わっている。

主人公設定（10月15日更新）（後書き）

現実味のある主人公を作ろうと思ったたらこうなりました。

なぜソフトテニス部っていう、やってる人は多いのに主人公設定にはまずならない部活にしたかって？

それは……………

作者がソフトテニス部出身であり、遊戯王をやってる人間が、ソフトテニス部出身者が最も多かったからです！

次に多いのが弓道部、その次に多いのがサッカー部かな？

そういえば、弓道部ってやけに頭のいいというか、テスト成績の上位者が多くないですか？作者の周りだけなんでしょうか…？

おっと。もう1つの理由を忘れるところでした。この小説では言わずもがな広暁とホルスがメインです。そうすると、コンビでやるスポーツの方が何かと表現しやすいので。

そうなると卓球やバトミントンやテニスも候補に挙がるわけですが、これらはシングルスが主体です。

そのため、ダブルスが主体であるソフトテニスにしました。

感想、よろしくお願いします！

使用魔法（10月24日更新）（前書き）

広暁の使用魔法をまとめたものです。

オリジナルの魔法は、魔法名の前に『』がつきます。

随時更新するので、よろしくお願ひします。

使用魔法（10月24日更新）

・攻撃魔法

テンソウジン
天創塵：

広暁が独自に考えた最初の魔法。

魔力を集束した矢をサジタリウスから放つことにより、音速を超えた速度で飛ぶ。

その威力は、真っ平らな土地を巨大なすり鉢状にする程。

ただし音速以上の速度で真っ直ぐ飛ぶので、近くにいる相手には放てない。

相手が小さい場合も同様で、狙いがつけにくい。

外れた場合はすぐに爆発するようになっていたが、直撃するより威力は若干落ちる。

通常時の威力は、シャツハに「AAAランクの魔法」と言われるほど集束密度が高い。

ジョウハクセン・イツシキ
篠電霰・壱式：

??????????

ジョウハクセン・ニシキ
篠電霰・弍式：

対集団戦射撃魔法『篠電霰』の弍式。

探索魔法で周囲の敵を把握すると同時に数多の矢を生成。

標的をロックオンし、弦を弾くことで一気に発射、標的を狙い撃つ。数が多いと同時制御が難しいので、何本が一纏めにして放つことが多い。

ジョウハクセン・サンシキ
篠電霰・参式

対集団戦射撃魔法『篠電霰』の第参式。

放たれた1本の魔法矢が上空に移動し、力を蓄えて綺麗な球状の魔力球ができたら準備完了。

広暁の合図と共に広範囲（一転集中も可能）に怒号の如く矢が放たれる。

蓄えた魔力の量に比例して放たれる矢は増える。

制圧力で言ったら天創塵を上回るが、天創塵以上に発動までに時間がかかるのが難点。

魔力貯蔵の時間を狙われないようにするために、迷彩魔法とセットで使うことが多い。

オホロツキ
朧月：

魔法の中でも珍しい、音を使用する魔法。

弦を弾く音と起点とし、自身を中心に音を伝達。

聞いた生物が不快になる音と三半規管を揺らす高周波音を同時に出し、戦闘力を下げる。

音の強さ・範囲・指向性等は調節が可能。

・防御魔法

プロテクション：

触れたものに反応し、対象を弾き飛ばす性質を持った防御バリアを発生させる。

特に物理攻撃に対する防御性能が高い。

広暁が使用することもあるが、サジタリウスにオートガードとして設定されているので、サジタリウスが自動発動することが多い。

ラウンドシールド：

魔法陣を使用した円形の盾を作り出す魔法。

一方向しか防御できないが、その分防御力は高く、特に魔力弾への防御に優れる。

戦闘スタイル柄、広暁は『防ぐ』より『躲す』ほうが得意であるため、この魔法も攻撃を『流す』目的で使用する回数のほうが多い。

・移動魔法

ブリッツアクション：

体全体の振りを加速する魔法。

弓矢を使用する広暁が使うことは少ないが、近接戦を想定したシグナムとの訓練では使うことが多い。

ソニックムーブ：

フェイト考案の瞬間高速移動魔法。

単純な速度なら現在のエリオと同等の広暁だが、まだ直線軌道でしか移動することが出来ない。

・捕獲魔法

リングバインド：

バインド系の基本魔法で、発生したリングで目標をその場に固定する捕獲魔法。

基本だけに単体での威力はそれほどでもないが、複数同時・遅延発生・強度向上等の応用が利きやすい。

広暁は複数同時と強度向上を行うことにより、ホテル・アグスタに

現れた人間昆虫を捕えた。

デイレイドバインド：

指定した空間に侵入した者に対して発動する設置型捕縛魔法。
広暁の性格と戦闘柄使うことが増えるであろう捕縛魔法で、現在最も力を入れている捕縛魔法。

・結界魔法

ETP（エクスクルージョン・トライアングラー・ピラミッド）：
魔力素が結界内に存在しない空間に相手を閉じ込める結界魔法。
ユーノお薦めの無限書庫所有の本に載っていた魔法で、初めて使用したのは第40話。

術式は全魔法の中でもトップクラスの難易度であり、ユーノが「広暁なら使えるかもしれない」と考えて広暁に教えた。

魔力結合を阻害するAMFとは違い、魔力を作る素である魔力素を完全に排除した結界内に対象を閉じ込める魔法であるため、魔法を結界内で使うことは不可能。

本来はSSランククラスの魔法だが、それは「遠距離から」「対象に気づかれないように」「素早く」発動する場合であり、広暁は「近距離から」「対象に接触して場所を指定して」「時間をかけて」発動することで使用を可能とした。

現在は上記の条件下でしか使えないため滅多に使うことはないが、味方の援護と時間があれば強力無比な結界魔法と化す。

・回復魔法

フィジカルヒール：

肉体的な負傷の治癒のための魔法で、即効性。

フォワードメンバーでは広暁とキャロしか使えないが、効果範囲・治癒速度共にキャロのほうが上。

マインドリターン：

意識を失っている生物の意識を回復させる魔法。

広暁が初めて使ったのは第29話で、それまでは気絶した昆虫や魚等で練習していた。

・探索魔法

フィールドサーチ：

長距離探索魔法。

自身を中心に発動、範囲を広げること、発動範囲内の生物や建造物の状態を知ることができる。

なのはが使用する『エリアサーチ』より範囲が広く、視覚情報以外にも確認することができる。

現在の広暁はさほど範囲を広げられないが、将来的にかなり伸びるというのはシャマル談。

・幻術魔法

フェイク・シルエット：

単体・複数の幻影を発生させる高位幻術魔法。

肉眼や簡易センサー類では見抜けない精度を誇るが、幻影に攻撃が直撃すると消えてしまう。

初使用は第40話。

この魔法の弱点を逆手にとり、攻撃してきたシャツハをディレイドバインドで捕えた。

本編中に記載はないが、ティアナに教わった魔法である。

ティアナは複数体同時に出現させられるが、広暁は1体が限度であり、発動時間もティアナより短い。

第7話「機動六課での朝 変」(前書き)

第7話です。

タイトルからも分かる通り、これから数話、機動六課での朝の出来事を書いていきます。

ちなみに、タイトルの字は「変」ですからね？「恋」じゃないですよ！

第7話「機動六課での朝 変」

（機動六課隊舎）

ジリリリリリリ！！！！

ガチャン！

「…もう朝か」

目覚ましを止めて起きる広暁。

現在の時刻は午前7時。

なのはとフェイトは午前8時に迎えに来ると言っていたので、1時間ほど早い。

「あ…俺、ミッドミルダに飛ばされたんだっけ」

軽く伸びをし、いつもと違う朝の風景を見てはやく。

そして、今の彼が思い出すのは昨日起こった出来事。

車に乗ろうとしたら海浜公園に飛ばされ、変な機械に襲われたと思っただらそれを退治する変な服の人達。

絶体絶命のピンチに何故か実体化して窮地を救ってくれたホルス。

元いた世界ではあり得ないようなことが広暁の頭を埋め尽くす。

変な夢だと思いたい。

しかし、広暁の服に包まって寝ている一匹の生物がその幻想を打ち

砕く。

「夢じゃ…ないんだよな」

そこには広暁の温もり（？）に包まれて眠る1匹の竜がいる。
昨日、広暁を助けてくれた竜、『ホルスの黒炎竜 LV8』。

これを信じるなという方が無理な話であるし、今も実は夢の中だと
言うのも無理な話である。

「事實は受け止めないとね」

そう呟く広暁の瞳は、先程まで物思いにふけつたいた時の顔とは違
う。

何かを決意し、自分でそれを切り開いていこう。
そのような意志を感じさせる目だ。

「さてと！まだ1時間あるし、筋トレでもしようかな」

そういつて彼は部屋の片隅まで移動する。

何をするのかと思えば腕立て伏せだ。

日課として毎日続けていること。

これに腹筋やスクワットといった世間一般でよく知られるようなも
のが続く。

本来は寝起きでやるようなものではないのだが、自分を奮い立たせ
るために広暁は行う。

といっても、それこそどこぞのレスラーがやるような回数をやるわ

けではない。

彼が行う筋トレはあくまで技のため。

自身の技を正確に繰り出すために必要な筋肉を鍛え、維持している。

筋肉質ではないが、俗に言う細マッチョでもない。

競技者としての体型であり、機能美とも言うような肉体である。

（でも…こっちでこれから生活するなら、もっと筋肉つけた方がいいのかな？）

腕立て伏せを終え、腹筋をしながら考える広暁。

機動六課での仕事内容は分からないが、戦闘要員は昨日の話からして確定事項だ。

筋肉をつけておいて損は無いだろう。しかし…

（魔法の世界だしな…筋肉って意味あるのか？）

昨日のことを思い出しながら考える。

直に戦闘するところは見てないが、なのはが持っていたのは杖、ヴィータが持っていたのは細長いハンマーだ。

なのはが杖で杖術を使うとは思えないし、ヴィータがハンマーであるのがジェットを簡単に粉碎するとは思えない。

恐らくではあるが。

杖を媒体として色々な魔法を使ったり、ハンマーを巨大化、もしくは肉体を強化して戦うのだろうと考える。

…元の世界で見たアニメやマンガの知識ではあるが。

（今考えても分からんな。あとで八神さ…はやてに聞いてみるか）

今は思考を放棄することで落ち着いたようだ。

思考中に『八神さん』と言いそうになったが、『はやて』と脳内変換した広暁。

真面目な性格というのも困りものである。

そんなことを考えているうちにスクワットも終え、部屋に備え付けのシャワーを浴びようと服を脱ぎ始めると、

「キュ… キュイー……」

ホルスが起きた。

広暁の上着からモゾモゾと出て来て、思いつきり羽を伸ばす。

人間でいう所の腕を思いつきり上に伸ばして伸びをするようなものだろうか？

「おはよう、ホルス」

「キュイキュイ」

広暁がホルスに挨拶をすると、ホルスも挨拶を返してきた。やはりというか何というか、知能の高い竜である。

「なあ、ホルス…その鳴き声、どうにかならんか？もうちょっと」
う、ごつい感じで

「キュイ？」

困惑する広暁。昨日聞いたが、未だにこの可愛い鳴き声には慣れていないようだ。

「……慣れると？」

「キユイ！」

そんな広暁の思いもむなしく、可愛らしく返事をするホルス。交渉決裂、慣れるしかないようである。

「はあ…とつととシャワー浴びるか」

服を脱いでシャワー室へと入っていく広暁。

コツコツコツコツ。

朝の隊舎を2人の女性が歩く。

一人は高町なのは一等空尉。

スターズ分隊の隊長であり、『エース・オブ・エース』の称号を持つ空戦のエキスパート。

もう1人はフェイト・テストロッサ・ハラウン。

ライトニング分隊の隊長であり、『金の閃光』の異名を持つ音速の魔導師。

この2人が並んで歩くと、道行く管理局員（ほとんど男性）が振り向き振り向き。

それほどの美貌の持ち主であり、優秀な魔導師なのだ。

そんな2人が今から一人の若い男を迎えに行くと思ったら、彼らは一体どのような反応を起こすのだろうか？

知らない方がお互いの身のためである。

「なのはは緊張しないの？」

「えっ？何が？」

フェイトの突然の問いを、なのはが聞き返す。

「広暁さんのことだよ。次元漂流者とはいえ、今から彼を起こしに行くんだよ？」

「何言ってるの、フェイトちゃん？時間までには起きておくって、広暁さんは言ってたじゃない」

「あれ！？そうだったけ！？」

「も〜。しっかりしてよフェイトちゃん」

フェイトの勘違いに気付いたなのは呆れ顔だ。

フェイトにとつて、今まで出会った年上の男性というのは数えるぐらいしかない。

その内、義兄であるクロノや幼馴染であるユーノを除くと、ほとんどが仕事上の関係者だ。

つまり、隊舎内とはいえこのような経験は初めてになる。

「私は別に緊張しないよ。昔はよくお兄ちゃんを起こしてたし」

「あの真面目な恭也さんが？」

「お兄ちゃん、朝は弱くてね。鍛錬がある日は問題ないんだけど、休日とかよく寝過ぎすんだ」

「へえ」

そんなことを話しながら歩いていると、2人は広暁の部屋の前に着いた。

広暁の部屋の前に着いた2人。

現在の時刻は午前7時50分。昨日約束した時間より10分早い。

「ちょっと早いけど…大丈夫かな？」

「時間ぎりぎりに起きるような人じゃなさそうだし、大丈夫じゃない」

い？」

「それもそうだね」

声をかけるかどうか迷っているようだが、広暁の印象からして問題ないと判断したのだろう。

コンコン。

「おはようございます、広暁さん。起きてますか？」

「……………」

「返事がないね、なのは」

「そうだね、もしかしてまだ寝てるのかな？」

部屋の中から返事がない。

部屋から出るとは考えにくいし、もしかしてまだ寝ているのだろうか？

「失礼します」

部屋の扉を開け、中へと入って行く2人。

隊舎の部屋の鍵はそれぞれ個人認証機能があり、その鍵がないと部屋に入れない。

しかし、何分急なことだったため、広暁は部屋の鍵を作っていないのだ。

「あれ、いないね？」

「もしかして、部屋から出た？」

「まだ時間じゃないし…それに広暁さんはまだ六課の中がどうなってるか知らないんじゃない？」

「うん…となると、一体どこに？」

部屋を物色…じゃなかった、散策しながら考え込む2人。すると…

「キュイ！」

2人に向かってホルスが話しかけて（鳴きかけて？）きた。

「確かあなたは…」

「『ホルス』だよ、なのは」

「そうそう。ホルスちゃん、広暁さんがどこに行ったか知らない？」

「ちゃんは付けなくていいと思うけど…」

ホルスに広暁の行き先を聞くのは。

この時、2人は失念していた。

隊舎ではトイレや風呂は共用である。

しかし、各部屋にシャワー室があることを。

「キュキュイ！」

ホルスが首をシャワー室へと向けた瞬間。

ガチャツ。

「誰かいます?」

広暁がシャワー室から顔を出した。

<広暁 s i d e >

シャワー。

朝のシャワーってどうしてこんなに気持ちいいんだろうね。

夜浴びると疲れが抜ける感じがするけど、朝浴びると力が湧いてくる。

不思議だね。

「ふう… すつきりした」

シャワーを浴び終えて、備え付けのタオルで体を拭く。

外して入れておいた腕時計を見ると、時間は午前7時50分。なのはとフェイトは8時に来るって言ってたから、まだ余裕があるな。

それに、こういった軍事機関の人なら時間にも厳しいだろうし、時間ぴったりに来るだろ。

そんなことを考えていると、脱衣所の外に人の気配を感じた。人数までは分からないが、誰かいるのは分かる。

もしかして2人がもう来たのか？

いや、さすがに10分前には来ないだろ。

来たとしても、ここは男である俺が寝ていた部屋。ずかずかと若い女性が入って来るとは考えにくい。

うん… 分からん。

とりあえず、声だけでもかけてみるか。

下を見せないように顔だけ出せば問題無いだろ。

ガチャッ。

「誰かいます？」

「……………」

「あ。何だ、2人だったんすか。服着るんで、ちょっと待ってても
らえます?」

「……………」

「?どうかし……」

スウーツ。

「キヤ

ツ!!!!!!!!!!!!!!」

2人の声に驚いた広暁だが、そんなことは問題ではない。
広暁は急いで服を着た。

今の大声は確実に隊舎内に響いている。人が来るのも時間の問題だ。
シャワーを浴びた後とはいえ、裸に近い恰好でいるのはまずい。

そして事は動き出す。

騒ぎを聞きつけたヴォルケンリッター4人とはやて、局員や食堂のおばちゃんまで集まり、現場は騒然とした。

まず部屋に入つて来たのはピンク髪にポニーテールの女性。入つて来るなり広暁の襟元を掴み、

「貴様！高町とテストロッサに何をした！！」

とてつもない剣幕で詰め寄つた。

理由を言おうとするが、そこで更にヴィータの追い打ちがかかる。

「お前！まさかなのはとフェイトを朝から…！？」

誰がどう聞いても変なことしか考えつかないことを言う。

「あらあら。朝からお熱いわね」

白衣を着た金髪の女性がそれを睨し立てる。

「……………」

静観する青い犬。

とりあえず、こういう場合は結論から言つた方がいい。

しかし、それは相手が聞く耳を持っていければの話。

ここまで熱くなった人間を静めるのは難しい。

となると、大声を出した当人に話してもらつた方が早い。

そう思い、広暁は2人がいるであろうベットの方向へと視線を傾けたのだが…

2人は気絶していた。
それほど衝撃的なものでも見たのだろうか？脱衣所にはちゃんとドアがあるのに。

援軍は望めない。

こうなったら、これを使うしかない。

広暁がズボンのベルト穴に手を伸ばそうとすると…

「はいはい！皆注も〜く〜！」

手を叩きながら前へと出たのははやて。

「ここでこの事件を見ていたい気持ちも分かるけど、皆戻ってくれへんか？」

このままじゃ今日の仕事に差し支えるからなー！」

さすが部隊長。まとめ上げるのはお手の物である。

ヴォルケンリッター4人を除いた人達は多少渋りながらも解散した。

「さてと…ほんなら広暁。話を聞かせてくれへんか？ことによっては……ただじゃ済まさへんで〜？」

両手をワキワキとさせながら笑顔で言うはやて。

訂正。ただこの状況を楽しみたいがために解散させたようだ。

「……という訳です」

「何やそりゃ。なのはちゃんとフェイトちゃんは一体何してんの？」
話を聞いたはやては呆れ顔でそう言った。
状況だけを簡潔に言つと、

?なのはとフェイト、勝手に部屋に入る
?部屋を物色
?シャワー室から広暁出現(顔しか出していない)
?キヤー

少々乱暴だがこうなる。

シャワー室から顔を出した広暁にも非はあるが、それであれほどの
大声を出す2人も2人だ。

「だとしても、顔出すから驚くんだよ。脱衣所の中から声かえけり
や済む話じゃねえか」

それでもまだつつかかるヴィータ。
過ぎたことを穿り返しても仕方ないのだが、女の性というやつだろ
うか？

「自分の目で見ないと確信持てないしね。時間より早く来るとも思わなかったし」

「確かにうちは軍事機関やけど…そこまで硬く考えんでもええから。早く着いたり遅刻したりなんてしよっちゆうやし」

「それでいいのか…？」

ますます機動六課に対する考えが揺らぐ広暁。

あれか、やる時やればいいのか？

やる時やれば普段はおちゃらけてもいいのか？

「すまん。私としたことが早急だった」

そんなことを考えていると、ポニーテールの女性が広暁に頭を下げた。

「分かっていただければいいですよ。ですけど、もうちょっと考えてから行動してもらえます？」

「そこは…まあ、あれだ。私の個性というやつだ」

「いや、そういう問題じゃないですから」

このポニーテールの女性はシグナム。

フェイトが隊長を務めるライトニング分隊の副隊長である。

はやてから敬語でなくていいとまた言われたのだが、シグナムと話しているとは何故か自然と敬語になるようだ。

そして、さつきから気絶した2人の身体を弄くり回している金髪の女性。

名前をシャルムといい、ロングアーチに所属する医務官である。

「よう、ルルね」

弄くり回すのは終わったらしい。何をするのかと見ていると...

「てい！」

「「ぐふっ!?!」」

2人の鳩尾に中高一本拳が突き刺さる。

気絶から復活させるためにやったようだが、かなり痛そうだ。2人とも腹を押さえている。

「シャルム...そこまでやらなくてもええんやないか？」

「これが一番手っ取り早いのよ」

女性は恐い。

「ほんなら2人とも...広暁に何か言うことがあるんやないか？」

「...やっぱり...そうなる？」

「なのは...」

「うん」

「「セーの…」」

「「ごめんなさい!!」」

広暁の部屋にて、なのはとフェイトが大声で謝る。

腰は90度以上曲がっており、下手したら135度を超えているのではないだろうか？
よく曲がるものだ。

「分かってもらえたならいいよ。それより、聞きたいことがあるんだけど」

「「何?」」

「何で気絶したの?」

「「それは……………」」

「?どうした?」

途端に黙り込む2人。広暁も何事かと思い、問い質す。

「その…何というか…」

「裸を見たと思って…」

広暁はこれを聞いて少し呆れた。

自分は顔しか出してないし、そもそも脱衣所にはちゃんとドアがある。

仮に裸で出たとしても、大声を出すのは分かる。しかし、気絶するのはいき過ぎだ。

「仮に裸を見たと勘違いしても気絶するか、普通？」

「そら多分しゃーないことなんや」

「どづいづこと、はやて？」

広暁の疑問にはやてが答える。

「うちは元々女が多いからな。

ロングアーチを含めれば男もそれなりにいるけど…スターズもライトニングもほとんどが女や。

男は1人しかおらへんで」

「マジ！？」

「マジやで。しかもその男も、10歳の子供やからな。広暁みたいな年頃の男の裸なんて見たことなかったんやろ」

顔を出したただけだとさっき言ったのだが。

「一体機動六課はどうなってるんだ…？」

「そこら辺は、朝食の後でまた説明するわ。ほな皆、朝ご飯食べに行くで〜」

はやての掛け声で動き出すヴォルケンリッター・なのは・フェイト・

広暁。

「何か…朝から疲れたな…」

「キユイキユイ」

ぼやく広暁。そして、広暁を慰めるかのように肩に止まるホルス。

「ホルス…ありがと。そうだな、気を取り直して朝飯を食べに行くか！」

「キユイ！」

元氣よく返事をするホルス。

理由は分からないが、ホルスも腹が減るんだな〜と思った広暁。その足取りは軽くなったようだ。

「それで2人とも。どやった？」

「何が？」

「どうしたの、はやて？」

食堂へと向かう道中。

一番前を歩いている女性3人のうち、はやてが唐突に切り出した。その顔はまるで訪問販売のセールスマンのような笑顔だ。

「2人とも見たんやろ？ 広暁の裸」

「は、はやてちゃん！？」

「だから見てないって言ったでしょ！？ そもそも顔しか出してなかったよ！！」

とてつもない剣幕で怒る2人。

2人としては早く忘れたいのだが、このようにからかう親友がいるため難しそうだ。

「ええな。私もついてけばよかったわ。そしたら…」

「はやてちゃん、まさか……」

「なのは。それ以上は言っちゃ駄目」

もしはやてが付いて来ていたとしたら。

あの後ははやてが起こす行動を考え、呆れる2人であった。

ブルツ。

「また寒気？」

「どうかしたか？」

「いや、何でも……って男の声？」

「私だ」

「犬が喋った!？」

「犬ではない、狼だ」

狼、もといザフィーラが話せることに驚く広暁。

どうやら広暁は、これからも驚くことが多々あるかもしれない。

第7話「機動六課での朝 変」(後書き)

ちよつとシャマルをキャラ崩壊させました。

医務官 西川先生 大人の女性 色々とアレな発言

みたいな図式が何故か頭に浮かんだためです。

なお、この話以降のシャマルのキャラはずっとこんな感じですよ。

原作通りでもいいんですけど…せつさくの二次創作、キャラ崩壊ぐらいやってみたい！

そんな思いの元書きました。もう少し崩壊させてもよかったですかね？

ご意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第8話「機動六課での朝流」（前書き）

「流」と書いて「ながれ」と読みます。

今回の話は私の趣味が多分に交じっています。
不快感を感じられるようでしたら、ブラウザの戻るボタンを押すこ
とを推奨します。

勝手なお願いで申し訳ありませんが、何卒…。

第8話「機動六課での潮流」

「機動六課、食堂」

「…というわけで、今日から民間協力者として働くことになった墨谷広暁さんです」

「墨谷広暁です。よろしくお願いします」

「……よろしくお願いします！」「……」

食べる朝食のメニューを選び、窓際に陣取ったフォワード陣。朝食の前に挨拶をすませるとのことらしい。

といっても、スターズ分隊の4人は昨日の戦闘。

他のヴォルケンリッター、そして部隊長であるはやてには今朝のゴタゴタで会っている。

つまり、実際に合っていないのはエリオとキャロの2人だけである。

「それじゃ…エリオとキャロ、自己紹介よろしくね？」

「はい…！」

フェイトがエリオとキャロに自己紹介を促す。

その様は、子供をママ友達に紹介する母親のようだ。

「エリオ・モンディアル三等陸士です。よろしくお願いします！」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

元氣一杯な声で挨拶する2人。見ていて微笑ましい光景だ。

「この竜は？」

「私の使役竜でフリードって言います。あの、そちらの竜は…？」

「こいつは…俺の相棒でホルスって言っただ」

「広暁さんも召喚士なんですか？」

「うん…」

どうやって言ったらいいものか？広暁が悩んでいると…

「フリード、どうしたの！？」

キャロの声に広暁が視線を上げると、ホルスとフリードが互いに睨みあっている。

戦う雰囲気は感じられないが、お互いを品定めするような雰囲気は漂っている。

「同じ竜同士、何か譲れないものもあるのかな？」

「なのは、そんな冷静に分析しなくても…」

睨みあうフリードとホルス。

10秒…20秒…
30秒を超えたところで。

「キユクル！」

「キユイ！」

鳴き声と共にお互いのパートナーの所へと戻った。

今の30秒の間で一体何があったのだろうか？

それは竜のみぞ知るところである。

「……さて、朝ごはんを食べよか！」

目の前で起きた事をまるで無視するかのように言っはやて。見事なスルースキルだ。

～食事中～

「フォワードで唯一の男ってエリオのことだったのか」

「そうなんです！男の人が増えて、本当に嬉しいです！」

エリオが嬉しそうに言うのには訳がある。

フォワード陣は全て女性であり、しかもキャラ口を除いたら全て年上

の女性なのだ。

男が増えて喜ぶのも無理はない。

そんなエリオを不思議そう…というか、あり得ないものを見るような眼で見る広暁。

エリオの目の前には、トーストが乗った皿がある。

いや、あるだけならばまだいい。

その横には、同じような皿が5枚以上積みまれている。

トーストを5皿。1皿2枚だから10枚は食べた計算になる。

「…エリオは大食いなのか？」

「…はい！？ええと…そう、朝の訓練でお腹が凄く減るんですよ！

僕のポジションはガードウィングなので、よく動き回りますから！」

いや、それでもさすがにその量は無いだろうと言いつつも、隣の隣で食べているスバルを見て言葉を失った。

その数何と10皿。エリオの倍はある。

「えーっと…スバルも大食いなのか？」

「！？あたしはその…そう！フロントアタッカーっていつて、私のポジションは全線で激しく打ち合うので、体力の消費が激しいんですよ！」

スバルもエリオと同様、どこか不自然さを感じる受け答えだ。

といつても、魔法の事をほとんど知らない広暁にポジションの事は分からない。

もしかしたら、それだけ訓練が厳しいのだろうか？
それとも、魔法を発動すること自体が体力を消費するのだろうか？
だからただ運動するだけよりも体力を消費するのだろうか？

広暁が思考の渦の深みにはまっっていると…

「広暁？広暁！？さっきからどないしたんや！？」

「！？どうした！？」

はやてが話しかけて来たことに全く気付いていなかったようで、驚いたように返事をする広暁。

「いや、何か急に手が止まっただけーっとしてたからな。どないしたんやと思って」

「あゝ、ごめん。ちょっと考え事をね。訓練についていけるのかな
〜って」

「そういえばはやてちゃん。広暁さんはスターズとライティング、
どっちに入るの？」

「私もそれ気になった。どっちなの、はやて？」

話は逸らせたが、どうやら別の話に移行してしまったようだ。

「私もそれは考えてたんやけど…まだ決めてないんや。
この後色々と検査してから考えようと思ってたから」

「にははは〜…はやてちゃんらしいというか……」

「でも、仕方ないよね。分からないことには決めようがないし」

はやての言うことに案の定というか、渋々納得するなのはとフェイト。

2人としては早く決めておきたかった多様だが、仕方ないものは仕方ない。

「それで、広暁。訓練についていけるかってことやけど、あんたなら問題ないと思うぞ」

「どうして？」

「体つきを見れば分かるわ。何かスポーツか武術をやってたんやろ？まあ、こうやって改めて見るとスポーツの方が濃厚やけど」

「確かにそうだけど…」

体つきを見ただけでスポーツをやっていたと見抜くはやてに驚く広暁。

武術家というのは雰囲気や体の傷等で何となく分かることが多い。

しかし、スポーツ選手というのは服の上から見ただけでは分かる人は少ない。

それを看過したはやてに驚いているようだ。

「部隊長をなめたらあかんで〜？」

心も読めるのか？

「それで、何をやってたんや？」

「ソフトテニスを9年ぐらい」

「……ソフトテニス？」

フォワードの新人4人が声を揃えて言った。

「ソフトテニスを知らないの？」

「テニスなら知ってますけど……」

「ソフトテニスは聞いたことがないです」

スバルの意見にティアナが被せるように言った。

話を聞く限りでは、ミッドチルダにソフトテニスというスポーツは無いようで、その事実には少し落ち込む広暁。

もしかしたら、ミッドチルダでもやるつもりだったのだろうか？

「ソフトテニスってのは、日本で始まったスポーツだね。」

ルールはほとんどテニスと同じだけど、ボールがゴムボールなんだよ。

それと、ソフトテニスだとダブルスが主流でシングルスはほとんど無い」

「大会で優勝したこととかあるんですか？」

スバルが多少興味を持ったようで、広暁に聞いてきた。勝負事となると気になるようだ。

「全国大会でベスト8までいったな」

「ベスト8!？」

「高校の時だけだね」

「ベスト8って凄いんですか!？」

「高校生のソフトテニス人口は9万人。

ダブルスだから大体4万5千ペア。

つまり4万5千ペアの内、上位8ペアってことになるな」

「ふえ〜…」

広暁の戦績に驚いているようで、スバルはトーストを持つ手が止まっている。

「やっぱり私の覗んだ通りやな。トレーニングとかもちゃんとしてるんやろ？」

「ジョギングとか、筋トレとか、基本的なものはやってるけど…そんなトレーニングで大丈夫か？」

「大丈夫や、問題あらへん。なんやかんや言っても基礎体力は大事やからな。

体力ないと魔法もそう打てへんし」

「ふ〜ん…」

やっぱり基礎は大事である。

「ごちそうさん！さてと、広暁。私は先に部隊長室に戻って色々準備するから、食事が終わったらシヤマルと一緒に医務室に行ってくれへんか？そこで検査するから」

「了かい」

「はい」

何故か2人揃って間延びした返事をする広暁とシヤマル。もしかしたら馬が合うのかもしれない。

「隅から隅までたぐりつぷりと調べてあげるわ」

「…お手柔らかにお願いします…」

……………訂正。馬が合うことはないかもしれない。

「シヤマルっていつもこんなのか…？」

「…済まんな」

「…ごういう奴なんだ…」

諦めたような声で返事をするシグナムとヴィータ。彼女達も色々振り回されているのだろう。

そんなシヤマルのする検査について、つい考えてしまう。

一体どんな検査をするのだろうか？
いきなり脱がされて全身に変なチューブを刺されるとか。
耐久力を測るとか言って、両腕を固定されて筋肉質の人に腹を何発も殴られるとか。

広暁がシャマルの検診について色々と妄想していると、

「そういえば、ソフトテニスでしたっけ？それってゴムボールを使
うんですよね？」

「そうだけど？」

ティアナが思い出したように質問をした。

「ゴムボールでやるんですか。テニスより簡単そうですね」

「確かにそうだけど、ソフトテニスの方が競技としては難しいと思
う」

「どづいうことですか？」

ティアナの問いに答える広暁。そこは譲れないものがあるらしい。

「ゴムボールだからこそ、だよ。
テニスで使うボールと違って回転をかけやすいから、色んな変化球
を打てる。」

テニスでもドライブ、スライス、バックスピンの有名だけど、弾ん
だ時の変化がテニスの比じゃ無い」

「どれぐらいですか？」

「球種にもよるけど…バックスピンだと全く跳ねずに止まることもある」

「そんなのありですか!?!」

驚いたように言うティアナ。全く跳ねない球をどうやって打ち返せというのだろうか?

「インドア…室内だとそれもやりやすいんだけど、普通の芝のコートでやると難しい。」

それでもそんな球を打てる人間がいるからね」

「結構凄いスポーツなんですね…」

エリオが感慨深げに言った。

スポーツをやった経験は少ないようだが、凄いということは分かるようだ。

「それと…ソフトテニスが唯一他のスポーツと一線を画すところがある」

「まだあるんですか!?!」

また驚くティアナ。

「スポーツをやる時に必要なものとして、『心・技・体』がよく挙げられるのは知ってるか?」

「それなら私も知ってるぞ。スポーツだけでなく、武術の道を歩む

ものなら誰もが心得ているものだ」

自らも剣士として、騎士として生きているシグナムが賛同する。

「心は精神の状態。技は技術。体は身体、及び体力。だけど、ソフトテニスだとそれらにもう一つ加わる」

「もう一つ？一体何だ？」

「智。智恵の智だ」

「智恵だと!？」

広暁が言ったことにシグナムが驚いているようだ。

「そう。ソフトテニスだと心・技・体・智の4つになる」

「確かに智恵は大切だが…加えるようなものなのか？」

「ソフトテニスっていうのはな。

パワーやスピードももちろん大事なんだけど、一番必要なのはテクニク…もとい智恵なんだ。

ゴムボールだから回転や風の影響を受けやすい。どんな回転をかけて打つか？

相手が打つボールはどれくらい回転がかかって、自分がそれに反応できるか？

風の影響を考慮に入れてボールを打ち、相手が打ったボールの軌跡を予測出来るか？

挙げればきりがなくらい。

そうというのが理由か分からないけど、年配の人ほど強いのもソフト

テニスプレイヤーの特徴だと思っ」

「加える形になるけど、それらに必要なのは洞察力。
相手の些細な癖や目線の動き。身体の移動や試合の流れ。
それらを掴む者こそが、真のソフトテニスプレイヤーと言える俺
は考えてる」

「なるほど…一理あるな」

「広暁さんてお喋りというか…好きなことになると話が止まらない
タイプですか？」

「それがどうかした？」

「最初の印象だと口数の少ない人というか…必要なこと以外話さな
い人っていうイメージがあったので」

「…よく言われるんだよ、それ」

ティアナが言ったことに、広暁はうんざりと言った口調で話す。
人に言われることが多いらしく、それを訂正するのも面倒臭いとい
った感じで。

「元がこんな性格だから大人しくしといた方が良いつていうのは分
かってるんだけどね…。
好きなことの話になると止まらなくなるのだけは中々直せないんだ
よ…」

「あ、それあたしも分かります！あたしもこの性格直せなくて、い
つともティアに怒られるんですよ！」

「あんたは直す気が無いだけでしょ…もうちょっと周りに気を使えばいいんだけど…はあ………」

ティアナもティアナでスバルに苦勞しているようである。そんなことを話していると、

「ごちそうさま。広暁さん、医務室に行くわよ？」

「了解つと。ホルス、行くぞ」

「キユイ」

シヤマルが食事を終えたようだ。広暁も食器の乗ったトレーを持ち、席を立つ。

ちなみに、今朝のホルスのご飯は厚切りハムのステーキ。肉が好みようだ。

「どんな結果が出るか楽しみね」

「俺はちょっと怖いですけどね。自分に魔法が使えると思うと」

「ミッドチルダでは一般的よ？」

「俺のいた世界では一般的じゃないんだよ………」

「ここはミッドチルダだけど？」

「まだ慣れてないってことで」

軽口を交わしながら食堂を後にする2人。
何だかんだで機動六課での生活、もとい昨日感じた女性に対する恐怖心は薄れてきているようである。

「食堂、まだ食事中の人達」

「どうだった？広暁さんの印象は」

「真面目なお兄さんって感じですよ」

「優しい男の人、かな？」

フェイトの問いに対し、答えるエリオとキャロ。
その反応を見て、どこか嬉しそうなフェイト。

（エリオにとっては頼れるお兄さん。キャロにとっては、同じ竜を操る者。

結構いい人かもしれないな、広暁さんは）

やっぱり親バカである。

その後、話は広暁のポジション談義へと移行する。

「話を聞いた限りでは、広暁のポジションはセンターガードが良いかもしれないな」

「そうだね。広く見ることが出来る目を持つてみたいだし、ホルスちゃんもいるから遠距離砲撃にも困らないしね」

「じゃあライトニングかな？」

「ライトニングにセンターガードはいないけど…キャロとフリードがいますよ？」

「だったらスターズ？」

「センターガードが3人に増えますよ…」

「スターズでフルバックは？」

「それも有りだな」

「そもそも、いきなり訓練出来るのか？」

「ガジェットとの初めての戦闘であそこまで出来れば大丈夫だと思うよ？」

「ヴィータちゃんも見てたじゃない」

「戦う者というよりは競う者といった感じだがな」

「そこは今後の訓練次第だよ」

この後議論は白熱し、午前の訓練ぎりぎりまで食堂で議論を交わしたフォワードメンバー（+ザファイラ）。

そもそも広暁に魔力の資質があるかどうかすらまだ分かっていないのだが。

獲らぬ狸の皮算用、知らぬ広暁の今後談義である。

「!？」

「どうしたんですか？はやてちゃん」

「誰かが私の噂をしたような…」

「へ？」

「すまん。何でもあらへんで、リン」

「はあ……」

部隊長室で何かを感じ取った狸^{はで}。

ちなみに、広暁の昔のあだ名もある動物の名前なのだが、それはまた別の話。

第8話「機動六課での潮流」(後書き)

ソフトテニス談義で話の半分が終わってしまいました…。

ソフトテニスって、何かと馬鹿にされやすいんですよね。

「あんなの、俺にも出来る」とか言う他の部活の奴とか。

そついう奴らと乱打(軽い打ち合い)をして、左右前後に走らせたり色々と回転をかけて空振りさせるのが楽しかった中学生時代。

さすがに今はそんなことはしませんけど、やってて楽しかったと思ってしまう。

……救いようがないですね、私。

意見・感想・訂正等、よろしく願います。

第9話「機動六課での朝観」(前書き)

久しぶりに「リリカルなのはStrikers」のアニメを見ました。

1、2話を見たんですけど、全体的に声が幼いように感じましたね…。

シグナムとエリオ以外は。

エリオはしっかりしてるし、いい声だし。

シグナムはやり手のキャリアウーマンて感じの声だし。

明日から休日なんでもうちよ見たいと思います。

それでは第9話、始まるよー！

第9話「機動六課での朝 観」

（機動六課医務室（シャマルの城））

「ほな始めるか」

食堂を出た広暁とシャマルは、検査のため医務室に来ていた。

広暁も病院には行ったことがあるし、診察を受けたこともある。しかし、こんなに凄そうな機材が置かれているのを見るのは初めてだ。

パソコンの周りのはいくつものディスプレイが浮かんでいる。

また、ベットの上にはアーチ状の光の帯があり、帯の中ではミッド文字が動いている。

ここに寝転がって検査をするのだろうか？

「すっげえ……」

「驚いた？」

「そりゃあもう。こんな凄い設備、初めて見た」

「ほとんどが本局からのお下がりなのよ？」

「これで！？……って、俺が知るわけないわな」

「ふふ。それでも、別の課の医務室に比べたら良い機材であることに間違いはないわ」

「すっげえ」

「それさっきも言わんかったか？」

「驚いてますから」

トリオの漫才じゃあるまいし、何をやってるのだろうかこの3人は、
医務室で漫才というのも乙なものだが。

「じゃあ、始めましょうか。広暁さん、上着を…」

「失礼しま〜す！」

シヤマルが広暁に何かを言いかけると、医務室の扉を開けて誰かが
入って来たようだ。

「なんやリイン。来れないって言ってなかったか？」

「こんな面白そうな人、私が見逃すわけがないじゃないですか〜」

そうやって入って来たのは青いロングの髪を持つ女性……なのだが、
浮いている点は置いておこう。もう見慣れたことだし。
しかし、彼女の身長がその……低い。
というか、体が小さい。

身長は大体30cmぐらいで、そんな人が制服を着て飛んでいる。ファンタジーゲームに出てくる妖精のようだ。

「あなたが次元漂流者の墨谷広暁さんですか？」

「あ、はい」

「はやてちゃんのデバイスで、リインフォース？曹長です。よろしくお願いしますね？」

「ええ、こちらこそ」

「それと、私のことはリインと呼んで下さい」

リインが握手を求めて右手を差し出してきた。

ミッドチルダに来てから何度目の握手だろうか？

そう思いながら広暁も右手を出したのだが。

体の小ささ故どうやって握手しようかと悩んでしまっ
すると……

ギョツ。

指を握られた。

握手というか何というか。

実に奇妙な光景だろう、傍目から見たら。

「キュイ！」

今まで黙っていたホルスがリインに鳴きかけてきた。

その後、リインと同じところまで飛び、ホルスも右手（右前足？）

を差し出した。

「あなたがホルスですか。よろしくです!」

「キユキユイ!」

握手するリインとホルス。もとい、デバイスと竜。さつきよりシユールな光景だ。

「はやてちゃん、リンカーコアの検査は終わっただんですか?」

「それを今から始めるとこやったんだけど?」

「間に合ってよかったです」

2人の関係は主人とデバイス、もしくは上司と部下の関係だろう。

しかし、今の広暁の目の前のやりとりを見る限りではそうは見えない。

い。
おや、いや、どちらかというと姉妹しまいの様な関係に見える。

実に微笑ましい。

「そのリンカーコアってのは?」

「魔法を発動するのに必要な器官、魔力の源や。魔力量が多ければそれだけで有利やし、レアスキル（固有技能）を持ってるならレアモンやで?」

「ほ」

聞いた限りでは生まれ持って決まるものようだ。

一種の才能とでも言えばいいのだろう。

「役者も揃ったことだし、いいかしら？」

「おっと、すまんなシャマル。始めてかまへんで」

「分かったわ。じゃあ、広暁さん。上着を脱いでくれる？」

「上着を？ 分かった」

上着を脱ぐことに少し疑問を感じたが、広暁は上着を脱ぎ始めた。医者の触診のようなことをするのだと思ったのだろう。

（何で服脱がせるんや、シャマル？服の上からでもシャマルなら検査できるやろ？）

（せっかく若い男の子が来てるのよ？見なきゃ損じゃない）

（確かにそうやけど…）

（こういうのには慣れてないのよね、はやてちゃんは。普段はセクハラ発言が多いのに。そんなんじゃ他の女の子とくっついちゃうわよ、彼）

（な、なにを言うてるんや！？）

（思春期の女の子は敏感なことよ。今は誰もそんな気は無いみたいだけど、いつ彼が他の女の子とくっついてもおかしくはないわよ？ 彼みたいにも外も真面目な男の子はそうそういないから）

(それはあかん!!)

(だったら、今の内に彼の裸を見てアドバンテージをとっておいた方がいいんじゃない?)

(それもそうやな………ってあれ? 何でシャルルがそのこと知ってるん?)

(そのこと?)

(え〜っと、その…私の気持ちをや)

(そんなの、見てれば分かるわよ)

(そんなに分かりやすかったかな?)

(多分気づいてるのは私だけよ?)

(よかった〜。ほな、じっくり拝ませてもらおうかな)

(……はわわ〜。はやてちゃんにも遂に春が!?)

(………ライン、頭冷やしたいんか?)

(1、ごめんなさい!)

広暁の知らぬところ(念話)で実に乙女らしいというか、女の子らしいというか。

そんな会話をする女性3人。

そして、さつきから何か考え事をしているようなシャマルを不思議に思ったのか。

「どうかしたの？」

「大丈夫よ。始めるわね」

広暁は聞いたが問題は無いようだ。

もっとも、知らない方が幸せだろう、今の会話は。

（にしてもええ体しとるな〜。

全体的に無駄がない。でも、ムキムキっちゅーわけでもない。

正にアスリートの体系や）

（これが大人の男の人の裸ですか〜。エリオ君と違って色気がありますね〜）

ゾクッ。

「あら？大丈夫？」

「何か寒気が…」

機動六課に来てから何回目かの寒気。

「もう少しだから、それまで頑張ってちょうだい（もっと裸を見た
いけど）」

「は〜いっ」と

「次はベットに横になってもらえる？」

「オツケー」

「どうやった、シャマル？」

「魔力量はA A +、魔力変換資質は無し。飛行も可能ね」

「おゝ結構ええやないか」

「そうなの？」

「地球の人間で魔力量A A +ってのは中々無いで。ミッドチルダでも上の下ぐらいやな」

「飛行も可能だし、ホルスとの相性もよさそうですね」

「キユイ」

結構良いものを持ってたらしく、驚く広暁。

「魔力変換資質って？」

「魔力を意識せず別の物質に変換させる資質のことや。

シグナムが炎熱、フェイトちゃんとエリオが電気やな」

「俺には無いのか」

某忍者漫画の性質変化みたいだなと思いつつ、それが無かったことに落胆する。

そこまではさすがに欲張りだろう、ミッドチルダの常識的に考えて。

「だけど…」

「?どないしたんや、シャマル？」

「リンカーコアが何か違うような気がするのよね。

何て言うか、広暁さんのはちょっと複雑というか……何かが違うの
「よ」

「シャマルでも分からへんのか？」

「本局の機材を使えばまだ分からないけど………確証は無いわね」

「うーん……しゃくない、今は放置やな」

「もーっつあるのよ」

「もう1つ？」

「レアスキルがあるみたいなんだけど……」

「レアスキルやて!？」

「それが分からないの。あることは分かるんだけど……」

「どーいうことや？」

「まだ覚醒していない……使える状態になっていないと言えいいのかしら？」

「そらまた面倒くさいなあ」

「使えない状態って珍しいのか？」

「レアスキルってのはな。」

持ち合わせていても本人がそれを持つことに気づいてないことがほとんどなんや。

だから何かさえ分かればすぐに使えるんやけど……」

「使えるようになるためには？」

「分からん。何かきっかけがあって使えるようになる人が多いんやけど……」。

何年も経ってから使えるようになるなんてのもざらやしな。ぶつちやけ運次第や」

「本気ですか」

「本気^{マシ}やで」

レアスキルを使えるようになるのが運次第。

さすがに広暁も驚きを隠せない。

だが、地球の人間としては恵まれているようだし、そこまで望むのも野暮というものだ。

使えるようになるまで気長に待つことにしよう。

広暁はそう結論付けた。

「ホルスの方はどうだった？」

ちなみに。広暁の検査の後、ホルスも検査をした。

もつとも、ホルスはベットのうえでただ立っただけなのだが。

「魔力量はAAA+。能力としては炎の生成・操作・探知といったところかしら」

「AAA+か。今のなのはちゃんより多いなあ」

「今の？」

「私とフェイトちゃんとなのはちゃん。

それにシグナムとヴィータにはリミッターっていて、魔力量に制限がかかるとるんや。

制限をかければそれだけ沢山の魔導師を雇えるしな」

緊急時には制限は外せるけどな、と補足するはやて。

つまるところ、軍でいうところの戦闘機や戦車の保有台数の様なも

のか。
リミッターは無いが。

「でも、ホルスはもつとすごいわよ?」

「すごい? どういうことや?」

「調べた結果と、海浜公園でのガジェットとの戦闘データを基に考察した結果だけだ。」

「ホルスは魔力の収束に無駄が無いのよ」

「無駄が無い?」

「魔法つていうのはね。大気中に満ちてる魔力素をリンカーコアによって吸収、エネルギーとして加工、魔法発動により魔力を消費するの。でも、消費した魔力全てが消滅する訳じゃなくて、余りが周囲に霧散したり、魔導師やデバイスに残ることもあるのよ。」

「なるほど」

「ホルスはそれが数十万分の1%ぐらい。それこそ限りなく0に近いの。」

「なのはちゃんやフェイトちゃんですら2〜3%は霧散するのよね」

「確かにそれはすごいけど……何でや?」

「私にも分からないわ。もともとそういう才能を持っているのか。それとも、長きにわたる戦いの中で身についたものなのか」

「分からんなさ……ホルスは一体どういう存在なんや？」

「それに加える形になるかもしれないけど。もう一つ、面白い事が分かったわ」

「……面白い事？」

「広暁さんとホルスに精神リンクがあることが確認されたわ」

「精神リンク？」

「主と使い魔の精神は精神的に繋がつとるんや。

だけど、使い魔は魔導師が作成し使役する魔道生命体。

ホルスはそれとは違うやろ？」

「そもそも、こいつがどういう存在かすらまだ分からないんだけどな」

「キユイ？」

指を指されて首をかしげるホルス。

相変わらず可愛い。

「私の調べた感じでは、フリードと同じ感じだったわよ？」

「アルザス出身ってことか？」

「ううん。体の構造とか、リンカーコアとか。でも、ホルスの方が幾分か優れてるみたい」

「優れてる？」

「聞いた話だと、ホルスは自分の意思で小さくなれるそうじゃない」

「確かに。なあ、ホルス。大きくもなれるのか？」

「キユイ！」

「……なれるみたいです」

勿論と言わんばかりに大きな鳴き声で鳴くホルス。

どこか誇らしげに胸を張っている様にも見えるが、ここでは置いておくことにしよう。

「自分の意思で大きさを変えられるのは稀少よ？召喚獣は普通大きさは変わらない。

フリードだって、キャロの竜魂召喚の魔法を受けないと本来の姿にはなれないから」

「ほぐ。お前すごいんだな」

「キユイ！！」

さっきより大きな鳴き声で鳴くホルス。

少しは自重してほしいものだ。

「あれ？ 精神リンクがあるとどうなるんだ？」

「主人の方の感情や記憶が使い魔に流れるんや。まあ、使い魔が主の感情を察知するためのもんやな」

「ってことは、俺の感情はホルスにダダ漏れってことか？」

「そういうことやな。まあ、感情が荒れん限りは普段の生活に支障はないと思うで、広暁もホルスも。それに、リンクを切ることも可能やしな」

「ふん……」

「キユイ？」

自分の感情がホルスにダダ漏れ。

さすがにそれは恥ずかしいと思ったのだが、まあ、ホルスだけなら問題ないか。

そう結論付けた広暁。

…ホルスは今の感情にも反応したのだろうか？

「にしても、ホルスは凄いな。お前、一体何なんだ？」

「キユキユイ？」

また首をかしげる。

自分にも分からないと言っているのだろうか？

「まあ、分からんもんはしゃーない。今は先にやることをやるつや」

「それもそうだな」

「それじゃあ、次はデバイスとバリアジャケットやな」

「デバイスって武器のこと？」

「せや。まあ、それはデバイスルームに行きながら説明するさかい。行くで〜」

「はい」

「じゃ〜ね〜」

何とも間延びした会話をする3人（広暁以外）。

そして深く息を吐く広暁。

広暁もたまにそんな話し方をするのだが、他人が話すのを聞くと気が抜けるようだ。

人の振り見て我が振り直せとは正にこういった状況を言うのだろうか。

そして、舞台はデバイスルームへと移行する。

広暁のデバイスはどのようなデザインになるのだろうか？

そもそも、まともなデザインになるのだろうか（主に狸の影響で）？
3人と1匹は医務室を出た。

第9話「機動六課での朝 観」(後書き)

添削してて思ったんですけど、今回はやけに倒置法が多かったです。そのときの気分次第で作風が変わるんですかね、申し訳ありません。

こんな私ですが、生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第10話「機動六課での朝悟」（前書き）

第10話です。

ここまで読んで下さった方なら分かっていると思いますが、私の小説は話の進みが遅いです。

もっと早くしてもいいんですけど…実際にあったとしたらこのぐらいは時間がかかると思います。

自分勝手に申し訳ありませんが、何卒…。

第10話「機動六課での朝悟」

「デバイスルーム」

「…てなわけや。彼に合ったデバイスを作ってもらえんか？」

「まーっかせて下さいー！」

彼女の名前はシャリオ・フィリーノ。通称シャーリー。

機動六課の通信主任であり、（自称）メカニックデザイナーである。

「何か言いました？」

気のせいです。

「どうしたんやシャーリー？」

「（今悪口を言われたような…）あ、ごめんなさい。

それで、彼に合ったデバイスを作ればいいんですよね？」

「せや。これからは現場でバリバリ働いてもらっつんやからな。一番いいのを頼む」

「了解です！どういったのにします？」

広暁がここに来る途中はやてから聞いた限りでは、デバイスというのは5つに分かれている。

|||||

「だろ？」

「ポジションや戦闘スタイルによって分かれるのが普通ですね。八神部隊長、広暁さんのポジションはどこですか？」

「私はスターズでフルバックになってもらおうと考えてたんやけど…広暁はどっか希望ある？」

「いや、ポジションとか自分が使える魔法とか全然知らんし」

「ポジションはな、大きく分けて4つや。前線を崩すフロントアタッカー、指揮と砲撃のセンターガード、遊撃のガードウイング、後方支援のフルバック。広暁にはホルスがいるから、フロントアタッカーとガードウイングは向いてない。センターガードも考えたんやけど、そうなるかと必然的にライトニングになる。スターズにはセンターガードが2人いるからな。でも、ライトニングにはキャラとフリードがいるから、バリエーションを増やすためにもスターズでフルバックが一番良いと思ったんや」

食堂でのメンバーの会話を簡潔にまとめたはやて。
はやてはその場にいなかったのだが、やはり考えることは同じということだろう。

「キャラは召喚師やから、手袋型のブーストデバイスを使っとる。だから広暁もブーストデバイスが良いと思うんやけど…向き不向きがあるからな、一概には言えん」

「なるほど…となると、インテリジェンスデバイスか、ブーストデバイスが妥当か」

「アームドデバイスはどうですか？」

「武器を使ったことが無いんで」

「鉄パイプとかビール瓶とか、色々あるやろ？」

「どこの不良の喧嘩ですか…。まあ、大学の空手部とか合気道部とか拳法部の友達に付き合わされて、トンファーとか釵さいとか六尺棒とかヌンチャクとか木刀とか流星錘じゅうせいすいとか多節棍は使ったことあるけど」

「そっちの方がよっぽど恐ろしいわ…」

「いやいや。部活の練習とか趣味の範囲ですから。

実際に喧嘩で使ったことは無いし、そもそも持ち歩いたら軽犯罪法に引っかけから。」

「つていうか、木刀しか持ってないし」

「木刀は持ってるんですね」

「修学旅行で京都に行った時に買って…って話逸れてない？」

「広暁が突っ込みどころ満載なことを言うからやろ。しかし、そうなるとはんまにどないするん？」

「そうだな…」

しばし考え込む。

一般的なのは杖の形をしたストレージデバイスだ。

しかし、自分のポジションを考慮に入れると、武器の形をしたデバイスではなく身につけるタイプのデバイスの方が安全だろう。

デバイスが壊れると魔法も発動出来ないのだから。

だが、ブーストデバイスは補助特化。

味方の補助はもちろん必要だし、攻撃はホルスがいるから問題ない。

しかし、ホルスがやられたときや1人の時のことを考えると、ブーストデバイスでは汎用性に欠ける。

そして、フルバックというポジションのことも考えると…

「……………お願いします」

「その心は？」

「……………です」

「お美事にござりまする」

「2人共何を言ってるんですか？」

「…気にしないで…」

平行世界といえどネタは通じるようだ。

しかし、そのネタが分からないシャーリーに素で反応されて落ち込む2人。

言うはやてもはやてだが、乗る広暁も広暁だ。

真面目な性格と言っても、ある程度のユーモアは有るのだろう。

……………というか、何故はやてはあの剣術漫画のネタを知っているのだろうか？

若い女性を読むような漫画ではないのだが。

「……………といたところですかね？」

「そんなところですよ」

「分かりました。デザインはどうします？」

「デザイン？そこまで考えてなかったな」

「そんなに難しく考えなくてもいいですよ、皆さん自分の好きなデザインですから。」

「もちろん、実用性も兼ねてますけど」

「好きなデザインを兼ねた実用性重視じゃないの？」

「そつとも言います」

つまり、デザインと実用性を両立させるだけの技術をシャーリーは持っているということだろう。

「そつだなあ……」

「…みたいな感じをお願いします」

「分かりました。完成まではそれなりに時間がかかるので、このストレージデバイスを使ってください」

「了解」

「機動すればバリアジャケットが展開されますから。」

バリアジャケットは一般局員が使用する物と同じになってます」

広暁に支給された杖型になるストレージデバイス。

これが広暁オリジナルのデバイスが出来るまでの代用品ということになる。

「にしても、よくあんなスラスラとデザインや機能を言えたなあ」

「元があるからな。俺はそこに色々を加えただけだし」

「それでもや。カードリッジシステムや状況に応じた複数の形態変化の考案。あんた本当に大学生か？」

「大学生です。デバイスの形態変化は昨日チラツとなのはから聞いたし、形態変化の種類はポジションの事を考えた結果だ。プラス、本からの知識だな」

「恐ろしいやつぢゃな。研究者に向いてるとか言われへん？」

「研究者は無いな。何でそこまで観^みえるとか、考えすぎにも程があるとかならよく言われるけど」

「ますます恐ろしいやつちな。まあ、今はデバイスの製作が決まったことを喜ぶとするか」

「だな。ん？」

「どうしたんや？」

「いや、作ってもらえるのはいいんだけど…お金とかはどうなるの？」

「それなら問題あらへんで。民間協力者ってことになつとるから、経費は機動六課持ちや」

「いいの？」

「それ相応の経費が降りてきとるからな。ちゃんと給料も出るで」

「何か申し訳ないな」

「何や？不満なら、給料から引いとくか？」

「申し訳ありませんでした」

「素直でよろしい」

夫婦漫才ですか。

「つちゅーわけでや。デバイスの製作も問題無さそうやし、やる」とは終わったな」

「そうだな」

「じゃあこの後は…どないしょ？」

「…決めてなかったの？」

「冗談やて。ミッド文字を教えるから、誰か手の空いてる子を呼んどくわ」

「語学か…」

「苦手なん？」

「英語とかなら問題無いんだけど…知らない言語を一から学ばうてのがね」

「話せるんやし問題無いやろ。後は覚えて書けるようになるだけや」

「それもそうだな」

「そういつことや。ほなシャーリー、よろしくな」

「お任せ下さいー！」

そう言ったシャーリーに会釈をし、2人と1匹はデバイスルームを出た。

「あ、はやてちゃん！私を置いて行かないで下さい！！」

ずっと空気だったリイン。

出る時まで忘れられていたようだ。

↳back to the 部隊長室↳

「そういえばまだ聞いてなかった」

「何を？」

「今朝言ったこと。機動六課のことだよ」

「あゝ…そう言えば」

「気になってたんだよ。時空管理局のことはよく知らないから何とも言えないんだけど…機動六課は知り合い同士が多いというか関係者が多いというか。身内の集まり見たいな感じがする」

「…せやな。そこら辺はちゃんと説明しとかなあかな」

その後、広暁は機動六課設立の経緯を聞いた。

過去に空港で大規模火災があり、その行動の遅さに嘆いたはやて。それを解決するために、4年の歳月をかけて自分の部隊を作ったこと。

設立理由はロストギアの捜査と保守管理を主な任務とする少数精鋭部隊の設立。

ロストロギアは危険な代物で、しかしそれを担当する課が十分ではなかったこと。

自分にはあまりコネやキャリアが無いため、どうしても課の人間は身内が多くなることなど。

それらを聞いた広暁は、驚きながらもその意思に感服していた。

はやては、広暁が部活や遊びに明け暮れている時も、目指すものために戦っていたのだ。

それも生死をかけるような。

はやてははやて、自分は自分。

例えそう割り切ったとしても、心の中で比べてしまう。

「……俺なんかとは違うんだな」

「何のことや?」

「機動六課の人はさ、多かれ少なかれ自分の将来のことを考え、それに向かって突き進んでる。自分の意思でね。だけど……」

「……」

「俺にはそういうのがない。はやてが夢に向かって突き進んでる時も、俺は部活に明け暮れたりカードで遊んだりしてたんだ。勉強もそれなりにしたし、大学もある程度はいいところに行ってる。だけど、将来便利そうとか知識が増えるのが楽しいとか。そんな理由なんだよ。なりたいたいものになりたくてやってきたわけじゃないんだ。そう思うと…ね」

「……………」

「ごめん、つまらんことを話したな」

「気にせんでええ…。それに、広暁が思った通りうちゅーわけでもないやろ？」

「どづいづことだ？」

「広暁が機動六課うちゅに入ることを決めたってことはや。

少なくとも、自分の生きる道を考えてってことやろ？」

機動六課うちゅに入っても、将来の肥やしになるとか楽しそうなことはいからな」

「……………」

「それに。

自分が一生懸命何かに打ち込んできた時間は決して無駄にはならん。それが趣味やスポーツでもな。

私はただそれが機動六課の設立だったうちゅーだけや」

「……………」

「どつしたんや?」

さつきから黙ったままの広暁を疑問に思ったのか、はやてが聞く。

「…いや。やっぱり部隊長だなーと」

「なんやすごい馬鹿にされてる様な気がするんだけど?」

「ごめん。でも、おかげで少し楽になった」

「そらよかった。部下の悩みを聞くのも部隊長の仕事だからな」

「ありがと。また愚痴をたれることがあるかもしれないけど、いいかな?」

「構へん構へん。どーんと来い!」

「助かるよ。それじゃ、今日は失礼するね」

「オフィスにルキノを呼んであるから、彼女に教えてもらってな」

「了解」

今の会話で心に引っかかっていたものがとれたのか、広暁の足取りは軽くなった。

心なしか、その背中も大きく見える。

「若者よ、大いに悩め。そして私を頼れ」

良い事を言っているようだが、どこか違うような気がする。

そもそも、はやてより広暁の方が年上なのだが。

「しっかりしてる人やと思ってたけど、結構可愛いところもあんなな〜。」

悩んでる時の顔なんて良かったわ〜」

はやての毒牙が広暁に迫る。

広暁は逃げ切ることが出来るのか？

それとも、逆に毒牙を持つ獣を捕えるのか？

この先を語るには、今はまだ早過ぎる。

第10話「機動六課での朝悟」（後書き）

今更ですが、私の小説の主人公はリアルにいそうな人間をモデルと
しています。

何故こういった主人公にするかというと…単純にそういった小説が
少なかったからです。

現実にいそうな人間がモデルの小説があってもいいんじゃないかな
あ、と考えて書いています。

なお、これで機動六課での朝編は終了です。

次からは別の流れになりますので、よろしく願いします。

ちなみに。広暁のデバイスの詳細が分かるのはもうちょっと先にな
ります。

意見・感想・訂正 e t c、よろしく願いします。

第11話「初訓練」(前書き)

明けましておめでとございます！

第11話です。

大切なお知らせがありますので、後書きを必ず見てください。
よろしく願います。

必ずですよ!?

第11話「初訓練」

<広暁side>

ズルズル。

ハムハム。

ゴクゴク……。

パン!!

「ごちそうさま」

いや、まさかミッドチルダできつねうどんを食べるなんて思っ
てもなかったな。

今朝は促されるままモーニングセットを選んだから、他のメニュー
を選ぶ余地なんてなかったし。

食堂のおばちゃんの話では、地球の料理はミッドチルダに来た地球
人が広めたらしい。

それこそ、次元漂流者や自分の意思で引越した人まで。

その人達の努力の甲斐あって俺はこうしてうどんを食べるわけだ、
ありがたい。

っと、そんなことより。

さっきのはやてからの連絡では、

「空いてる子に頼んで基本的な訓練をするから、昼ご飯食べたら空間シミュレーターに行つてな〜」

とのことだったので、昼飯を食ったら俺は空間シミュレーターというところに行かなければならない。

午前は魔法の勉強、午後は実技。

これから1週間、このスケジュールで俺の育成をするぞうだ。

空間シミュレーターというのは機動六課の訓練スペースで、任意の空間を作れる海上訓練施設。

主にガジェットとの戦闘訓練を行う場所で、早い話しが凄いバーチャル空間を生み出す施設だ。

建物の上にも立ててるらしいし。

そこで俺はマンツーマンの訓練を受けるらしい。

なんか贅沢な気もするが、時間が空いてるから大丈夫とのこと。

そついや、誰に訓練受けるんだろ？

俺はスターズ所属だから、なのはかヴィータかな？

でも2人は忙しい身の上らしいし…。

となると、ティアナかスバルか？

基本的な訓練ならあの2人が出る幕でもないからな。

年下に教わるというのも不思議な気分だが、俺は初心者、向こうは
玄人。

至極当然のことだ、問題ない。

「キユイ！」

ホルスも食い終わったみたいだな。

ちなみに、ホルスの昼飯はハンバーグ。

肉ばっか食ってて大丈夫かと聞いたら、

「キユキユイ！！」

と言われた。

問題ないと言っているのだろう。

もう何言ってるか分かるようになってきた、慣れてって怖いね。

そっぴや、ライオンとか肉食動物も肉だけ食ってても問題ないらしいな。

…ってあれ？ライオンって、動物の血からビタミンを取るから問題ないんだよな？

生で食うわけだし。

ハンバーグって思いつきり熱通ってるけど（焼き加減は多分ウエルダン）。

…まあ、本人（竜）が大丈夫って言ってるなら大丈夫だろ。体壊したらシャマルに診てもらえば多分大丈夫だし。

さてと。食器を片づけて空間シミュレーターに行きますか！

く空間シミュレーターく

「ってあれ？フェイトだったの？」

「そうだよ。私じゃおかしかったかな？」

「いやさ。俺はスターズの所属になるから、スターズの誰かだと思

「つてた」

広暁が空間シミュレーターに着くと、いたのは腰まである金髪を黒いリボンで一括りにした女性。

ライトニング分隊の隊長であるフェイトだった。

「それはまたフォーメーションとかの訓練をするようになってからだよ。」

魔法の基礎訓練なら誰が教えても大差ないからね。

だからこの時間空いてる私が担当することになったの」

「ってことは、明日以降の訓練も人が変わる可能性があるって?」

「そういうことになるね。でも、引き継ぎはちゃんとやるから問題ないよ」

「分かった」

とりあえずは訓練の予定について広暁も納得したようだ。

「それじゃ訓練を始めるね。」

今日やることは魔力弾の生成。

魔法の基本的なことは今日習ったんだよね?」

「リンカーコアで大気中の魔力素を吸収、エネルギーとして魔力に加工、んで魔法発動だっけ?」

「そう。今日やるのはその中でも基礎中の基礎、魔力弾の生成。これは加工した魔力をそのまま出す訓練だよ」

「了解…今から訓練を始めるんだよな？」

「そうだよ？」

「ちょっと走ってきていい？軽く準備運動もしたいし」

「それぐらいなら構わないよ……クスッ」

「？何か変なこと言ったか？」

「ごめんなさい。訓練始める前には軽いジョギングと体操。フワードが行ってる訓練と同じだったから」

「まあ、スポーツやってる人なら大抵そうするとは思っけど……」

「今からやるのは戦闘訓練だからね？気を引き締めてよ？」

「OK。んじゃ、ちょっと走ってきてまゝす」

「キユ〜イ」

そう言っつて広暁は空間シミュレーターの外へと走り出した。

機動六課は海辺に立っているの、海沿いを走るようだ。

ホルスも飛んで行ったが、やはり広暁と一緒に良いということだろう。

（15分後）

「ただいま」

「結構長かったね？」

「ゆっくり走ってきたからな。多分3kmぐらいしか走ってないぞ？」

もっとも、これが普通の広暁のジョギングのペースなのだが。ランニングとなるともう少しペースを上げるのが普通だ。

「んじゃ、ちよっと体操するんで」

「分かった。しっかりね？」

「了解」

そう言っつて広暁は体操を始めた。屈伸、伸脚、アキレス腱伸ばし。肩回しや柔軟など。

一通り終わると広暁は深い深呼吸の後、フェイトに話しかけた。

「終わりました」

「じゃあ、始めましょう。まずは私を見て」

そうやってフェイトが右手を前に突き出した。すると、そこに金色の光が集まりだしたのだ。

「これが魔力弾。人によって色は違うけど、主に攻撃に使うの。自分の意思でコントロールすることも出来るよ」

フェイトが右手を上空にかざすと、弾は空に向かって上昇した。そして、その弾が空を縦横無尽に駆け巡ったのだ。

空軍基地で戦闘機が行うショーに似ているが、こちらは人が操っている。迫力では劣るが、鮮烈さや美しさという点ではこちらの方が上だろう。

「魔力弾って、デバイスの補助が無くても作れるの？」

「そうだよ。あと、バリアとか肉体強化とか、プログラムが必要なものとかが、ある程度簡単なものはデバイスが無くても発動出来る。それ以外の魔法は、デバイスにプログラムしておくのが基本かな」

デバイス無しでも魔法は発動出来るらしい。

しかしそういった人達は、自分達とは頭の構造が違いすぎるとのこと。

広暁には到底無理だろう。

「それで、俺は何をすれば？」

「真似して」

「…はい？」

「真似して」

「いや、それは聞きとれたんだけど…。魔法を発動したことが無い俺にいきなり魔力弾を生成しろと？」

「大丈夫。最初はデバイスを起動させて、デバイスの補助下でやればいいから。」

今日の目標はデバイスの補助下で魔力弾を生成すること。簡単に言えば、魔力を作ることかな」

「分かった…ってあれ？ホルスはどうするんだ？」

「はやてちゃんの話だと、ホルスは広暁さんの訓練が終わるまでは特にやることは無いらしいんだ」

「じゃあ、しばらくは俺と一緒にいるだけでいいのか？」

「そういうことになるね。あ、でも…」

「でも？」

「……………」

「もしも〜し?」

「その…大きくなってもらっていいかな?」

「へ?」

「だから、その…。ホルスの大きくなった姿を見せてほしいんだ。海浜公園での戦闘映像は見たんだけど、生で見たいから」

「OK。んじゃ、ホルス。頼む」

「キュキュイ!」

ホルスが広暁の呼び声に答える。

ホルス自身が黒炎に包まれ、それが段々と大きくなる。

黒炎が段々とホルスの形を作り出し、黒炎が収まるとそこには…

「グオオオオオオ!!!」

大きく立派になったホルスがいた。

体長は10m以上あり、やはりでかい。

そして何故か無駄に吼えてる。

「この姿…これがホルスの本当の姿?」

「らしいです。小さい姿は魔力の消費を抑えられるんで、普段は小さい姿でいるって」

「えっ！？ホルスの言葉が分かるの！？」

「感情的なことなら何となく分かるんだけど…会話は無理。

ホルスは俺の言葉が分かるみたいだから、俺が聞くことに『はい』か『いいえ』で答えてもらった」

「はいかいいえ？どうやって？」

「はいなら右の翼を、いいえなら左の翼を上げる」

こんな風にねと言いながら広暁がホルスに簡単な質問をする。

「炎を吐けるか？」

バサッ。

ホルスの右の翼、2人から見たら左側の翼が上がる。

「今日の昼飯は野菜炒め？」

バサッ。

今度は左の翼、2人から見たら右側の翼が上がる。

ちなみに今日のホルスの昼飯はハンバーグね、と広暁が補足。

「本当に人の言葉が分かるんだ…」

フリードも人の言葉が分かるのだが、そこまで気が回らないようだ。

「俺もびつくりしてますけど…もう慣れました」

慣れって怖いね、パルト？。

「ありがとう。それじゃ、訓練を始めようか。ホルスは、もう小さくなくてもらってもいいよ？」

「分かった。ホルス」

広暁の掛け声と共にホルスを黒炎が包み、それが段々と小さくなる。黒炎が晴れると小さくなったホルスがいた。

「キユイ！」

どんなもんだいと言わんばかりに鳴いているが、ここはスルー。

「じゃあ、まずはデバイスを起動させて。セットアップって言えばいいから」

「分かった。セットアップ」

広暁が手に持つ杖の形をした小さいキーホルダーが、淡い光と共にその姿を変化させる。

光が収まると、そこには約四尺（120cm）の杖が合った。本に出てくる魔法使いが持つような木の杖ではなく、金属の様な材質をした白い機械的な杖だ。

「まずはデバイスの力でリンカーコアに魔力素を吸収してもらおうか。その感触を覚えて」

「OK」

広暁に確認をとると、フェイトはデバイスに向けて右手をかざした。フェイトの手が金色に光り、そこから放たれる光を杖が受ける。すると…

「!?!」

広暁が何かを感じ取った。

自分の中に何かが入って来るような感覚。

入ってきたものが体の中心に集まり、凝縮される感覚。

このような感覚は初めてであり、何より感じてて気分のいいものではない。

「何だこの感覚…!?!」

「今、広暁君の体内では、リンカーコアが魔力素を基に魔力を作っているの。」

体が光を帯びてきたら魔力の生成が終わった合図だよ」

フェイトの言った通り、広暁の身体が段々と発光する。その色は…

「黒…?!」

広暁から出る光、つまり広暁の魔力光は黒であった。

「俺の魔力光は黒ってこと…?!」

「そういうことになるね。でも、黒…か」

「ん？黒って珍しいのか？」

「私は金色、なのはちゃんは桜色、はやてちゃんは白色。ミッドチルダ式・近代ベル方式・古代ベル方式に関わらず色はばらけるんだけど、古代ベル方式のはやてちゃんは白色なの。でも、黒色は私の記憶にある限り見たことがない」

「ふーん…」

「……」

(一体どうということなの…?)

見たことのない魔力光『黒』。

フリードを超えた力を持つ竜『ホルス』。

そして、それを従える次元漂流者にして民間協力者『墨谷広暁』。

保護は快諾したが、ここまで前例のない事が続けば一抹の懸念を覚えるのも当然のことだ。

もつとも、考えてもフェイトの知識では正解はおろかその過程すら導き出せないのだが。

「フェイト？」

「ごめんね、考え事をしちゃって。どうしたの？」

「いやさ。魔力光の色ってどういう風に決まるの？」

「うーん…本人の性質を表すとか、逆に本人の望む性質を表すとか

言われてるんだけど、まだはつきりとしたことは分かってないんだよね」

「その通りだとしたら、俺は悪い人間か、そうなりたい人間ってことになるよな…」

「だ、大丈夫だよ！まだはつきりしたことは分かってないんだから！！！」

「そうであることを望みますよ…」

「ほ、ほら！訓練訓練！！集中して！！！！」

「は〜い」

どことなくナイーブになってきた広暁をフェイトが鼓舞する。

広暁もまだ少し引きづってはいるものの、訓練に対する意欲は失せていないようだ。

〜1時間後〜

ヒュンヒュンヒュヒュヒュン!!

「お〜」

「大分慣れてきたね」

広暁の上空には、八の字を描いて飛ぶ黒いエネルギー弾が2つ。

最初こそエネルギー弾の形に圧縮することも難しかったが、今では広暁の意思通りに魔力弾を操ることが出来る。

魔力を作ることこそデバイスの補助は必要だが、操作するという点ではもう問題は無いだろう。

「思ったより魔力弾の生成に時間がかからなかったから、バリアの方もやってみようか。」

本当は明日やる予定だったけど」

「バリアってーと、防御用に張る壁みたいなやつ?」

「そうだよ。受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。」

まずは、一番簡単なバリア系からいってみようか」

「OK」

↳さらに1時間後↳

「えい！」

ピュウン！！

「は！」

ブウン！！

ピシャン！！

「まさか1時間でバリアを張れるようになるなんて…」

「フェイトの教え方が上手いからじゃない？」

「ふふ、ありがとう」

フェイトの放った金色の魔力弾を、広暁の張った黒色のバリアが防ぐ。

防がれた魔力弾は、金の鱗粉を散らすが如く飛び散った。

フェイトの教え方が上手いのか、はたまた広暁の飲み込みが早いの

か。

2日分の訓練を1日でこなしてしまった。

「じゃあ、今日の訓練はここまで。」

明日は今日の復習と、デバイスの補助無しで魔力弾の生成とバリアを張る訓練ね」

「ありがとうございます！…っと、そうだ」

「どうかした？」

「ここって何時まで使っていい？」

「確か…フォワードの訓練が4時からあるから、それまでなら問題無いよ」

「サンキュー」

「残って自主連でもするの？」

「まあ、そんなところ」

「あまりやりすぎて、明日の訓練でばてないようにねっ」

「了解」

教導を終えたフェイトが空間シミュレーターから去る。

この後は、執務官としての仕事が残っているのだろう。

広暁が腕時計を確認する。

現在の時刻は午後3時10分。

フォワードの4人が来ることを考えると、10分前にはここを出た方がよい。

つまり、自主連に使える時間は40分。

「さてと…ホルス」

「キュイ」

「始めるぞ」

「キュキュイ！」

〈部隊長室〉

「おおきにな、フェイトちゃん。訓練はどやった？」

「思ったより飲み込みが早い感じかな。」

残って自主連もするみたいだし、フォワードの4人との訓練に混ぜ

「つても遜色は無いかも」

「ほぐ。それはそれは。1週間後が楽しみや」

「そうだね。じゃあ、私は本局に行ってくるから」

「ほなな〜」

.....
.....?
.....

「自主練...?まだ自分だけで魔力の生成は出来ないはずやし、一体何してるんやろ?」

ピピッピピッピッ。

ヴォーン。

はやてが空間ディスプレイを起動し、空間シミュレーターを映す。そこに映っていたものとは...

「ほーっ、これはこれは...。ますますもって楽しみやな」

映像を見てほくそ笑む一はやて(狸)。

広暁が残ってしていた自主練の内容とは?

そして、1週間後までに広暁は予定通りの訓練をこなすことができるのか?

それは広暁の努力次第。

第11話「初訓練」(後書き)

大切なお知らせです。
次回からタイトルを

「リリカルなのはStrikers (黒炎竜を従える者)」

に変更します。

理由としては、

- ・デュエルの要素が皆無
- ・ホルスと言ったら”竜”ではなく”黒炎竜”

といったことが挙げられます。

ネタばれも含んでいますますが申し訳ございません。

このままだとタイトル詐欺になってしまうので、思い切って変えさせていただきます。

何卒よろしく願います。

ではまた次回…。

第12話「信じる者は」(前書き)

第12話です。

今回はちよつと話を飛躍させました(話は長いけど…)!

それと、今回は今までより話がちょい長めです。

では、「リリカルなのはStrikers」(黒炎竜を従える者)をよろしく願います。

第12話「信じる者は」

広暁の初訓練から1週間。

この1週間で広暁は様々なことを学んだ。

言語は勿論、魔法の運用や体系。

それだけでなく、時空管理局やミッドチルダでの一般常識など。

魔力も自分で作れるようになり、魔力弾の生成や制御、バリアも張ることが出来るようになった。

それだけでなく、まだ有効範囲は狭いが念話も使用可能になった。

元々努力家で集中力はあるので、ある程度の所にいくまでは時間がかからなかった。

広暁曰く、

「『地獄の2年後期』に比べたら……」

とのこと。

理系の大学生なら経験したことがあるかもしれないが、ここでは割愛。

だが、『飛行』の魔法の習得には広暁も苦労した。

『浮く』ことは出来るのだが、素早く移動出来ない。

なのはやフェイトは一発で飛べたらしいが、それは彼女達の魔力量と資質が有ってこそ。

広暁の魔力量も多い方だが、それでも難しいし資質も無い。

ならばどうすればいいか？簡単なことである。

それは『慣れ』だ。

広暁は飛行の訓練を始めた3日目以降、ほとんどの時間を飛んで過ごした。

それこそ、食事中や風呂、用をたす時まで。

飛んでない時間は、訓練中と寝る時くらいだ。

その甲斐あってか、飛行訓練を初めて5日目で時速60kmぐらいは出せるようになった。

フェイトの音速には遠く及ばないが、訓練を続ければその身に合った飛行速度を得られるだろう。

もともと、

「疲れるし落ち着かない」

と本人も言っているので、四六時中飛んでいるこの訓練を続ける気は無いようだが。

なお、短距離の移動なら、飛びイメージよりも地面を蹴るというイメージの方が広暁本人はやりやすかったということを補足しておく（月の上を跳バイメージ）。

（食堂）

現在の時刻は午前7時半。場所は食堂。

いつものように隊長副隊長陣とフォワードメンバー、はやてにリインにヴォルケンリッターのメンバーで朝食を食べていた時のことだ。

「広暁はライトニングでセンターガードになってもらうから」

はやてがそう切り出した。

フォワードメンバーは頭をかしげ、隊長副隊長陣・リイン・ヴォルケンリッターは納得している。

「え？いや、俺ってスターズでフルバックじゃなかったの？」

広暁がそう言ってしまうのも当然のことだ。

自分のポジションは1週間前から決まっていたのだし、それを考慮に入れてデバイスを考えたのだ。

「問題あらへんよ。それに、穴があかないようにもう一つデバイスのモードを増やしたから」

「…さいですか」

広暁も、もう突っ込むのが面倒臭くなってしまっているようで、黙々と箸を動かす。

人に振り回されるのはもう慣れていているという雰囲気振りまきながら。

『冷酷無比な作戦を悪魔の様な頭脳で完璧にこなし、敵を完膚無きまでに叩きのめすことが出来る人』
「ちゅー意味や」

「「「いや、それは言い過ぎだ（だよ）」」」

なのは・フェイト・広暁が同時に突っ込む。

はやてのボケはともかくとして、広暁はこの結果を見て頭を抱えた。性格診断だと言われて受けたら、それがポジションの適性判断のテストだったとは。

はやての一存で決めるわけにはいかず、テストを受けさせてその結果を議論した上での結果だろうが、それでも一言は言ってほしかった。

「まったく…一言ぐらい言ってくれてもよかったですだろ？」

「こつこつというのはサプライズの方が面白いやろ？」

「…まあ、結果を見て驚くことはないから別にいいけどさ」

「どつこつことだ？」

広暁の一言にシグナムが反応する。

学校や本などでこつこついったテストを受ける機会があるが、毎回毎回同じ結果が出ること。

しかも、『観察・客観・冷静』の3つの単語は必ず含むとも。

「…とまあ、そんな訳でさ。結果を見る度に『俺はどごその軍師か』って自分に突っ込んでた」

「まあ、こんな結果じゃなあ……」

ヴィータが同情するように答える。

彼女を見てそれら3つの単語が浮かぶ人はいないだろうが、別の単語がヴィータの中では渦巻いているのだろう（豪胆とか単純とか無鉄砲とか）。

「けどまあ、それだけが理由やないんやで？」

「ん？」

「キャラも同じ竜召喚士やからな。同じ部隊の方が何かとやりやすいやろ？」

「あ……」

広暁もはやての言い分にちょっと納得したようだ。
今はポジション云々より、同じ境遇の者同士を一緒にした方がいいということだろう。

「でもさ、俺とホルスには精神リンクがあつたんだろ？」

「そこやねん。調べても詳しい事は分からへんし」

「私としてはもっと調べたいんだけどね」

「キユイ？」

そう、ホルスと広暁には精神リンクがある。

だが、フリードは使役竜であり使い魔ではない。
当然精神リンクも無い。

そもそも、ホルスは使い魔ではないので精神リンクがあること自体
おかしいのだ。

最初の検査を含めて3回検査をしたのだが、未だにはっきりとした
ことが分からない。

そんなことを話していると、

「広暁さんとホルスってどういう関係なんですか？」

キャラが広暁に聞いてきた。

カードが実体化したことは話したが、やはりもっと深いところが気
になるようだ。

「そうだな…一番付き合いが長くて頼れる相棒ってところかな」

「キユイ！」

ホルスもそれに肯定するように鳴く。

その一言を聞いて何か思うところがあったのか、

「あの…広暁さん？」

「うん？」

「えーっと、その…私に教えてくれませんか!？」

キャラが意を決したかのように、少々大きめの声で広暁に言った。

隣に座っていたエリオはその気迫に驚いているようだが、広暁は平然と言葉を返す。

「教える？何を？」

「その…竜との関わり方というか…在り方というか…」

「俺が？俺はホルスと会ってまだ1週間しか経ってないし、魔法の事もよく知らない。

そんな俺がキャロに教えられることなんて、ほとんど無いと思うけど？」

「それでもです。広暁さんとホルスは、出会ってまだ1週間しか経ってないですけど、いつもお2人（1人と1匹）は一緒にいますし、何ていうかその…とても息が合っていると言うか、それが当然というか…自然な感じなんです」

最後の方は少々か細い声になってしまったが、キャロの言う通りである。

この1週間、広暁は常にホルスと共に行動している。

午前の勉強の時間では、ミッド語を勉強している広暁の傍らに常にいる。

昼ご飯を食べる時も一緒だ。

午後の訓練中も一緒だ。

ついでに言うと、夜の入浴も一緒だ（さすがに浴槽には入れられないが）。

「そう言われればそうですね。

広暁さんに翼を洗ってもらってるホルス、すごく気持ちよさそうでしたよ」

昨日の事を思い出すかのようにエリオが応える。
あれから出会ってから1週間しか経ってないが、広暁とエリオはもう友人の関係になっていた。

(頭洗ってもらったの気持ちよかったな…)

もっとも、気持ちいいのはエリオにも言えることのようなだが(ホモじゃないよ!?)。

(『お兄さん』って…呼びたいな……)

女性ばかりの機動六課で、突然現れた広暁はエリオにとって救世主だったのだろう。

年上の女性にからかわれることが多いエリオにとって、広暁は頼れる兄のような存在になっていた。

最初は広暁も10歳も年下の男の子に対する接し方がぎこちなかったが、今では普通に接している。

以前の広暁ではありえないことだが、ミッドチルダに来てからリミッターが外れたのだろう、色々と。

エリオがそんなことを考えている中、広暁は思考が終わったのかキヤロに言った。

「いいよ。俺に教えられることがあるなら」

「やった！ありがとうございます、お兄ちゃん！」

……………。

一瞬の静寂。
のち、

「……………え
……………」

「!？」

驚きの声。

「お、お兄ちゃん!? 何で!？」

何故か最も早く復帰した広暁がキヤロに驚きながら問いかける。
普段は名前で呼ばれてるのにいきなりお兄ちゃんなんて呼ばれたら
誰だって驚く。

「え? え!? えつとその… 広暁さんて頼れる男の人って感じで…。
だから、その… お兄ちゃんって呼びたくて…」

赤くなりながら言うキヤロに思わず飛びかかってしまう人もいるだ
ろうが、広暁にそんな性癖は無い。

だが、無いとしても。

今のキヤロは自分の中でためていた考えを勇気を出して言ったのだ。
それを断ることは広暁には…

「いいよ。好きに呼んで」

出来なかった。

広暁陥落。

「あ、あの！！だったら僕も、『お兄さん』って呼んでいいですか！？」

「はい！？」

止まることのない追撃。

「僕も、その…広暁さんのこと頼れる男の人って思ってた……」

「もう…好きに呼んで下さい……」

「ありがとうございます、お兄さん！」

これはあれだ。

巻き込まれ体質の発展系だ。

ただそれが年下限定なだけだ。

色々と犯罪の臭いがするが気のせいだ。

（10歳で働いてる2人に頼れる男の人って言われる俺って一体…。

俺この間まで20歳の大学生だったんだけど）

口に出さないあたりさすがだが、それでも考えるものは考える。

（まあ…悪い気はしないか。

これがあいつなら『ふざけんなあ！！』とか言って殴りかかってくるだろうけど）

大学に入ってから知り合った友人を思い浮かべながら、広暁は考えをまとめた。

「ほう……お兄ちゃんか……」

「おい。何考えてる」

はやてが言ったことに不穏な空気を感じたのか、広暁が突っ込む。

「いやいや気にせんでええよ？」

「……………」

もう突っ込む気力すら消えてしまったようだ。

朝からこの調子では、午後にある広暁も交えた訓練はどうなるのだろうか？

一抹どころか多大な不安が広暁の脳裏をよぎった。

〈空間シミュレーター〉

現在の時刻は午後2時。

広暁も交えたフォワード陣の初の訓練だ。

「じゃあ、今日からは広暁君を含めた5人で訓練を始めるよ」

「……………はい!!」「……………」

「広暁君はどこまで出来るようになった?」

「魔力弾の同時制御は最高5つ。簡易的なバリア。飛行速度は最高時速60km。」

マルチタスクは3つってところ。念話は、集中すればなんとか」

「1週間で大抵のことはやったって感じだね。」

でも、マルチタスク3つはどうやって?2つでも難しいのに」

「うん…慣れですかね?」

大学で講義を受けながらゲーム・マンガ・音楽が日常の広暁にとっては造作もないことだったらしい。

真面目な大学生としては問題かもしれないが、健全な大学生としては何ら問題は無いだろう、うん。

「じゃあ、始めようか。あ、ホルスはまだ訓練には加わらないで。まずは広暁君の実力を見たいから」

「了解。ホルス」

「キユイ!!」

広暁が呼びかけると、広暁はなのはの傍らに移動した。

「いい子にしてるんだぞ？」

「キュキュイ！」

任されたと言わんばかりに鳴くホルス。サムズアップしたように見えたが気のせいだろう。

「じゃあ、まずはガジェット相手の戦闘訓練。

今回は逃げるガジェットを1機残らず倒すこと。数は10機、時間は5分。

皆、気を抜かないようにね？」

「くくくくはい!!」「くくくく」

「じゃあ…始め！」

合図と共になのはは飛び、空間シミュレーターの外へと移動する。その先にはシャーリーがおり、彼女の手元には幾つものディスプレイが浮かんでいる。

「広暁さんを交えた初めての訓練。面白くなりそうですね」

「そうだね。お手並み拝見、ってところかな」

「そういえば、広暁さんはガジェットの事を知ってるんですか？」

「勉強の時間に皆が教えていたから大丈夫。勿論、私も教えたけど」

「なるほど。なら、心配はいりませんね」

「キユツキユ」

結果から言うと、訓練は成功だった。

AMFやガジェット、フォワード4人の特徴を知っていた広暁は、ティアナと共に指揮を務めた。

また5人の中で唯一空を飛べるため、上空からの地形を基にガジエツトを追い詰める策を立てたのだ。

この計が功を奏し、路地に追い詰められたガジエツトをキャロの『アルケミックチェーン』が補足。ティアナの『ヴァリアブルシュート』がガジエツトを貫通し、スバルのリボルバーナックルとエリオのストラダーダがガジエツトを粉砕した。

だが…

「広暁君…最後のあれは一体何？」

「すみません！理論上は可能だつて分かつてたんですけど、自分で試してみたかつたんです！！」

なのは呆れるように広暁に問い詰めているのは、広暁が破壊したガジェットの破壊方法だ。

広暁は、

「ガジェットにはAMFがあるから、魔法攻撃は効きにくい。だつたら、魔力で肉体を強化してぶっ叩けばいいんじゃないかね？」

と考えていた。

そのため、ガジェットが残り2機になると

「試したいことがあるんだけどいい？」

といつて今まで指揮のためいたビルの屋上から路地裏に移動。

捕縛された2機の内1機を、杖型のデバイスで中央の黄色い目に牙^が突^{とつ}。

もう1機をソフトテニススマッシュの要領で地面に叩きつけたのだ。上空10mぐらいから。

「いや、まさか魔力であそこまで肉体を強化できるなんて思わなくて…。」

つい調子に乗ってしまいました、すみません！！」

真面目な人間だが、どこか抜けているというかずれているというか。今日の訓練で、広暁への認識を改めることになったようだ。

「は〜…さすがにあれには驚いたね……。でも、あれもありなのかな？」

「いえ、さすがにあれは…」

「でも、凄かったです！」

「さすがお兄さん！」

「お兄ちゃんすごい！」

元気娘 + 最近弟と妹になった2人は喜んでいるが、ガンナーは少し複雑そうだ。

(いくら自分の力を試したかったからって…センターガードが前線で暴れてどうするのよ？

それはスバルやエリオみたいにフロントアタッカーやガードウイングの仕事でしょ？

作戦の立て方とか指示の仕方とか、確かに素人とは思えないほどの確だったけど…はぁ……)

中長距離を制し司令塔的なポジションに立つ。それがセンターガード。

そんなポジションである広暁が前線で暴れてたら誰だって驚く。

「魔法っていう力に興奮してしまったというか…」

「私も最初は魔法の凄さに驚いたし、色々と無茶もしたからね。今

の広暁君も気持ちも分かるよ……。
だけど！センターガードが前線で暴れてどうするの！？
締めシュートイベーションやるけど、広暁君は前線に出ないこと
！！分かった！？」

「はい……」

広暁反省。

子供っぽさを出したことを反省。

「分かればよろしい。レイジングハート」

アクセルシューター

なのはの周りに桜色の誘導操作追尾弾『アクセルシューター』が出
現する。

「私の攻撃を5分間被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒット
を撃てればクリア。
誰か1人でも被弾したら最初からやり直したよ。がんばっていきー
！」

「……………はい！」「……………」

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自身あ
る？」

「ない！！！」

「同じくです！！！」

「右に同じ」

「じゃ、なんとか一発入れよう!」

「はい!」

「広暁さん。エリオとキャロ、頼んだわよ?」

「はいな」

「準備はオツケーだね。それじゃあ、レディー…ゴー!」

なのはの合図と共に5人に向かってアクセルシューターが放たれる。着弾点には小規模な爆発が起こるが、そこに5人の姿は無い。

(スターズとライティングに分かれたみたいだね。さて、どうするかかな?)

なのはが空中で思考をまとめていると、彼女の後ろにウインググロウドが出現。

更に右斜め前方からは、ティアナが狙っていた。

「アクセル!」

反応したなのはが2人に向けて魔力弾を撃つが、それらは2人を貫通した。

「シルエット。やるね、ティアナ…!?!」

ティアナの戦術を褒めるなのは。そこに迫る黒色の魔力弾。
だがその数は…

「8発!？」

なのはに迫る黒色の魔力弾の数は計8発。

(さっきは魔力弾の同時制御は5発って…『同時制御』?
ただ打つだけならそれ以上もいけるってこと!?!? やってくれるね…
!)

なのはの推測通り、同時制御ではなく打つだけなら広暁は5発以上打てる。

そのため今なのはに迫る魔力弾のうち、3発は正面から真っ直ぐ。
5発は彼女を囲むように迫っている。

「仕方ない…レイジングハート！」

オーバルプロテクション

オーバルプロテクション。完全球形で全方位対応のバリア魔法。

魔力弾とオーバルプロテクションが衝突し、そこに小さな爆発が生まれ、煙がなのはの視界を遮る。

広暁の魔力弾ではなのはのオーバルプロテクションを貫くことが出来ないのは自明の理。

だが…

「でいやあああああ!!!」

煙の中から大声と共にスバルがなのはに斜め下からなのはに突っ込

む。

その足元にはウイングロード。
先程までは展開されていなかったそれは、今の爆発の直後に展開されたことが容易に推測出来る。

「爆発を利用しての目くらまし攻撃。作戦はいいけど…甘いよ！」

スバルのリボルバーナックルを受けとめようとなのはが左手にシールドを展開。

だがそのシールドがスバルを受け止めることは…

「これもシルエット!?!」

なかった。

スバルがなのはに攻撃する瞬間、スバルが霞のように消えたのだ。

「!?!上!?!」

なのはの第六感、もとい戦場で鍛えた感が彼女に迫る危機を感知。その方向にシールドを張ると、そこにはなのはに迫るスバルの姿があった。

ドリルが回転するような音を立てながらリボルバーナックルが迫る。それをなのはがシールドで受け止めた。だが、

「うわ!?!」

それも外部からの介入で終わりを告げた。
なのはの放った魔力弾がスバルに向かって戻って来たのだ。

「うん、良い反応」

とっさに避けたが、避ける向きが悪かったのか。
ローラーシューズには最悪の横滑りで避けてしまった。
負担がかかったのか、いつもより多く火花が散る。

（スバル！危ないでしょ！）

（あう……。ごめーん！）

（待ってなさい、今撃ち落とすから！）

（了解！）

ガチャツ、キュイイイイイイン。
カチツ！……………プスン。

「イイツ！？」

「うわー！ティア、援護

！！」

「この肝心な時に……！！！」

カチツカチツ、ガチャツ。
ギュイイイイイイン。
バンバンバンバン！！

「来た！てえあ！」

スバルが飛ぶと、スバルを追っていた魔力弾を追うように2発が追

従。

のこり2発はなのはの方へ向かっていく。

一方その頃…

くなのは達から100mほど離れた廃ビル付近

「駄目だったか」

そこにはビルの陰から覗くライトニングの3人がいた。
先程の作戦は念話でティアナと広暁が考えたもの。

煙という目隠しを利用しての攻撃ならシルエットと考える可能性は低い。

そこを突き、先程の作戦を展開。

煙の中からシルエットを突っ込ませ、それがなのはに追突する瞬間に消去。

シルエットが攻撃した方向とは真逆の方向からスバルを突っ込ませる。

この時、ウイングロードを使うとばれる可能性があるため、スバルはビルの屋上から飛ばせた。
勿論、攻撃する時は声を出さないように念を押して。

「上手いかんもんだな…」

「でも！今の作戦は良かったと思います！なのはさん、反射神経だけで防いだみたいですから！」

「そうですね！今までの訓練でも、私達の攻撃は全部読まれた上で防がれてましたから！」

「…ありがとよ、2人共」

（今のを反射神経だけで防ぐのはさすが…って言うのもおこがましいか、歴戦の魔導師相手に。

だとすると、今までのティアナの作戦に問題があるのか？）

広暁が考えていたのはティアナの事。

彼女の立てる作戦はこういったことをあまり知らない広暁でも良いと思う。

だが…

（甘い…んだよなあ）

彼女の作戦は甘い。

シルエットを利用した攪乱や優れた指揮。

それだけならいいのだが、彼女の策は甘い。

というか、単純・シンプルなのだ。

シルエットを使うにしてもそうだ。

シルエットの影に本体を忍ばせ、相手がシルエットだと思って安心した隙に攻撃。

多方面から同時にシルエットを展開し、攪乱。

同時攻撃により対応的を絞らせず、それでいて本体はその中におらず別の場所から機を窺う。

広暁が考えただけでもそれらの用途があるのだ。

実際、先程の策をティアナに進言した時は驚かされていた。

だが、話を聞いた限りでは、彼女はシルエットを一重にしか使っていない。

(畏つてのは二重三重に張ってこそ意味があるんだがなあ。

一重で仕留められるほど楽な相手ならいいけど、なのは相手にそれは無理。

本来なら常に二重三重に考えるのがいいんだけど…。

陸士訓練校で習わないはずがないし、そういうのが嫌いなのかな？
若い頃から働いてると視野が狭くなるのか？

それとも、俺が今まで遊び過ぎて雑学が多いただけなのか？

俺の考えが間違ってるのか？

それとも……………)

「お兄さん(お兄ちゃん)?」

また悪い癖が出てしまった広暁。

考え込むとついついのめり込んでしまう。

「悪い、ちょっと作戦の事で考えてた。キャロ」

「はい！」

「次、頼んだぞ」

「はい！…でも……」

「どうかしたか？」

「私に出来るんでしょうか…？」

キャラが不安に思うのは今から行う作戦の事。

その作戦上『竜魂召喚』を行う必要があるのだが、キャラは成功させる自信が無いようだ。

キャラに聞いた話では、今までも竜魂召喚を行ったことはあるらしい。

しかし、制御出来ずにフリードが暴走してしまうことが多く、それ以来竜魂召喚を拒んでいたのだ。

「…じゃあ、キャラ。今から俺が言うことをよく聞いて」

「？」

「信じる、自分を。そして、フリードを」

「自分と…フリードを？」

「キユクル〜？」

「そう。まずは自分自身を信じて行動を起こす。なにがあっても自分は自分。それ以外の何者でもない。自分を信じ、1人の人間として自覚する。例え自分がどんなものを抱えていようと……な」

「!？」

最後の一言に思うところがあつたのか、キャラロが『ビクッ!』と震える。

隣ではエリオも思うところがあるのか、少し俯いた。

広暁はそれに気付いたが、構わず話を進める。

「いいか？まずは自分を信じる。

自分を信じられなければ、相手を信じることは出来ないし、信じられることも出来ない。

1人の人間として自覚し、相手を信じること。キャラロ、出来るか？」

「……………」

しゃがみ、キャラロの目線に立って広暁が言う。

すると、キャラロは俯いてしまった。

広暁もそんなキャラロに言及することなく、ただ顔を上げるのを待つ。

「あの…お兄ちゃん？」

「何だ？」

「私…やってみます！」

「そうか。頼んだぞ？」

「はい！…あと、お願いがあるんですけど…」

「ん？」

「訓練が終わった後、聞いてほしいことがあるんです」

「オッケー」

「あの、お兄さん？」

「どうした？エリオ」

「僕も聞いてほしい事があるんですけど…」

「分かった。訓練が終わったら2人まとめて聞くよ」

「「ありがとうございます、お兄ちゃん（お兄さん）！…！」」

「さーてと、話はここまで。キャラ」

「分かりました！」

「キョクルー！」

広暁に押し出され、キャラとフリードが前に出る。

（お兄ちゃんは、自分を信じるのが一番大切だって言った…。
今まで私は、何で力を持つてるのとか、何で生まれてきたのとか、
そんなことばかり考えてた…。

「ただ、お兄ちゃんとは違う。」

「自分に自信を持って生きてる。」

「まだ会って1週間しか経ってないけど、私にも分かる。」

「だからホルスともあんなに自然に接することが出来るんだ。」

「だったら私も…!!」

（お？いい顔になったじゃん）

（キャロ…何か振った切れた？）

「ごめんね、フリード。今まで私、自分の事もフリードのことも信じ切れてなかったのかもしれない」

「キユクルー…!!」

「そんなことはない、と言ったのだろうか？フリードが力強く鳴いた。」

「うん…だけど、今なら私にも出来ると思う。…ううん、絶対出来る！」

「フリードを暴走させたりなんてしない!!」

「キユクルー…!!」

「いくよ、フリード！」

竜魂召喚

「キャロの掛け声と共にキャロとフリードが桃色の魔力光に包まれる。」

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり、天を翔けよ」

キャロの足元に魔法陣が展開され、そこから現れるは白き両翼。
ケリユケイオンの輝きが増し、なおもキャロの詠唱は続く。

「来よ、我が竜、フリードリヒ！竜魂召喚！！」

詠唱を終えると同時に魔力光が破れ、現れたのは白銀の飛竜。
白き体躯と赤き目を持ち、キャロを背中に乗せ羽ばたく様は威風堂
々。

「キユオオオオオオ！！」

大声で吠えるが、その声はどこか優しさを含み、聞く者の心を落ち
着かせる。

「やった…！成功しました！！」

「よし…」

「すごい…これがフリードの本当の姿！？」

それぞれが感想を漏らす。だが、今はのんびりと感傷に浸っている
時ではない。

「よくやったな、キャロ。もうちょっと喜んでたいんだけど、今は
作戦が先だ」

「はい、お兄ちゃん！」

キャロも竜魂召喚の成功にいつまでもはしゃがず、広暁の指示に従

う。

「我が乞うは疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

ブーストアップ・アクセラレーション

「行くよ、エリオ君！」

「了解！」

エリオの掛け声を聞くと、キャラロがエリオに向かって左手をかざす。

「ブーストアップ・アクセラレーション！」

キャラロの左手から放たれた魔力の筋がエリオの持つデバイス、ストラーダへと吸収される。

すると、ストラーダに2つある噴射口から魔力が勢いよく噴出され始めた。

「かなり加速つくから気をつけてね!？」

「大丈夫！」

噴射口から魔力が勢いよく出ているが、エリオはそれを体で押し止める。

「よし。じゃあ、後は最初に言った通りだ。抜かるなよ？」

「はい!...!」

2人は返事をする、共に別方向へ向けて移動する。
キヤロは上空へ、エリオは廢ビルを利用してなのはの死角に回り込
むように。

「さて、俺も行くか……」

作戦は最終段階へと移行する…

第12話「信じる者は」(後書き)

題名変えての初めての話、第12話。

今後とも「リリカルなのはStrikers」黒炎竜を従える者
」をよろしくお願いします。

ご意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第13話「新デバイス」（前書き）

第13話です。

最近1話毎の文字数が多くなってきました…。

最初の方の話が短いというのがありますが、それでも比べたら長い
です。

今では1話1万文字がデフォになっているという現状…。

ですが話数を増やすわけにもいきませんので、このまま続けたいと
思います。

ご理解のほど、よろしく願います。

第13話「新デバイス」

<なのはside>

「あれは…フリードの真の姿!？」

咆哮を聞いて振り返ってみると、そこには話にしかなかったことがない真の姿のフリードがいた。

竜魂召喚はまだ制御出来ずにいるってフェイトちゃんは言ってたけど……。

うっん、過去の憶測にとらわれちゃ駄目だ。

今私の目には真の姿のフリードが映っている、それだけで十分だ。

「スバル!」

「分かった!」

声が出た方向を見ると、そこには私から離れるスバルとティアナの姿が。

態々わざわざ声に出すということは、これは何かの罠?

さっきの攻撃もあるし油断は出来ないね。

「フリード! プラストレイ!」

フリードから高熱の火炎砲が私に向かって放たれる。

初めて見る魔法に今の制限状態。

そう考えると、あの炎を受けるのは選択肢の中から排除。

ならばここは…

「シユート!!」

「!?!」

ティアナの声に思わず振り向くと、そこには私に向かって来る4つの魔力弾。

前からはブラストレイ、後ろからはティアナの魔力弾。

今の位置では避け切るのも防ぐのも難しい。

ならば…攻撃が届かない位置まで引く!!

「まさか上に行く気!?!」

ティアナの声が下から聞こえるが、今は後回しだ。

このビル群を抜けて、フリードの攻撃が届かない位置まで上昇する!!

スピーアアングリフ

「はああああああ!!!!!!」

「え!?!」

上に向かって飛行していると、横のビルの中から私に向かって飛んでくるエリオの姿が!

…なるほど、ブラストレイと魔力弾で逃げる方向を限定、その移動中を狙うって作戦だね。

だけど……

「それじゃあ…ばればれだよ！」

私もエリオに向かって突撃する。

このまま上に逃げてもいいが、追われる形では迎撃しにくい。
今ぶつかってエリオを落とす…！！

ドガアアアアアアアン！！

壮絶な衝突音と共に私達は激突。

私が飛ばされることのないけど、エリオがビルの中に向かって飛んでいく。

私もそのままビルの中に着地。

結構派手に飛ばされたけど大丈夫かな？

気絶してないといいけど。

「狙いはよかったんだけどね。

ビルの中からだど攻撃方向が限定されるから、迎撃もしやすい、も
っと考えないと。」

これで終わりかな？」

諭すようにエリオに言うが…

「……」

反応が無い。

もしかして、本当に気絶しちゃった？

ちよつとやりすぎちゃったかな？

私が出自分の教導に対して考え直していると…

「いえ…」

今のはエリオの声？
気絶してなかったの？

「まだ終わりじゃありませんよ…」

エリオが起き上がりながら私に言った言葉。
それはまるで、まだ作戦が終わってない事を告げている。

「というより…」

更に言葉を告げるエリオ。一体何が…？

「チェックメイトです」

「！？」

背後から聞こえる声に、私は思わず振り向く。
そこにいたのが広暁君だと気がつき、一瞬更に考えてしまったせいで…

ガラガラガラガラ！！！！

「デエエヤアアアアアア！！！！」

ビルの床を崩して私に向かってリボルバーナックルを向けてくるスバルの反応に遅れてしまった。

（訓練終了後）

ミッションコンプリート

「お見事。ミッションコンプリート」

「やったー！」

「よかった…」

「よし！」

「ふー…」

「疲れた…」

ミッションコンプリートの言葉にそれぞれ思い思いの言葉を告げる
フォワード5人。

だが、なのはの表情は複雑そうだ。

「さすがにあそこまでやられるとは思わなかったな」

「ご、ごめんなさい！なのはさん！！」

大声で謝るスバル。

その後、スバルとなのはが衝突。

さすがは歴戦の魔導師というべきか、なのははあの状況でもバリア
を張った。

しかし、あまりにとっさだったため、十分な魔力をバリアにまわす
ことが出来なかった。

また、『自身の力+重力』という2つの力でスバルは攻撃したため、
受け切ることが出来なかった。

結果、スバルの力を受け切ることが出来なかったなのははそのまま
スバルに押され、床を貫通。

なのはのバリアジャケットにはスバルの拳の形をした跡が残った。

床を一枚抜けたところで止まったのはバリアジャケットの頑丈さ故
といたところだろう。

「いいよ、気にしなくて。でも今回の作戦はよかったね」

「ティアナと俺で頑張って考えましたから。な？」

「え？は、はい…そうです……」

「？」

ティアナのしどろもどろに返答になるのはが首を傾げる。

(…私の指揮だけじゃ、あそこまで完璧になるのはさんを追い詰める
ことは出来なかった。

いいところまでいったとしても、エリオとなのはさんをぶつけさせ
ることぐらいしか出来なかった。

だけど、広暁さんの考えた作戦は……。

広暁さんが入る前でも、シュートイベーションでなのはさんに一撃
を加えることは出来た。

だけど、広暁さんの作戦には隙が無かったし、次の手が幾つもあっ
た。

広暁さんは、常に何手先も考えてる……。

私は一体……)

自己嫌悪に陥るティアナ。

だが、誰もその内情に気付かない。

「最初のシルエットを利用した攻撃も良かったけど、その後のも良
かったね。」

エリオからスバルへの連携」

「はい！広暁さんの指示通りでした！」

「本当は僕で終わりにしたかったらしいんですけど…」

「どういうこと？」

エリオが言ったことに対し、なのはが反応する。
それに答える広暁。

「まずは真の姿になったフリードのブラストレイ。
なのはがこれを見るのは初めてのはずだし、威力も結構ある。
となると、防ぐより攻撃をくらわない位置まで逃げる方が無難。
更にティアナの魔力弾で、逃げる方向を限定」

「その後、上空へ逃げる途中での横からの突進攻撃。
確かに攻撃方向は限定されるけど、それはなのはとて同じ。
むしろ突進するエリオと違って、なのはは迎撃した後逃げるかビル
内に残らないといけない。
フリードの炎をくらわないためにね。
となると、地の理はこちらにあった」

「なるほど…」

「で。エリオが一撃当てれば良かったんだけど、それが駄目だった時のプランも考えた。

それが上の階からのスバル奇襲。

気付かれてはいけないし、反応されてもいけない。

となると、別の方向に意識を向けさせる必要があった」

「それがエリオ…?」

「そ。押し負けそうだったらわざと派手に飛ばされるってね。気絶したとなのはが思えば、なのはの性格からしてビルの中に入ってくる。」

そこでエリオが一芝居。

なのはの注意をエリオに向けさせる」

「でもそれだと、広暁君が出る必要は無かったような?」

「人間は1つのところに集中してて外部からの刺激に反応すると、一気に注意力が散る。」

注意力が落ちてるから、当然その後くる2つ目の刺激にも反応が遅れる。」

念には念をってやつです」

「そこまで考えて…。広暁君、本当に大学生だったの?」

「本を読むのが好きで、そこからの引用…かな」

「ふーん…でも、ちょっと残念だな」

「何がですか?」

「私達機動六課の設立目的はロストログアの捜査と保守管理。そしてその目的のために戦くことになるのはガジェット。ガジェット相手に心理戦が通用すると思う?」

「……………あ」

「そういって。」

今回の作戦は確かによかったけど、ちゃんとそういったところも考えて作戦を練らなきゃ」

「…目次第もございません」

「分かればよろしい。」

これからは今言ったことを考慮に入れて作戦を考えてね?」

「はい!」

「それと…キャロ」

「はい!」

「竜魂召喚の成功、おめでとう」

「ありがとうございます!」

「どうして今回は出来たの?」

「あの、それは…お兄ちゃんのおかげなんです」

「広暁君の?」

「はい!自分を信じる。そうすれば、フリードも信じてくれるって」

「そんなことを広暁君が?」

「人からの受け売りですけどね」

「ふ〜ん…広暁君が…ね……」

「どうかしました？」

「ううん。何でもない」

「はあ…」

（広暁君をライトニングにしたのは、あまり訓練に参加出来ないフ
イトちゃんや訓練が苦手なシグナムの代わりに保護者役になって
ほしかったからっていうのも理由だったんだけど…まさかここまで
上手くいくなんて。フイトちゃんが知ったら喜ぶだろうな）

結構打算的なこと考えてやがりましたよ、この教導官。

（『自分を信じる。そうすればフリードも信じてくれる』か…。
会ってまだ1週間しか経ってない人がキャロを変えられるなんて…
…。
こっちはことはフイトちゃんが知ったら悲しむかな？）

でもちゃんと報告しないとね、教導官？

「じゃあ、今日の訓練はここで終了。

ティアナの指揮も大分筋が通って来たね、広暁君の考えた作戦もよ
かったし。

2人共。指揮官訓練、受けてみる？」

「い、いえ、あの…戦闘訓練だけで一杯一杯です!!」

「」冗談を。まだミッド文字すら不自由な俺にどうしろと?」

「ふふ」

冗談とも本気ともとれないのはの提案に2人は苦笑を浮かべる。
その時…

「キュー? キュクルー?」

「キュイ? キュキュイ?」

「え? フリード、どうしたの?」

「ん? ホルス、どうかしたか?」

「何か… 焦げ臭いような」

「あ、スバル! あんたのローラー!」

バチツバチツバチツ。

「う、うわ! やば!」

臭いの発生源はスバルが右足に履いているローラーだった。

「あちゃー… しまったー。無茶させちゃった…」

「オーバーヒートかな? 後でメンテスタッフに診てもらおう」

「はい…」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい。騙し騙しです…」

「皆訓練にも慣れてきたし、広暁君も基礎は十分。そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな」

「……新デバイス？」

「シャワールーム」

「聖王教会ね。エリオは行ったことある？」

「いえ。僕が行ったことないです」

「そっか…」

ここは宿舎のシャワールーム。
訓練を終えた5人は、シャワーを浴びた後、デバイスルームに集まるように言われていた。

（聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局理事官『カリム・ゲラシア』。』。

機動六課設立の後ろ盾の中でも最高の人、か。
六課で民間協力者として働いてる俺の事を紹介する必要があるのは分かるけど…）

広暁が考えているのは、先程訓練を終えての帰り道のこと。

（回想中）

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるっか」

「『はい！』『』『』『』」

訓練を終えた広暁達は空間シミュレーターを後にし、隊舎へと続く道を歩いていった。

「ん？あの車って？」

広暁達の目の前に現れたのは1台の黒いスポーツカー。
その車が、6人の前で停車する。

「フェイトさん！八神部隊長！」

車に乗っていたのはフェイトとはやてだった。

車の天井部分と窓が消え、オープンカーのような外観になる。

「すごい！これ、フェイト隊長の車だったんですか！？」

「そっだよ。地上での移動手段なんだ」

「皆。練習のほうはどないや？」

「あー。あはは…」

「頑張ってます」

「エリオ、キャロ。ごめんね？私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて……」

「あ、いえ、そんな」

「大丈夫です！」

「…俺もライティングなんですけど」

ちよつと不貞腐れたようにいう広暁。

「え！？あ、あの、その…」

それに答えるしどろもどろのフェイト。

忘れないであげてください。

「あはは〜…皆良い感じに慣れてきてるよ。
広暁君も交えての今日の訓練、良い感じだったし」

「そうか、それは頼もしいな〜」

はやての褒め言葉に、5人のフォワード陣は嬉しそうに微笑む。
部隊長からの褒め言葉はやはり格別ということだろう。

「それだけじゃないんだよ、フェイトちゃん」

「何かあったの？」

「キャラ」

「は、はい!!」

なのはに促されてキャラが一步前が出る。
そして呼吸を落ち着かせ…

「フェイトさん！私…竜魂召喚に成功しました!!」
言い切った。

「え!?!キャラ、ホント!?!」

「はい!!」

「やったね、キャラ…!!でも、どうやって?」

「お兄ちゃんのおかげなんです！」

「お兄ちゃん…広暁君の？」

「はい！そつき……」

キャロ説明中……

「そんなことが……」

「はい！自分を信じればフリードも信じてくれるって」

「自分を信じればフリードも信じてくれる、か……」

「どうしました？フェイトさん」

「ううん、何でもない。あ、そうそう。」

「今から私達、6番ポートまで行く予定だったの」

「教会本部で騎士カリムと会談やで。帰るのは夕方過ぎになるさかい」

「私は本局に行ってくるの。お昼には帰ってこれるから、皆で一緒にお昼を食べようか？」

「「「「はい!」「」「」」

「それと…キャラロが竜魂召喚に成功したお祝いにケーキを買ってこようかな?」

「え!? ケーキ!?!」

「こら、スバル! はしゃぐんじゃないの!?!」

「あはは〜…」

「皆はリクエストある?」

「あたし、ショートケーキ! いちごが載ってるやつ!」

「あたしは…ティラミスをお願いします」

「僕はレアチーズで」

「私はモンブランを…」

「俺は…ザッハトルテを」

「私はシュークリームを頼むわ〜」

「皆遠慮ないな〜…じゃあ私はミルフィーユ」

「クスツ。そういうのはもね」

「うう…フェイトちゃんのバカ〜」

「「こらこら2人共。部下の前やで？」

「「はい……」

各々にケーキを注文する六課の面々。

戯れるなのはとフェイトを戒めるはやて。

ここが機動六課の前でなくどこかの家庭の玄関前なら実に微笑ましい光景だ。

「あ、それと。広暁」

「ん？」

「教会本部に行くの、広暁も付いてきてくれへん？」

「俺が？」

「そう。聖王教会騎士団の魔導騎士で、管理局本局理事官『カリム・グラシア』。」

機動六課設立の後ろ盾の中でも最高の人や。

次元漂流者で民間協力者つちゅー広暁を紹介せーへんわけにはいかへんからな」

「分かった」

「あ。でも、はやてちゃん」

「「どうしたん？」

「今、訓練を終えてシャワーを浴びに行く途中だったの。その後新デバイスの説明もする予定だったから、結構時間がかかったらよ？」

「時間でどれくらい？」

「うん…1時間弱かな？」

「1時間か…」

「私の方は急ぎの用事じゃないから大丈夫だけど…はやくは？」

「私の方も大丈夫や。カリムなら分かってくれるやろ」

「いやいや。ちゃんと確認取らないとまずいだろ」

「広暁は真面目やな」

「当然のことを言ったまでだ」

「はいはい。今確認取るからちょー待ってとって」

そう言うてはやくは車から降り、小走りで走って行く。

「もしもし、カリム？今日の会談の………1時間………紹介したい人が………」

携帯電話の様なものを取り出し、連絡をとるはやく。

どこでも空間ディスプレイが浮かぶようなミッドチルダにも、携帯電話は存在するようだ。

「うん、分かった。おおきにな」

電話を終えたのか、こちらに向かってこれまた小走りですって来る。

「オツケーや。1時間遅れても問題あらへんて」

「よかった。じゃあ、皆。シャワーを浴びてロビーに集合ね」

「「「「はい!」「」「」」

「エリオ、キャロ。話は帰って来てからでいいか?」

「「はい!」「」

「ほな、私達はどつする?」

「私はオフィスに戻ってさっきの訓練のデータをまとめるよ」

「私も付き合っついていいかな?」

「うん、いいよ。はやくちゃんは?」

「私も見てみたいな。さっきやったつちゅー訓練」

「じゃあ、皆。オフィスにレッツゴー!」

「「オー!」「」

回想終了。

「ま、行ってみれば分かるだろ」

「そうですね」

自己完結をした広暁に返事をするエリオ。
自分の中で思考を進めて唐突に結論を出す広暁にも慣れて来たよう
だ。

「んじゃ、俺は先に出てるな」

「あ、あの…お兄さん！」

「ん？」

「頭、洗ってもらえませんか？」

「頭？いいぞ」

「お願いします」

何気にシャワールームでは初めてのお願い。
夜の入浴では何回かやってもらっているが、シャワールームでは初
めてだ。

どことなく恥ずかしそうなエリオ。

そんなエリオの様子に気付かず、シャンプーを手に付けてエリオの頭をワシヤワシヤと洗う。

「いやゝ。人の頭洗うなんて久しぶりだなゝ」

「僕、前にも洗ってもらいませんでした？」

「それを含めて、だよ。友達と温泉とか行っても、20前後の男の頭なんて洗わなかったしな」

「あはは…」

そんなこんなで男子用シャワールームの時間は過ぎる。

一方その頃、女子用シャワールームでは…

「えっと…スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃って、ご自分で組まれたんですよね？」

「うん、そうだよ」

「訓練校でも前の部隊でも、支給品は杖しかなかったのよ。ほら、今広暁さんが持つてる奴」

「私は魔法がベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし。ティアもカードリッジシステムを使いたいからって」

「で、そうなるよ。自分で作るしかないのよ。
訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、目立つ
ちゃってね」

「ああ！もしかして！それで、スバルさんとティアさん、お友達に
なっただけですか？」

「腐れ縁とあたしの苦悩の日々の始まりって言って！！」

「えへへ…。さて、キャラ。頭洗おっか？」

「お願いします！」

「あたし、先にあがってるからね」

「はい」

こちらでも、男子用シャワールームと同じく和やかな時間が過ぎ去
る。

（エリオ君、お兄ちゃんと一緒に嬉しそうだったな…）

私も、今度はあっちのシャワールームに行ってみようかな？

それはさすがにまずいのだが。

この時のキャラの願望は、また別の機会で成就することになる。

「皆…まだかなあ……………」

「女性は身嗜みに時間がかかるもんなんだよ……………」

「キユクル〜」

「キユイ〜」

階段で2人の男と2匹の竜がぼやいた。

「そういえば、お兄さん」

「ん？」

「お兄さんのデバイスって、どんな感じなんですか？」

エリオが広暁に聞いてきた。

最近魔法の学習を始めたにも関わらず、今日の訓練を成功に導いた
広暁がどのようなデバイスにするのか気になるようだ。

「見てのお楽しみってことで」

「え〜。教えて下さいよ〜」

ガクガクと広暁の肩を揺らす。

年相応の振る舞いに広暁も頬が緩む。

「だ〜め。俺の楽しみがなくなる」

「楽しみ？」

「皆の驚く顔が見たい」

「え〜」

そんな感じで、広暁達はフォワード女性陣が来るまで待っていた。

〜デバイスルーム〜

「うわあ、これが…」

「あたし達の新デバイス…ですか？」

「そーです！設計主任あたし！
協力、なのはさん、フェイトさん、レイジンググハートさんとリイン
曹長！」

「はあ…」

スバルとティアナの前にあるのは、青い宝石を模したペンダント上のデバイスと、白地に赤いXマークを円が囲み、中央に真っ直ぐ縦線が伸びているカード上のデバイス。

「ストラダーとケリユケイオンは変化無し…かな？」

「うん、そうなのかな？」

「これが俺のデバイス…」

エリオ・キャロ・広暁の前にあるのは、紫色の腕時計と桃色の宝玉を模したプレスレット。

そして、銀色の羽を左右対称に開いたデザインのペンダント。中央に炎の形をした黒い結晶がある。

「違いまーす！」

急にリインが出てきて叫んだ。

今までどこに隠れていたのだろうか？

「変化無しは外見だけですよ！」

「リインさん！」

「はいです！2人はちゃんとしたデバイスの使用経験は無かったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです…！」

「あ、あれで最低限…？」

「ほんとに…？」

自分達がさっきまで使っていたデバイスが最低限の機能しか持っていなかったことにキャロとエリオは驚いている。

「俺のデバイスのデザインで…」

「そうです！ホルスの翼を基にデザインしました！

真ん中の黒い結晶は、ホルスが吐く炎をイメージしたです！！」

「キュイ？」

ホルスがデバイスに近づいてその様を見る。

自分を基にデザインしたと言われれば気になるのも当然ということか。

というか、ホルスに人間の考えたデザインの良し悪しが分かるのだろうか？

「キュキュイ！」

翼を羽ばたかせて歓喜の声をあげる。

よく分からないが納得したようだ。

「広暁さんのデバイスは武器の形状をしたインテリジェントデバイスです。

そして、通常形態を含めた3つのフォームがあります。

デバイス初心者の広暁さんにいきなり3つもフォームを付けるのはやりすぎかなと思ったんですが、さっきの訓練を見る限りでは大丈

夫と判断したです！」

「ふ〜ん…ってあれ？俺が最初に言ったのは2つだけだったような？」

「もう！今朝のはやてちゃんの話を忘れたですか！？」

ポジションがセンターガードになるから、もう一つ形態を増やすって言うてたじゃないですか！」

「あ〜…そういえば。そんなことを言ってたような気がしないでもない」

「まったく…しっかりして下さい！」

「いじめんなさい」

浮いているラインに謝る20歳の男。シュールな光景だ。

「分かればいいです。では、説明を続けるです」

そう言うてラインがまた別の場所に移動する。

「皆が使うことになる5機は、六課の前線メンバーとメカニックス
タッフが、技術と経験の粋を集めて作った最新型！部隊の目的合わせ、そしてエリオ・キャロ・広暁さん、スバルにティア、個性に
合わせて作られた文句無しに最高の機体です！！」

説明の途中でラインが両手を広げる。

すると、5つのデバイスが彼女のもとに集まった。

「この子たちは皆まだ生まれたばかりですが、色々な人の思いや願いが込められて一杯時間をかけてやっと完成したです。ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いっきり全開で使ってあげてほしいです」

リンが説明を終えると、各々のデバイスが主人のマスター前に集まる。

「うん、この子たちもね。きっとそれを望んでるから」

(これが俺のデバイス…よろしくな)

「キュイ!!」

「痛!?何すんだよホルス!」

「キュキュイキュイキュイキュイ!!」

何故だか知らないが、ホルスが怒っている。

広暁の頭を嘴で突いたのだ。

「もしかして…」

広暁の頭に一つの因果関係が浮かび、それを解決する案を思考する。

「お前…デバイスに嫉妬した?」

「キュイキュイ!!」

感情を隠すことなくありのまま鳴くホルス。
俺を忘れるなど言っているのだろうか?

「何言つてんだよ。ホルスもこいつも、俺の相棒だ。どっちが良いなんてことはないから」

そう言つてホルスの首元を撫でてやる。

「キュイ〜」

解決。

「……………あはは〜……………」

今のやりとりですっかりデバイスルームの空気が和んだようだ。

ウィーン。

「ゴメンゴメン、お待たせ〜」

和んだところで、部屋になのはが入つて来た。

「なのはさ〜ん!〜!」

「ナイスタイミングです。丁度これから機能説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね?」

「はい!〜!」

説明中…

「なるほど…」

シャーリーとなのはの説明は、大まかに分けて3つ。

デバイスには出力制限がかかっていて、現段階の出力に慣れたら次の出力に行く

隊長・副隊長陣には、デバイスだけでなく本人にもリミッターがかかっている。

部隊毎に保有出来る魔導師ランクの総計規模は決まっているので、それを掻い潜る裏技。

だが、滅多なことではリミッター解除の許可は通らない

午後の訓練でテストして微調整

「…とまあ、こんなところかな。そういえば、広暁さん」

「ん？」

「その子の名前、どうするんですか？」

「名前？うーん…」

考えてなかったようで、腕組みをして思案する広暁。

(やっぱり、ホルスと関係がありそうな名前がいいよな…)

そして。考え終えたのか、腕組みを解く。

「じゃあ、『サジタリウス』で」

「『『『『サジタリウス?』』』』」

「そう。サジタリウス」

「確か…射手座のことだよな?」

広暁を除いた人間で、唯一地球出身のなのが答える。

「俺の星座でもあるんだけど、ちゃんと別の意味もあるよ」

「別の意味?何ですか、お兄ちゃん」

「それは秘密だ」

「え〜。教えて下さいよ〜」

エリオと同じように、広暁の手を揺らすキヤロ。

「ま、追々教えるよ」

「む〜」

怒ったのか、頬を膨らませる。

小動物が怒ったみたいで可愛く、何故がスバルがポクツとしている。

「スバル…」

すかさず突っ込むティアナ。

「…ハッ!? ゴメン、今のキャラが可愛くて」

「スバル…そっち方向に走っちゃ駄目だよ?」

「走りませんよ! そもそも、そっち方向って何ですか!なのはさん
!!!」

照れながら怒るといふ器用なことをするスバル。

その肩に手を置き、広暁は言った。

「大丈夫: お前はまだ若いんだ。間違ってもやり直せるだけの時間
はある」

「広暁さんも乗らないで下さい !!!」

最初の空気はどこへ行ったのか、デバイスルームで練り広げられる
漫才。

「あ、そうそう。広暁君」

「ん?」

「外でフェイトちゃんとはやてちゃんが待ってるから。』早く行く
で』だって」

「分かった。デバイス持ってっていい？」

「どうぞどうぞ。今の内にその子と友好を深めておいて下さい」

「オツケー。ホルス、行くぞ」

「キュイ」

そう言つて広暁は自分のデバイス『サジタリウス』を持ち、部屋を出る。

「お兄さんのデバイスって、どんな感じなんですか？シャーリーさん」

広暁が部屋を出たのを確認した後、さっき広暁に聞いたことを今度はシャーリーに聞く。
やはりまだ気になるようだ。

「うーん…私も広暁さんから口止めされてるんだよね」

「え〜」

「私も。でも、ヒントぐらいならいいんじゃない？」

なのはが提案する。

「そうですね、ヒントぐらいなら」

「ヒントですか？お願いします」

「じゃあ…ヒント一つ目。ミッドチルダではあまり見ない形状のデバイス」

「あまり見ない？」

「そう。二つ目。これがラストね。彼がやっていたスポーツとは関係ない」

「スポーツ…ソフトテニスでしたっけ？」

「じゃあ、ラケットの形状じゃないのかな？」

「そうだよ。広暁君も『用途や形状が違ってても、ラケットで戦闘はしたくない』って言ってたし」

「スポーツに使う道具で戦いたくないってことですね」

「うん」

「やっぱり、お兄ちゃんてスポーツマンなんですね」

「そうだね。この1週間でも、筋トレとかランニングとかよくやってたし」

「お兄さん（お兄ちゃん）てすごいなあ…」

「あはは…」

なのはが苦笑する。その理由は先程のオフィスでの会話。

（『私のことはお母さんともお姉ちゃんとも呼んでくれないのに…
広暁君だけずるい…』

ってフェイトちゃんが言う理由も分かるなあ…。
広暁君て年下の子に好かれやすいのかな？

なのはの考えもあながち間違っではないが、正しいとも言い難い
のが実情だったりする。

「それじゃあ、皆。デバイスを持ってオフィスに行くよ。
今日の午前中はデスクワークだからね」

「「「「はい！」「」「」」

一方その頃、六課隊舎前では…

「む」

「フェイトちゃん、そろそろ機嫌直さな」

「分かってるんだけど…」

「そんなに気になるなら、広暁に直接聞いてみたらええやん」

「それも…そうだね」

2人が話しているのは、先程なのはが考えていたことと同じ。

『フエイトのことをエリオとキャロがお母さんともお姉ちゃんとも呼ばない』

今までは気にしてなかったが、2人が広暁のことを兄と慕うようになつてからは顕著になった。

何としても呼んでもらおうと、さっきの時間は色々と策を考えていたのだ。

一体この執務官は何を考えているのだから。

(にしても、お兄ちゃんか…これはこれで攻め手になるかもしれない…)

部隊長、あなたもか。

「あ。広暁君、来たみたいだよ」

「お〜来た来た。広暁〜」

「ごめん。待たせた？」

「ううん。それほどでも」

「1時間ぴったりや」

「計ってたのかよ…」

「冗談やで？」

「はいはい…」

はやてが広暁に好意を持っているのは確かなのだが、これではあれだ。

好きなクラスメートの女子をいじめる小学生男子だ。

性別が逆だし、そもそも2人はいいい大人なのだが。

これでは広暁が気付くはずもない。

「ん？俺ってどこに乗ればいいの？」

ここで広暁が気付いたのは車のどこに座るか。

フェイトの車は2人乗りであり、フェイト・はやて・広暁の3人が乗るには座席が足りない。

「それなら問題ないよ」

ポチッ。

フェイトが車に取り付けられているボタンを押すと、車の後部の方が変形する。
すると…

「座席が出来た…」

「便利やろ？」

「確かに」

2人乗りの車が5人乗りになった。魔法恐るべし（今更？）。

「ほんじゃま、失礼しまゝす」

広暁がそう言つて車に乗り込もうとすると…

ガン！！

「痛！？」

「だ、大丈夫！？」

「何やってんねん、広暁」

車の上部に頭をぶつけてしまった。

ボックスカーや軽自動車ならともかく、フェイトの車は見た目スポーツカー。

身長184cmの広暁には車高が低すぎた。

「背が高いつても不便なもんやな」

「いったゝ…たまにやるんだよな」

そう言いながら広暁が改めて車に乗り込むが…

「低い…」

天上に頭がぶつかっている…というか、首を60度ほど横に傾けてようやく高さが丁度いい。

「広暁には悪いけど、このまま行くからな」

「う、ごめんね？広暁君」

「気にしないでいいよ…もっと浅く座るから」

そう言つて広暁は尻を前に出し、足を伸ばして浅く座る。行儀悪いが、首を痛めなかったためにもこれしか方法がない。さすがに寝転ぶわけにもいかないのだ。

「行儀悪いな」

「仕方ないよ、はやく」

「ま、それもそうやな。ほな行くで」

「運転するのは私だけだね」

こうして3人は六課を出た。

第13話「新デバイス」（後書き）

第13話終了。

広暁のデバイスは一体何でしょうか？

何気に今までの話に伏線も張っています。もし分かる方がいたら感想で答えていただけると嬉しいです。

…というか、サジタリウスって名前だけで分かりそうですね。

ではでは。ご意見・感想・訂正 e t c、お待ちしております。

第14話「芽生える心・敵対する心」(前書き)

第14話です。

今回は少し短いです。

といっても最近の話が長かったんですけど…。

まあいいでしょう(オイ!)。

それでは。

第14話、始まるよー!

第14話「芽生える心・敵対する心」

↳ミッドチルダ北部ベルカ自治区『聖王教会』大聖堂↳

ここは聖王教会大聖堂の入り口前。

そこに佇むのは1人の管理局員と1人の民間協力者と1匹の竜。

といっても、ホルスはカバンの中に入れており、その隙間から青い目を覗かせているのだが。

最初に入るのを嫌がると思ったのだが、意外なことに乗り気で入ってきた。

案外狭いところが好きなのかもしれない。

「うん…」

どうされました？マスター

「サジタリウス…。いやさ、教会って苦手なんだよ」

教会が苦手？何故ですか？

「…誰にも言うなよ？」

私のメモリーに保存されますが

「じゃあ、誰にもその情報を見せるなよ？」

分かりました

「実はさ、なんつーかこう…落ち着かないんだよ」

落ち着かない、ですか？

「この教会のことはよく知らないんだけどな。

俺の知ってる教会だと、どこの教会でも常に誰かに見られてる感じがしてさ。

どうしてもそつちの意識が先行するんだ」

なるほど、私には分からない感覚ですね

広暁が話した内容はデバイスであるサジタリウスには理解できるものではなかったらしい。

簡潔にまとめられた感想は、冷たく広暁の心をえぐる。

「……ちよつとは同情してくれたり反論してくれてもいいんじゃないか？」

情報としては記録されていますが、それに対する感情は持ち合わせていません

「……不幸だ」

何故ですか？

「気にするな、ただの戯言だ」

分かりました

「キユイ？」

何故こんな会話をしているのかというと、

「聖堂の中に入るには巡礼用のケープが必要です。少々お待ち下さい」

と、出迎えに来た教会の職員が言ったためだ。制服では巡礼者を不安にさせてしまったためらしい。

その時間を持て余して周りを見ていた広暁にサジタリウスが反応したのだ。

「『カリム・グラシア』さんだっけ？どんな感じの人なの？」

「仕事は出来るし美人なんやけど…上司って感じはせーへんな。どっちかつちゅーとお姉ちゃんって感じや」

「お姉ちゃん？」

「そ、お姉ちゃん」

ここでまた一つ、広暁の中に疑問が生まれた。

（六課設立に最も貢献した人で、六課最高の後ろ盾。んでもって、管理局本局理事官。

それなりに年がいった人を想像してたんだけど…）

そう、年齢である。

はやてにしるフォワードメンバーにしる、皆自分より年齢が下だ。魔法という力のおかげで、ミッドチルダでは就労年齢が低いというのは分かっていた。

しかし、今はやての話を聞いた限りでは、カリム・グラシアの実像が上手く作れない。

また、先程から広暁の周りを歩いている職員の方を見ると、どう見ても広暁より年上だ。

（お姉ちゃんだから少なくとも20歳よりは上だろうけど…同い年つてのもきついよな…）

広暁が思考の渦にはまりそうになっていたところ、そこにある意味救世主が現れた。

「お待ちせしました。こちらをお召の上、私に付いて来て下さい」

「おおきにな」

「はい」

先程の職員である。

渡されたテープを身に纏い、2人は職員の後について行く。

（カリムの部屋）

コンコン。

「エンゼル」

「失礼します」

ノックして部屋に入る。

部屋に入った2人はケープを取った。
ついでにホルスもカバンから出す。

「カリム、久しぶりや」

「はやて、いらっしやい」

(若!?)

そこにいたのは妙齢の女性。

腰までとどく金髪を紫色のリボンでカチューシャ風にまとめている。
年齢は広暁より少し上、23〜25といったところだろうか？

広暁と大して年は変わらないようだ。

「こちらの方が？」

「そやで」

「初めまして。聖王教会騎士団の騎士、カリム・グラシアです。カリムと呼んで下さいね？」

「機動六課で世話になっている、次元漂流者で民間協力者の墨谷広暁です。」

「よろしくお願ひします…カリムさん」

「カリムで構いませんよ？」

「すみません。名前を呼び捨てというのはさすがに…」

「はやてのことは呼び捨てと聞いたけれど？」

チラッ。

広暁がはやての方を見る。

はやてはニヤツと笑った。

ピキッ。

広暁の額に一筋の稲妻が走る。

ちよつと怒った。

「分かりました…カリム」

「はい、よく出来ました」

根負けしたのか、早速弄ばれている。

お姉さん属性とでも言うのだろうか？

「そちらの竜が…？」

「せや。広暁のパートナー、ホルスや」

「そうです。正式名称は長いんで、ホルスと呼んでやって下さい」

「キュイ！」

フツツとカリムが笑う。

見る人全てが虜になるような笑顔だ。

お姉さん属性も合わさって、聖母を感じさせるような人。
それがカリム・グラシアだろうか？

「分かったわ。では、こちらに。紅茶を飲みながらゆっくりと話しましょう」

「おおきにな」

「はい」

「これがジェット…新型？」

「今までの？型以外に新しいのが2種類。
戦闘性能はまだ不明だけど…これ。？型は割と大型ね」

ゴクツ。

広暁が紅茶を飲む。

「本局にはまだ正式報告はしてないわ。
監査役のクロノ提督には、障りだけお伝えしたんだけど」

「これは…！！」

「それが今日の本題。一昨日づけでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

「レリック、やね」

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし」

「ガジェット達がレリックを見つけるまでの予想時間は？」

「調査では、早くて今日明日」

「そやけどおかしいな？ガジェットが出てくるのがちょお早いような…」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか」

サクツ。

広暁がクッキーを食べる。

（何で俺、ここにいるんだろう…？おもいつきり場違いだよな？
挨拶だけして外で待ってればよかったんじゃない…）

今更気づいても遅いのだが。

それでも2人の会話は続く。

「レリック事件もその後起こるはずの事件も、対処を失敗するわけにはいかないもの！！」

（…ん？まるでこの先何が起こるか分かってるような言い方だな…）

カリムの言ったことに対し、広暁が反応する。

口には出さず、態度にも表れないのは広暁の地の性格故だろう。広暁が言葉の意味を考え始め、ふとはやての方を見ると、

（はやて？）

はやては何かを決心したような目で空間ディスプレイをいじっていた。

ピッピッピ。

カーテンが開き、暗い空間に一気に光が降り注ぐ。

急に明るくなったため、広暁は眩しさのあまり目を手で隠す。

「まあ、何があってもきつと大丈夫。

カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。

予想外の緊急事態にも、ちゃんと対応できる下地が出来てる。

そやから、大丈夫！」

「はやて…そうね、はやてが言うならきつと大丈夫よね。

優秀な新人が隣にいるみたいだしね」

「広暁も結構強いで〜？」

「いやいや」

広暁が顔の前で指を揃えた右手を横に振る。

日本でいう拒否兼謙遜のポーズだ。

「そんな謙遜せんでええやん。初めてガジェットと戦った時の映像、

「かつこよかったで？」

「あれはホルスのおかげだろ」

「そやったっけ？」

「10割そうです」

「キユイ？」

「フフッ」

先程の張りつめた空気とは違い、和やかな空気が部屋を包み込む。

（ねえ、はやて？）

（どうしたん、カリム？いちいち念話せーへんでも…）

以降、念話でお送りします。

（あなた、広暁君のこと好きでしょ？）

（ブッ！！何を言うんや、カリム！？）

（違うの？）

（違う違う！そんなことあらへん！！）

(じゃあ、私が広暁君を好きになっても構わないわよね?)

(へー!?え、いや、え!?あれ!?)

(何を動揺してるのかしら?)

(え〜と、その…)

(やっぱり好きなのね?)

(……………)

(沈黙は肯定と受け取るわよ?)

(あー、もう!そうです!!私は広暁のことが好きです!!!!)

(やっぱり。もう、素直じゃないんだから)

(うう…そんなに分かりやすかった?)

(何となく気付いただけよ。分かりやすいつて程のものじゃないわ)

(そーかあ、良かった。…うん?ちよー待て)

(どうしたの?)

(さつきカリム、『私が広暁を手籠めにするわよ?』って言わんかったか?)

(そこまでは言っていないわよ? 『私が広暁君を好きになっても構わ

ないわよね?』って言ったのよ)

(それ、ホンマか?)

(何が?)

(カリムが広暁のことを好きっちゅーことがや!)

(うーん…どうなのかしら?)

(はあ!?)

(こんな感情、初めてなのよね。

さっき初めて彼を見たら、全身に電流が走ったような感覚がしたの。それでさっき、ちょっとボーツとしちゃったのよ)

(そうは見えへんかったけどな。さすがカリム)

(いえいえ、それほどでも)

(…ってちゃーう!カリム、それは一目惚れや!…!)

(一目惚れ?これが?)

(せや!初めて会う男!全身を走る電流!正に一目惚れの代名詞やないか!

ってゆーか、今まで一目惚れを経験したことが無かったんか!?)

(そうみたいね。でも、本当に一目惚れなのかしら?)

(そうに決まってるて!)

(へえ、でも…)

(どうしたん?)

(私が今までに会ったことのないタイプの男性なのよね、広暁君。ヴェロツサみたいな、キザな優しさとは違う。

クロノ提督みたいな、不器用な優しさとも違う。

無限書庫司書長のユーノさんみたいな、無償の優しさとも違う。

広暁君は、親身になって心配してくれる優しさを持つてるような気がするの。

それに、彼といると何だか落ち着くのよね)

(よくこの短時間でそこまで分かるな。

ってゆーか、ヴェロツサが聞いたら泣くで、さっき言ったこと)

(伊達にあなたより長生きはしてないわ…ところで、彼の年はいくつ?)

はやての意見はスルーされた。

(確か…20歳^{はた}ゆーてたな)

(20歳…4こ下ね…)

カリムの年がばれたが、当然広暁は気づかない。

もし気づいたとしても「予想が当たった」ぐらいにしか感じないだろうが。

(カリム?まさか...)

(話はここまでよ、はやて。広暁君が不審に思ってる)

(ちよ、おま...)

念話終了。

ちなみに、お互いのマルチタスクをフル活用したため、僅か10秒で済んだ。

「仕事の話ですか？」

「そんなところです。ごめんなさいね」

「いえ、お気になさらず。挨拶しただけで出てかなかった俺が悪いんですから」

「そんなことないわよ?はやてが言ってた民間協力者のことがよく分かりましたから」

「この短時間で?」

「はい」

「凄いですね...」

念話の内容を知らない広暁は、カリムが言ったことに感嘆のため息を漏らす。

その顔は純粹に驚いているようであり、働く人の凄さを思い知ったといった感じだ。

「それ・と」

「はい？」

「敬語でなくても構わないわよ？」

「いえ、さすがにそこまでは……」

「か・ま・わ・な・い・わ・よ？」

「…分かった」

「よろしい」

（この人もはやてと似てるよな…人をからかって楽しむ癖でもあるのか？）

あながち間違っではないが。

さすがにこの段階で気付けと言っるのは酷だろう。

「そういえば。広暁君のデバイスってどのような形をしているのですか？」

「俺のデバイス？」

広暁が不思議に思う。何故自分がデバイスを持っているのを知っているのかと。

(そういや…カリムと電話してたよな、はやて。その時に言ったのか?)

相変わらず思考が早い。

はやてはカリムに遅刻の連絡をした時に、新人が新しいデバイスを受け取ることを言っていたのだ。

(まあ、見せても構わんだろ。六課の後見人だし)

そう考えた広暁は、制服の上着のポケットから一つのペンダントを取り出す。

銀色の羽を左右対称に開いたデザインの中央に黒い炎の形の結晶があるデバイス、サジタリウスだ。

「こいつが俺のデバイス、『サジタリウス』です」

「これが…なるほど、このデザインはホルスの翼を模しているのね」

さすがです、騎士カリム

「よろしくね？サジタリウス」

こちらこそ。マスターとホルス共々よろしくお願いします

「フフ。ええ、分かったわ」

勝手に広暁とホルスのことを頼んでやがりますよ、このデバイス。

「ペンダント型ですか」

「ええ。デザインは特に希望してなかったんで」

「でもこのままだと、携帯に不便じゃありません？」

「それは…まあ、確かに」

「ちょっと待って下さい」

そう言つてカリムは席を立ち、先程まで座っていた机の引き出しを開ける。

机の中に探し物があつたのか、それを持つとまた席に戻つて来た。

「これを使つて下さい。昔使っていたリボンですけど」

カリムが広暁に渡したのは、彼女が首元に行っているのと同じ、紫色のリボン。

だが、広暁が受け取つた方のリボンはかなり細く、紐と言っても差し支えない細さだ。

「昔はそちらのリボンを使っていたのですけれど。」

シャッハ：私の秘書に今付けている方を進められましたね。

そちらのリボンは今、使つてないんです」

「いいの？思い入れとかあるんじゃない？」

「確かに思い入れはありますが…使わないリボンをとっておいて
もリボンが可哀想ですから。」

そのリボンも使つてもらつた方が嬉しいでしょうし」

「分かった。そういうことなら、もらっていい？」

「ええ、どうぞ」

そう言って広暁はリボンを受け取ると、サジタリウスの上部にある穴にリボンを通し、両端を結んで首に通し、Yシャツと制服の間にサジタリウスを滑り込ませる。

「あら？隠してしまうの？」

「首からペンダントをぶら下げてる管理局員はまずいと思っけど？」

「フフ。だったら仕方ないわね」

カリムとの談笑に花を咲かせる広暁。

2人共本当に楽しそうに話しているあたり、本心での会話なのだろう。

(む〜……)

その様子を面白くなさそうに見つめる…というか睨みつけているはやて。

(カリム…抜け駆けは許さへんで?)

(こいついうのは早い者勝ちよ?)

(小癪な真似を…!!)

(どっどっ自由に)

バチバチッ!!

2人の中で火花が散る。

というか、念話を使わずに視線だけで会話しているように見えるのは気のせいだろうか？

うん、気のせいだろう。

(何だ？もしかすると…いやまさか…うん…)

広暁も何かに気付いたようで、経験と考察と勘から結論を導き出すが…。

(いや、さすがにそれはないだろ。もしそうだとしたらはやては小学生だし、カリムは行き遅れだ)

出した結論に対し、それはさすがにありえないとばかりに批評する。その内容はかなりひどい。

(でもなあ…ありえないとも言いきれないしなあ…)

簡単に物事を否定出来ないのは理系人間の悲しい性だろうか？

この用心深さが今後の広暁の命を救うことになるのは、今はまだ秘密にしておこう。

そんなこんなでカオスな空間が形成されつつある中…

ビービービー!!

「「「!?!?」「」

部屋の中に向けたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

↳機動六課オフィスルーム↳

「終わらないよー！」

「まったく…」

「キャロ、ここは？」

「ここはこうして…」

「みんな。時間までに終わらないと明日までの宿題ってことになるからね？」

オフィスでは報告書の作成に追われる4人の姿が。
ティアナは終わっており、エリオとキャロも8割がた終わっているが、スバルに至ってはまだ半分もいってない。

「ノ　　！！」

「うわ！？スバルが発狂した！？」

「「スバルさん！？」」

「まったくもう…」

ある意味平和な光景だが、これでは先が思いやられる。
すると…

ビービービー！！

スバルの声を上回る音がオフィスに鳴り響いた。

「このアラートって！？」

「一級警戒態勢！？」

「グリフィス君！」

『はい！教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて！』

「うん」

『状況は？』

『教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。』

場所はエイリム山岳丘陵地区。

対象は山岳リニアレールで移動中』

『移動中って!?!』

「まさか!?!」

『そのまさかや。内部に侵入したガジエットのせいで車両の制御が奪われてる。』

リニアレール車内のガジエットは最低でも30体。

大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。

ハードな出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか?』

『私はいつでも』

「私も」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオツケーか?』

「「「はい!」「「「「

『よし、いいお返事や。シフトはAの3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制』

「「はい!」「」

『なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮』

「うん」

『ほんなら…機動六課フォワード部隊、出動!』

「」「」「はい!」「」「」

『了解。皆は先行して。私もすぐに追いかける』

「うん!」

……………。

……………?

「あれ?お兄ちゃんは?」

キヤロの咳きは泡沫の如く、オフィスの喧騒に消えた。

第14話「芽生える心・敵対する心」（後書き）

あ、ありのままこの間起こったことを話すぜ！

「普通にカリムとの絡みを書いていたら、いつの間にかカリムルートが出来ていた」

な…何を言ってるのか分からないと思うが、俺も何が起きたか分からなかった。

頭がどうにかなりそうだった…。

気が付いたら書いていたとかつい調子に乗ったとかそんなチャチなものじゃ断じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

…はい、すみません。第3話の使い回しです。

ホント、何でカリムルートが出来たんだろう…。

私としては、他の方が書かないような相手を広暁とくっつけたかったんですけど…何故にカリム!？

まあ出来たものは仕方ないので、これからも書き続けていきます。ちなみに、カリムの年は予想です。

クロノと同じ年ぐらいに見えたので。

それでは今回はこちら辺で。

ご意見・感想・訂正等、お待ちしております。

第15話「サジタリウス」(前書き)

第15話です。

前回の話通りだとカリムルートも…。

おっと、これ以上はネタバレになりますので言えませぬね。

それでは第15話をお楽しみください。

第15話「サジタリウス」

↳再びカリムの部屋↳

「さてと。広暁には初めての出勤やな」

「だな…」

「何や？えらく不安そうやな？」

「そりゃな。いきなりガジェットと戦うわけだし…」

「最初にガジェットと戦った時のことを忘れたん？」

「あの時は無我夢中だったし。生きるか死ぬかって考えてたから。でも、今回は任務。俺の失敗が六課全体に迷惑をかけると思うと…」

バシッ！！

はやての手が、広暁の背中をおもいつき叩く。

「痛！？何すんだよ、はやて！？」

「辛気臭い顔すな！男は度胸！！黙って突き進め！！！！」

「んな無茶な…」

「あんたはこの1週間で、魔法を何年も学んできた他のフォワード4人と同じ位置まできたんやで!？」
「まだ一つも攻撃用の魔法使えないのに!！」

「え!?!ちよつとはやて!?!それホント!?!」

「せやで!まだ出来るのは魔力弾の生成とバリア、飛行と念話ぐらいや!！」

「そんな状態で広暁君を出動させる気!?!」

「大丈夫!広暁ならやってくれる!広暁は、それだけの武器を持つてる!！」

「俺が持つてる武器って…!」

サジタリウスを見る。

何でしょうか?マスター

「キユイ!！」

俺もいるぞとホルスが突っ込む。

「デバイスでもホルスでもない!あんたのその眼!そして頭脳!それこそがあんたの武器やろ!?!」

「…まあ、確かに」

今までかすり傷が限界だったシュートイベーション。

そこでなのはにあそこまでのクリーンヒットをあたえる作戦を考えたのは広暁だ。

その頭脳を力と言わずして何と言おうか？

「だったら、自分の武器に自信を持って突き進め！

フォローはなのはちゃんとフェイトちゃんがしてくれる！だからおもいつきり行け！！」

「……………」

広暁が黙り込んでしまった。

といつても、はやての言葉に気圧されたわけではない。

（俺がミッドチルダで見つけるべき新しい道…。

これがその第一歩なら…臆するわけにはいかないよな！）

どうやら覚悟が決まったようだ。

広暁自身も自分の中で一本の柱が出来たのだろう。

「ありがと、はやて。柄にもなく消極的になってたな」

「そうそう、その意気や」

（それに…練習してたあれもあるやろっしな）

「健闘を祈ります、広暁君」

「カリムもありがと」

「どういたしまして」

「さてと！広暁に闘魂を注入したところで、今後の行動を決めるではやてにどこそその元プロレスラーが乗り移ったような気がするが。そんなことはないだろう。」

「さっきも言った通り、場所はエイリム山岳丘陵地区や」

「いや、場所知らんし」

「場所のデータはサジタリウスに送つとくから、それを基に移動して。」

「大まかに言うと、ここから北西に約40kmや」

「分かった」

「シャツハ。はやてを送つてあげて。機動六課の隊舎まで、最速で」

『かしこまりました、騎士カリム』

「聖堂の裏に出て。シャツハが待ってる。」

「広暁君も。飛び立つなら、あそこは目立たないから」

「おおきにな、カリム。今日のお茶、美味しかったよ」

「ご馳走様でした」

「フフッ」

「さてと。ほな行こか？」

「おう！」

「…何でカリムがここにいるの？」

「そうですね、騎士カリム。早くお部屋に戻られたほうが…」

「ここは聖堂の裏。」

そこには車の前で待つ修道服を着た女性シャツハと、何故か先程別れたカリムがいた。

「いいじゃない。大きいホルスの姿を見たいし、広暁君のバリアジヤケットも気になるし」

「後者が本音やろ…」

「何か言っただかしら、はやて？」

「いえいえ、何も？」

先程の真面目な空気はどこへ行ったのか、2人は敵対心剥き出しだ。そんな2人を呆れ顔で見つめる広暁とシャツハ。

(…「うめんなぞ」)

(いえ、お気になさらず)

そんなやり取りが聞こえてきそうだ。

「まあ、カリムの気持ちも分からんでもないけど…私も見たいし」

「…俺は見世物ですか？」

「細かいことを気にしたら負けやで？」

「へいへい…」

広暁にとって、巻きこまれ役ポジション兼苦勞人ポジションはどうやら確定事項のようだ。

「はあ…んじゃまあ、行きますか」

「キュイ！」

「ホルス。先に頼む」

「キュキュイ！」

ポオオオオ！！

黒い炎が小さなホルスの身体を包み込む。

その炎は段々と体積を増し、炎が晴れるとそこには…

「グオオオオ」

大きくなったホルスが。
場所をわきまえているのか空気を読んでいるのか、大声で吠えないのは大したものだ。

「これが…ホルスの本当の姿…」

「大きい…」

「うわ…」

三者三様の声を漏らす。
言葉こそ違うものの、感嘆しているところは3人共変わらない。

「さてと。次は俺達だ」

了解です、マスター

「サジタリウス…セットアップ!!」

セットアップ

サジタリウスの声と共に、広暁が黒い球状の光に包まれる。
その光はまるで炎のように広暁を包み込む。
広暁の身体が浮かび上がり、徐々にその服が変わっていく。
光が晴れるとそこには…

バリアジャケット・シューティングフォーム

「これが…俺のバリアジャケット………」

バリアジャケットを身に纏った広暁がいた。
どうやらこのフォームはシューティングフォームというらしい。

黒のインナーに深緑色の長袖の上着。
同色の長ズボン。

黒いベルトをしており、手には同色のオープンフィンガーグローブ。
腕に銀色のプロテクターがついており、向う脛にもプロテクター。
銀色のメタリックな靴、折りたたまれて額に巻かれている迷彩柄の
バンダナ。

だが何より目を引くのは…

「何故にマント?」

そう、マントだ。

首の下で銀色の留め具で止められているのは白いマント。
黒線で縁取りされたそれは、所々に金色の三角形が入っている。

「これ必要なのか?」

「それはシャリーに聞かんと分らんなく。防御力上昇が目的な
んやないか?」

広暁自身はバリアジャケットのことなどよく知らなかったので、武
器に合ったタイプで希望したのだ。

…正直バンダナも必要ないような気がするが。

ちなみにこのフォーム、高速機動補助をベースに防御面にも考慮し
たフォームだったりする。

そして、広暁が左手に持つデバイス『サジタリウス』。

その形状は…

「弓…?」

「弓やな」

「弓ですね」

「天翔ける弓『サジタリウス』。それがこいつだ」

弓だった。

黒色を基調としたその弓は、持ち手の部分はおよそ拳3つほど色は銀色。

そこから伸びる黒色の節は、弓にしては大きくて太めだ。

節の内側の持ち手側には2つのカードリッジスロットがある。

弦は銀色だ。

「反りは結構浅いけど…何かシグナムのボーゲンフォームに似てるような…」

「シグナムのデバイスって剣だよな? ってことは…遠距離対策か?」

「さすがやな、広暁。近接主体のベルカ騎士にとって、遠距離は鬼門や。」

それを克服するための対遠距離一撃必殺形態。それが『ボーゲンフォーム』や」

「へえ」

「…ってそんなこと言ってるんやない!」

「ん？」

「あんだ、弓使えるんか？」

「……まあ、それはお楽しみつてことで」

「はあ！？」

「ホルス、行くぞ」

「グオオ」

シュタツ。

広暁がホルスの肩に飛び乗る。
そして…

「ライトニング05、墨谷広暁。推して参る！」

バサツバサツ！！

ズドオオオオン！！

ピキイイイイイイン……………。

「…行つてしまいましたね」

「そやね…」

「『推して参る』ってどういつ意味なんですかね？」

あつとゆう間に飛んで行ってしまった。
取り残された3人は、三者三様の声を漏らす。

「彼なら大丈夫でしょう。出来ない事を口にするような人ではない
でしょうから」

シャツハの疑問は軽くスルーされた。

「まあ、確かに。広暁ならそうやるな。それと…カリム」

「はやて？」

「どやった？広暁は？」

先程までの緩慢とした空気が消え、凜とした空気になる。
空気の変化を感じたカリムも、努めて真面目に言葉を返す。

「……まだはつきりとしたことは分からないわ。だけど…彼ならや
つてくれそうな気がする」

「随分と曖昧な答えやな？カリムらしくないで」

「さすがに私だってハッキリとは言えないわ、彼のことはまだよく
知らないのだし。」

それでも…彼なら変えてくれそうな気がするの」

「…そうか。カリムがそう言うんなら、そうなんかもしれんな」

「ええ、彼なら…」

2人の眩きを聞いていたのはシャツハ1人だけだった。

「でも、広暁君を渡す気はないわよ？」

「ちょ！？今ここでそれを言う！？？」

「騎士カリム、それはどういう意味……」

「シャツハ？」

「はい!？」

どこか怒気を含んだ声でシャツハの名前を呼ぶカリム。笑顔なのが余計怖い。

「早くはやてを六課の隊舎まで送ってあげて」

「わ、分かりました!騎士はやて!いざ参りましょう!いざ参りましょう!」

「ちょ、シャツハ!?そんな無理矢理車に押し込まんでも!」

カリムの威嚇というか醸し出す空気に気圧されたのか、はやてを車に押し込むシャツハ。

体が小さいためすなりと入るところが広暁と違う。

「では!全速前進です!」

グワアアン!!

おもいつきり車のアクセルを踏み込むシャツハ。その仕草には、安全運転の欠片も感じられない。余程カリムの笑顔が怖かったのだろう。

「言つとくけどなーカリム!広暁と一緒にいられる時間は私のが圧倒的に長いんやでー!」

助手席の窓を開け、カリムに向かってはやてが叫ぶ。
アクセル全開で超加速の車にも関わらず。

「騎士はやて！？危ないですからお止め下さい！！！」

「だからー！圧倒的に私に分があるわけやー！！絶対カリムには負けへんでー！！！！！」

「騎士はやて！！！」

グワシッ！！

「おうふ！？」

左腕で器用にはやての首根っこを掴み、車の中に引きずり込むシャッパ。

慣れているように見えるのは気のせいだろう。

(帰ったら詳しいことを聞かないと…！！！)

そのまま車は走り去っていく……。

「フフッ、こんな気持ち初めてね。だけど、私も負ける気はないわよ？」

それに、一緒にいられる時間が長ければいいというものでもないん

だから」

1人聖堂裏に佇むカリムが小悪魔のような笑顔で呟いた。
その声を聞く者にはここにはいない…。

第15話「サジタリウス」（後書き）

広暁のデバイス『サジタリウス』。

その正体は…弓でした！

サジタリウスは日本語で『射手座』。

ケンタウロスが弓を引く姿で有名ですね。

ちなみに伏線は主人公設定の後書きにありました。

『作者の周りで遊戯王やってる人間で、ソフトテニス部の次に多いのが弓道部』。

…分かりにくいですね、申し訳ありませんでした！！
次やる時はもう少し分かりやすいように頑張ります！

広暁のバリアジャケットですが、辺境自然保護隊の制服をもっと濃くした感じだと思っていただければ分かりやすいです。
弓を使うならバリアジャケットはやっぱり緑かなと。

次回からいよいよ戦闘に入ります。

広暁とホルスの活躍にご期待下さい。

感想・訂正・意見等お待ちしております。

第16話「射手vsガジェット」(前書き)

第16話です。

広暁の初陣は果たしてどうなるのでしょうか？
では。

第16話、始まるよ〜！

p.s

PV10万アクセス、ユニーク1万アクセス、お気に入り100件
突破！

第16話「射手vsガジェット」

（エイリム山岳丘陵地区上空）

広暁が狙うのは3機で編隊を組み飛行しているガジェット？型。それらを一直線上に捉えられる位置に移動する。

「明鏡止水」

ピチャン…。

平らな水面に一滴の水滴が落ち、波紋は消えて水面は鏡のように。

キュイイイイン。

右手に黒色の魔力が集まり、矢へとその形状を変化させる。

スッ。

引くのではなく下ろす。

ギイイイイ…。

「遠距離狙撃用スコープ展開」

スコープ展開。標的までの距離95m。伏角24度

狙いを定め…。

「一撃必中」

…放す。

パアアアアン！！

シューシューシューシュー……。。

シューンシューンシューン！！！！

ドガアアアアアアアアアア！！

放たれた矢は一直線に飛び、寸分変わらずガジェットのを貫き、その機体を爆発させた。

「あと…10機か」

マスター

「どうした？」

マスターの戦闘スタイルならガジェットに近づくのは得策ではないでしょう。

ですが経験を積むためにも、近中距離での乱射戦をするべきです

「…やっぱり？」

勿論です

「…俺が一気に作れる矢はまだ1本だけだし、大量に作るとなると一本一本連続で作る必要がある。もしくは、魔力弾を作ってそこから矢の形に収束せんといかん。近中距離戦でそんな時間があるか？」

私が補助します。今のマスターの力量なら10本まで矢を作れま
すから

「もっと腕を磨けばお前が作れる矢の量も増えるのか？」

その通りです

「うーん…そういうことならいいか。誘導も付けてくれるか？」

了解です

現在エイリム山岳丘陵地区上空では、激しい空中線が行われている。なのはの砲撃がガジェットを破壊し、フェイトの斬撃がガジェットを切り裂き、広暁の狙撃がガジェットを貫く。ちなみにホルスは…

「グオオオオ！！」

グシャツ！ メシャツ！ バキツ！

ガジェット相手に空中で肉弾戦を行っている。最初こそ炎を吐いたり、炎を矢や槍の形に収束して放ってガジェットを破壊していた。

だが。

「グオオオオオオ!!」

途中で面倒臭くなったのだろう、今では手足に炎を纏って殴る蹴るの肉弾戦をやっている。

ちなみに、撃墜数はなのはについで2位。

3位はフェイト、4位は広暁であることを補足しておく。

(ホルスがいれば俺いらなくね…?)

と、広暁もつい考えてしまう程の撃墜っぷりである。

実際は広暁がいなければホルスも付いて来ないので、いるだけで役に立っているのだが。

「ホルスー！無茶するなよー!？」

「グオオ！」

分かっている、と言っているようだ。

危なくなったら戻って来るようにいつてあるし、なのはやフェイトの邪魔もしていない。

ときたまフォローされたりフォローしたりしているようなので、今はまだ問題ないだろう。

一緒にいるよという突っ込みもありそうな気がするが、こちらの方が効率がいいのだ。

「それにしても」

どうされました？

「なんか…すんなり行き過ぎのような……」

すんなり…ですか？

「ああ…」

（回想中）

「しっかし速いなあ」

広暁はリニアレールに向かっていている途中であり、今はホルスの肩に乗っている。

自分より速いホルスの飛行速度に最初こそ驚いたが、今ではすっかりこの飛行を楽しんでいる。

風にたなびくマントがかっこいいと思っっていることは秘密だ。

マスター。後2分で目的地に着きます

「ありがとうございます。そっぴやさ」

何でしょうか？

「お前に付いてる機能ってどんなのがある？」

遠距離狙撃用スコープ・弓を放つ際の反動防止・構える間の防御用バリア・張力の変化。

他にも、放つ矢に対して誘導性能を付与することが出来ます

「なるほど…放った矢に空気抵抗はあるのか？」

マスターの矢は魔力を収束したものです。

そして、魔力は空気中の魔力素をリンカーコアで生成した物。

そのため、魔力素が遍在する空气中を進んでも空気抵抗は無きに等しいでしょう。

補足しますと、私から放たれる矢は古来の武器である弓と違って段違いの威力と速さです。

また、インテリジェントデバイスといえど、武器を模している私は頑丈です。

近接戦闘になることがあっても遅れはとらないでしょう

「なるほど、サンキューな」

お気になさらず

さらりと自慢してのけるサジタリウス。

自分の良さを自慢したくなるのは人もデバイスも関係ないようだ。

「そういえば」

どうしました？

「俺が矢を作れることには突っ込まないんだな？」

マスターが矢を作れることは、既に情報として書き込まれていました

「ってことは…誰かに見られてたってことか？」

何をですか？

「矢を作る練習をしたところ。時間を見つけては隠れてやってただけだな」

その可能性が非常に高いですね

「はあ…」

実際、機動六課内ではプライバシーは有って無いようなものだが。そこは個人のマナーに委ねるとしよう。

「にしても…久しぶりだな、この感覚」

感覚、ですか？

「ああ。弓…弓道をやった時期が昔あってな。つっても、もう8年以上持っていないけど。だからさ」

何でしょうか？

「向こうについて1射目に放つ矢は何も手を加えないでくれ。補助も無しだ」

理由を教えてくださいませんか？

「昔の感覚を取り戻せるかどうか試したい」

了解です

（ま、和弓と洋弓じゃ弓自体も構えも違うんだけどな。そこは何とかするしかないか）

広暁の考えた状況下では、和弓より洋弓型の方が戦いやすい。そのため、サジタリウスの形状はこのようになった。

（ってゆーか、専門用語もほとんど覚えてないんだよな…。矢を射る時の心構えは覚えてるし、まあいいだろ）

結局は出たとこ勝負、運次第ということだろうか？
常に先のことを考えて行動する広暁にはあり得ないことだ。

マスター

「どうした？」

全然緊張している様子が見受けられませんが？今回が初出動というのに落ち着き過ぎでは？

そこにサジタリウスが気づいたのか、先程から考えていたことを含めて広暁に聞いてきた。

広暁は全くと言っていいほど緊張している様子が見受けられないのだ。

「…緊張はしてるさ。ただ…」

ただ？

「俺以外のフォワード4人は俺より年下なわけだしな。

エリオとキャロにいたってはまだ10歳だぞ？」

俺のいた世界ならまだ義務教育を受けてる期間で、こんな荒事に巻き込まれることはまず無い。

そんな2人が出勤するのに、20歳の俺が緊張でガクガクブルブルしてたらかつこがつかないだろ？

魔法を学んできた年数に違いがあっても、暮らしてきた環境が違って、だ。

それくらいの意地は見せるさ」

マスター…

広暁が落ち着いている理由。

それは最年長の自分が情けない姿をみせられないという、ある意味男の意地の様なものだった。

今はまだ姿は見えないが、4人はもう現場に到着してガジェットと戦っているのかもしれないのだ。

「どうした？俺らしくないか、意地を張るのは？」

いえ、そういうわけでは。ただ…

「ただ？」

マスターにもそういった一面があるのだなと思っただけです

「俺の全てを知るのには難しいと思うぞ？
人間なんて、自分で見ても周りから見ても完璧に理解出来るものじ
やないからな」

これから知っていければ。私はそれでいいです

「…ありがとな」

こちらこそ

どうやらこの2人（1人と1機）は初陣の前にその絆を深めること
が出来たようだ。
そこにホルスの突っ込みが入る。

「グオオ！」

俺もいるぞと。

「ホルス…お前もな。これからよろしく頼む。つつても、もう1週
間は一緒にいるけどな」

我々1人と1匹と1機。揃ってから初めての出勤ということなら
ば

「これが初陣…だな」

「グオオ」

見えてきました。リニアレールです

「よっしゃ、俺達の初陣だ。おもいつきり行くぞ！」

「グオオオオ！！！」

了解しました

「あれは!?!」

「ホルスと…広暁君!?!」

空中でガジェット?型と戦闘を行っていたのはとフェイトが見たのは、こちらに向かって飛んでくる竜とその肩に乗っているバリアジャケット姿の広暁。

(すみません、遅くなりました)

(ううん、大丈夫)

(広暁君、いきなりで悪いけど…いける?)

(勿論です。んじゃ…)

(ちょっと待って!そつちじゃない!!)

(え?いや、俺達の任務はレリッククの確保じゃ…)

この位置と共に送られてきたデータでは、スターズとライトニングに分かれてリニアールの前後からガジェットを破壊しながらレリックを奪取することが任務のはずだ。

(その予定だったんだけどね)

(広暁君のデバイスとホルス。その2つだと、レリック確保より空中を制する方が向いてるの)

(予定と違いますが…いいんですか?)

(臨機応変にだよ、広暁君? 教導官の言うことが信じられない?)

(いえ、そんなことは)

(だったら…)

(ええ…)

(つまり…)

()()(空中を制する!)()()

3人は念話で確認すると、即座に散り散りになる。

なのはの『アクセルシューター』がガジェットを破壊し、フェイトの『ハーケンセイバー』がガジェットを切り裂く。

広暁は…

(いや、俺これが初戦闘なんだけど!?)

なんで隊長2人と一緒に空中を制することになるわけ!?)

ちよつとてんぱっていた。

自他共に認める冷静な性格ではあるが、初任務が隊長との共闘なら仕方のないことだろう。

マスター、落ち着いて下さい。まずは1射です

「……………ふう。すまん」

マスターでも取り乱すことがあるのですね

「当たり前だ。常に冷静でいられるわけじゃない」

記録しておきます

「おいおい……」

(そついや、フェイトもマントつけてるな……デザインの傾向も似てるし……)

バリアジャケットは各隊の隊長のを参考にしてるのか?)

当たりである。

ちなみに、現在広暁がいるのはなのはやフェイトから同高度で横に約50m離れたところ。

「ホルス、お前はまだ手を出すな。俺の傍で周りを見てくれ。俺に近づくのがいたら撃墜だ」

「グオオ」

「サジタリウス。さすがにこの位置だと狙いづらい。もうちょっと近付く」

分かりました

広暁は空中を移動し、ガジェットが弓道における近的（28m）の位置になるように距離をとるが…

「…動局的か…」

弓道と違ってこれは実践、矢を放つ対象となるガジェットは当然動く。

相手が飛行に特化したガジェット？型なら尚更だ。

どうされますか？

「問題ない」

そう言つて広暁はガジェットの動きを観察する。

なのはの砲撃を避ける機体、フェイトの斬撃をくらつて爆発する機体、離れた所で旋回する機体。

今の自分が確実に狙える機体を探す。

（ガジェットは半自立型つて言つてたな…。

遠距離からの狙撃なら気付かれることなく射抜くことは出来る。だ
けど…）

そう、第1射目は広暁の感覚を取り戻すために射る。
先程そう決めたのだ、まだデバイスに頼る時ではない。

自分に喝を入れ、なおも観察を続ける。

ポオオオオ！！

後ろでホルスが炎を吐き、ガジェットに攻撃する。

A M Fを張るが、ホルスの炎の前には長続きはしない。

ピシピシピシピシピシッ！

パライイイイン！

A M Fが消え、ガジェットはその機体を黒炎に晒される。

金属であるガジェットは表面が溶け、やがて…

ドガアアアアーン！

爆発。

「ホルス、それだと魔力消費が大きい。炎は収束しろ」

「グオオ」

広暁の言った通り、ホルスは生み出した炎を矢の形に収束する。

この1週間、広暁と一緒にホルスも練習していたのだ。

そして収束が終わると…

「グオオオオオ！！」

ホルスの叫び声と共に、広暁を狙うガジェットに向かって矢が飛んでいく。

ガジェットもAMFを張るが…

ピシイーン！

収束された炎の矢の前にAMFを貫通。機体を貫かれ、爆発する。

「名付けて『フレイムアロー』…かな？」

AMFが魔力結合を解くなら、解かれないほど固く収束すればいい。もしくは、解かれる前にAMFを抜ければいい。

矢の形に収束し、吐く炎を上回るスピードで飛ばす、それが『フレイムアロー』。

（ホルスがすっかりやってるんだ。主人である俺が情けない姿を見せるわけにはいかない）

再度自分に喝を入れ、観察を続ける。

……………。

（…なるほど）

広暁が何かに気付いた。場所を移動し、弓を構える。

（魔力を右手に）

広暁の右手に黒色の魔力が集まる。

(生成するは黒き矢)

魔力が矢の形を作り出す。

(箭^{はず}を弦にかけ)

目標を捉え。

(引くのではなく下ろす)

矢を引き絞る。

(後は…)

タイミングを計るだけ。

(1…2…3…)

そして…放す。

パアアアアーン!!

シューイイイイン……。

シューン!

ドガアアアアーン!

ガジェット?型が1機、広暁の放った矢に貫かれた。

お見事です、マスター

「ふう……」

どうでしたか？8年ぶりの感触は

「70点……かな。和弓より構えやすいし、狙いもつけやすかった。構えも問題ないし、放した後の残心もまあまあ。ただ、ガジェットを狙うのに時間をかけすぎた。もっと一瞬で集中して一瞬で開放しないと」

記録しておきます

「サンキュー。しっかし、凄い速さだったな。

空気抵抗を感じさせないぐらい真っ直ぐ飛んできたし、AMFと機体を完全に貫通したぞ。

弓道どころか、アーチェリーより速いんじゃないか？」

先程そう述べましたが

「百聞は一見に如かず、だよ」

広暁が射たのは、なのはの周りを旋回する2機のガジェットのうち1機。

攻撃することが無く、狙われそうになると退くといった行動を繰り返していた。

恐らくは様子見・もしくは偵察で、他のガジェットに情報を送っていたのだろう。

その周回軌道上に弓を構え、矢を放つ。
もう1機はなのはが撃墜した。

（今の広暁君!?!）

（うん。今からは遠距離からの狙撃に徹しようと思つ）

（分かった。気をつけてね?）

（了解）

なのはとの念話を終え、広暁は息を吐く。

「今からは遠距離からの狙撃に徹する。サジタリウス、頼んだぞ?」

お任せ下さい、マスター

「ホルスは…」

「グオオオオ!!!」

今度は、炎の槍『フレイムスピア』でガジェットを貫いている。
フレイムアローより数は少ないが、その分大きさと破壊力は上だ。

「…ホルス、お前はここでガジェットを退治しててくれ。
なのは隊長とフェイト隊長には念話で伝えとく」

「グオオオオオオ!!!」

何だか嬉しそうに鳴くホルス。

戦闘出来たのがそんなに嬉しいのだろうか？

「さてと…一旦離れるぞ」

了解です。そう言えば

「何だ？」

先程から口調が冷たくなりましたね？

「仕事モードにしたと言ってくれ。」

こういう時はこういう口調の方がやりやすい…はず」

記録しておきます

「おいおい…」

回想終了。

今広暁がやっているのは遠距離狙撃。

弓矢でやるには難しいと思われがちだが、ある程度の腕とデバイスがあれば難しい技ではない。

実際、広暁もサジタリウスの補助がなければ遠くのカジエツトを狙えないのだ。

遠すぎるガジェットは小さくて狙いにくいのだし。ちなみに、スコープ通りに狙えば3桁の距離も余裕で当たったりする。

下手したら4桁の距離も当たるんじゃないかと思えるほどの性能だ。文明の利器さまさまである。

「ま、矢に誘導性能をつけてもいいんだけど…」

『それだと意味がない』ですか？

「まあな。狙う際の情動的な補助はありがたいけど、遠距離はどれだけ狙えるか試したいんだ」

こんなこと言ったらなのはやフェイトに叱られるかな？とサジタリウスに尋ねる。

大丈夫だと思います。そもそも、言わなければなりません

「お前…凄いいこと言ってるぞ？」

事実を述べたまでです

「まったく…」

呆れながら言う広暁だが、その表情はどこか嬉しそうだ。

「さてと。んじゃまあ…行きますか!」

了解しました

そう言つて広暁はガジェットの方へ飛んでいく。
狙うは2機まとまって飛んでいる機体、近接戦をしかけるのだ。

「サジタリウス！」

はい、マスター

広暁の意志を汲み取ったのか、サジタリウスが矢を生成する。

その数6本、広暁が考えたのと同じ数だ。

こちら辺はさすが高性能と言ったところか。

「放つは1機につき3本…放て！」

号令と共に周囲に展開された矢が放たれる。放たれた矢はガジェットに向かって飛んでいき…

ドガアアン！

「1機外したか」

1機は3本の矢をまともにくらって爆発したが、もう1機は矢を回避した。

距離を取るのか、一旦こちらに背を向けて離れる。

「直接射るのに比べると、パワーもスピードも劣るな」

そこは今後の訓練次第です

「へいへいっと…!?!」

そのもう1機がこちらに向かってレーザーを発射してきた。訓練のおかげか、最初見た時は避け切れないと考えたレーザーも避け切ることが出来る。

「サジタリウス…お前、さっき頑丈って言ったよな？」

はい…まさか？

「そういうこと。お前を和弓型じゃなくて洋弓型にしたのはさ…」
うゆう状況のためなんだよ！」

『ウオオ！』と叫びながら広暁はガジェットに向かって飛んでいく。発射されるレーザーを巧みに避け、弓の持ち手を持って上段に構える。

そして、両腕を魔力により強化。

イメージするは…魏の初代皇帝のC6！

右からの袈裟斬りの要領で、上部の節でもいっきり叩く！！

「ウオラアアア！！」

グウワシヤアアン！！

おもいつきり上段から振り抜かれた一撃は、ガジェットの前頭部を完全に破壊し…

ドガアアン！！

爆発した。

「お〜。何か気持ちいいな〜」

マスター…やるなら一言言って下さい

「分かってたくせに」

…はあ

「何故お前が溜息を吐く、というか吐ける」

気分です

「そういうものなのか？」

そういうものなのです

これは人間とデバイスの会話です、お間違えのなきよう。
間違っても人間同士の会話ではありません。

（広暁君）

（フェイト隊長？）

（空のガジェットは全部倒したね）

（お？そうみたいですね）

（後は4人に任せよう。皆しっかりやってるみたいだし）

(了解)

空域は確保。後は広暁以外の4人のフォワードに任せることになった。

「ホルスー！戻って来ーい！！」

「グオオ！」

下で悠然と羽ばたいていたホルスも広暁の元へ戻って来る。戦闘出来たのが嬉しいのか、その顔は心なしか清々しい。

シュタツ。

「やっぱり足が着くと落ち着くわ」

空を飛ぶ魔導師の発言としてそれはどうかと思いますが

「まだ慣れてないんだよ。見逃してくれ」

…了解です

ホルスの肩に乗った広暁に突っ込むサジタリウス。

出会ってからまだ1時間と経ってないが、お互いにお互いをすんなりと受け入れている。

会話の節々に色々とおかしい単語が混ざるが、上手くやっているようだ。

一方その頃…

くリニアレールく

「ここじゃ魔法が使いにくい…エリオ君！」

「うん、分かった！」

2人が戦っていたのはガジェット？型。

？型・？型と比べて巨大で、AMFの無効化範囲も広い。

機体は球状だが、ベルト状のアームの伸ばすことで近接線も可能な厄介な相手だ。

すると2人は…

「どう（えい）！」

リニアレールから飛び降りた。傍から見たら自殺行為であるが、2人の思惑は違う。

『ライトニング03・04…飛び降り！？』

『一体何を！？』

『いや、あれでええ』

驚くルキノとアルトの2人に、はやてが語りかける。

もう1人、管制にあたっていたシャーリーも気がついたようだ。

『そっか！』

「そう。発生源から離れば、AMFも弱くなる。

使えるよ…フルパフォーマンスの魔法が！

キャロ…制御に成功した竜魂召喚、見せつけてあげて！！」

「エリオ君、フリード！」

「キュクルー！」

「うん！」

竜魂召喚

キャロの掛け声と共にキャロとフリードが桃色の魔力光に包まれる。

「蒼穹を奔る白き閃光、我が翼となり、天を翔けよ」

（自分を信じる。そうすれば、フリードも応えてくれる！）

広暁に言われたことを胸に、キャロは詠唱を続ける。

「来よ、我が竜、フリードリヒ！竜魂召喚！！」

詠唱を終えると同時に魔力光が破れ、フリードが真の姿で現れる。

「エリオ君！」

「分かった！」

フリードの背にまたがるキャロ。キャロの左手に導かれる形で、エリオもフリードに乗る。

『あれが…フリードの真の姿…』

『なんやシャーリー、見たこと無かったんか？』

『初めてに決まってるじゃないですか！』

『今朝の訓練でキャロは成功したんやで？』

『本当ですか！？まだ訓練の映像見てなかった…』

『まあ、これあの2人は大丈夫やる』

「そうですね。あつちの2人には救援はいらないです。さあ、レリックを回収するですよ！！」

「はい！」

リニアレールの上でエリオとキャロを見ていたスバルとティアナ。彼女達にリンが語りかけ、3人は再びリニアレールの中へと入って行った。

その後、『一閃必中』の掛け声と共にエリオがガジェット？型を破壊した。

ちなみにこの掛け声、広暁が教えた言葉だったりする。

『ガジェット反応、ロスト！』

『後はスターズ03と04がレリックを確保すれば終わりですね』

『そうですね…ちょっと待って下さい！これは！？』

一方その頃、重要貨物室前では…

「これでロックが開くはずよ」

重要貨物室にはガジェットが来てなかったのか、まだロックがかけられたままだ。

「よし！行くよ、マッハキャリバー！」

中にまだガジェットがいると思ったのか、新しくなったマッハキャリバーと走るのが楽しいのか。

ドアが開いた瞬間、スバルは突っ込んでいった。

「こら、スバル！何やってるのよー！」

ティアナも慌てて追いかける。

その顔は呆れ顔というより、「ああ、またか」という諦めの顔に近い。

「え〜っと、レリックは…」

「確か黒い箱に入ってるはずよ」

「黒い箱黒い箱…！？ティア、後ろ！！」

「えっ！？」

ティアナが振り向くとそこにいたのは…

「ふ〜…」

ガジェット？型を破壊し、一息つくエリオ。

「エリオ君」

「キャロ？どうしたの？」

「ちょっとこっち来てくれない？」

「ん？いいよ」

そう言ってリニアレールに近づいてきたフリードに飛び乗るエリオ。そのままフリードはリニアレールから離れる。

「えーっとね…」

「どうしたの？」

「そのね…帰ったらお兄ちゃんに話したいことがあるって言ったじゃない？」

「うん…もしかして、キャラも？」

「うん。私のこれまでのこと、お兄ちゃんに話そうと思って」

「僕も。機動六課に来る前のこと、お兄さんに話そうと思ってた」

「お兄ちゃん、受け入れてくれるかな…？」

「お兄さんなら大丈夫だよ」

「うん…」

2人で出勤前に広暁に言ったことを話し合っている。
…というか、どことなく甘い空気が漂っているのは気のせいだろうか？

(エリオ、キャロ)

((はい!?))

フェイトからの念話に驚く2人。

(今はまだ戦闘中だよ? スバルとティアナがレリック確保に向かっているけど、油断しないで)

(は、はい!)

(ごめんなさい!!)

フェイトに念話で叱られ、謝るエリオとキャロ。自分達の今の状況を確認し、話を終える。

「い、ごめんね? エリオ君」

「ううん、僕の方こそ。今はここでスバルさんとティアナさんを待つ」

「そうだね」

2人はリニアレールに並走しながら飛ぶフリードに乗ってスバルとティアナを待つことに決めた。
するとその矢先…

グワシヤアアアン!!

「スバルさん!?!」

リニアレールの天井を突き破ってスバルが飛び出してきた。

「まったくもう……」

「にゃはは……」

「あ……」

3人は戦闘のため離れてしまったリニアレールに向かっていく。ちなみに、なのはとフェイトもホルスの肩に乗っていたりする。広暁が右肩、なのはとフェイトが左肩だ。

「エリオ、キャロ……」

「元気出して、フェイトちゃん!」

「……ドンマイ」

戦闘中にどことなく甘い空気になっていた2人を、フェイトが念話で戒めたのだ。

姿は見えないのに通信を駆使してそれに気付くフェイトもさすがだが、

『まったく…最初の出勤にしちゃあエリオとキャラロはリラックスしすぎちゃうか？』

スバルとティアナは4回目やけど』

それらの情報を分かりやすくまとめてフェイトに送り返すはやてもどうかと思う。

この指揮官、絶対に楽しんでる。

「2人とも、広暁君の影響なのかな？」

「俺の？」

「そう。キャラロは竜魂召喚に成功したし、エリオは動きに無駄が無くなってる」

「ん…そうなんですかねえ？キャラロはともかく、エリオには何も教えてませんよ？」

「そうだよ。ね、フェイトちゃん？」

「え！？あ、うん…」

「フェイトちゃん？」

まだ『広暁・兄事件（命名：フェイト）』を引きづっているようだ。その時…

『なのはちゃん、フェイトちゃん、広暁！これ！…』

「「「!?!?!」」」

3人の目の前に空間ディスプレイが開く。
そこに映し出されていたのは…

「「これは何!?!」」 「ガジェット!?!」

3人は同時に叫んだが、広暁だけ叫んだ言葉が違う。
だが、誰もそれには気付かない。

「はやてちゃん!これは何!?!」

『重要貨物室にいた奴らや。数は3機。こんな形のガジェットは見
たことがないで!?!』

「一体これは…!?!」

3人が見たのはスバル・ティアナが相対する3機の機体。
それぞれ赤・黄・緑の機体をしており、二足歩行の人間型。
体にはギアを思わせる物が埋め込まれている。

一方広暁は、

(何故に3色ガジェット!?!?)

混乱していた。

そう、この3機を広暁だけは知っている。

それぞれ『レッド・ガジェット』『イエロー・ガジェット』『グリー
ン・ガジェット』。

纏めて略して『3色ガジェット』であり、『除去ガジェ』として猛威を振るったモンスターだ。今は『マシンナーズ』にも組み込まれているカードである。

（何でこいつらが…？もしかしたらホルスが実体化したのと同関係あるのか？）

広暁が思索していると…

「「広暁君！」」

「え！？は、はい！！！」

「私達は先に行くから！」

「広暁君も早く付いて来てね！？」

「お、おお！了解！！！」

ピシユウウン！

2人はホルスの肩から降りると、あっという間に行ってしまった。全速力で飛んで行ったのか、2人の姿はもう広暁には見えない。

「伝えそびれたな…どうしよう……」

何をですか？マスター

サジタリウスの機械的な声だけが広暁の耳に届いた。

第16話「射手vsガジェット」（後書き）

ようやく遊戯王成分が出てきましたね。

3色ジェットと言えば、最近私の地元ではまた除去ガジェが流行ってきました。

『抹殺の使徒』を入れているからリバースモンスターが根こそぎ除外されるといふ…。

リバースモンスターがキーカードの私のデッキには天敵です、天敵。

…：愚痴を言って申し訳ありませんでした！！

ここで一つお知らせです。

学業が忙しくなるので、更新が遅れるかもしれません。

もともと早くない更新ですが、遅れたら申し訳ありません。

それでは。

感想・訂正・意見等、お待ちしております。

第17話「動き出す欲望・葛藤する現実」（前書き）

第17話です。

.....。

間空けて申し訳ありませんでした!!

言い訳させてもらいますと、実は卒業論文の作成と発表があったのです。

期日が迫ると、今まで気付かなかったこと・やりたいことがどんどん見つかり、それらをやっていたら大変なことになりました。

私、「最後に寝たのいつだ？」って初めて聞きましたよ…。

まあ、もう発表は終わっただんですけどね。

データをまとめて研究室に提出するので、更新の速度を上げるのは難しいと思いますが、これからもよろしく願います。

では。第17話、始まるよ〜

第17話「動き出す欲望・葛藤する現実」

「スバルさん！」

ガシッ！

リニアレールから飛び出してきたスバルを、フリードに乗っていたエリオがキャッチする。

「大丈夫ですか？」

「いったー…うん、大丈夫。それにしても…」

「はい。あれは一体何ですか？」

ぞろぞろとリニアレールの中から出て来たのは3色ガジェット。初めて見るそれらに、誰もが驚きを隠せない。

「こいつら一体何なのよ！？こんなタイプのガジェット、見たことが無いわ！」

勿論、彼女達はこれらの『ガジェット』のことは知らない。

同じ『ガジェット』でも、その言葉の指す意味は全く異なるのだ。

（皆、聞こえる！？）

（（（フェイト隊長！？）））

4人に向けて念話を送ったのはフェイトだった。

移動中に念話を送っているらしく、声もどこか焦り気味だ。

(今私となのは隊長と広暁君でがそっちに向かっている。私達が着くまで耐えて!)

(それは嬉しいんですけど…こいつらは一体何なんですか!?)

(ごめんね、ティアナ。それは私達にも分からないの。とにかく耐えて!皆、出来る?)

(フェイト隊長…)

(…はい!出来ます!)

(えっ!?ティア!?)

(今の私たちがじゃあ、こいつらを倒すことは難しい。だったら私達で、時間を稼ぐ!!)
ただそれだけのことでしょ!?)

(ティア…うん、そうだよね!)

(エリオと、キャロ。2人も大丈夫?)

(勿論です!)

(皆さんが来るまで頑張ります!)

(うん、良い返事。皆、頼んだよ?)

(((了解!)))

念話を終えた4人は、それぞれ戦闘態勢をとる。

「こいつらにAMFは無いわ。だけど恐ろしく頑丈で、私の弾丸もスバルのリボルバーナックルも効かないの」

「AMFが無いのに、ですか!？」

「あたしが殴った時は凹ませるくらいは出来たから、何回も攻撃すれば破壊出来ると思う。」

「ただ、3機同時だとそれも難しいの」

「という事は…」

「そういうことよ、エリオ。あたしとキャロ、フリードは援護。スバルとエリオは前衛!」

「はい!」

エリオとキャロは勢いよく返事する。未知の敵といえど、恐怖心は無いようだ。

「まずは…キャロ!」

「はい! ティアさん!」

ブーストアップ

ケリュケイオンが光を発し、その光が大きくなる。

「行きます!!」

キヤロが手を振ると、光はティアナのデバイスクロスミラーージュへと吸収される。

受諾

「いくわよ、クロスミラーージュ!」

カードリッジロード。クロスファイアシユート

ティアナの周りに複数の橙色の弾丸が形成される。
キヤロの援護を受けて強化されたそれは、ガジェット?型であれば
複数同時に破壊出来るだけの破壊力と貫通力を持つ。

「シユート!!」

ティアナの掛け声と共に放たれる弾丸は計15発、1機につき5発
の計算だろう。だが。

【…攻撃確認。複数の弾丸による包囲攻撃】

【…回避を推奨】

【…回避します】

機械的な声と共にガジェットが動き。

ザンザンザン！

避けた。

「「えっ！？」「」

エリオとキヤロは驚いた。目の前のガジェット（？）が話すことにはではない。

それらがクロスファイアシュートを跳んで避けたことにだ。

「まだまだ！」

避けられた弾丸が再びガジェットのもとに向かっていく。クロスファイアシュートは誘導制御が可能な射撃魔法。完全に弾丸を消し去らない限りいつまでも付きまとう。

【…迎撃準備】

【…迎撃準備、承認】

【…迎撃します】

再び機械的な会話をする3機。
すると…

ザッザッ！

シュンシュン！

キュイイイイイン！

ピシユン！

「な！？私の弾丸を！？」

「そんな！？」

ティアナの放った弾丸全てが消された。

それも、手足による迎撃や体に埋め込まれたギアを回転させて、だ。

「だけど…スバル、エリオ！今よ！」

「了解！！」

そう、3機は上手く追い詰められていたのだ。先程スバルが突き破って出て来た穴の近くに。

（策は常に二重三重に…。広暁さんならもつといけただろうけど、今の私にはこれぐらいしか…！！）

これでも十分大したものだが。

穴の下、リニアレールの中には、既にキャロの『ツインブースト』を受けた2人がいた。

「いくよ、エリオ！」

「はい、スバルさん！」

「デヤアアアアア！！」

2人は気合いの掛け声と共に跳び上がり。

「マツハキヤリバー!!!」 「ストラダー!!!」

「ウオオオオオ!!!」

ズサッ!!!ギユオオオオン!!!

【: 損傷率80%。修復: 不可能】

バチッ!バチバチッ!!

ドガアアン!!!

爆発。

「よし!まずは1機!!!」

「後は赤いのと黄色いの!!!」

ストラダーの刺突とりボルバーナックルのパンチを食らったグリーン・ガジェットは粉碎された。
残すは2機、レッド・ガジェットとイエロー・ガジェット。
すると…

「皆、大丈夫!?!」

「1機倒したみたいだね!」

「……なのは隊長！フェイト隊長！」「」

4人が上空を見上げると、そこにいたのはなのはとフェイト。

「あれ！？お兄さんは！？」

「広暁君ならもうすぐ来るよ！私達は先行したの！」

「そういうこと！皆、下がって！あとは私達がやる！」

「……はい！」「」

2人の言ったことに素直に従い、4人はリニアールの後方へと下がる。

そして、2人はそのままガジェットと相対する形をとった。

「これ…ガジェットなの？」

なのはがフェイトに問う。

「見たことないタイプ…ってわけでもなさそうだね。？・？・？型と配色が全く違う」

「じゃあ…どういふこと？」

「分からない。でもレリックの傍にいたってことは…」

「…」

「そっ…」

「「こいつらは敵!」「」

2人は答をだしたのか、武器を構え攻撃態勢をとる。

なのはは砲撃体勢、フェイトは斬撃体勢といったところか。

【…データ照合完了】

【…高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの2名と確認。照合率…100%】

【…攻撃します】

先程まで沈黙を貫いていた2機もデータ処理を終えたのか2人の攻撃に備えるような構えを取る。

「喋った!?!」

なのはは飛び立ちながら、フェイトはバルディッシュを横薙ぎに構えながら突っ込んだ。

勿論、喋ったことに対する驚きの意味で。

「…まあ、そこは後で調べるの!レイジングハート!」

「うん!いくよ、バルディッシュ!」

オー・ライト

イエッサー

先ず放たれたのは『ディバインシューター』。不規則な軌道を描いて飛ぶ誘導制御弾。

質と量は、先程のティアナのクロスファイアシュートを上回る。

【…回避…不可能】

【…迎撃します】

2機は先程と同じようにして迎撃し、攻撃を無力化する。だがその機体は、先程より傷ついているのが分かる。

「フェイトちゃん！今！」

「分かった！」

2機の迎撃が終わったところで、フェイトが突っ込む。バルディッシュのフォームは『ハーケンフォーム』。

先端に鎌のような魔力光を放つ形態である。

その魔力刃の密度は高く、切断する威力は折り紙付きだ。

「ハアアアア！！！」

フェイトが狙うは…右側にいるイエロー・ガジェット！！

【…回避しま】

スパアアアアーン！！

言い終わる前に、フェイトの攻撃がイエロー・ガジェットを切り裂き。

【…完全…破壊…修復…不可能…】

ドガアアン！！

爆発した。

「あと…1機！」

残るはレッド・ガジェット1機のみ。ところがその時。

【…状況を不利と判断。撤退します…】

レッド・ガジェットがそう言うと、背中にあるギアが変形。ジェットエンジンの様な形に変形していく。

ポオオオオ！！

レッド・ガジェットは飛び立った。

「あ！逃げる気なの！？」

「逃がさない！」

2人もそれを慌てて追おうするが、それを止めたのは…

シュン！

「「!?」」

一筋の黒い光だった。

）
広
暁
s
i
d
e
（

さて、どうしようか。

さっき見たあれはどう見ても3色ガジェットだ。

ガジェットの新型とは思えないし、俺の知ってるガジェットと考えるのが妥当だろう。

だとすると、一体何故？

どうして俺の知るガジェットがミッドチルダにいる？

「グオオ？」

そう考えながらホルスの方を見る。

そう、ホルスもあいつらと同じ、遊戯王のモンスターだ。

もしかすると…あいつらもカードが実体化した存在なのか？

だとすると、俺みたいにその主人がいるってことになるけど…。

ミッドチルダに遊戯王は存在しないし、こっちの地球にも存在しないことはなのは達から聞いた。

次元漂流者としてミッドチルダに飛ばされて、俺みたいな状況になったと考えるのが妥当だろう。

だとしたら、何故レリックを狙う？

レリックを狙う奴らに助けられたなら、言うことを聞かなきゃならないのは分かるけど…。

マスター？

「ん？」

後3分ほどでリアールに追い付きます

「分かった」

.....

「どうした？まだ何かあるか？」

いえ…自分の中に貯め込まれるのは危険です。私に話して気が楽になるのなら話して下さい

「…ありがとな。だけど、今はまだ確証がないんだ。その時になったら話す」

…分かりました

サジタリウスにも気をつかわせたか。
良いデバイスに恵まれたな。
っていうか、どんだけ思いつめた顔で考えてたんだ、俺？

…つといけない、今は悩んでる時じゃない。
さっき来た通信を聞いた限りじゃ、もうなのはとフェイトは合流した。
俺も早く合流しないと！

気持ちを入れ替え、ガジェットとの戦闘に備えて気を引き締める。
さっきロンググーチからきた通信では、2人はもうリニアールに着いたそうだ。

4人の連携のおかげでグリーン・ガジェットは撃墜出来たらしい。
着く頃には残った2機も2人が倒しているかもしれないが、万が一ということもある。

俺では戦力的にあの2人には遠く及ばないが、ホルスなら火力面でサポート出来るはずだ。
それに…

「一回自分の目で見ときたいしな」

モニターで見たとはいえ、自分の目で直接確認したい。
原始的とか古いとか言われるかもしれないが、そこは譲れない。
俺がガジェットについての考察を深めていると…

「グオオ!?!」

「どうした、ホルス？」

ホルスが何か動揺したような声を出した。
周りを見回しても、ガジェットはおるか鳥さえ飛んでいない空だ。
ホルスが鳴いた理由は…?

ポオオオオ!

「え!?!」

いきなりホルスの身体を黒炎が包み始めた。ちょっと待て、こんな
るってことは…

「落ちる …!!」

俺は飛べる。

だけど、いきなりこんな状況になったらこんなセリフが出てても可笑
しくはない…よな?

空中で体勢を立て直し、改めてホルスの方を見ると、案の定ホルスは小さくなっていた。

「どうして小さくなった…？いや、本来の姿を維持出来なくなったか？」

「キユイ…」

さっきのホルスの鳴き声、あれには動揺の色が表れていた。ホルス自身も好きで小さくなったわけではないのだろう。となると、何が外的要因による可能性が高い。

しかし、ホルスに聞いても分からないといった感じだ。一体何故…？

…そういえば、小さい姿でいるのは魔力の消費が抑えられるからだったな。だとすると…

「サジタリウス。ホルスが巨大化したのはどのくらいだ？」

少々お待ち下さい……。1時間といったところですね

「1時間か…」

つまり、ホルスが本来の姿でいられるのは1時間が限度ってことか？魔力の消費を抑えるのが小さい姿であるためなら、炎を作らなければもう少し長く本来の姿でいられるということだろうか？

マスター、リニアールが見えてきました

「おう…ってレッド・ガジェットが飛んでる!?!」

仕方ない、ホルスのことは今は後回しだ。今は目の前のガジェットに集中しよう。

俺が見たのは、背中のギア部分がジェットエンジンになって飛んでるレッド・ガジェット。

逃げるつもりだろうが…逃がしはしない!!

目標までの標的72m。仰角7度。誘導付与

矢を瞬時に生成、構える。

弓道なら構えが面倒臭いが、それらを適当に高速で端折^{はじ}って最短で動作を終える。

誘導は…今は仕方ない!!

矢の生成から構えるまで約3秒。早くないかだ?!?気にするな!!

狙うは…レッド・ガジェットの背中のジェットエンジン!

「一・撃・必・中!」

ピュン!

俺の放った矢は左なりのカーブを描きながら飛んでいき…

シュン!

ドガアアン!

レッド・ガジエットのジェットエンジンは爆発した。

あのスピードでカーブを描きながら飛んでいくって物理学的にはどうなんだろうな？

まあ、この世界ならこれもありだろう。

俺は納得し、矢をくらったレッド・ガジエットの様子を見る。

「あいつは…まだ生きてるか」

問題ないでしょう。なのは隊長が向かっています

「なら大丈夫だな。さて…」

何て説明しようか？

く?????

『刻印ナンバー？、護送体制に入りました』

「ふうん…」

『追撃戦力を送りますか?』

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ」

ピュン。

モニターが変わる。

「それにしても、この案件はやはりすばらしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている上に…」

男は笑う。最高のおもちゃを見つけた、無邪気な子供のような笑顔で。

「この子達。生きて動いているプロジェクトFの残子を手に入れるチャンスがあるのだからね」

男の笑い声だけがその空間に響いた。そこで思い出したように話を始める。

「そして…この駒は素晴らしいね。」

まだAMFは付与することは出来ていないが…単純な戦闘能力ならガジェットをも凌ぐ。

今回はこれらを送ったが…今度は別ので試してみようか。それと…」

ピュン。

再びモニターが変わり、そこに映し出されたのは広暁とホルス。

「彼自身は人間の中でなら上の方に位置する人間だ……。頭脳も身体能力も優れている方だろう……。だが」

ピュン。

モニターに映るのがホルスだけになる。

「この竜は素晴らしい！私のガジェットをいとも簡単に破壊して溶かすあの炎！

肉弾戦における格闘能力も申し分ない！是非とも我が手中に納めた
いものだ……！！」

そう叫ぶ彼の傍らには、オレンジ色と銀色の人型のデザインをした
ロボットが佇んでいた。

〈起動六課会議室〉

「それで広暁。話したいこというんは？」

現場検証やレリックの護送を終えたフォワード陣は、六課の会議室に集まっていた。

フォワード陣だけでなく、別の仕事から帰って来たシグナムとヴェータ。

はやてとリン、シャマルとザフィーラもいる。

「まあ…大体分かるけどな、言いたいことは」

「やっぱり…そういうことですか？」

「…ああ。俺はこいつらを知ってる」

はやてとリンの言ったことに対して広暁が返した言葉。

それに対し、会議室にいたメンバーの顔は驚愕の色に染まる。

「広暁、どういうことだ！？何故お前がこいつらを知っている!？」

「落ち着いて、シグナム。まだ広暁君は何も話してないから」

「テストロツサ…済まない。広暁、続けてくれ」

感情が高ぶるシグナムをフェイトが抑える。広暁もそれを待って話を続けた。

「こいつらはそれぞれ『レッド・ガジェット』『イエロー・ガジェット』『グリーン・ガジェット』。

ホルスと同じ…遊戯王カードのモンスターだ」

「ホルスと同じ…!?!」

「遊戯王カードのモンスター!?!」

「どづいうことですか、お兄さん!?!」

「お兄ちゃん!?!」

それぞれの反応を示すスバル・ティアナ・エリオ・キャロ。

「…前にも話した通り、俺のいた地球には遊戯王5D' SOCG…長いから遊戯王カードって呼ぶけど。遊戯王カードっていうカードゲームがある。こいつはモンスターカード・魔法カードマジック・罌トラップカードトラップって呼ばれる3種類のカードを駆使して相手のライフポイントを削るカードゲームなんだ。ライフポイントが尽きると負けになる」

「モンスターカードにも色々種類がある。ホルスは『炎属性』で『ドラゴン族』。属性は全部で7種類あって、闇・光・地・水・炎・風・神。種族は22種類あって、ドラゴン・魔法使い・アンデット・戦士・獣戦士・獣・鳥獣・悪魔・天使・昆虫・恐竜・爬虫類・魚・海竜・機械・雷・水・炎・岩石・植物・サイキック・幻神獣」

一息入れて、広暁の説明は続く。

「さっきのガジェットは全て地属性機械族。遊戯王カードをやってる人間の間では3色ガジェットって呼ばれた奴らだよ」

「…ホルスと同じような存在、か…」

「…その可能性が高い」

広暁の説明が終わると、一気に話が始まる。

何故カードゲームの存在が現実にいる？と言うシグナム。

ホルスと同じようにカードが実体化したの？と聞くのは、小さく独り言を話すフェイト。

「…俺にも分からない。ホルス、お前は？」

「キユイ……」

ホルスも分からないようで、困ったような悲しそうな声で鳴く。自分が役に立てないのが悔しいのか、翼もしな垂れている。

「お前が悪いわけじゃないんだ、気に病むな」

「キユイ……」

広暁がホルスの頭を撫でる。

少しは落ち着いたのか、ホルスも先程よりは元気な声で鳴いた。そのまま考え込むように、広暁は頭を下げる。

「それにしても分からないね。」

このモンスターが出ただけならまだ納得出来る部分はあるよ。ただど……」

「そや。こいつらはレリックを狙うガジェットと一緒にいたんや」

「…となると」

「ああ。レリックを狙ってる奴が操ってた可能性が高いつてことや。他のガジェットと一緒にな」

はやてが出した結論に全員が何ともいえない顔で頷く。

考えたくないが、これが一番可能性の高い結論だということに気付いていたようだ。

「ガジェット以外にもレリックを狙う輩を増やしてきたということか…小癩な真似を…!!」

シグナムが怒りを抑えながらも言った怒気が溢れる言葉に、誰も言葉を返すことが出来なかった。

すると、広暁が先程まで下げていた頭を上げて言葉を紡ぐ。

「本当にごめん」

「…何で広暁が謝るんや？」

「…もしかしたら、俺がミッドチルダに来たことに原因があるのかもしれない。だから…」

パアアン！

甲高い音が鳴り響く。言葉を続けようとする広暁の頬をはやてが平手打ちしたのだ。

「はやて…!？」

「はやて、何すんだよ!？」

「ふざけたこと言ってるんじゃない!!」

叩かれた広暁と隣にいたヴィータが反応するが、一蹴される。

「自分がミッドに来たことと関係がある？だから謝ったんか？ふざけるんじゃない！まだそんなこと分かったわけじゃないやろ!？」

「でも…」

「でももしかもあるか！

もし仮にそうだとしてもや、何であんたが謝る必要があるんや!？あんたは被害者なんやで!？」

前触れもなく別世界に飛ばされ、その世界で暮らすことを強いられた!!

そんなあんたが謝る必要がどこにある!？」

「……………」

はやてが矢継ぎ早に言ったことに、広暁も押し黙ってしまった。

はやての言ったことももつともだ。

広暁はいきなり別世界に飛ばされた。

そして、魔導師としての適性が高いために民間協力者として働くことになったのだ。

広暁本人が精神的にも肉体的にも完成しつつあるといっても、客観的に見ればあまりにも酷な話だ。

そんな状況にも関わらずに謝った広暁に、はやてはキレた。

「まったく…そんなに背負い込まへんでもええねん、機動六課では。幾らでも頼れる人はいるんやで？
もっとオープンにいつたらどうや？」

「……………」

「そうですね、お兄さん！」

「私達じゃ頼りないかもしれないけど…お兄ちゃんが思いつめる必要はないです！」

「エリオ、キャロ…」

「ちびっ子2人もこう言ってるんやで？広暁」

「……………」

広暁はなおも黙っている。しかしその顔は、先程謝ろうとした時と比べて幾分よくなっている。

「…はあ。なんか、はやて相手だとペースが狂うな」

「褒めても何も出へんで？」

「褒めてません…」

ハハッ！と笑うはやてに対し、広暁が突っ込む。突っ込む広暁の顔に、もう先程まであった自戒の念は無い。

「まっ、広暁も復活したようで何よりや」

「どっかの部隊長さんのおかげだな。ありがとさん」

「どういたしまして。それと…フェイトちゃん？」

「えっ？何、はやて？」

「何か伝えなあかんことがあるんとちゃうの？」

「…広暁君の話が終わってから改めて伝えようと思ってたんだけど…丁度いいかな」

フェイトが皆の前に出る。

出現した空間ディスプレイに映されたのは、ガジェット？型とレッド・ガジェットの破片。

「今日倒したガジェットのデータを本局でシャーリーと見てたんだけど…」。

ガジェットに使われてたパーツとレッド・ガジェット、だっけ？

そのエンジン部分に使われてたパーツで一致する部品があったの」

「ってことはや」

「そう。さっき言った推論が正しいことが証明された。

この機械達を操る者とガジェットの作成者は同じということになる」

「ほんなら確定やな。これからの捜査は、こいつらも視野に入れて考えていかなあかん。

皆、分かったか？」

「了解！！」「」「」「」「」「」「」

はやての言葉に全員が声を揃えて答えた。
そんな様子を見て、はやても満足げに微笑む。

「さてと、ほんなら今日は解散や。皆、ゆっくり休んで明日に備え
や〜」

「かしこまりました、主はやて」

「分かったわ、はやてちゃん」

「分かりました、主」

「アイス2個食っていいか？はやて」

守護騎士のうち、3人は至極真つ当な返事を返す。

…というか、ヴィータだけ言っていることがおかしい。

「アイスは1日1個までや」

「え〜！今日は新しい事実も分かったしその記念でことごと〜！」
ヴィータがはやての腕を揺さぶるが。

「駄目や」

どこかの樵^{しほ}が相手の質問を拒むかのように答えた。

その瞳は数多の戦場を生き抜いてきた強さを秘めていたような気が

すると、後にヴィータは語る。

「そつえば、広暁」

「何です…何？シグナム」

相変わらず敬語になりそうなところを無理矢理戻す広暁。

「お前のデバイス…サジタリウスだったか？弓の形状をしていたな」

「うん」

「弓を使ったことがあるのか？」

「弓…というより弓道をな」

「弓道だと？」

「知ってるの？」

「地球にいたことがあったからな」

「だったら話が早い。昔さ、弓道をやってた時期があったんだよ」

「あれ？でも、お兄さんてソフトテニスをずっとやってたんじゃ？」

「中学生…12歳からはな。小学校に入学した6歳から卒業する12歳まで、弓道をやってたんだ」

「6歳からだど？随分と若い頃からというか…」

「俺がいた市はスポーツが盛んでさ、小学校の間は弓道教室に参加してたんだ。」

元々母が学生時代に弓道をやってたから道具は一通り揃ってたし。もつとも、本格的に始めたのは小学5年。10歳からだけどな。

あんまり若い頃から弓道をやり過ぎると骨格形成に問題があるって言われてたから」

「なるほどな。その割には随分と離れたところにいるガジェットを射ていたが？」

「6年もやってたからな、基礎が出来てた。」

それに、体もあの頃とは違う。

用途は違えどそれなりに鍛えてあるし。

何よりサジタリウスの補助が大きい。

こいつの補助がなきゃ当てることなんて出来なかった」

光栄です、マスター

「そこまでやってたなら、大会でいいところまでいったんじゃないか？」

「いや。大会は出てないんだ。母が拒んでな」

「どうしてだ？」

「まだ早いと思ってたんだと。」

中学校に入学して、弓道部に入学してから大会に出させる予定だったらしいんだけど……」

「中学からはソフトテニスを始めたよ…」

「そういうこと。怒られはせんかったけど、結構シヨックだったみたいだな」

「まあ、せっかく育てたのに別のスポーツに走られてはな」

「そこは父が擁護してくれたけどな。『広暁の道を決めるのは広暁だ』って」

「良い父親じゃないか、大切にしろよ？」

「…また会えるかどうか分からんけどな」

「っ！？済まない…」

せっかくいい具合にはやてがまとめたのに、シグナムがまた戻してしまった。

そんなシグナムの脇腹をはやてがどつく。

(どーしてくれるんやシグナム！？せっかく広暁が持ち直したのに…！)

(申し訳ありません、主はやて。私としたことが…)

(どうすんだよ、シグナム！？)

ついでにヴィータも加わって井戸端会議が始まるが。

「おい。その3に〜ん？」

「「「は、はい!?!?」「」」

広暁に呼ばれて思わず叫ぶ3人。

「俺は気にしてないから。そこまで真面目に考えんでもいいよ」

「いや。でもな、広暁？」

「それにさ」

「広暁？」

はやての言葉を聞かず、広暁は言葉を繋げる。

「自分が恵まれた存在だって気付いたし。高望みすると罰が当たる」

「「「「「「「「「「「!?!?」「」」」」」」」」」」」

なのは以外の全員が驚いたようにして広暁を見る。

この時、彼女達は気付かなかった。

動揺しているのは自分だけではないことを。

「ほんじゃま、俺は外で練習してきます。感触を忘れないうちにな」

了解です、マスター

「キユイ！」

広暁はホルスを連れて出て行ってしまった。

（恵まれた存在…？）

（もしかして…いえ、そんなことが…）

（何や、広暁。気付いとったんか？）

（どういう意味なのでしょう？）

（何のことだろう？）

（恵まれた存在…か…）

（お兄さん…）

（お兄ちゃん…やっぱり気付いてたんだ…）

（まったく…恐ろしい奴だぜ…）

（先程の会話での周りの反応に気付いたのか？）

（鋭い人ね…）

（広暁…）

会議室を出た後、広暁は隊舎の外へ出るべく歩を進める。
その表情はどこか哀愁が漂い、今は20歳という若さを感じさせない。

「恵まれてたんだな…俺」

自分の推論が当たっていたことに対し、広暁は安堵とも落胆ともつかない溜息を吐く。

「強いな…機動六課の人は」

マスター

「どうした？」

先程言った言葉…どういう意味ですか？

「さっき言ったこと？」

『自分が恵まれた存在だって気付いたし。高望みすると罰が当たる』です。

どういう意味ですか？

「…録音してたのね。別に、そのまんまの意味だよ」

そのまんまの意味…ですか？

「そう。あとは自分で考えてくれ」

はあ…

「キュツキュツ」

何故あなたが嬉しそうなのですか、ホルス？

「キュイ！」

………

サジタリウスがミッドチルダのネット回線に潜って広暁が言った言葉を調べたのは、また別の話。

言葉通りの意味しか出てこない…！！

第17話「動き出す欲望・葛藤する現実」（後書き）

第17話はこんな感じですよ。

なんかはやてがかっこよすぎる様な気がしますけど…まあ仕方ないよね（おいこら）！！

私の考えるシナリオ上、主人公に弓を使わせたのですが、その経緯に困りました。

何せ、部活はソフトテニスをやっていたことにしてしまったのですから！！

実は、市の弓道教室ということにしたのも理由があったりします。私こと夢月も、小学生の間は市の陸上教室に参加してました。

その時一緒に走ってた友達が、今は大学駅伝で走ってるという事実を知ってびっくりしたつい2年前（作者の豆知識…？）。

まあ、このような経緯で、弓道教室に参加していても不思議はないということになりました。

それでは。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第18話「逃げる射手」(前書き)

第18話です。

今回は、広暁の今後の方針を決める重要？な話です。

読む際は…どつしりと構えて広くい心で読んでください。

では。第18話、始まるよ

!!

第18話「逃げる射手」

ザッザッザッ！

弓を片手にもち、空間シミュレーターが作り出した森の中を走るのは1人の男。

次元漂流者にして機動六課民間協力者、墨谷広暁。

彼は今…

ピュンピュンピュンピュンピュン！

「だーかーらー！これはきついつてー！！」

「お前なら多少の無茶は問題ない！どんどん行くぞー！！」

「いや　　！！」

生命の危機に瀕していた。

それは遡ること20分前。

広暁にとって初出勤の任務の後、フォワード5人の訓練は個人技能に入った。

といっても、広暁は未だに攻撃魔法を使えない。

矢の生成はただ魔力を固めただけであって、とてもじゃないが魔法とは呼べないらしい。

実際は魔法なのだが、初歩の初歩もいとこなのだ。

故に、訓練の間の空いてる時間を使ってサジタリウスに魔法を覚え

させ、それを発動することで体に覚えさせるといふハードなメニューを組まれてしまった。

そもそも、本当は魔法の訓練すらまだする気は無かったのだ。

〈広暁の戦闘記録を見た隊長陣の会話〉

「これだけの矢が放てるなら、しばらくは弓だけに集中した方がいいんじゃない？」

「デバイスの補助があるとはいえ、速度と貫通力だけならなのは砲撃と同じぐらいじゃないか？」

数とか操作性とか鍛えたら凄いことになるぞ」

「私もその方がいいと思うな。」

8年もブランクがあるようには見えないけど、弓の訓練だけに集中した方がいいと思う」

4人の内3人はこのように考え、広暁の訓練は弓を用いた狙撃練習にしようと考えていた。

だが。

「いや、それでは勿体ない」

「「「シグナム?」」」

反論を唱えたのがこの女性。

烈火の将ことライトニング分隊副隊長、シグナムである。

「勿体ないってどういうことだよ、シグナム?」

シグナムに聞き返したのは、鉄槌の騎士ことスターズ分隊副隊長、ヴィータ。

「主に聞いた話だが…広暁は矢の生成を独学でやっていたそうだな?」

「そうだよ。訓練の初日から今まで毎日。私が担当した後に始めたのが最初みたい」

「つまりだ。たったの1週間で奴は実戦レベルの矢を生成するまで漕ぎつけたということだろう?」

「そういうことだな。一気に大量に作るのはまだ出来ねえみたいだけど」

「では聞くが…ここに居る者で広暁と同じことが出来る奴はいるか?」

「「「!?!?」」」

シグナムの言葉に他の3人は同時に息をのむ。

今まで気がつかなかったことにたった今気がついたといった感じで。

「そうだ。魔力弾ならここにいる誰でも作れるだろう。だが、それを矢の形に収束するとなると話は別だ」

「…確かに。術式を構築して発動する砲撃魔法なら砲撃の形はいくらでもあるけど、デバイスを使用しないで直接作るとなると…」

「難しいね。収束することは出来てもそれが矢の形を保つのは」

なのはの言ったことに対して、フェイトが繋げるように言ったこと。それは、魔力の収束の難しさについてだった。

魔力弾を作ることは出来ても、形を変えて収束することは難しいこととされているのだ。

なお、砲撃としてそのまま撃ちだすのは魔力弾を作ることと大差ないらしい。

あくまで収束した後の『維持』が難しいのだ。

「それに、広暁は飛行魔法も1週間足らずで会得した。本人の努力も勿論あるだろう。

だが単純な魔力の運用なら、先天的な資質があると見て間違いない」

「それも…そうだな。

ガジェットを直接破壊した時とか遠距離から狙撃する時とか、体の強化してみたみたいだし」

「加えてだ。魔力を収束するだけで術式を構築しないから攻撃に移るまでのスピードは速いし、矢であるが故に砲撃のように撃ち続ける必要もない。矢に収束出来る魔力を増やしたらそれこそ凄いことになる。収束の形を変えれば攻撃のバリエーションも増えるだろうしな」

正に『シンプル・イズ・ザ・ベスト』。

「じゃあシグナムが言った勿体ないって…」

フェイトの言わんとしていることは、正に先程シグナムが言ったことに対する回答。

「弓だけに専念させるのではなく、魔力による身体能力の強化…自己ブーストだな、それも教える。

捕獲魔法や防御魔法、移動魔法はデバイスに覚えさせておけばいいだろう」

「確かにそれなら効率は良いと思うけど…」

「広暁がその訓練についてくれるかな？」

なのはとフェイトが懸念するのは訓練内容。

広暁が基礎的な魔法を使えるのならともかく、使えないのにこの量をこなすとなると…

「ばてるな、確実に」

ヴィータの言った通りになる。

体力に自信があっても、慣れない魔法を毎日練習してたら確実にばてる。

「そこは私が尻を叩くさ。

剣を交えることが出来ないとはいえ、私が直接鍛えられる奴がきたのだからな…!!」

シグナムは真っ赤に燃えていた。
それはもう、シグナムの身体から炎が溢れ出ているのが分かるくらいに。

…というか、実際燃えている。

「ちょ、シグナム！？足元燃えてる！！」

気付かぬ内に魔力変換資質『炎熱』を発生させていたのは…「ご愛敬。

このような会話が六課のオフィスで行われていた。
そして今は、空間シミュレーター（version森林）。

「…というわけだ、分かったか？」

「…ある程度は」

「キユイ？」

説明を聞いた広暁は少々げんなりしていた。

どう考えても確実にばてる訓練メニューを組まされているのだ。

鍛えているとはいえ、それがこれからしばらく続くとなると気が滅入るというもの。

「何だ？やる気が感じられないが」

「確実にばてるメニューを組んだ張本人が言うセリフですかね？」

「心配知るな、簡単な治癒魔法も教えてやる」

「気絶することが前提なんですね、分かります」

もつとくにでもなれといった感じで広暁がボケたが、

「その通りだ」

素で返されてしまった。凹む。

「…はい、分かりました。で、今から何を？」

「そう焦るな。まずはお前の戦闘データのおさらいだ」

そう言うと、シグナムの目の前に空間ディスプレイが現れる。

そこに映し出されていたのは、広暁の身体能力や思考能力についてのデータ。

「身体能力は全て平均以上で、瞬発力・反射神経・敏捷性は同年代の中ではトップクラス。」

洞察力に優れ、相手を観察し、そこから導き出される答えを基に攻める技巧派。

かといって直接的な行動が苦手というわけでもない。

技巧派寄りのオールラウンダーといったところか」

シグナムが言ったことに対し、広暁も所々頷きながら聞いていた。

身体能力は今まで鍛えた結果だし、自分の思考スタイルも何となく分かる。

ピッ。

空間ディスプレイを消し、シグナムは再び説明を始める。

「お前は敏捷性に優れた射手だ。

ティアナのような静物射撃型ではなく、敵を観察しながら動き回り、高速の矢で敵を倒す。

それが今考えられるお前に最適な戦闘スタイルだろう。

あえて名前をつけるなら『動物狙撃型』だな」

『敏捷性に優れた射手』 『動物狙撃型』

戦闘能力はフェイト、戦闘スタイルはなのはといったところだろうか？

良いところ取りと言えば聞こえはいいが、器用貧乏になる可能性も否定出来ない。

というか、その言い方だとアフリカ辺りで横行してる密漁者のような気がする。

しかし、突っ込んだら面倒臭いことになりそうな気がするのでここはスルー。

「なんかガードウイングみたいだな」

「実際のところ、お前はフロントアタッカー以外ならどこでもいけるからな」

「あれ？でもその戦闘スタイルだとホルスが…」

「キユイ」

「ホルスとの連携はまだ考えてないんだ。お前に付いているとはいえ、ホルスは1匹だけでも十分な戦力になるからな。」

それに、常に一緒にいなければならないというわけでもないだろう？」

「まあ、確かに。まだ色々と分からんことはあるけどな」

シグナムが考える戦闘スタイルだと1人で動かなければならない。小さい姿でも大きい姿でも、ホルスが付いて来るのは辛いだろう。

「それに動きまわるといつても、テストロツサのように高速で動きまわれというわけではない。」

戦場を移動しながら時には別々に、時には巨大化したホルスと同時に攻撃する。

狙撃型でありながらスピードに優れているという点を含めても、手札の多さがお前の利点だ」

手札が多いとその分どの行動を起こすか迷いがちだ。状況判断力を鍛える必要があるなど広暁は考える。

「そつえば、弓で直接殴っていたな？」

「あれは試してみたかっただけ。」

俺が敵に近づくことはまずないだろうし、近付かれたそうだったらすぐに離れる。

まあ、ケースバイケースだけど」

「…そうか。それは残念だ」

シグナムが本当に残念そうに溜息を吐いた。
広暁も大体考えていることは分かるが、そこは突っ込まない。

「それでだ、広暁。矢を作ってから放つまでどれぐらいかかる？」

「対象の距離にもよるけど…大体3秒かな。

魔力の矢だと真っ直ぐ飛ぶから、重力とか空気抵抗を考えなくていいし。

対象を狙うだけでいいから楽だ。

誘導付きの矢とか、直接放たない矢ならもっと早いけど」

「それを1秒で出来るようにしろ」

「はい！？いやいや、それはきついつて！！」

「お前なら出来るだろう？」

シグナムの命令に、広暁も驚きながら言葉を返す。期待されてもきついものはきつい。

「矢の生成に1秒、構えて放すまで2秒かかるんだぞ？
放す時までの動作を短縮しても、2秒が限界だって」

「生成しながら構えて放せばいいだろう」

「そんなこと…うーん……」

「生成してから構えるから時間がかかるのだろう？
だったら生成しながら構えればいいだけの話だ」

シグナムが言ったことに広暁は感銘を受けた。

今までは完全に矢を作り終えるまで構えてなかったのだ。

実戦はまだ1回しか経験していないので、仕方ないと言えば仕方ないことなのだが。

ここはやはり踏んできた場数の違いというものだろう。

「なるほど…^{はず}箭の部分から作って先に弦に^{つる}かけておけば、構えながら矢を作れるな。

それなら時間も短縮出来る」

「だろう?」

「じゃあ、今からその練習を?」

「いや、違う。今からやるのはこれだ」

シグナムの後ろから現れたのは…

「何だこれ?」

それは宙に浮かぶ5つの白い球体。

「これはスフィアと言ってな。早い話攻撃用のレーザーを発射する機械だ」

「…まさか」

広暁の頭を不安がよぎる。

レーザーを発射するスフィアが5機、何か意味深に笑うシグナム。それらが意味するものは…

「大方お前の予想通りだ。このスフィアがお前に向かって攻撃をする。」

終了条件はスフィアの全機撃墜だ」

「いきなり実戦ですか」

「体で覚えた方が早いだろ？」

「まあ…確かに？」

納得出来ないようだが、そこはシグナムだからと広暁は割り切った。と、ここで一つ疑問が生まれる。

「ホルスはどうする？」

「ホルスはやることはない。そうだな、フリードのところにも行ってもらおうか」

「だそうだ、ホルス。俺の訓練が終わるまでフリード達と一緒にいてくれ」

「キュツキュツ」

ホルスは飛んで行った。広暁が羨ましそうにホルスを見ていたような気がするが気のせいだろう。

「何か反論があると思っていたがな」

「…色々と諦めがついたんで」

訓練を始めるといふのに落ち込んでいく広暁。そんな精神状態で大丈夫か？

「察しが良すぎるのも困りものだな。当然、この訓練には制限がある」

「どんな？」

「飛行・矢の生成・矢を放つことにおけるデバイスの補助・誘導付与の禁止。

魔力による体の強化は認めてやる。

訓練範囲はこの空間シミュレーター全てだ。

だからといって、他の新人のところには行かないようにしてほしいが」

「飛行の禁止はともかく…誘導をつけられないってのはきついな。

っていうか、訓練範囲が空間シミュレーター全てってことは…」

誘導をつけるにはちょっと念じるだけでいいのだが、その分魔力も消費する。

それでも、当たらないよりはマシなのだ。

それがないというのはきつい。

「そつだ。常に移動しながら…つまり逃げながらだな、撃墜してもらう」

「制限多くない？つてゆーか、動きながら矢を放つことなんて一度もないんだけど？」

「体の強化を認めてやるだけありがたく思え。では…」

「いきなり!? サジタリウス!!」

OK

広暁の掛け声と共にサジタリウスは、ペンダントから弓へと形態を変化させる。

「発射!!」

ピュンピュンピュンピュン!!

5機のスフィアから一斉にレーザーが発射された。

第18話「逃げる射手」（後書き）

何か新しい戦闘スタイルを広暁にと考えていたらこのようになりました。

比較対象がないのであれですが、面白い戦い方が出来ると思います。実はこれも次話以降の伏線だったり…おっと、これ以上はいえませぬね。

魔力の運用・資質についても同様のことが言えるので、ここでは割愛。

戦闘スタイルを決めるのが早すぎると思われる方がいるかもしれませんが。

しかし、短期間で技術を向上させる場合、その終着点や役割を決めて練習した方が効率がいいのです。

これはほとんどのスポーツや格闘技において言える事…のはず。

ではでは。感想・訂正・意見等、お待ちしております。

第19話「三位一体」 (前書き)

第19話です。

今回も、私の趣味が多分に含まれている部分があります。

「ぶつちやけ、この設定いらなくね?」と思われる方もいるかもしれませんが…それでもやらせてください!お願いします!!

それでは。第19話、始まります。

第19話「三位一体」

「さっきの爆発音は何でしょうね？」

「シグナムが広暁に何かやってんだろ。スフィアを何機か持ってたし」

ここでは同じフロントアタッカー同士、ヴィータがスバルに教えていた。

現在行っているのはバリアを張る際の下半身の使い方とマツハキヤリバーの踏ん張り方だ。

「下半身は膝を落とす感じで軽く構える。

かといって落とし過ぎずに、左右への移動がすぐに出来る体勢…でしたっけ？」

「マツハキヤリバーなら前後の移動は楽だからな。

拳の先にバリアを張る場合、右拳を出してるなら右足に6、左足に4力に乗せる感じだ」

ヴィータの説明にスバルは納得し、ヴィータもグラーファイゼンを構える。

そしてヴィータが動こうとした正にその瞬間…

ザザッ！

「！？」

「えっ！？ヴィータとスバル!？」

茂みから出て来たのは広暁だった。後ろには5機のスフィア、ついでにその上空を飛ぶシグナム。

「シグナム!？何でこっちに来るんだよ!？」

「それは広暁に言ってくれ!私はただ追っているだけだ!！」

怒気を含んだヴィータの声に、シグナムも似たような声で返す。

だが、その顔は努めて冷静だ。
「というか楽しそうだ。」

「すみません!ちょっとお邪魔します!！」

そう言つて広暁は魔力で足腰を強化し、2人の頭の上を飛び越える。
その途中で矢を生成し…

シュタツ!

着地と同時に構え…放つ!

シュン!

至近距離…といつても10mはあるが…から放たれた矢をスフィアは避けることが出来ず…

ドガアァン!

爆発。

「まず1機！失礼しました！！」

広暁は脱兎の如く逃げ去る。

それを追うは残り4機となったスフィアとシグナム。

「空中で射るのはさすがに無理か……。どんな姿勢からでも射ることが出来るように鍛えないとな」

シグナムは1人呟いた。獲物を狙う豹のような目をしながら。

「……………」

取り残された2人。開いた口が塞がっていない。

「…何の訓練でしょう?」

「…実戦訓練だろ」

「実戦ですか？訓練ですか？」

「うつせえ」

「そうだよ、エリオ。もっと広く動いて」

「はい、フェイトさん！」

ここではエリオとキャロが、スフィアから放たれるレーザーを避ける訓練をしている。

無論、広暁を狙っているのと違ってレーザーのダメージは少ない。

「エリオ…何ていうか…見えてる？」

「多分お兄ちゃんのおかげだと思います」

「広暁君の？」

フェイトが疑問に思ったこと。

それはエリオが目に見えない後ろからのレーザーも避けていることだった。

「一回見た全体の動きを確認・記憶した後、自分を上から見ると視点を変える。」

マルチタスクを使ってその視点を意識しながら、攻撃を避けたりスフィアの死角に入るんです。

レーザーを発射する前は音がするので、予測がしやすいですから。お兄ちゃんホークアイは鷹の目っていう技術だって言っていました」

「広暁君がそんなことを…」

フエイトも広暁には驚かされてばかりだ。
動きに無駄が無くなって来たと思ったら、このような技術まで知っ
ているとは。

「マルチタスクを知ってこれを思いついたそうです。」

お兄ちゃんがいた世界でも鷹の目はあつたんですけど、マルチタス
クがあれば楽に出来るかもって。

お兄ちゃんの知り合いでも鷹の目を出来る人はいたらしいんですけど、
ど、その人はバスケットボールの選手だったそうです。」

バスケの選手がこんな技術を持っていたとは、とフエイトはちょっ
と驚愕。

「キユイ！」

ホルスも自慢げに鳴く。

こっちに来てからはフリードと何やら話していたが、今は自由気ま
まに飛んでいる。

……………フエイトもやってみる。

自身の周りの状況を確認・記憶。

その後上から見下ろすような視点にチェンジ。

…なるほど、これは……………。

「確かにこれなら周囲の状況を把握しやすいね」

「私はまだ出来ないんですけど…………絶対出来るようになります！」

年少、s2人に広暁は良い影響を与えている。

(なんか…私、取り残されてる?)

フェイトには悪い影響を与えているようだが。

「じゃあ、エリオ。そろそろキャラと…!?!?」

フェイトが『キャラと交代しようか』と言おうとした瞬間、その目に映ったのは。

「広暁君!?!?」

「キュイ!?!?」

森の中から跳んでくる広暁だった。というよりこの方向は…

「今度はフェイトとエリオとキャラ!?!?」

おもいつきり3人がいる方向に向かって飛んできている。背後には4機のスフィアとこれまたシグナム。

「失礼します!」

訓練用のポールを足場にし、再び跳躍。

3人を飛び越え、その途中で矢を生成、^{つが}番える。

体をスフィアの方に向け、最高到達点に達して体が安定したところで…放つ!

ピュン！

しかし、その矢は狙ったスフィアに当たることなく、先程広暁が出てきた森林の方へと向かう。つまり外したのだ。

そして、

ドガアアン！

矢は着弾点を中心に半径数mの樹木を爆散、吹き飛ばした。

シュタツ！

「チツ！やっぱり止まって放たないと狙いがつけにくいな…！」

動きながら射るのは初めてなので、当てられなくても仕方ないと言えは仕方ない。

広暁は再び逃げようとするが…

「おっ？ラッキー！」

爆散した樹木を避けるために、スフィアが統制の無い行動をとり始めた。

さっきより距離はあるがこれなら…

「避けられる心配はない！」

狙うは2機まとまって動いているスフィア。

矢を生成、構え…放つ！

当たるのを確認せず、即座に次の矢を生成、構え…放つ！

この間、僅か4秒。

早速シグナムに言われたことを実践しているようで、時間が短い。しかも、弓道のように上まで上げてから下ろす形ではなく、直接引っ張って弦じゆんに番えている。

こちらの方が早いことに気付いたのだろう。

ドガンドガアアン！！

「よっしゃ！あと2機！」

広暁は右手で小さくガッツポーズをし、また森林のほうへと逃げていった。

その後を残った2機のスフィアが追う。

「すまん、テストロッサ」

「え！？ううん、そんなことは…」

「そうか。では私は失礼する」

シグナムも2機のスフィアを追うように飛んでいった。

先程の2人と同じように、取り残された3人。

「何の訓練だろう…？」

「実戦…ですかね？」

「何て言うか…シグナム副隊長らしいですね」

「キユクルー」

「キユイ」

キャラの呟きに答えたのは2匹の竜だけだった。

「そう考えると、広暁さんは特殊ですね」

「そうだね。弓の形をしたデバイスなんて、シグナム以外で見たことないし」

訓練の合間の休憩。ティアナとなのはは、広暁の戦闘スタイルについて話していた。

ちなみに、『足は止めて視野は広く、あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる判断速度と命中精度』がなのはの考える射撃型魔導師の真髄である。

「広暁さんならどんな弾丸も同じ矢で撃ち落としそうですけど」

「それも…そうなのかな？逆に全部避けそうな気がするけど」

苦笑しながら答えるなのは。なのはの考えとは違つが、これはこれでありなのだろうか？

「広暁君は移動する射撃型、ううん、狙撃型魔導師ってことになるかな？」

「あ、でも。あたし、前に広暁さんに聞いたんですけど…」

「何を？」

「先日の出勤で、広暁さんが放った矢が一回も外れなかったことです。」

そのことを聞いたら、

『遠距離ならともかく、近・中距離で一撃必中の狙撃なんて無理。』

本命とフェイクを使い分けることに、間接攻撃の意味があると思う。

まあ、素人の俺の意見だけどね…』

って言うてました。

だから狙撃は、遠距離だけに意味がある言葉だって」

「フェイク、か…」

この間の訓練で広暁にいつぱい食わされたことを、なのはは思い出した。

なのはは想像した。

弓を構える広暁、狙われる自分。

放たれる矢とそこに隠される数多の権謀術数。

「…広暁君とは1対1で戦いたくないね」

「どういづことですか？なのはさんが負けることなんて…」

「何事にも絶対はないよ。」

確かに私の経験も手札も豊富だし、負ける可能性も圧倒的に低い。対して広暁君はまだ全然魔法のことを知らない初心者。まあ、戦ってる時と戦い終わった後の気分の問題かな？」

一旦区切った後、再びなのは話始める。どことなくその表情は暗い。

「私の考えを全て読んだ上で対処しそうなんだよね、広暁君。

広暁君がまだあまり魔法のことを知らなくても、行動を読まれた上で対処されたらやり辛いし…。

下手したら広範囲殲滅型の砲撃を使わないといけないかも。

直射型だと避けられそうだし。

何より、戦った後の疲労度が半端じゃないと思う。

心理戦はあまり得意じゃないしね」

ユーノ君やクロノ君と戦うみたいで嫌なんだよね」と苦笑しながら言うのは。

補助（結界・捕縛・治癒）に長けたユーノと超オールラウンダーのクロノ。

彼らと同列に並べられるのは広暁にとって光栄…なことなのだろうか？

というか、彼女の知り合いの魔導師は彼らを除いて皆戦闘特化型の魔導師（全員女性）なのだが。

「広暁さんなら避けそうですね。『いちいち正面からぶつかってやる義理はない』とか言って」

ティアナもひどいことを言っているような気がするが、間違っただけじゃない。

実際、広暁はそうゆうタイプなのだ。

だが、今の段階でそこまで出来るわけがない。

10年以上経験を積んでいるのはと1ヶ月も経験していない広暁では雲泥の差がある。

スバルに一撃もらったのがそこまでショックだったのか、広暁を買い被り過ぎだ。

もしここに広暁がいたら「催眠でもかけられてる？」と言って本気でなのはを心配するだろう。

「そこにホルスも加わると…」

「うわ…」

更に会話はヒートアップする。

ホルスの炎と広暁の弓矢。

素手で殴りかかってくるホルスと広暁の考える策。

訓練でホルスが巨大化することはないものの、初出勤時の映像を見てティアナは驚いたのだ。

もしそれらと相對することになると…怖い。

フリードの真の姿を上回る竜が直接殴りかかって来るのはご免こうむりたい。

なのはならともかく、ティアナには怖すぎる。

「でも…ああゆうタイプも必要なのかもね」

「どつという意味ですか？」

「広暁君、余分に矢を放たないでしょ？」

最近は何打てば当たるみたいなの砲撃型魔導師も多いからね。

フエイクで矢を放つことはあっても、それは意味のある攻撃。力の無駄遣いをしないってことなの。

広暁君みたいに無駄に魔力を使わない戦闘スタイルもいいのかなって。

狙って放った矢が外れることがあってもね」

「なるほど…」

今なのはが言ったことは、なのはの考える射撃型魔導師の真髄に通じるところがある。

『あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる』

これは、どんな弾丸もそれを撃ち落す最適の弾丸で撃ち落せ、という意味だ。

最適の弾丸を撃たなければ、その分余計に魔力を使うことになる。

「広暁さんはそこまで考えてあのデバイスを…？」

「それは…どうだろうね？」

弓を選んだのも昔やってたのが理由みたいだし。

もしそうでなければ私やティアナと同じタイプになってたかもね」

「それはそれで怖いですね」

アハハと2人は笑った。広暁が自分と同じタイプだったら、それはそれで怖いといった感じで。

「さてと、休憩は終了。訓練を続けるよ」

「はい、なのはさん…えっ!?!」

立ち上がるうとしてティアナの目に飛び込んできたのは。

(今度はなのはとティアナかよ!?)

木々の間から出てきたのは、これまた広暁。ついでに2機のスフィアとシグナム。

(結局全員のところ回っちゃったじゃん…)

もう声を出す気力もないようで、頭の中で愚痴る。

他の新人のところには行かないようしるとは言われたが、来てしまったものは仕方ない。

「ちょっとゴメンナサイ!」

今度は飛び越えることはせず、素直に横へ逃げる。そのまま森の中に逃げるが、

ピュンピュン!

スフィアがレーザーを発射してくる。視界の隅でそれを捉え、レーザーを避けるが…

ドオオン!

レーザーをくらった樹木が爆散した。下手したら広暁が放った矢の威力を超えている。

「ちょ！？威力上がってない！？」

「お前も段々と慣れてきたようだからな！私からのサービスだ、出力は最大だぞ！！」

「いらねーってそんなサービス！！」

愚痴りながら矢を放つ。だがその方向は…

「上だと？どこに向かって放っている？」

広暁が放った矢は真上に向かって放たれた。

シグナムも2機のスフィアもなのはもティアナも、ついその方向を追ってしまふ。

(広暁さんが無駄に射るはずがない。だったら広暁さんは…？)

ティアナが放たれた矢の出元を見る。だが、そこに広暁はいなかった。

(えっ！？一体どこに！？)

放った後すぐ逃げたのだろうか？それとも、別の場所から狙っている？答えは…

グワシャアアン！！

「「「な！？」」」

そのどちらでもなかった。

3人の上を影が通ったと思うと、次に目に飛び込んできたのは弓を上段に振りかぶる広暁。

そのまま弓を振り下ろし、スフィアを殴りつける。

返す弓でもう1機も殴ろうとしたが、避けられてしまった。

そう、広暁は矢を放った後すぐ足に自己ブーストをかけ、なのはとティアナの後ろの茂みに移動。

タイミングを見計らって跳躍し、スフィアを直接破壊したのだ。

「あと…1機…ハア…ハア…」

マスター、無茶しないで下さい

「無茶は…してねえよ…ハア…これが…一番…効率的…ハア…なんだよ…」

さすがに広暁も疲れてきたようで、肩で息をしている。だが、まだ訓練は終わっていない。

「すう…はあ。失礼しました！」

軽く深呼吸をし、広暁は再び逃げる。

それを追おうとするシグナムの顔は、今日の訓練で一番とっていいほど笑顔だ。

そこに含まれる意味は別として。

「まさか直接殴りにくるとは…。フフ…スフィアも残り1機…どうくるかな…」

「シグナム…怖い…」

「シグナム副隊長…凄く…嬉しそうです…」

笑うシグナムに恐怖すら覚えてしまったのはとティアナであった。

シュン！

ドガアアン！

「きゃっ！？」

広暁が先程放った矢が落ちてきて、それに驚いたのはとティアナが広暁を怒ったのはまた別の話。

（あと1機…どうする？）

木々の間を逃げ回りながら広暁は考えている。

今は自己ブーストにより足、つまり脚力を強化して木々の間を跳んで逃げている状態だ。

故に、先程まで走って逃げていた時ほど息は荒くない。

残り1機なら逃げ回る必要もないので、広い場所に出て相對しても良いだろう。だがそれだと、

(『移動しながら』ってことにはならないよな)

シグナムの言った制限を破ることになる。訓練で制限を破るわけにはいかない。

(さて、どうしようか?)

広暁が最後の詰めをどうしようか考えていると、

ピュンピュンピュン!!

「よっ…と!」

タンタンタン!

一旦視界にとらえた後、左右への軽いステップでレーザーを避ける。それこそ最小限のステップで。

(こうゆう時にソフトテニスやってたのが役に立つな)

広暁は中学1年生から大学3年生までの約8年半、ソフトテニスを続けていた。

ポジションは前衛。

そして前衛の仕事は決め球を決めて、点を取ること。そんなポジションである前衛に必要な力は…

『瞬発力』

こちらのペアの後衛が右側、相手側のペアがこちら側から見て左側で打ち合っているでしょう。

つまり正クロスだ。

前衛である広暁は、相手後衛とこちら側のコートのエンドラインの中央を結んだ線上に立つ。

この位置が左右どちらにも素早く動けるポジションだからだ。

そして正クロスで後衛同士が打ち合ってる際、それを狙って決めに行くのが前衛の1つの仕事だ。

この際、あまり早く動くと行動がばれて先程まで自分がいた場所、つまり『サイド』を抜かれる。

ならば、相手後衛が、打つコースを変えられないぎりぎりのタイミングで動けばいい。

それに必要なのが瞬発力であり、左右への足運び『ステップ』の速さなのだ。

今、広暁はその力を最大限に活かしている。

レーザーを避ける際、撃つタイミングと角度さえ分かれば無駄に動く必要はない。

作戦を考えながら2、3の少ないステップで避け切る。

（といても、逃げてばっかりだとこっちが先にばてるな。もっと乱射しても問題はないんだけど、それは止めとくか。

当たらない矢を放つても仕方ないしな)

広暁は更に思考を深める。どうすれば最後のスフィアを撃墜出来るか。

(待てよ? さっき放った矢の威力…森…木…乱射…)

何か思いついたのか、広暁は後ろを振り向いて確認する。
スフィアは後方約30m、シグナムもいるがそこは無視していいだろう。

(よし…やりますか!)

ザン!

両足に更に魔力を込め、更に跳躍力を上げる。
そのまま木々の間を跳び越え……スフィアとの距離を開ける!!

「距離を空けてきたか…遠距離からの狙撃でもする気か?」

シグナムは広暁の行動の真意を考える。

広暁なら狙撃でもおかしくないが、デバイスの補助は禁止している。
遠距離からの狙撃は難しいだろう。

シグナムが考えていると…

シュン! シュン! シュン!

矢が飛んできて地面に着弾、木々が爆散する。

爆散した木々の破片と土煙が織りなす煙幕はシグナムには嫌な存在だろう。

思わずシグナムは止まるが、スフィアは気にすることなく煙幕の中を突き進む。

（一体何を…？こんなことをしても視界が悪くなるだけ…。煙…突き進む…まさか！？）

シグナムが行動を起こそうとした正にその瞬間。

ドガアアン！

スフィアは撃墜された。

「あんな方法でスフィアを破壊するとはな」

「勘に頼った部分もあったけどな」

広暁が考えた作戦は単純。

放った矢を地面に着弾・爆発させることで視界を奪う。
人間なら思わず止まるだろうが、スフィアなら突き進む。
そして、煙から出たところを狙って矢を放つ。
当然この時は、木の陰に隠れていた。

「1回矢を外して地面に着弾して爆発を起こした時、結構煙が凄かったからな。

人間の視界じゃまず見えないぐらい。
だったら煙幕になると思ってさ。

あとは煙から出て来たスフィアを狙えばいいだけ。
黒い煙の中から白いスフィアが出てくるんだ、無茶苦茶狙いやすかった」

「相変わらず作戦を考えていたのか」

「作戦と呼べるほど大層なもんじゃないと思うよ？
全体の状況を見て、ベストな方法を考えたただけだし」

「…やはりな」

「何か言った？」

「いや、何でもない」

シグナムがぼそりと呟くように言った言葉は広暁の耳には届かなかった。

勿論、シグナムもそれを広暁に伝える気もない。

「よし。今からは自己ブーストについて教える」

「自己ブースト？」

「魔力や魔法で肉体を強化することをそう呼ぶんだ。お前もさっきやってただろ？」

「なるほど、自己ブーストって言うのか」

「ああ。では始めるぞ」

ピィ ツー!!

「はい！じゃあ午前の訓練、終了！」

「ハアハア……」

「……」

「はい、お疲れ。個別スキルに入ると少しきついでしょ？」

「ちょっと…ハア…というか…」

「その…ハア…かなり…」

「……………」

ティアナとエリオが言った言葉はここにいる5人の本心を代弁している。

実際は、かなりどころかとんでもなくきついのだが。

「広暁君？さつきから顔上げてないけど大丈夫？」

「……………」

なのはに言われて広暁は左手で軽くサムズアップ。

顔を上げるが、その顔は他の4人の比ではないほど疲れているのが見てとれる。

ぶっっちゃけ生気が無い。

「おい、シグナム。広暁にどんな訓練したんだ？」

「スファイア撃墜の後は自己ブーストの訓練だ。」

足に魔力を込めての機動力強化や、拳に込めての肉弾戦を模した訓練をな。

その後は、魔力の収束の形を変えて攻撃バリエーションを増やす訓練をした」

「それだけでここまで疲れるわけないだろ？」

「いや、広暁の資質をもっと伸ばそうと思って…訓練中はずっと自

己ブーストさせたままだった」

「……は!?!?」

シグナム以外の隊長陣が呆気にとられたような声をだした。その理由は…

「それはやり過ぎだよ!並の魔導師でも自己ブーストの維持は難しいのに!?!」

「魔法を発動してないならいいけど、もし発動してたら魔力が暴走したかもしれないんだよ!?!」

「自己ブーストはその時々で瞬間的にやるものだぞ!?!
それをずっと維持してたらばてるなんてレベルじゃねえぞ!?!」

「うっ…すまん。思ったより広暁が上手くこなすものだからつい…」

3人が怒涛の如く言葉を繋げる。

自己ブーストというのは魔力や魔法による肉体の強化の事を表す。広暁が行ったのは危険性の少ない前者であるが、それでも危険が無いわけではない。

魔力の運用・維持が上手くいかずに魔力が暴発することもあるのだ。それをずっとやっていたとなると…

バタツ…。

「……!?!?」

「キユイ!?!?」

「キユクル!？」

こうなる。広暁は倒れた。

第19話「三位一体」 （後書き）

第19話、いかがだったでしょうか？

ソフトテニスについては…ご勘弁下さい、本気で書きたかつたんです！！

ボレーに関しては他にも、

- ・相手の行動を読む
- ・こちらの動きを悟られないようにする
- ・的確なコースで返す

といった技術が挙げられますが、私個人としては瞬発力が一番大事であると考え、このような話になりました。

全体的に広暁を持ち上げ過ぎな気がしますが…何故か書いてるうちにこうなってしまう。

なのはキャラは全体的に力任せの気があるので、広暁のように考える人間には苦手意識があるのかもしれない。

あまり会ったことのないタイプの人に苦手意識を感じるのと同じですね。

もつとも、広暁は考える人間ですが、そこまですば抜けているわけではありません。

体より頭が先行するぐらいの感覚で（今は）構わないです。

それでもなのはが苦手意識を感じるのはやはり…自分の周りに少ないタイプの人間だからでしょうか？

ではでは。感想・意見・訂正 e t c、お願いします。

第20話「believe in myself」(前書き)

第20話です。

タイトルを初めて英語にしてみました。結構見栄えがいいですね、これ。

ですので、時たま英語のタイトルを使っていこうと思います。

ではでは。第20話、始まるよ。

第20話「believe in myself」

〔医務室〕

パチツ。

「……………!？」

ガバツ!

機動六課医務室。

この部屋の主たるシャマルは、今はいないようだ。
そんなこの部屋で、広暁は目を覚ました。

「あゝ、一回集まった後倒れたのか…。気絶するなんて初めてだな」

「キュイ!？」

「ホルス!？」

「キュイー!」

ホルスが広暁に飛びついた。

ずっと心配していたのか、その顔はいつもより元気がなさそうだがそれ以上に、広暁が起きて嬉しいといった感情がその表情に出ているのが分かる。

「ありがとな、ホルス」

「キユイ〜」

ホルスの首元を撫でてやると、気持ちよさそうに鳴いた。

「えーと…」

ホルスを撫でた後、気絶前の記憶を辿り現在の状況を確認。その顔色は倒れる前より大分良くなっているようだ。

「もう2時…2時間以上寝てたのか」

「その通りだ」

「!?!」

広暁は振り向いた。誰もいないと思っていた部屋にいたのは…

「気分はどうだ…広暁」

「大分楽になりましたよ…シグナム」

広暁を気絶に追い込んだ張本人、シグナムだった。

そんなシグナムを、ホルスは敵意丸出しで睨みつける。

主人をこんな状態になるまでしごくとは何様のつもりだ、と言わんばかりの表情だ。

「シヤマルは？」

「あいつなら今はオフィスにいる。提出する書類に不備があったらしくてな」

「そう…」

医務室を静寂が包む。お互いに話そうとしない空気…というわけではない。

「ばてるどころじゃなかったな？」

「……」

シグナムが話そうとしないのだ。

その表情はいつもの厳しくもクールなものではなく、純粹に狼狽しているようにも見える。

「その…すまなかった」

「何が？」

「午前の訓練のことだ。私としたことがやりすぎてしまった…本当にすまない」

シグナムが頭を下げて謝った。

それに伴い、彼女のピンク髪のパニーテールも揺れる。

真面目な気質故だろうか、自身の過ちはちゃんと認めた上で広暁に謝罪する当たり、昨今の社会人にも見習ってほしいものだ。

「……」

「その…まだ怒っているか？」

「当然…と言いたいところだけど」

体ごとシグナムの方を向け、広暁は座り直す。

その顔は怒っているような表情ではなく、何かを考えている表情。どちらかというと、笑顔に近いような気がする。

「いつまでも引きずっても仕方ないしな。それに、訓練で倒れたなら俺に非があるってことだろ？」

「キュイキュイ!!」

「違う!」と言いたげなホルスの言葉を繋ぐように、シグナムが言葉紡ぐ。

「そんなことはない。今回のことは明らかに私の所為だ。まだ魔法を学んで間もない広暁にあそこまでやらせたのが間違이었다」

「そうか…ならお互い様ってことで」

「は?」

広暁はそう言って右手を出した。その顔は優しく笑っており、シグナムも呆気にとられている。

「無理にでも訓練を終えさせなかった俺も悪いつてこと。」

だからこの話はこれで終わり。

まあ、またあんな訓練をしてここの世話になることがあるならその限りじゃないけど」

「…善処しよう」

「いや、そこは断言してほしいんだけど!？」

2人は軽口をたたきながらも握手をした。断言はしてないが、今後は大丈夫だろう。

「キュー…」

ホルスは納得出来ていないようだ。

しかし、更に鳴いて反論しないところを見ると、とりあえずは納得したのでろう。

広暁が許したのに自分が反論するのは間違っていると考えているのだろうか？

「あとは俺が退院(？)したら缶コーヒーでもおごってもらえれば」

「…ちゃっかりしている奴だ」

悪いことをされたり良いことをしてあげたら見返りを求めるのは大學生の必須技能です。

昼飯を奢ってもらう・なりすましを頼むなどと一緒に、状況に応じて使い分けましょう。

「それと連絡事項だ」

「連絡事項？」

手を放した後、シグナムが話し始めた。今から言うことは隊長陣で話し合って決めたらしい。

「今日のお前の戦闘訓練は無しだ、ゆっくり療養しろということだろう。それと…」

そう言っただけでシグナムが制服のポケットから出したのはサジタリウス。そういえば無かったなと思いつつ、目の前のデバイスを見る。

「サジタリウス？無いと思ったらシグナムが？」

お元気そうぞ何よりです、マスター

「ありがとうございます」

「幾つか魔法を覚えさせておいた。詳しいことはこいつに聞いてくれ」

「分かった」

広暁はサジタリウスを受けとって首からかける。

一瞬シグナムの顔が怪訝になったが、今は置いておくことにしよう。

「私は失礼する。シャマルも時機に戻るはずだから、奴の言うことを聞いてゆっくり休んでくれ」

「了かい」

医務室から出て行くシグナムを、広暁は軽く手を振りながら見送る。

残された1人と1匹と1機は再び話を始めた。

「サジタリウス。俺が倒れた後どうなった？」

倒れたマスターをなのは隊長が浮遊魔法で医務室まで運んだ後、シヤマル先生が治療しました。

倒れた理由は魔力の過剰使用。

2時間も全身に自己ブーストをかけていたなら当然の結果だそうです

「キユイ！」

2時間も自己ブーストを体にかけるなんて聞いたことがない、とシヤマルは言っていたらしい。

改めて自分がやっていたことに恐れを抱く広暁。それをやらせたシグナムって一体…。

「その前の訓練で作った矢と自己ブースト、自己ブーストかけながら作った魔力弾の変形体。

そいつらの分の魔力を自己ブーストに回してたらどれくらいもつ？」

魔力量的には3時間が限度かと。何故そのようなことを？

「一つの目安…かな。

そこまでお前が心配することじゃないさ。

自己ブーストってのは本来、瞬間的にかけるのがメインなんだから？

魔法による強化じゃなくて魔力による強化は特にさ。

さっきの訓練では長時間軽くかけてただけだしな」

確かにそうですが。もしまたこのようなことがあるなら、私はレ

ヴァンティンにかけあいます

「キユイ！」

「…それは止めてくれ。色々とめんどいことが起こりそうな気がする」

デバイスがデバイスにかけあうなんてありかよ、と心の中で突っ込みながらサジタリウスを宥める。

気になるところではあるが、転ばぬ先の杖だ。

というか、ホルスも誰かにかけあうつもりだろうか？

マスター、そろそろお休みになられた方が…

「そうだな。じゃあ最後、お前に覚えさせた魔法ってというのは？」

ラウンドシールド・リングバインド・フィジカルヒール・ソニックムーブ・ブリッツアクションの5つです。

ラウンドシールドは魔法陣を使用した円形の盾を作り出す防御魔法。リングバインドは対象を魔力リングで縛る捕獲魔法。

フィジカルヒールは治癒魔法。

ソニックムーブは移動を加速する魔法。

ブリッツアクションは腕の振りやフットワークなど、体全体の振りを加速する魔法です。どの魔法もミッドチルダ式ですね。

発動形式としては魔法名を唱えるタイプなので、マスターが術式を構築する必要はありません

今言った中にバリア魔法が無いのは、既に広暁が使えるからであるう。

バリアならサジタリウスにもう覚えさせているのだ。

「まだ構築出来ないけどな。そうか、俺はミッドチルダ式でいくのか…」

自分の使う魔法の方針が決まったことに喜ぶ。だが、ここで一つ疑問が浮かんだ。

「攻撃用の魔法はないのか？」

先程サジタリウスが言った魔法の中に攻撃用の魔法がないのだ。一体何故だろうか？

マスターは魔力の扱いそのものに対して資質があるとシグナム副隊長は言っていました。ですので、攻撃は主に弓矢と魔力弾を変形させたもので練習するそうです。

加えてですが、まずは私に記録された5つの魔法を使うことで適性を見るとも言っていました

「ふーん…」

『魔力の扱いそのものに資質がある』

もしかして魔力弾の形を変えることが、だろうか？

確かに色々と変形も出来たし収束量も上げることが出来たが、それが難しいことだったのだろうか？

そもそも変形させたといっても、知っている技のパクリなのだが。

「……………」

少し悩む広暁。だが、その後言ったことは…

「ちよつと練s y」

駄目です 「キユイ！」

「へい…」

まだ療養中の身にはあるまじき言葉だった。
すかさずサジタリウスとホルスの神速の断りが入る。
渋々といった感じでベッドに戻り、布団を被ろうとすると…

ウィーン。

「シヤマル？」

扉を開けて入って来たのは…

「お兄さん!!」 「お兄ちゃん!!」

エリオとキヤロだった。

フリードは留守番らしい。

どうやらお見舞いに来てくれたようだ。

「おっ、2人共。さっきはごめん…!?!?」

ズボツ!!

広暁が言葉を紡ぐことはなかった。

起きている広暁を見て嬉しかったのだろう、エリオとキャロが広暁に飛びかかったのだ。

それも結構なスピードで。

(痛い…)

言葉に出さなかったのは2人への配慮だろうが、それがかえって痛々しい。

そんな広暁に気付くことも無く、2人はマシンガンの如く言葉を紡ぐ。

「本当に大丈夫ですか!? 頭が痛いとか気持ち悪いとか!」

「なんだっ たら今から私がヒーリングしますから!」

「もしかしてお腹空いてますか!? もしそうなら今すぐお昼を持って来ます!」

「飲み物は何かいいですか!? 紅茶ですか、コーヒーですか!」

「…とりあえず落ち着こうか、2人共」

そう言って広暁はホルスに目配せをする。

ホルスは意味を汲み取ったのか、エリオとキャロの背後に回って頭

を小突いた…嘴で。

「「痛つ!?!」」

ちよつと可哀想だが、これ以上続けられたら広暁がもたないのだ。
精神はもとより肉体が。

「…落ち着いた?」

「「ごめんなさい…」」

「ならいい。とりあえず降りてくれ」

「「はい…」」

2人はいそいそとベッドから降りるが。

「それで、お兄さん!体の方は大丈夫なんですか!?!」

「シヤマル先生に何もされてないですよね!?!」

2人の攻撃、もとい口撃「くちげき」は止まらなかった。というか、キャロが言
った言葉の意味は…?

「大丈夫、今は何ともない。

後は寝るだけだし、明日になれば治つてると思うから。

お昼はあとでシヤマルに聞いてからな。

飲み物を飲むにしてもお茶か水だ」

たった70文字で今までに2人が言ったことを見事にまとめた。

さすが20歳の元大学生、情報の整理はお手の物だ。

「よかったあ〜…」

安堵の溜息を吐くエリオとキャロ。

その顔は純粹に広暁の無事を喜んでいよう、見ている広暁の顔も思わず綻ぶほどだ。

それから3人は今までのことを話した。

2人はデスクワークが一段落ついたので、休憩時間を利用して広暁のお見舞いに来たこと。

倒れた広暁をなのはが浮遊魔法で運んだことは勿論、シグナムがヴィータにズタボロとまではいかないまでも折檻されたこと。

スバルとティアナも後々お見舞いに来ること。

そして…

「あの…お兄さん。聞いてほしいことがあるんですけど………」

「急に改まってどうしたんだ？」

さっきまでとは打って変わってエリオが深刻な面持ちで話し始めた。隣にいるキャロも似たような表情ということも考えると、今から話すことは重い話になるようだ。

広暁もそれを理解したのか、姿勢を正して2人を椅子の方へと誘導する。

椅子に座った2人は緊張をほぐすためだろうか、深呼吸を繰り返している。

「今から話すことって…前に聞いてほしいことがあるって言ったことだよな？」

「はい…。じゃあ、まずは僕から話します」

そう言ってエリオが話したこと。その内容は…

(重い、重過ぎる……………)

エリオが話したのは自分の出生のこと。

エリオはモンディアル家の一人息子として生まれ、裕福な暮らしを送っていた。

しかしエリオが三歳の時、事件は起こった。

家に突然現れた科学者によって、半ば無理矢理研究施設に連れて行かれたのだ。

理由は、エリオが死んだモンディアル家の息子のクローンだったから。

その際、エリオが無理矢理連れて行かれるにも関わらず両親が途中で抵抗を止めたので、大好きな人に裏切られるという喪失感を味わったこと。

それに追い打ちをかけるように研究施設では非人道的な扱いを受けたので、益々心が荒れて自暴自棄になっていたこと。

そんなエリオを救ったのが、現保護責任者であるフェイトだった。フェイトが訪れた際も、エリオは電撃を放出させて彼女を攻撃した。そんなエリオに対してフェイトは全く抵抗せず、真摯な説得をしたのだ。

エリオの気持ちを全て分かってあげることが出来ない、けど少しでも分かりたい。

だから悲しみで人を傷つけないで、楽しいことや嬉しいことを探して一緒に生きていきたいと。

そんなフェイトの説得にエリオの心は段々と氷解して行き、今に至るのだ。

「お兄さんに話そうかどうか迷いました。

ただお兄さんはもう気付いていたみたいだし、何よりこれから一緒に戦う仲間であるお兄さんにこのことを話さないのは失礼じゃないかって思ってた…」

「そうか……」

確かに広暁は、過去のエリオに何かあると考えていた。

10歳で時空管理局の局員をやっていることは勿論、両親ではなく保護責任者がいること。

そして、自分がいた世界について話した時、両親のことを話したら顔が曇ったこと。

両親がいないことは想像がついていたが、まさかエリオがクローンということとは考えもしなかった。

「私もそんな感じなんです」

続いてキャラコが話した内容。

その内容はエリオとは違ったが、概ね似たようなものだった。

キャラコは第5管理世界『アルザス』で、地方の召喚部族の子供として生まれた。

しかし、強力過ぎる竜召喚の力を恐れられ、たった一人で旅に出されたのだ。

管理局に拾われてからも行き場がなく、竜達の制御が出来ずにどの部隊からも持て余されていた。

しかし、上手く制御出来なくて当たり前なのだ、正規の教育も訓練もほとんど受けていないのだから。

キャラコ自身が戦いに怯えていたこともあり、フリードはちょっとした刺激ですぐに暴走した。

心を通わせた竜であっても、術者が正しく制御出来なかったら暴れ回るだけだ。

フェイトが保護した後も、キャラコはしばらくの間覚えたまま、心を閉ざしていた。

今のように心から笑えるようになったのは、つい最近のことである

という。

「私も、お兄ちゃんには話そうかどうか迷いました。だけど、エリオ君と相談して決めたいです、話そうって。お兄ちゃんはまだ気づいてたみたいだし……」

「……………」

広暁を交えての初訓練の時、広暁は2人に言った。

「例えば自分がどんなものを抱えていようと、自分を信じて1人の人間として自覚する」

この言葉があったからこそ2人は広暁に自分の過去を話す踏ん切りがついたのだろう。

しかし、これは広暁がそそのかしたと言っても過言ではない。

まだエリオ達との訓練に混じる前、広暁が隊長陣から魔法の訓練と勉強を受けていた時の話だ。

行動の時間帯や場所が違うとはいえ、広暁が他のFWメンバーと会う確率は低くない。

食堂で夕食を取ろうと思った広暁は、4人で夕食をとっていたFWメンバーを見つけたのだ。

その時、広暁は自分がいた世界のことを話した。

当然、家族のことも。

この時、スバル以外の全員が一瞬顔を暗くしたことに気づいてしまったのだ。

広暁のように観察力・洞察力に長けている人間は、総じて「気付く

力」が高い。

何かのきっかけで起きた動作や心情の変化に気付いてしまうのだ。

このことに加えてフェイトがエリオとキャロの保護責任者であることを考えると、2人は両親がいない、もしくはこころない両親によって何かひどい目にあわされたことがある。

広暁はそう考えていた。

過去に負い目を持っていてから、エリオは動きに無駄が多く、キャロは竜魂召喚が制御出来ない。

広暁はそう考え、自分に過去のことを話すように仕向けたのだ。

2人が自分のことを『兄』として慕ってくれるのもこれに拍車をかけてしまった。

話してすつきりすれば訓練に集中することが出来、これから先も胸を張って生きることが出来る。

そう思った故の行動だったが、2人の過去は広暁にとっては正にパンドラの箱だった。

（俺もそれなりに苦労して生きて来たと思ってた。

だけど……この2人に比べたらどれだけ恵まれた人生を送ってきたんだ、俺は？）

広暁は地球の日本出身の人間だ。

普通の家庭に生まれて義務教育を受け、高校に進学。

勉強や部活、趣味に精を出しながら高校生活を満喫し、それぞれの分野で好成績を出した。そして、受験勉強を経て大学に進学。

大学に進学しても自分の将来が決まらず、決められた道筋の中でそれなりに生きて来た。

しかし、エリオとキャロは違う。

自分の生い立ちにもめげず、自分が生きる道を決めてそれに向かっ

て真っ直ぐ生きている。

今の広暁には、とてもじゃないが勝てる気がしない存在だ。

（だけど、2人は俺を兄として慕ってくれる。

だからこそ、自分の過去を話した。

今の俺じゃ到底2人の足元には及ばないだろうけど、その勇気を無駄にするにはいけない……よな）

広暁は意を決めて話す。2人の勇気を称え、自分を鼓舞するために。

「エリオ、キャロ」

「は、はい!!」

「2人は…今の自分をどう思う？」

「…僕はクローンです。

でも、だからといって自分を蔑むようなことはしません。

どんなことが起きても、僕は『エリオ・モンディアル』という1人の人間ですから!!」

「私もです。竜召喚の力を恐れられて村を追い出されはしました。

だけど、今の私はそれを制御することが出来ます。

自分の力を恐れはしません。

なぜなら…私は『キャロ・ル・ルシエ』という1人の人間ですから!!」

2人は言い切った、『自分は自分』という1人の存在であると。

例えどんな過去を抱えていようと、『自分自分』。そして、2人が断言したからこそ広暁も告げる。

「良い返事だ、2人共。」

これから生きていく中で、色々な事があると思う。だけど、過去を振り返ることはあっても、過去に縛られちゃ絶対に駄目だ。

人が生きるのは今、そして未来。

人は決して過去に生きることには出来ないんだからな」

「はい!!!」

「良い返事だ」

返事に納得し、広暁は2人の頭を撫でる。

普段の広暁ならこのようなことはしないが、何故かやってしまった。これで幾つ目のリミッターが外れたのだろうか？

「…って、ごめん!」

そう言っただけで広暁は両手を2人の頭から話そうとするが…

「もつと撫でて下さい!!!」

「!?!?」

エリオとキャラコが凄い剣幕でそれを止めたので、広暁はそのまま2人の頭を撫で続けた。

この間、エリオとキャラコは終始笑顔であったことを補足しておく。

一方その頃、医務室の扉前では…

「ど、どうしよう？ティア」

「入り辛いわね…この空気は」

広暁のお見舞いに来たスバルとティアナは中に入れずにいた。自動扉とはいえ、中の声は聞こえる。

エリオとキャラロが言った「もつと撫でて下さい！！」を聞いてしまったので、2人はちよつと入り辛くなってしまったのだ。

そして、扉から漏れているピンク色の幸せオーラの様なもの。

発生源はエリオとキャラロだろうが、今この中に入ったら間違いなくやばいことになる。

故に2人が出した結論は……

「戻ろつか…」

「そうね…」

（（もう広暁さんは大丈夫そうだし））

広暁は大丈夫だからと言い訳を心の中でして、早急に立ち去ることであった。

そんなこんなで再び医務室の中。
頭を撫でられてご満悦のエリオとキャラ、ちよつと両腕が疲れた広
暁は雑談に花を咲かせていた。

「フェイトがエリオとキャラの保護責任者なんだよな？」

「はい。僕達2人はフェイトさんに引き取られたんです」

「ってことはさ。フェイトは2人のお母さんってことになるよな？」

「お、お母さんですか!？」

キャラは思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。

広暁の言ったことはあながち間違いではないのだが、9歳しか年が
離れていないフェイトのことをお母さんと呼ぶのはさすがに無理が
あるということだろうか？

「何ていうかその…エリオもキャラも、遠慮し過ぎなんだよ。
もっとフェイトに甘えてもいいと思うぞ?」

「で、でも!フェイトさんいつも忙しそうだし…」

「そうです!私達が甘えたらフェイトさんの負担になるんじゃないや

理由は違った。

2人はフェイトに対して遠慮していたのだ。子供としての図々しさ、それが早熟な性格故に2人にはないのだ。

「確かにフェイトは忙しいと思う。

だけど、2人が甘えてくれないことがフェイトにとって辛いことは俺にも分かる。

本当にフェイトのことを心配するなら、2人に出来ることはもっと甘えることだと思う」

「「……………」」

2人は考えるように顔を下げる。

広暁の言うことももっともだが、それでまたフェイトに心配をかけるしまうのではないか？

考えるのはいいことだが、この考えはけっして良い方向には行かない。

2人の思考を読みとった広暁は、更に言葉を紡ぐ。

「訓練や任務の時に甘えるとは言わないけどさ、プライベートではもっと甘えていいと思う。

無闇やたらに甘えなくてもいい、フェイトを頼るだけでもいいんだ。例え、それがどんなに小さい事でも。

それと、もし出来るなら……お姉ちゃんかお母さんって呼んであげると喜ぶと思うよ？」

自分の中で考えを纏めているのだろう。

広暁が言った言葉を聞いた2人は、ちょっと難しそうな顔をしている。

だが、それも束の間。

意を決したのか、2人は口を開いた。

「お兄さん…僕、頑張ります！」

「私も、頑張つてフェイトさんに甘えます!!」

「お、おう。頑張れよ」

何か2人はとてつもなく意気込んでいる。

頑張るのはいいことだが…甘えることを頑張るといふのは傍目から見てどう映るのだろうか？

………ちよつとずれているような気はするが、微笑ましい光景であることには間違いない。

広暁は想像した脳内ビジョンを消し、改めて2人を見る。

「そう言えば、時間は大丈夫か？」

「時間、ですか？」

「2人共、休憩時間を利用して来てくれたんだろ？」

さすがに何十分も休憩時間があるとは思えないんだけど…」

「…あっ!!」

2人は同時に声を上げる。何かを思い出したのか、突然あたふたし始めた。

「ど、どうしよう、エリオ君！まだ報告書の作成が終わってないよ!!」

「だ、だだ、大丈夫！落ち着いて、キャロ！！」

どう見ても落ち着いているようには見えない2人。そんな2人に諭すように、広暁は言葉を紡ぐ。

「お見舞いありがとな、2人共。早く戻って報告書の作成、頑張れよ」

ナデナデ。

「ウウン」

広暁は再び両腕でエリオとキャロの頭を撫でた。

その心地良さに、先程までの2人の慌てっぷりはどこへやら。兄に甘える弟と妹というよりも、主人に甘える子犬の方が表現的に正しく思える光景である。

「それじゃあ、お兄さん。失礼します」

「ゆっくり体を休めて下さいね」

「了解」

広暁に挨拶をした2人は医務室を出て、再びデスクワークのためにオフィスへと向かう……。

「俺も…強くなりたいとな…」

2人が出て行った後の医務室で、広暁は呟いた。

この言葉に込められた意味を知ってか知らずか、ホルスが翼を勢いよく羽ばたかせ始めた。

サジタリウスも何か思うところがあるのか、黒い水晶を点滅させて広暁に語りかける。

私も共に強くなります

「…ありがとう。俺、ここまで強く何かを成し遂げたいって思ったの

は初めてかもしれない。これが、俺の生きる道……………」

(……………見つけられたのですね……………)

「キユキユイ!!」

広暁の決意を聞き遂げた1匹と1機。

サジタリウスは数回水晶を点滅させてそれに応え、ホルスは鳴くことに応える。

1人と1匹と1機の新たなスタート。

それを決意させたのは、10歳の男の子と女の子の2人であったという。

第20話「believe in myself」(後書き)

第20話、いかがだったでしょうか？

自分の進む道が決まった広暁の今後をどう書いていくか…難しいですけど、それ以上に楽しさで溢れてます、私の心は。

…ちょっとキザでしたね、私反省。

では。感想・意見・訂正等、よろしく願います。

第21話「考察」(前書き)

第21話です。

今回の話では、魔法に関する私なりの解釈を含んだ部分が多々あります。

そこを踏まえた上で読んでいただけると、私としては嬉しいです。

では。第21話、始まります。

第21話「考察」

（部隊長室）

ここは部隊長室。

はやてとリインが書類関係の仕事をする人が多いこの部屋に、数人の女性が集まっていた。

集まっているのは、はやて・リイン・なのは・フェイト・シグナム・ヴィータ。

彼女達が見ているのは、午前中の広暁の訓練映像。

「こんなことが出来るんだ…」

「執務官の仕事で協力してもらった本局の魔導師の方にこうゆうことを出来る人がいたけど…。
改めて見るとやっぱり凄いね」

「シグナムの言った通りやな。これは面白い資質や」

「凄いです〜」

「もしこれをサジタリウスで放つたら…」

「殲滅力こそないが、火力は十分期待出来る。広暁ならそれも可能だ」

映像の中で広暁が行っていること、それは決して珍しいことではない。

ただ魔力を矢の形に生成しているだけだ。

だが、普通でないのはその集束量。

普段の広暁が魔力矢を生成する際に収束する魔力量を優に超えるそれは、術式を構築して発射する中距離砲撃魔法と同等の火力を持つ。それを広暁は、魔力を集束して魔力矢を生成するという魔法の基礎中の基礎だけでやってのけた。

「これを放つたら……」

「……凄いことになるね」

なのはとフェイトの言う通り、これは凄いことである。

広暁は並の魔導師が放つ中距離砲撃魔法と同等の火力を持った矢を放てるのだ。

これを術式構築して収束出来る魔力量を増やしたり、誘導制御をつけて魔法にしたら……考えただけでも凄いことになる。

効果範囲が狭いとはいえ、火力が同等というだけで十分に凄いのだ。

「それだけではない。これを見てくれ」

そう言つてシグナムが切り替えた映像。

そこに映し出されていたのは、先程の矢の1/3程の長さの魔力矢を生成している広暁。

だが、その数が普通ではない。

「……全部で何個や？」

「え〜と……全部で32個です。広暁君は器用ですね〜」

広暁は32個の魔力矢を同時に生成しているのだ。

時間はかかる上に集中力も必要、集束出来る魔力量もそこまで多く

ない。

今の段階では誘導制御すら不可能だろう。

だが、もしもこれらが一齐に放たれたとしたら…避け切るのは難しい。

防ぐことは出来たとしても、防御魔法に回す魔力量が増えるのも必定。

「広暁なら出来ると思ってやらせたのだが…まさかここまで上手くいくとは思わなかった。

ここまで器用なことが出来る奴はそうそういない。

このまま鍛え続ければ、奴は必ず戦力になる。

ある程度出来るようになったら魔法にすればいい。

術式はミッドチルダ式の砲撃魔法のそれをちよつといじればいいしな。

そこまで難しくないだろうから、直にデバイス無しで広暁も発動出来るようになるはずだ。

それに……」

「シグナム、そろそろ落ち着こうか」

そろそろシグナムの歯止めが効かなくなってきたので、はやてが止めに入る。

先程のヴィータの折檻に懲りてないのか、また燃え上がっているように見えるが…気のせいだろう。

「広暁にはホルスもいるしな。

初めて見た時も驚いたけど、改めてこないだの出勤時の映像を見たら驚いたぜ……」

「私もあれには驚いたな、まさか格闘戦をするなんて思わなかったし。」

それに、『フレイムアロー』っていう魔法も凄いやね」

「実際は炎を集束してるだけらしいけどな。広暁が考えたんだろうな、矢の形だったし」

ヴィータの言う通り、ホルスも凄い。

初出勤時には強力な火炎放射だけでなく、矢の形に収束した炎を飛ばす『フレイムアロー』でガジェットを破壊し、あまつさえ肉弾戦までこなしたのだ。
だが……

「ほんま凄い奴やで、広暁は。だけど……リン、そっちはどやった？」

「はいです。『ホルスの黒炎竜 LV8』という竜が載っている書籍は……なかったそうです」

「そうか……」

はやてはホルスという竜の存在についても調べていた。

広暁の話は信じているし、疑う気も更々ない。

しかし、何の理由もなくいきなり竜が表れるなど常識的に考えたら信じ難い話だ。

もともと、その理由を見つけないことが困難であることは想像に難くない。

故に、ホルスが存在するかもしれない管理世界のことを調べていたのだ。

無限書庫ならそれもあると思い、無限書庫司書長で友人でもあるユーノ・スクライアに搜索を依頼したのだが、結果は不発だった。

「でも！ホルスという名前なら見つけることが出来たそうです！！」

「ホンマか、リイン！？」

「はいです！これがそのデータです！！」

ピッ。

「これって……」

モニターに映し出されたのはホルスのデータ。しかしその内容は……

「エジプト神話やないか、これ？」

そう、エジプト神話だ。

なのは達の故郷である第97管理外世界である地球。

古代に数多栄えた文明の中でも最も有名といっても過言ではない文明。

そんな文明である『エジプト文明』の神話である。

「私、歴史はちょっと……」

「じゅめん、私も……」

「2人はもつと本読まなあかんで〜？……っとリイン、説明続けてく

れるか？」

「ホルスはエジプト神話に出てくる神様で、冥界の神オシリスと豊穡の神イシスの子供。天空と太陽の神と言われています。外観は、隼の頭をした人間で描かれることが多かったそうです」

「天空と太陽の神…か。それは何となく分からんでもないんやけど…ホルスは竜やで？」

「でも、ホルスって鳥に似てない？ 嘴とか翼とか」

「私も初めて見た時、竜か鳥か迷ったよ。前足があるから竜だって思ったけど」

「2人共、論点がずれてるで」

はやての突っ込みに対し、なのはとフェイトは苦笑いをして口を噤んだ。

ちなみに、ヴィータとシグナムはずっと口を閉ざしている。

地球にいたことはあっても、古代文明のことなど知る機会は無かったのだろう。

「まあ…これが分かっただけでもよしとするか。ほな、これで会議は終了やな」

この会議は元々ホルスのことを話すために開かれたのだが、何故かこのような会議になっていた。

ラインの報告は別として、それ以外は完全に予定外だったのである。

「私はこれから本局の航空武装隊に様があるから」

「私も、この間分かったガジェットのパーツのことで本局に」

「じゃ、あたし達で4人の面倒をみるか」

「そうだな」

「頼むな」

「さてと！私は広暁のお見舞いにも行こうかな」

「え？この書類はどうするんですか？」

ラインが指差したのは、はやての机の上に積まれている書類の束。部隊長として処理しなければならない書類は部隊員のそれとは比較にならないほど多い。

「帰って来たらやるから、ラインは先にやっといてや」

「え！？はやてちゃん！？」

そのままはやては部隊長室を出ていく。

残されたラインは、書類の束を見てため息を吐くしか出来なかった。

（医務室）

「攻撃魔法か…今日の訓練をやった感じだと、考えられるのは2つだな」

この2つですか？

「キユイ」

サジタリウスが映しだした映像、そこには広暁が作り出した矢が映っていた。

午前の訓練で試したことを基に、オリジナルの魔法を考察中なのだ。

「普通の矢より生成に時間はかかるけど、その分威力に特化した矢を放つ魔法。

火力では劣る小さめの矢を複数飛ばす魔法。

技名は……また考えるか」

シグナム曰く、矢として集束する魔力が多いほど速度は上がるが、誘導制御が効きにくいらしい。

体積が同じ物体でも、質量が大きい物体の方が早く飛ぶのと同じ理屈ということだろう。

「前者はまだやりやすいけど…後者はどうする？」

俺が数本自分で矢を放って、後は周りに展開して発射。もしくは…」

マスターが生成された矢を分岐…ですね。マスターだけが行うのなら魔力的に不可能に近いですが、術式を構築して魔法として放てばそれも簡単です。マスターはご自分だけでも32本まで生成出来るのですから

「（術式って便利だな…）周りに展開する方は広く散開しやすいから広範囲向け。分岐する方は狙いを定めやすいからタイマン向けてところだな」

ですね

「キユキユイ」

所々ホルスの合いの手が入りながら会議？ は着々と進んでいく。魔法の実践は止めたホルスとサジタリウスだが、魔法の考案は止めなかったらしい。

体を動かすわけでもないの、頭を使うぐらいはいいと判断したのだろう。

ちなみに、殲滅力の高いミサイルを1発放つより殲滅力は低くても複数のミサイルを放った方が着弾点の被害は大きい。

これと同じことを考えると、ケースバイケースとはいえ後者の魔法

の方が使う機会が多いだろう。

もっとも、あくまで『火力』や『殲滅力』を重視する場合の話だが。

「まあ、後は術式を構築出来るようになってからだな」

マスターは術式に対する理解速度が早いような気がしますが…

「数学と物理の応用みたいなもんだからな。

伊達に小・中・高・大と勉強してないよ、数学も物理も得意だし。

まあ、物理の勉強が始まったのは中学からだけど」

理系人間なめんじゃねえ、と心の中で思っついそうな笑顔である。

そう考えると日本の若者も、理系ならミッドチルダでも活躍出来るのだろうか？

他にも、通信司令とかデバイスマスターとか。

「後は…うん……」

特に無いかと。私にプログラムされた魔法を試すわけにはいきませんし

サジタリウスの言葉に、広暁は難しい顔をする。

体は大丈夫とはいえ、シャマルの許し無しに勝手に出ていくわけにもいかないので暇なのだ。

「サジタリウス、シャマルは今何してるか分かるか？」

クラーヴイントに尋ねてみます……………今はティータイムだそ

うです。後30分ほどで戻ると

「あの医者……まあ、いいか。それより、聞いてほしいことがあるんだけど……」

聞いてほしいこと、ですか？ 「キユ？」

「ああ。この間のガズ」

「広暁？失礼するで？」

「！？」「キユ！？」「！？」

彼らは一斉にドアの方を振り向いた（実際に振り向いたのは広暁とホルスだが）。

声と口調から判断するに、はやてが来たようだ。

広暁は一瞬顔をしかめるが、すぐにそれを直してサジタリウスとホルスに話しかける。

「…話しはまた今度な。どうぞ」

…了解です

「キユイ」

サジタリウスとホルスが了解の合図を告げた直後、はやてが扉をくぐって医務室へと入って来る。

片手には果物が入ったバスケットを持っており、どうやらお見舞い

に来てくれたようだ。

「思ったよりも大丈夫そうやな。心配したでーホント」

「いや、申し訳ない。鍛えてるつもりだったんだけど…やっぱりまだ戦闘には慣れてなくて」

「こないだの出動時はそんな風に全く見えなかったけどな…っと、これ。お見舞いの品やで」

「ありがとう」

トテトテと部屋の中に入って来たはやては、ベットの傍の椅子に座る。

そのまま流れるような動作でバスケットからリングを取り出し、ナイフで剥き始めた。

「いや、さすがにそこまでしてもらおうわけには…」

「怪我人が遠慮せんでえーの。ここは大人しくはやてちゃんに任せとき」

「ん…」

広暁は納得いかないようだが、これ以上反論しても無駄と判断したのか口を閉じた。

そして視線は、はやての手元へと移動する。

右手に果物ナイフ、左手にリングを持ったはやては、器用にリングの皮を剥いていく。

それを見た広暁は、ちょっと羨ましそうな声ではやてに言った。

「はやて器用だな」

「まあ、私は昔から料理してるからな。広暁は出来へんの？」

「剥けないことはないけど…皮に実が結構つくと思う。あんまりそういう機会無いし」

「実家暮らしの大学生はそんなもんやるな」。

これからの時代、ちゃんと料理も出来んといかんぞ？」

「だな…」

雑談をしながらも、はやてはリンゴの皮を器用に剥き続ける。ところがどっこい、その心中は……

(料理の出来る女を見せつけて好感度アップや！カリムには負けへんでー！！)

広暁に料理が出来ることの大事さを教えつつも、その心はちょっと濁っていた。

その心の乱れが指先に表れないあたり凄いが、もしこれを広暁が知ったら…どうなるだろうか？

「ほら、剥けたで」

「サンキューな」

剥けたリンゴを切り分けたはやては、皿に乗せて広暁に渡そうとする。

広暁もそれを受け取るうとするが…

ヒョイ。

(ン?)

ヒョイヒョイ。

…受け取るうとするが、はやては広暁が皿を取ろうとするとその皿を移動させた。

何故このようなことをするのか…広暁は想像がつきながらも念のためはやてに尋ねる。

「リンゴ食べたいんですけど…」

「何言ってるねん。こうゆう時にはこれがお決まりやろ?」

サクッ。

はやてが取った行動、それはリンゴにフォークを指して広暁の目の前にかざすこと。

広暁もその行動が意図することが分からないわけではない。しかし、その行動を実行に移すにはかなりの胆力がある…

パクッ。

「えっ!?!?」

モグモグ…ゴックン。

「美味しいな、このリンゴ」

…はずなのだが、広暁は何の躊躇もなくリンゴに喰いついた。そのまま咀嚼して飲み込み、感想を述べる。その一連の流れに、はやては驚いているようだ。

「どうした？」

「え、いや、その…もう少し恥じらいがあるかな」と

「そういう態度とったら負けたような気分になりそうな気がした」

「うっ…」

「次、お願いしまーす」

「…はい」

ヒョイ。

パク。

モグモグ…ゴックン。

「美味しいな」

「うっ…」

そんなこんなでリンゴを食べ終わった広暁。はやてが少し落ち込んでいる様な気がしないでもないような気がするが、広暁は気にしないことにする。

「そう言えば…お見舞いに来てくれたのは嬉しいんだけど、仕事はいいの？」

「大丈夫やで、リンに任せてきたから…勿論、私も後でやるよ！」

ちょっと鋭くなった広暁の視線に、はやては思わず語尾が上擦る。

自分もやるという当たりさすがだが、自分の部下に戒められる部長…いいのか、それで？

「ってそんなことより！ホルスのことで分かったことがあったんや！！！」

「分かったこと？」

気まずい流れを断ち切るため、何より自分の尊厳を守るためにはやては話題を変える。

その話題とは、先程リンからの報告で分かったこと。

「ホルスはエジプト神話に出てくる神様で、冥界の神オシリスと豊穡の神イシスの子供。天空と太陽の神と言われてるそうや」

はやては自信满满と言った感じで言い切るが…

「ん？ そうだよ？」

「……パードウン？」

広暁は「何それ？ そんなの、とっくの昔に知ってるよ？」と言わんばかりの表情で答えた。

余りに予想していない返答だったのか、はやては言葉が英語になる。

「えーと、広暁…知ってたんか？」

「うん。あゝ…そうか。遊戯王カードの成り立ちについて話してなかったな」

「成り立ち？」

「アニメの話になるけど、遊戯王カードの元は3000年前のエジプトが発祥ってことになってるんだ。だからアニメのキャラクターやカードには、エジプト神話の神の名前が多いんだよ」

「…マジで？」

「マジで。遊戯王カードやってると、神話に出てくる神様とか武器

の名前に詳しくなるんだよね」

うんたらかんたらと広暁は遊戯王の雑学を話し始めるが、はやては意気消沈していた。

無限書庫を使つてまで調べた内容を、広暁がもう知っているとは思わなかったのだ。

雑学を話していた広暁もそんなはやての様子に気付いたのか、はやてに話しかける。

「それで…つてはやて？ どうした？」

「…ううん、何でもなし。ほな、お大事に…」

「うん？ 分かった」

トボトボ… ウィーン… ガジャン…

「俺のせいかな…？」

半分はそうでしょうね

「キユイ？」

部隊長室を出たシグナムとヴィータは、オフィスへと向かっていた。先程話した通り、フォワード4人のデスクワークを見るためである。

「シグナム、何難しい顔してんだ？」

「……………」

「シグナム？おい、シグナム！？」

「…っ！？すまない、どうかしたか？」

「どうかしたか？じゃねえよ。何難しい顔してんだって聞いてんだ」
「よ」

「…ああ、済まない。何、そんなに難しいことを考えてるわけじゃない」

「じゃあ何を考えてるんだよ？あたしでよかつたら相談に乗るぜ？」

「そつだな…。ならば聞くが…」

「ああ」

烈火の将と呼ばれているシグナムが悩む姿が珍しかったのか、ただ家族として心配だったのか。

理由は両方だろうが、本音でいえば後者だろう。

シグナムが放つであろう言葉を一字一句聞き漏らすまいと、ヴィータは身構える。

「サジタリウスの待機状態だが…ペンダント型で紫色の紐が通してあったな？」

「……確かにそうだけど？あたし達みたいに首からかけるんじゃないのか？」

「それなんだが…なんとゆうか…広暁のイメージに合わなくてな………」

「……は？何を言ってるんだお前は？」

シグナムが言ったことに対し、ヴィータは呆然とした。それもそうであろう。

普段悩む姿を見せないシグナムが、珍しく悩んでいる素振りを見せた。

それを心配して理由を聞いたら、部下がデバイスにつけている紐がそいつのイメージに合わない。

生気が抜けるを通り越して、魂が昇天しかねない勢いだ。

「広暁は冷静というか落ち着いているというか…クールなイメージがあるだろ？」

「だから、紐の色は青とか黒の方が似合うと思うんだが………」

(折檻した時に頭を殴り過ぎたな…うん、そうに違いない。
次からはボディーを重点的に攻めるか…)

「もしくはイメージを明るくするために、オレンジや赤の方が似合
っていると思うのだが…。」

「ヴィータ、お前はと思う？」

「アー、ハイハイソウデスネー。ソッチノハウガイインジャナイカ
ナー？」

「何故片言なのだ？」

ジュジュジュ…

「…？」

「どうされました？ 騎士カリム」

「私のセンスを悪く言われたような気がするわ」

「はい？」

この日の夜、教会の制服を着て姿見の前で延々と唸るカリムをシャツハは見たらしい。

第21話「考察」（後書き）

第21話、いかがだったでしょうか？

なのは世界の魔法は、数学と物理、そしてC言語の様なプログラムに通ずる部分があるので、オリジナルの魔法を考えるのはそれほど難しくないと私は考えています。

ですので、これからも主人公である広暁にはオリジナルの魔法を使わせる機会が多いと思いますが、よろしく願います。

勿論、既存の魔法も使わせますよ？

では。感想・意見・間違い訂正 e t c、お待ちしております。

第22話「日記」(前書き)

第22話です。

今回の話は、視点転換はあれど全て1人称ですので、読む時は気を付けて下さいね？

では。第22話、始まります。

第22話「日記」

< 広暁 side >

あゝ、今日も疲れた〜。

今日の夜の訓練、あれは何だ？

気絶はしないけど、あれはいつ倒れてもおかしくないぞ。

何でセンターガードの俺がガードウイングのシグナムの攻撃を延々と受け続けるんだ？

移動型のセンターガードである俺を鍛える目的ってのは分かるし、「こういう状況もある！！」っていうシグナムの言い分も分かる。

だけど俺は、剣を持った相手に切りかかられたことなんて今まで一度もないんだぞ！？

剣筋は見えてもサジタリウスで不器用に防ぐことしか出来ないし、結局ほとんど避けて終わった…。

足に自己ブーストかけてたせいでまだ足が痛い…寝る前にフィジカルヒールかけとくか。

…っとその前に。

今日から日記を付けることにした。

ミッドチルダでの新しい生活を記す日記だ。

今まではミッドチルダに来る時に持っていた手帳に書いていた。だが、さすがに手帳では限界がある。

その旨をなのはに話したところ、備品で余っていた大学ノートを買ったことが出来た。

これからはこのノートに日記を書いていきたい。

あれだけやれば1月飛行訓練をするのと変わらないそうなので、まだ断定はしていなかったそうだ。
普通はあんなやり方で飛行の練習はしないそうだけどね。
だってあれが一番手っ取り早いと思ったんだもん。

だが、矢の生成を見てはつきりと分かったらしい。
魔力を弾の形：魔力弾にしたり、砲撃として打ち出すのは難しいことではない。

元来、魔力を集めると最も安定するのが球状らしい。

これは俺もやっていて分かった。

しかし、それを別の形に集束、維持となると話は変わる。

本来なら、球形の魔力弾より弾丸の様な形状の方が貫通力が高いのは自明の理。

だがそれをしないのは、なのは曰く

「変形して維持するのは難しいから、術式を構成して砲撃魔法を使うの」

つまり、俺はミッドチルダでは珍しいタイプの魔導師ということになる。

『集めた魔力を自在に変形して収束する』

出来る魔導師が存在しないわけではないが、それでも少ないらしい。かと言って、日の目を見ないというわけでもない。

この資質がある人は身軽に行動出来るので、奇襲が主な任務だそうだ。

デバイスも持っているそうだが、ほとんど使わないらしい。

それでいいのか、あんだ達…。

今更だが、俺はなのはやフェイトを呼び捨てだけどいいのか？
公私で使い分けてるけど、いくら年下でも自分の上司や上官を呼び
捨てっていうのはなあ。
シグナムやシャマルにいたっては俺より年上に見えるし。
そういえば、ザフィーラは何歳だ？
狼らしいけど、話せるならそれっぽい魔法生物とか…。
竜もいるから不思議じゃないけど、一体何歳なんだろうな？

話が逸れた。つまり俺は、

『魔力の扱いそのもの、もっと突っ込むならば集めた魔力の収束・
変形・維持が得意』

ということになる。

したがって、主な攻撃方法は、矢を生成して狙撃。

もしくは、様々な形に変形させた魔力を攻撃に使うことにする。

術式構築やデバイスの補助が不要なので、ミッドチルダ式としては
素早く攻撃に移ることが出来る。

と言っても、色々と手を出し過ぎると器用貧乏になるので、攻撃は
矢関係に絞るつもりだ。

もっとも、それでは火力や殲滅力で劣るので、状況によってはちゃ
んとした魔法を使いたい。

魔力がエネルギーの塊とはいえ、ただ矢を放つだけでは破壊力で劣
るのだ。

そう考えると、鏃^{やじり}を無くして長い針みたいなのにした方がいいか？
螺旋回転を加えて貫通力を上げるってのも有りだな。

ただでさえ魔力弾より貫通力が高い俺の矢の威力が上がるだろうし。
正確性は誘導制御で問題無い。

だけど誘導制御つけると速度がなあ……。
臨機応変に、ということにしておこう。
火力・貫通力・速度・誘導制御によって別々の魔法を考えるっていう手もある。

防御魔法はバリア・シールド・フィールド系を使い分ければいい。これら防御魔法に関しては、術式構築が自分で出来るようになったよって、サジタリウスに頼らなくても発動出来る。

もったも、防御は最終手段であり、避ける方が俺には合っているのだが。

俺は元々瞬発力があり反射神経もよく、それらをスポーツとトレーニングで更に伸ばした。

この資質のおかげで魔力による身体強化も上手く出来るので、攻撃は避ける方が俺に合っている。

だが、センターガードというポジション上、避けてばかりもいられない。

味方に対する最低限の攻撃は防ぎたい。

まあとにかく何か新しい防御手段は考えたいので、これから推敲していこうと思う。

移動魔法はまだ考え中だ。

体の振りを加速する『ブリッツアクション』と、移動を加速する『ソニックムーブ』。

矢を番えるのにブリッツアクションは不要だし、速く動きたいなら足に魔力をかければいい。

高速移動するならソニックムーブは必要だが、俺の戦闘スタイルとポジションでは不要な気がする。

……あれ？

体じゃなくて、矢にこの2つの魔法はかけれないのかな？

もし出来るなら矢の速度が上がるだろうし。

矢といえば、前の出撃ではガジェットのアMFを貫通出来た。

しかし、もつと強力なAMFでは消されるかもしれない。

だったら魔法で金属の矢を作って、速度強化して放てば強力じゃないか？

魔力と違ってエネルギーじゃないから、爆発による殲滅は期待出来ない。

しかし、貫通力というただ一点においては魔力の矢を上回るだろう。静物狙撃じゃないと当てるのは難しいだろうが、一考の余地ありだな。

金属生成の魔法があるか聞いておこう。

正直言って治癒魔法は難しい。

軽い筋肉痛や怪我なら直せるが、体全体を包み込むように出来ない。俺が治癒魔法で治せるのは、あくまで体の一部分なのだ。

覚えておいて損はないので、時間があつたらキャロかシャマルに詳しく教えてもらおうと思う。

……この短時間で学んでる身としては贅沢なことかもしれないが。

捕獲魔法は便利だ。

一旦捕まえてしまえば、貫通力のみに的を絞った矢を放って狙うことが出来る。

だけど今の俺では、対象がある程度近くにいないと捕まえることが出来ない。

対象が高速で移動するのも同様だ。

練習を積み重ねれば出来るようになるらしいので、攻撃の次に力を入れて練習したい。

今までやった感じでは、回復魔法以外はある程度こなせた。

つまり、魔力操作が俺の得意なスキルであり、回復魔法が苦手なスキルということになる。

結界魔法と召喚魔法はやったことがないので分からないが、暫定的に決めておく。

召喚魔法はレアスキル扱いみたいだから期待はしてないけど。

そういえば、未だに巨大化したホルスとの訓練がない。

今日だって、技が決まってるないと訓練し辛いかで一緒に訓練してないし。

前の出撃で分かった通り、ホルスが巨大化出来るのは1日1時間。

俺から魔力を供給すれば更に時間を伸ばすことは可能だとシヤマルは言っていたが…。

それを考慮に入れてということだろうか？

炎の生成という点では小さくても大きくても変化はないので、別にいいのだが。

俺とホルスだけで出撃なんてまずないから、訓練をやっても無意味かもしれないしな。

そもそも、ホルスが規格外過ぎる。

俺達フォワード5人が束になっても、巨大化したホルスには勝てないだろう。

竜魂召喚によって真の姿になったフリードが加わってようやく勝てるといったところだ。

ホルス：お前は一体何なんだ？

この間の出撃の時に戦った3色ガジェットといい、一体ミッドチルダで何が起きてるんだ？

カードが実体化したと思ってたけど、実際は違うのか？

一体……………？

「キユイキユイキユイキユイ」

「痛いって」

『つつく』が『みだれづき』になってきたので、軽く頭を撫でて攻撃を止めさせる。

明日も早朝訓練があるので、今日はもう寝るか。

部屋の電気を消してスリッパを脱ぎ、ベッドに入る。

ついでにホルスも入ってくる。

俺と一緒に寝るのが好きなようで、最近をよくベッドに入ってくるのだ。

羽を折りたためばコンパクトで体が温かいので、最近寝つきがよくなった気がするな。

「目覚まし頼むな、サジタリウス」

『分かりました。お休みなさいませ』

「お休み〜」

「キユイ〜」

そして俺の意識は暗闇へと落ちていく……。

<サジタリウス side >

マスターは就寝されましたね。

今日から日記をつけることにしたようで、寝る前まで机に向かっていましたが……。

その光景をホルスが恨めしそうに見ていたのは私の気のせいでしょう。

断じて早く一緒に寝たいとホルスが思っていたとは思いません。ええ、思いませんとも。

今日は夜の訓練を除いて、マスターの資質を伸ばすための訓練のようでした。

矢の生成も1秒強で出来るようになり、遠距離へ攻撃に移る速度としては六課最速らしいです。

シグナム副隊長は「もっと速く！」と言っていました。マスターならそれも可能でしょう。

マスターは努力家です。

通常の訓練に加え、ミッドチルダの言語の勉強。

デスクワークを行い、空いた時間を見つけては自主練をしています。マスターは「俺が皆の足を引っ張るわけにはいかないしな」と言っています。……。

マスターは気付いていないのでしょうか？

今やフォワード5人の中でマスターが中心となっていることに。

……いえ、マスターは気付いていてそう言ったのでしょね。
マスターは『気付く』人ですから。

一番新人の自分が中心になるわけにはいかない。

だからこそ自分は一步引いて4人を見て、サポートする。

今はそれでいいかもしれませんが、段々とそれでは駄目になってきます。

マスターはそのところを分かっているのでしょうか…？

……どちらにしろ、今の私には見守ることしか出来ませんね。

マスターが気付いていないとは思えませんし、気付いていないのなら私が忠告すればいいだけです。

ホルスは炎の収束バリエーションを増やす訓練をしていました。

技が確立していないと訓練もし辛いようで、今はまだホルスも5人の訓練には加わっていません。

攻撃用のフレイムアローとフレイムスピアだけでなく、防御・補助用の技も考えているようです。

勿論マスターと私も考えていますが…今ではホルスが自分だけで考えている時間の方が長いです。

マスターもホルスがここまで知能が高いとは思っていませんでした。く、とても驚いていました。

勿論、私もですが。

知能は人間と同じではないかと最近では考える程です。

娯楽のカードゲームから出て来た存在『ホルスの黒炎竜 LV8』。

その基となったエジプト神話に存在する天空と太陽の神『ホルス神』。
マスターは分からないと言っていました。マスターには幾つかの
仮説があるのでしょうか。

この間医務室で話そうとしていたこと。

そして、夜1人の時に何かを考えるように窓の外を見続けているこ
と。

きつと、医務室で話そうとした仮説に更に考察を加えているのでし
ょう。

私としては、もっと気軽に相談してほしいものです。

自分の中に貯め込んで、結果として周りに被害をもたらす思春期の
傍迷惑な人間とは違いますが…。

マスターは、出来ないことや確証が無いことは口に出さない性格の
ようです。

恐らく、あの時自分が言おうとしたことに改善点が見つかったので
しょう。

はやて部隊長が来る来ないに関わらず話は無くなっていただけでしょ
うね。

政治家がテレビで発言するわけではないのですから、もっと気軽に
相談してほしいものです。

ここは今度、マスターに強めに言うておきましょう。

…そういえば。

はやて部隊長と騎士カリムはマスターに気がある様ですが…マスタ
ーはどうされるのでしょうか？

私としては、マスターの幸せを祈るだけです。

こう言うてはなんですが、2人共しつこい性格のようですから。

このことを踏まえて、私もマスターをサポート出来るように精進し

ましよう。

目覚ましは予約しておきましたし、そろそろ私もスリープモードに移行しましょうか。

明日もまた、マスターと共に訓練に励みましょう。

<ホルス s i d e >

「スゝスゝ……」

初出勤時の夢を見る。

「キュ… キュー……」

ガジェットを壊すシーン。

「キュ！」

左手で正拳突き。

「キユ！」

右手でフック。

「キユ！」

左足で前蹴り。

「キユ！」

右足でローキック。

「キユツキユ」

スツキリ。

「キユイ……」

夢は続く。

第22話「日記」(後書き)

第22話、いかがだったでしょうか？

サジタリウスが人間臭過ぎる…と思われる人が多いと思いますが、私としてはこれぐらいの方が好きです。

私の趣味で申し訳ありませんが、ご容赦下さい。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第23話「地球編1」（前書き）

第23話です。

ここから数話、サウンドトラックの地球出張編になります。
広暁達の出張はどうなるのでしょうか？

では。第23話、始まります。

第23話「地球編1」

ここは聖王教会、カリムの執務室。この部屋にいるのは2人の女性。1人はカリム・グラシア。聖王教会教会騎士団騎士。もう1人はシャツハ・ヌエラ。聖王教会修道女でカリムの秘書。彼女達2人は、モニターに映し出された報告書を見ていた。

「ロストロギア発見の報告…ですか」

カリムの部屋に呼び出されたシャツハが見たのは、ロストロギア発見の報告書。

その文面を読んだシャツハは微妙に顔をしかめる。

「機動六課に捜査依頼ですか…機動六課はレリック専門では？」

「その可能性を否定し切れないから、よ。勿論、こんな不確かな情報ではやての部隊を動かしたくはないのだが……ねえ？」

「…ああ、そういうことですか」

本来ならロストロギアの保守と管理は聖王教会の使命の一つであり、専用の調査団もある。

しかし、それら全てがで払っており、今の聖王教会には動かせる手足が存在しないのだ。

「仕方ないわね…はやてに連絡しておきましょう。丁度いい里帰りになるでしょうしね」

「里帰り…ですか？もしかして、発見されたロストロギアがある場所は…」

「そう。第97管理外世界…」

「地球への出張任務？」

「そうだよ。出発は明日の朝になるから、ちゃんと準備しておいてね？」

夜の訓練を終えて自主練をしていた広暁。

そこに訪れたがフェイトである。

広暁がエリオとキャロに言ったことが功を奏したようで、2人はフェイトに対して甘えるようになったらしく、そのことを広暁は度々聞かされていた。

もつとも、『お姉ちゃん』『お母さん』と呼ばれるのは恥ずかしいらしく、今まで通り『フェイトさん』と呼ばせているあたり、フェイトも事を急いでいた感が否めないが。

そのようなこともあり、フェイトは広暁に対してよく話しかけるよ

うになった。

今までは時たま敵対視するように見ていたのに、この変わり様。女性というのは気^けに恐ろしき生き物である。

「内容は？」

「発見されたロストロギアの破壊・封印。可能なら後者ってことになるかな」

「となると…キャロが鍵だな」

「…相変わらず鋭いね、広暁は」

「どうもどうも」

相変わらずの広暁の鋭さにほんのちよつとだけフェイトは呆れつつ、フェイトは広暁の隣に立った。

そんなフェイトの行動が気になったのか、広暁はフェイトに尋ねる。

「どうかした？」

「うーん…ちよつと気になるんだよね。広暁がどんな魔法を考えているのか」

「前にも話さなかったっけ？」

「原案はね。結構改良を加えたんでしょ？」

「まあ…それなりに。今の俺じゃあ、そんな難しいことは出来ないけど」

「広暁は理解速度が早いからね。もしかしたら、デバイス製作にも向いているかもしれないよ？術式を理解してデバイスとの相性も考えながら、広暁は魔法を考えることが出来るしね」

「さすがにそこまでは…」

そこまで手を広げるつもりはないという意味を込め、広暁は顔の前で右手を左右に振る。

その動作の意味をフェイトは理解しつつも、更に広暁を褒める。

「でも、広暁君は本当にすごいと思うよ？」

この短期間で他のフォワードと遜色ない程のところまで来てるし。

サジタリウスから放たれる矢は速くて正確。

その上、エリオ並の高速移動も出来るんでしょう？

エリオが嬉しそうに話してたよ」

「速度だけなら、ね。ジグザグならともかく、必要最低限の動きで移動するってのが出来ないし」

「今はそれで十分だよ。これから上手くなっていけばいいんだから」

「ん〜…」

フェイトは今まで溜まっていたものを吐きだすかのように、広暁を褒める。

広暁も悪い気はしないのだが、さすがにそこまで言われると照れる。それを顔に出さない当たりはさすがだが、これ以上言われると顔に出る恐れがあるので、広暁は話の腰を折ることにした。

「そういえばさ、このことを他のフォワードには言ったの?」

「あっ!?! エリオとキャロに伝えてなかった!?!」

「早く行ってあげたら?」

「そうだね! 広暁、ありがとね!?!」

最後に広暁の右手を両手で握手して、フェイトは隊舎の方へと走っていく。

すると、何かを思い出したように途中で体を反転して叫んだ。

「あっ、そうだ!?!」

「どうした!?!?」

「前買えなかったケーキ買ってきたから! 食堂に行けばもらえるからね!?!」

「分かった!?!」

俺が頼んだのはザッハトルテだったなと思いつつ、広暁は体を反転する。

そのタイミングを見計らったのか、唐突にサジタリウスが広暁に話しかけた。

マスター、どうされました?

「ん？何のことだ？」

顔には出てなくても私にはお見通しです。何か考えるところがあるのでは？

「…分かっててよくそこまではっきり言えるな、お前」

マスター相手ですからね

「理由か、それ？まあ…ただの照れだよ」

照れ…ですか？

「フェイトみたいな天才で秀才の魔導師に褒められるってのはさ、純粹に嬉しいもんだろ？」

天才で秀才…マスターも同類のように私は考えますが

「俺はどちらかってゆーと秀才型だ、天才の要素は持ってねーよ」

（フェイトみたいな天才型だと、感覚で術式を組めるからな。

俺みたい奴は逐一理解しながらやるしかないんだよ…）

……………

どこか自嘲気味の感じがする広暁の言葉。
サジタリウスも広暁の意図するところが分かったのか、言葉を発しない。

「まっ、そんなことは置いといてさ。部屋に戻って明日の準備するか。」
平行世界とはいえ地球に行くんだしな」

…そうですね。ホルスも待っていることですし

先程までの空気を変えるように、広暁は明るく広暁は言い放った。サジタリウスも空気を讀んだのか、それ以上追及することはない。

（マスターは本心から言ったのでしよう。
悲観している様子は見られませんが、ただ事実を言っただけといった感じです。
これ以上何か言うのは野暮というものですな）

隊舎へと戻る途中、広暁の首からかけられていたサジタリウスはそう考えていた。

「食堂でケーキ貰わんとな」

「さて…準備完了」

忘れ物はありませんか？

「大丈夫だ、問題ない」

「キユイ！」

「んじゃまあ、行きますか…地球へ」

六課から支給されたスポーツバッグに荷物を入れ、広暁は部屋を出る。

といっても、その大部分を占めるのは着替えの服であり、日用品はほとんどない。

精々歯ブラシとかタオルぐらいだ。

「あ、お兄さん！」

部屋を出て数分歩いていると、エリオと出くわした。

エリオも広暁と同様のスポーツバッグを肩から掛けているが、その服装は制服ではない。

「エリオの私服って初めて見たな」

「そうですね、大概是局の制服か部屋着ですから…可笑しくないですか？」

エリオの服装は、白いインナーに水色の上着。

ズボンには深い青色のカーゴパンツであり、全体的に清潔感が漂う服装。

それらがエリオの赤い髪と合わさることで、活発な中にも冷静さが漂う雰囲気を作り出す。

「うーん……いいと思うぞ？」

専門的なことは分からないけど、エリオに似合ってるってのはよく分かる」

「あ、ありがとうございます!!」

初めて見せる私服姿を広暁に褒められ、エリオはご機嫌のようだ。ちなみに広暁の服装は、ミッドチルダに飛ばされた時と同じ服装。2人して歩いていると、場所が場所なら同じスポーツを楽しむ兄弟に見えるだろう。

「お？5人そろって来たみたいやな」

あの後隊舎の前でフォワード女性組と合流したフォワード男性組は、揃って部隊長室に到着した。

出発する前に最終確認を行うらしく、地球へ行く六課のメンバーが全てこの部屋に揃っている。

スターズ・ライトニング分隊のメンバーに加え、シャマルにはやてにリイン。

ぶつちやけ、機動六課の主要メンバーが揃っている。

「こんなに主要メンバーが抜けて大丈夫？はやて部隊長」

「留守はグリフィス君とザフィーラがしっかり守ってくれるからな。問題あらへんで」

「ふーん…」

「ある程度の広域捜査になるから司令部もいるからな。それに、相手はレリックの可能性もあるロストロギアや。戦闘要員が多いことにこしたことはないで」

「なるほど…」

帰ってきたはやての言葉に対して広暁は未だに心配の情を隠せずにいるが、それを感じ取ったはやてが更に言葉を紡ぐ。広暁もそれに納得したようだ。

「さて、皆揃ったところで…最終確認や。

今回の任務は第97管理外世界の惑星『地球』で発見されたロストロギアの調査。

出来ることなら封印処理して持ち帰ることが望ましい。

移動はヘリで地上本部まで行った後、転送ポートで地球まで一っ飛びや。

何か質問は？」

「はい」

「何やティアナ？」

「現地での宿泊施設はどうするんですか？人数は多いですし、泊まるところが必要では？」

「いい質問や、ティアナ。
地球には現地協力者がいるから、その人が所有するコテージを借り
ることになったる」

「現地協力者？魔法文化が存在しない地球に？」

広暁の疑問ももつともだ。

魔法文化が存在する管理世界ならともかく、地球には魔法文化は存
在しない。

そんな地球で協力者が得られることに疑問を感じるのは当然だ。

「それは現地に着いてからのお楽しみや」

「へ？」

「他に質問はあるか？ないなら行くで」

「……………」

広暁の質問はうやむやにされたが、はやてがそう言うならそうなの
だろう。

広暁は自分の中で結論付けた（考えるのを止めたともいう）。

バババババッ！！

今広暁達がいるのは、地上本部へと向かうへりの中。その後部にすし詰めとまではいかなくても、満員御礼の状態に乗っている。

「地球か…改めて考えると何か変な感じだな」

「お兄ちゃんは平行世界の地球出身なんですよね？」

「その可能性が高いらしいな。はっきりとしたことは言えんけど」

広暁にとっては同じで異なる地球。

行くことに喜びはあったものの、自分のいた地球とは違うという事実、そこから来る悲しみもある。

それをエリオは察したのだろう、広暁に話しかけた。

「お兄さんは…辛いですか、地球に行くのは？」

何を突然…と考えた広暁だったが、そこは自前の洞察力で察知。

エリオの考えることを推測し、慎重に言葉を選ぶ。

「辛くないって言ったら嘘になるけど…楽しみの方が大きいかな。

俺がいた町にいくわけじゃないけど、地球…しかも日本に行くことに変わりはないんだし。

どこが俺のいた地球と違うか比べたい」

広暁は軽く微笑みながらエリオに伝えた。

エリオも納得いく回答が得られて嬉しかったのか、広暁以上に笑顔だ。

ついでにキャラ口も笑顔だ。

彼女もエリオと同様、広暁のことを心配していたのだろう。

「ニパア／＼／／」

何故かフェイトも笑顔だが…ちょっと危ない方向の笑顔の様な気がする。

これに突っ込む勇氣は広暁にはないので、別の話題を探すことにした。

そして目に入るのは…

「そういえば、リイン曹長」

「どうしたんです？広暁さん」

「リイン曹長は地球に行ったらその姿で行動するの？目立つと思っけど」

広暁の目に入ったのはフワフワと飛んでいるリイン。

ミッドチルダでも人目を引く姿だが、地球に行ったら目立つことの上ないだろう。

地球に30cmぐらいの大きさを浮遊する人間などいないのだから。

「あゝ、そういうことですか。

そういえば、フォワードの皆には見せたことがなかったですね」

ピン！ キュイイイイン！！

突然、リインの体から閃光が発せられ、その光がリインを包む。

やがて光が収まり、そこにいたのは……

「……ええ!?」「……」「わあお」

エリオ・キャロと同じ年ぐらいの女の子であった。

陸士隊の制服を着ており、リインがそのまま大きくなった感じだ。

「可愛い」

「大きくなれたんですね……」

「凄い……」

「わ……」

広暁以外の4人は驚いたような表情だが、広暁はそこまで驚いていないように見えない。

それに対して不満なのか、リインが突っ込む。

「広暁さん……もう少し驚いてくれてもいいんじゃないですか?」

「いやーその……驚くのに疲れたというか。」

世界が違うなら常識も違うだろうし、一々俺の世界での常識と比べて驚くのもどうかなーと」

「うう……はやてちゃん、広暁さんが枯れてしまいました」

「枯れたとは何だ、枯れたとは」

広暁の言ったことに対してちょっと傷ついたので、リインははやての元へと駆けて行った。

リインをあやすはやての姿はまるで母親のようであり、その姿を見

て親子みたいだなと広暁が感じたことを記しておく。

「誰が母親や、誰が」

シューイイイイイン……

「はい、海鳴に到着ですー！」

「「「「「お〜」「」「」「」

本局に着いた後、はやてとヴォルケンリッターの3人は出張の手続きの少し遅れることになった。

よって、なのは・フェイト・リイン・フォワード5人が先に地球に飛んだのだ。

一瞬の閃光の後、そこに姿を現したのは広暁達機動六課出張組。その場所は湖の傍であり、周りが木々に囲まれている。

森の真ん中に湖があるといった感じだ。

広暁達を挟んで湖の反対側にはコテージが建っており、その佇まいは自然に上手く溶け込んでいる。

「ここが神奈川県海鳴市……」

「広暁君のいた地球と似てる？」

「いや、さすがにこれだけじゃ…商店街とか見れば分かるかもしれないけど」

広暁が悲しみの感傷に浸っていないのを知っているのか、なのはは普通に広暁に尋ねた。

答える広暁も当たり障りのない返答をするあたり、先程へりの中で言ったのは本当なのだろう。

「さて…じゃあ、皆。」

はやて部隊長達は手続きの関係で少し遅れてるから、まずは現地協力者が来るまでここで待機ね。

荷物はコテージの前に置いておけばいいから、それまで自由に行動していいよ」

「……………はい!」「……………」

なのはの号令から10分後、5人は思い思いに過ごしていた。

スバルとティアナは大きな木の下でのんびりとしており、エリオとキヤロは湖のほとりで会話に花を咲かせている。
一方広暁は……………

「平和だ〜……………」

静かですね〜……………

「キュイ〜……………」

……………いや、広暁達は、見事にだらけきっていた。
大の字で寝っ転がる広暁、その胸の上で輝くサジタリウス、羽を伸ばして伸び伸び状態のホルス。
傍から見たら平和な光景かもしれないが…任務中ということはこの1人と1機と1匹は忘れているのだろうか？

「キュイ！」

「ん？…ああ、分かった」

広暁はホルスの合図にその身を起こし、身なりを正す。
ぶつちやけ私服のだが、直すものは直す。

そのままの流れで他の4人に収集を掛け、なのは・フェイト・リーの元へと移動。

8人が集合した時には、丁度高そうなりムジンが湖に到着した時だった。

ブルルルル… キキッ！！ ガチャッ！！

「なのは！フェイト！久し振り！！！」

「アリサちゃん！」 「アリサ！」

車から降りて来たのはオレンジがかった金髪をした1人の女性。年齢はなのはやフェイトと同じくらいだろうか？顔つきを見る限り、ハーフであることが窺える。

「本当に久しぶりね、2人共」

「今回はありがとう、アリサ」

「気にしないでいいわよ、役に立てるなら。」

それに、こんな機会とはいえフェイト達に会えたんだしね」

(うーん……家が金持ちの友達？いや、この感じだと親友って言った方が正しいか？)

広暁は………いつも通り勝手に考え込んでいた。

そんな広暁の心の中を読んだのか、なのはとフェイトがアリサを紹介する。

「紹介するね。この人はアリサちゃん。私とフェイトちゃん、はやてちゃんの幼馴染なの」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね？」

「……………よろしくお願ひします！！」「……………」

アリサの挨拶に対し、元気よく挨拶を返す5人。

すると、そのメンツを見渡していたアリサの顔が微妙に曇った。

「なのは、この男の人は？新人フオワードは4人って聞いたけど」

「彼は墨谷広暁君。次元漂流者で、今は六課の民間協力者をやっ
てもらっているの」

「墨谷広暁…日本人なの？」

「日本人です。ついでに言うと、平行世界の地球出身の可能性が高
いです」

途中から広暁も会話に加わる。広暁が言ったことに興味を持ったの
か、アリサは広暁に質問した。

「平行世界の地球ね…出身はどこなの？」

「愛知県あいちけん伯氷市はくひょうし」

「愛知県はともかく…伯氷市はくひょうしは聞いたことが無いわね。平行世界出
身っていうのも本当なのかしら」

「俺にも分かりませんがね」

「見た感じは私と年は変わらないように見えるけど…もしかして大
学生だった？」

それと、敬語じゃなくてもいいわよ」

「じゃあ…お言葉に甘えて。

大学3年生だったな、ミッドチルダに飛ばされるまでは」

「どのの大学に通ってたの？」

「M大…じゃない、N大学」

「へえ、結構いいところに通ってるじゃない！私は聖祥大学よ」

「聖祥大学？こっちの地球にもあるんだ…」

「色々共通点はあるみたいね」

「そうだね」

「学部はどこだったの？」

「学部は……」

「……………？」「……………」

アリスと広暁の話す内容に、他の六課陣はついていけないようだ。何故なら、なのはとフェイトは中学までしか行っておらず、リインは融合デバイス。

ティアナとスバルは訓練校から就職しており、エリオとキャロも早くから管理局入りしていた。

故に、広暁とアリスのキャンパストークについていけないのである。興味本位からもう少し聞いていたというのが全員の本音であるが、このままでは仕事が始まらないのでなのはは切り出すことにした。

「…コホン。会話を楽しんでるところ悪いんだけど、そろそろ仕事の話…」

「あつ、すいません…」

「ごめんごめん。まさか大学のことまで話せる人がいるなんて思わなかったからつい、ね」

「全くもう……」

なのはの叱責に対し、広暁は申し訳なさそうに、アリサは笑いながら答えた。

それに呆れながらもなのはは答えるが、怒っていない当たり気が緩んでいるのだろう。

そして話は、仕事の話へと移行する。

アリサなのははやフェイトが魔導師であることを昔から知っているため、今回の申し出を受けたこと。

なのはの話では、ロストロギアが発見された箇所は数か所あるということ。

移動しているのか、それとも何か別の生き物が持ち歩いているのか、詳細は不明だということ。

「場所は全部で4地点だから、4つのグループに分かれてそれぞれ操作をしようか。」

スターズはスバルとティアナ、私とリイン。
フェイト隊長、ライトニングはどうする？」

「うーん…じゃあ、エリオとキャラコ、私と広暁君に分かれようか。
3人共、大丈夫？」

「「「勿論です」「」」

チーム分けも決まったので、広暁達は早速仕事に移ることにした。荷物はアリサの車に乗っていた黒服の人達が移動しておいてくれるそうだと。

ちなみに、何故自分達が来た時に皆がしっかり揃っていたのかとアリサがなのはに尋ねたところ、

「ホルスが車の音を聞いたから」

と、広暁が言ってアリサを感心させたことを追記しておく。

ホルス、もとい竜の感覚器官は人より優れているのだ。

ちなみに、ホルスとフリードは留守番である。

竜は地球では目立つのだ。

「キュイ〜……」 「キユクル〜……」

今、フェイトと広暁は商店街を歩いている。

ロストログアが発見された地点の1つに商店街があり、今2人はその商店街を捜査中なのだ。

この商店街はフェイトが地球にいた頃には毎日のように通っていた商店街らしく、道に詳しい。

「結構人通りが多いんだな」

「この時間は学生や仕事帰りの人で賑わうからね。私もなのは達と一緒によく遊んだんだ」

歩きながら会話をする2人。

時たま歩く人が振り返るが、十中八九フェイトを見ているのだろう。広暁もそれなりに良い顔立ちをしているが、それでもフェイトと自分を比べる程慢心してはいない。

歩きながら広暁はそう考えていた。

「私達見られてない？」

「見られてるのはフェイトでしょ」

「そうなのかな？広暁、結構かつこいいと思うけど。」

よくアリサが見せてくれたファッション雑誌に載ってたモデルの人と同じくらい」

「…喜んでいいのか、それは？確かに、モデルの勧誘はあったけどさ」

思い出すのは大学2年生の春。

名古屋を友人と歩いていたら、スーツを来たキャリアウーマンっぽい人に話しかけられたのだ。

話の内容が「モデルをやってみない？」だったので「興味無いです」と言っただけで速攻立ち去ったが。

それを聞いたフェイトは「勿体ない」と言っただけで、当時の広暁にとって大学の講義をさぼってまでやりたいほど好奇心がそえられるものではなかったのだ。

フェイトもこの話題を引きずるのは広暁に悪いと考えたのか、話題

を変えることにした。

「広暁」

「ん？」

「この商店街…うん、地球は、広暁君のいた地球と違う？」

「うん…雰囲気とか空気は同じだと思う。

だけど、雑誌とかテレビ番組とか、ちよつと違うのもあるからな。

やっぱり俺は平行世界の地球…別の地球出身だと思う」

「そっ……」

「まあ、違うなら違うで別にいいんだけどね。

今は六課でしっかり働きたいし。

俺の故郷の地球のことを考えて、どうにかなるもんでもないしな」

広暁が言った言葉に、フェイトは驚いた。

故郷に帰れる可能性がほとんど無いということを広暁が知っているのは、フェイトも知っていた。

しかし、それをこうして広暁の口から聞いたのは初めてだったのだ。

（広暁が自分から地球のことを話すことは今までなかった。

自分からそんなことを話しても良いことは無いし、周りの空気を悪くするだけ。

はやてはそう言ってたけど、今初めて話した。

ということとは……自分の中ではじめがついたのかな？

広暁、自分から空気を悪くするようなことは言わないから）

自分から空気を悪くするようなことを言う人間の方が少ないと思うのだが。

フェイトの知り合いにはそういう人間がいるのだろう。主に関西弁で話すYさんとか（セクハラ発言で）。

（フェイト隊長、広暁）

（はやて部隊長？）

フェイトが思案していたら、2人に念話が来た。どうやら、はやて達八神家組が到着したらしい。しかも、ロストロギアの情報というおまけ付きだ。

（確認されたロストロギアは運搬中に噴出したものだそうで、危険性・事件性はないそうや。攻撃性は無いそうやけど、出来れば破壊せずに封印して返してほしいのこと）

（了解）

（そっちの調査は終わった？）

（うん。商店街を一通り歩いたけど、特に何も無かったよ）

（ほな、2人共。もうロッジに帰って来てもええで）

（OK...っつとそうだ、1つ質問が）

(どうした、広暁？)

(そのロストログシアの特徴は？外見とか能力とか)

(…………… あっ)

(どうした…まさか、聞くの忘れた？)

その反応だと、連絡を一方的に受けたわけじゃなさそうだし)

(し、仕方ないやん！)

教会の人に会ったのはええけど、カリムやなかったんやで！？

あのおっさん、ノンビリノンビリ話しよって！

もうこっちが報告を受けるのを我慢するのがいやになるほど…！)

(そういう問題じゃないと思うよ、はやて部隊長…………)

念話という、脳内会話で繰り広げられる漫才…じゃなかった、ちょっと脱線した仕事の話。

ロッジまで戻る2人は、終始笑顔や呆れ顔を絶やさなかったという。

第23話「地球編1」（後書き）

第23話、いかがだったでしょうか？

「現実味のある主人公」をコンセプトに書いていますが、さすがに通っている大学まで書くのはやりすぎと思い、ローマ字で書くことにしました。

だけど、分かる人には分かりますかね？

M大…もといN大学。

さてさて、一体どこの大学なのでしょうか？

感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第24話「地球編2」(前書き)

第24話です。

社会人としての生活が始まってからは時間が取れず、間が空いてしまいました…。

また間があくこともあると思いますが、よろしく願います。。

では。第24話、始まります。

第24話「地球編2」

「ちょっとスバル！お肉ばかりじゃなくて野菜も食べなさい！..」

「ええ、別にいいじゃん」

「はやて、お野菜焼けたよ」

「ありがとな、すずか」

「平和だね.....」

草木も眠る丑三つ時...ではなく、各家庭で夕食が始まるぐらいの時間。

コテージの傍ではバーベキュー大会が始まっていた。

夕食はバーベキューと決まっていたらしく、その準備もすっかりしていたそうだ。

広暁とフェイトが着いた時には既にはやてやシグナム、ヴィータがバーベキューの準備を始めていたため、実に手早く準備を終えることが出来た。

「楽しいな、こういの」

「そうですね。こうやって皆でワイワイ食べるのってあまりありませんから」

「楽しいですねー」

「あ、エリオ。口の周りが汚れてるよ」

「フェイトさん!？」

ゴシゴシ。

ライトニングの4人は仲良く固まってを食べていた。

エリオの周りが汚れているのが気になったのか、フェイトがハンカチでそれを拭く。

エリオも驚いているようだが、あまり抵抗しないところを見ると満足でもないのだろう。

「綺麗に食べなきゃ駄目だよ?」

「うう………/ / /」

(俺が拭いてやった方がよかつたかな?)

いや、さすがにそれはやり過ぎか……この間約束したばっかだし)

「キャラもちよっと汚れてるね。ほら、こっち向いて」

「えっ!？あ、ありがとございます…/ / /」

(邪魔者は立ち去りますかね)

広暁はライトニングの元を離れ、別のテーブルへと向かう。

フェイトの世話焼きともかく、エリオとキャラロが甘えるのはまだまだ難しいようだ。

ここは家族3人にさせてその発展に努めるのも発起人の役目と考え

たのдарろう。

広暁が向かったテーブルにいたのは、八神家＋アリサとすずか。それに加え、なのはの姉である高町美由希、フェイトの義姉でエイミー・ハラオウン。

更には、フェイトの使い魔であるアルフまでいる大人数のテーブルだ。

自己紹介は既に済ませているので、そのまま広暁はテーブルの上の料理を…

「おゝ、広暁！肉食え肉！！」

…取ろうとしたら、アルフに山盛りの肉を載せられた。

その重さ、体感重量で約300g。

さすがに肉ばかりこの量を食べるのはきついで、少しアルフの皿に戻して野菜を乗せる。

栄養バランスは大事なのだ。

「あ、こら！ちゃんと肉食べないと大きくなれないぞ」

「これ以上伸びても日常生活が苦しくなるだけだと思っけどな…」

広暁の身長は184cm。

プロのバスケやバレーの選手と比べたら小さいが、それでも成人男性の平均＋10cm以上ある。

十分に大きい領域に入るのだ。

これぐらい身長があると、電車の乗り降り時に頭をぶつけることもある。

たまにやると本気で痛く、そして恥ずかしいのだ。

料理を食べながら、再び広暁は周りの面子を見る。

機動六課のメンバーに加え、現地協力者やその友人までいるテーブルだ。

そして気になったのは…

（青紫の髪…？）

最初に会った時は気にしなかったが、現地協力者の1人でもある月村すずか、その髪の色だ。

ミッドチルダの人間は地球でいう白色人種系の顔が多く、名前もそれっぽい。

髪の色が多彩なのは…世界が違えばそういうこともあると納得出来る。

しかし、月村すずかは名前や顔つきから判断しても日本人のはず。異なる地球といえど、おおよそ日本人からかけ離れている色だ。

勿論、日本人でも髪の色が黒でない人もいる。

地毛で茶髪の友人が広暁にはいるし、先祖にロシア系が混じってるとかで銀髪の高級生もいた。

しかし、青紫の髪は広暁の知る限りでの常識では存在しない。

この惑星は広暁のいた地球とは違うとはいえ、地球であることに変わりはないのだ。

（突然変異…そんなことあり得るのか？

いや…染めてるんだな、そくに違いない）

大学の構内を歩いていると、ピンクや緑に髪を染めた学生を見かけることもある。

広暁はそう自分の中で結論付けることで、これ以上考えるのを止めた。
例え、「染めて出る色じゃない…あれは地毛だ」と考えていたとしても。

これ以上考えても広暁には何の得も無いし、意味も無いのだ。

「結構食ったな…ちよつと歩いてくる」

「あんまり遠くに行っちゃ駄目やで〜?」

はやての言葉に、軽く左手を挙げることで広暁は答えた。

<広暁 side >

バーベキューを食べた後、俺は湖の周りを歩いていた。

この湖は結構広いようで、コテージから見た限りでは反対側は微かに見える程度。

仮に人がいたとしても豆粒ぐらいにしか見えないだろう。故に、その周りを歩くには結構時間がかかるので、散歩には最適だ。

「直らねえもんだな…」

思い出すのは先程のこと…すずかの髪の色についての考察だ。

考えても意味は無いし、そんなこと別にどうでもいいっていうのが正直なところだ。

しかし、気になると深く考えてしまうのが俺の性格。

周囲のことを忘れて考えに没頭することはもうないが、それでもこうして考え込んでしまう。

だからといって、この性格のことを悪くばかり言うつもりはない。よく考えるからこそ俺は世間一般でいう良い大学に入学出来たし、現にこの間まで通っていた。

「智のスポーツ」と言われるソフトテニスで全国大会まで行ったのもこの性格のおかげだ。

全国大会に行くことは出来なかったが、遊戯王カードの大会で西日本決勝まで行くことが出来た。

「考えてもしょうがないのにな…はあ……」

マスター

「何だ？」

いい加減にして下さい。私はそんなに頼りないですか

サジタリウスが怒ってる？

いや、そんなことより…サジタリウスが頼りないってどういこと
だ？

訓練から日常生活まで、十分頼りにしてるんだが。

「えーと…どういこと？十分頼りにしてるけど」

とりとめのない話ならそうでしょう。

しかし、マスターは考え過ぎです。

どんなに下らない話でも確証がない話でも、私に相談してもいいの
では？

丁度いい機会ですからはっきり言わせてもらいますが、マスターは
貯め込み過ぎです。

溜息を吐く程考えているのなら私に相談して下さい。

私はマスターのデバイス、『パートナー』ですよ？

そもそもですね…

…サジタリウスの説教が始まったよ。

インテリジェントデバイスってこんなに喋るもんなのか？

いや、AI（人工知能）を積んでるってのは知ってるけどさ、これ
はさすがに喋り過ぎの様な…。

マスター、聞いているのですか？

「…すみません、聞いてませんでした」

また考え込んでいましたね？

それは別にいいのですが…とにかく、私が言いたいのは。

分からないことや気になることがあるならどんなに小さなことでも
相談してほしいということです。

考えるのは人間が持つ他の生物に無い特筆した技能であることは私も知っています。

しかし、それが過ぎて心が病んでしまつては意味がないんですよ？
もうここまで言ったんですからいい加減に分かつて下さい

「……………」

…考え過ぎ、か。

今までの口ぶりから考えると、サジタリウスは分かつてゐるんだろうな。

俺が、『出来ないこと、確証が無いことは口に出さない』ってことに。

何故俺がこのようにすることを自分で決めたのか？

別に、大法螺を吹いて痛い目にあつたつて訳じゃない。

ただ自分で決めたただけだ…これは俺が生きていく中で守らうってどこで見聞きしたのか、今では覚えていない。

ただ、俺が生きていく中で守らなければいけないこと、守るべきことだと思つたのだ。

だから俺は、ずっとこの言葉を守つて生きてきた。

…だけど、まさかこれが『考え過ぎる』っていう弊害を生むとは。確証がないから、自分の中で納得がいくまで考える。

自分の中で結論が出るか、確証を得てやつと話す。

ディベートは例外だが、曖昧なことは話さないようにしてきた。

…結局、サジタリウスに怒られたわけだが。

もつと気軽に相談しても…いいのかな？

傍から見た俺がそんなに分かりやすいつてことだろうし。

自分の中で考え過ぎって。

サジタリウスの口調からすると、結構前から考えてたみたいだし。

…これも1つの転機か。

自分の性格の短所があるなら、これを機会に直すつても悪くない。不完全さの無い完全さなど存在しないとも言つが、周りから見ても短所だと思われるなら直すべきだ。

長所と短所は表裏一体とも言つけど気にしない。

何か関係ないよつかことを言ったような気もするが…まあ、いいか。短所は直す、それだけだ。

「…分かったよ。これからは、もっと気軽に相談するようにする。心配掛けてごめん」

…分かって下さればいいのです。それで結局、何を考えていたのですか？

「ん？…ああ、俺が考え過ぎる性格っていつのを考えてた」

その内容は？そんなに悩むことだったのですか？

「うーん…」

ついでだし、話してみるか。もっとも、何を言われるかは分からんけど…。

マスター……あなた……何故そのようなことを考えていたのですか
………？

「うっ…気になったから考えてたんだよ。それ以上深い意味は無い」

案の定冷たい言葉を返された。

まあ、他人の髪の色で考え込むなんて、聞く限りでは馬鹿な話だけ
どさ。

というか、もう考えないようにしてたのに話したらまた思い出しち
やっただじゃねえか。

私に当たらないで下さいよ？元を辿ればマスターに原因があるの
ですから

「…すみません」

インテリジェントデバイスって人の思考を読めるのか…？

くコテージ再びく

サジタリウスとの雑談をしながら、広暁はコテージへと戻った。食事を取っている人間は半分程度であり、残り半分は雑談をしながら片付けている。もう食器を片付けているテーブルもあるので、食事はもう終わりのだろう。

「お帰り〜。もう食事は終わりやけど大丈夫か？」

「大丈夫。ちゃんと食べたから」

はやてに軽く挨拶を返し、広暁は食事の片づけに合流する。

やることはバーベキュー用品の片付けと皿洗いだ、貴重な男手だとかで片付けに回された。

（今更だけど、男って俺とエリオだけじゃん…）

そのエリオは皿洗いを手伝っている。

ついでに言うと、フェイトとキャロも皿を洗っている。

こうして後ろ姿を見る限り、3人仲良く皿を洗う姿は十分に親子なのだが…。

先程のことを考えると、まだその道のりは遠いだろう。

そんなことを考えつつ、広暁は折り畳み式の椅子や机を畳んでいく。学生時代に学校行事で幾度となく経験しているので、手際は見事なものだ。

その隣では、ホルスとフリードが仲良く？会話をしている。

「キユイキユイ」

「キユクルー」

「キユキユイ？」

「キユキユイ！」

「キユイ！」

「キユル？」

「キユイキユイ」

「キユクルー」

∴ 広暁には、会話の内容が全く分からないが。

竜同土言葉は通じているようだが、傍から見たら十分に奇妙な光景の様な気もする。

犬や猫でも、このように会話？をするのを広暁は見たことがないのだから。

「仲がいいにこしたことはない、か」

「そういうことや」

「っ！？」

後ろから声をかけられ、広暁は反射的に距離を取って振り返る。

六課で戦闘訓練をしていて身に着いた技術だが、もはや脊髄反射レベルで体が反応するらしい。

しっかり魔力で両足を強化しているあたり、魔力操作も無意識に出来るようになったのだろう。

でなければ数mはある距離を一瞬で跳ぶことは出来ない。

「相変わらず速いな。瞬発力だけならフェイトちゃんさえ勝負やないか？」

「脅かすなよ…つか、気配がしなかったぞ？」

「部隊長をなめたらあかんで〜？」

（部隊長関係あるのか…？）

この台詞セリフ聞くの2度目だなと考えつつ、広暁は冷静に突っ込む…心の中で。

そして、シグナムとのマンツーマンの訓練が役に立つんだなと冷静に考える。

元々瞬発力は優れているが、あんな好戦的な剣士と訓練をすると否が応でも瞬発力が鍛えられる。

とんでもない速度で斬りつけてくるし、離れてもこれまたとんでもない速度で近付いて来るのだ。

シユランゲフォルムを必死で避けてシグナムに矢を打ち込んだのは良い思い出だ。

（こんなところで役にたつても意味無いような気がするけど…。いや、そもそも役にすら立ってないような…）

「おーい？広暁ー？」

「すみません、聞いてませんでした」

「いや、まだ何も言っていないんやけど…」

短所を直そうと一念発起したはいいものの、そう簡単に直るようなものではない。

だからこそ『性格』なのだ。

「まあええか。お風呂のことを言いに来たんよ」

「あつ、そうか。順番どうするの?」

コテージにはお風呂があるが、さすがにこの大所帯では一度に入るには限界がある。

その入る順番を尋ねに来たと思ったのだろう、広暁は答えた。

「いや、さすがにこの人数で入るには時間がかかるからな。だから広暁も早く準備してや」

「はやてちゃん、途中の説明が抜けてるよ……」

「準備?…ああ、そういうことか」

はやての曖昧な説明でも、広暁はしっかりとその真意を汲み取ったようだ。

もっとも、広暁以外の全員が全員着替えとタオルを持って準備していたら普通は気付く。

…というか、広暁は1人で最後までテーブルの片づけをしていたのか?

「と、とにかく!今からうちらが行くんは、日本が次元世界に誇るエンターテインメント施設……」

「スーパー銭湯や!!」

一同が着いたのは海鳴市内のスーパー銭湯。
アリサ家の所有物である黒くて長いリムジンが駐車場に数台止まるのは実に異様な光景だ。
ホルストとフリード? 当然留守番だ。

「おゝ。何か久し振りだな」

「お兄ちゃんは来たことがあるんですか?」

「最後に来たのは高校生…4年ぐらい前かな? 懐かしいな」

雑談をしながらスーパー銭湯へとなだれ込む面々。その数、しめて16人。

広暁とエリオを除いたら美女・美少女で構成される実に眼福なメンバーである。

「何名様ですか?」

「大人12人、子供4人です」

(子供…? エリオとキャロとアルフと… ヴィータ?)

ヴィータは元々大人料金の予定だったのだが、「子供料金の方が安いじゃないか!!」とはやてに言われて渋々了承したのは余談である。

「お。結構種類があるんだな」

「そうですね。凄く楽しみです!!」

広暁とエリオは男湯に興味津々のようだ。

広暁は懐かしさから、エリオは初めての体験に対する興奮から。

2人は女性陣に軽く挨拶をして男湯の暖簾をくぐるうとしたのだが…

「え？エリオ、一緒に入らないの？」

「エリオ君？」

…そうは問屋が卸さなかった。

フェイトとキャロが微妙に悲しい顔になっている。

ついでに手招きをしている。

悲しい顔で手招き…正にパラドックス。

「え、あ、いえ、あの、その……」

「私達は家族なんだよ？家族が同じお風呂に入っても全然大丈夫だよ？」

「そうだよ、エリオ君。私もフェイトさんも、エリオ君と一緒に入りたいんだよ？」

「その、僕は男ですから…」

(そういえば、何歳かまでは男も女湯に入っていていいんだっけ?)

2人共、エリオに裸を見られることに抵抗はないのだろうか?

いや、ないのだからこのような態度を取るのだろうか…エリオはすっかり反応に困っている。

ついでに言うと、広暁の後ろに回り込んで半分だけ顔を出して2人と話している。

正に『恥ずかしさま ツクス!!』状態である。

「エリオは男なんだぞ?色々和多感な年頃だし、一緒に入るのは止めといた方がいいって」

「うう…広暁もエリオに味方するの?」

「エリオの意志を尊重したと言って下さい」

「お兄ちゃんのいけず…」

(キャラ口…どこでそんな言葉を覚えたんだ…?)

広暁の言葉に2人はまだ納得していないようだが…広暁はそんな2人を尻目に男湯の暖簾をくぐる。

エリオもそんな広暁の後をそそくさとして行く。

それを見送る2人の視線が珍しく非難がましいものであったことを、ここに追記しておく。

「うう…」

「ありがとうございました、お兄さん」

「いってことよ。エリオも大変だな」

男2人は服を脱いでいた。服を脱ぎながら、広暁はエリオに銭湯でのマナーを教える。

「タオルは巻くなよ？それが銭湯でのマナーだからな」

「ちょっと恥ずかしいですね…」

男同士とはいえ、タオルを巻かないことにエリオは抵抗があるようだ。

六課の風呂ではエリオはそんなことはしないのだが、ここは初めてくるスーパー銭湯。

初めての場所なら当然周りには知らない人ばかりであり、そこからくる恥ずかしさがあるのだろう。

（どんなお風呂があるんだろう？）

エリオは広暁の説明を聞きながらも、初めての体験に心を躍らせていた。

そして、チラリと広暁の方を見る。

（お兄さん…筋肉質になってきてる…？）

エリオが見た広暁の肉体。

ほぼ毎日風呂では見ているが、このように改めて見て気付いたこと。それは、段々と広暁の体が筋肉質になってきているということだ。無駄な脂肪が無いなどという戯言ではなく、細マッチョなどという世迷言でもない。

マッチョには遠いものの、広暁の体は段々と戦闘用のそれに近づいているのだ。

……チラリ。

「…ハア」

「どうした？溜息なんか吐いて」

「いえ…お兄さんの体、ガッチリしてていいなあと。僕はこんなですから…」

「お前はまだ10歳だぞ？第二次性徴期も来てないのに筋肉つけてもいいことないって」

「第二次性徴期…ですか？」

「男は大体12歳前後から来るけど、そこで一気に背が伸びるんだよ。」

それが来る前にトレーニングして筋肉付けると背が伸びなくなる。例えば、4年後にキャロより背が低いなんて嫌だろ？」

「…それは嫌ですね」

「だろ？今はまだ無理しなくていいんだよ。身の丈に合ったことをすればいいんだ」

「はい！！」

広暁の分かりやすい説明も相まって、エリオは素直に広暁の言葉を受け止めた。

男のプライドなのか、キャロより背が低いのは嫌らしい（現段階では若干エリオの方が高い）。

そうこうしているうちに、2人はほとんどの衣服を脱ぎ終えた。後は下半身に着ている下着を脱ぐのみ。

そして、広暁が下着に手をかけようとしたところで…

ガラッ！ 「おじやましまゝす」

ガシッ！！ 「えっ！？」

クルッ！！ 「ていつ！！」

噂をすれば影。

広暁は瞬時にエリオの頭を掴んでそのまま90度回転、キャロから頭を逸らせる。

ついでに自分の顔も背ける。

「キャ、キャキャ、キャ…キャロ！？どうしてここに！？」

「え〜と…エリオ君が来ないから私が来たの。11歳以下なら女の子でも男湯に入っていいたって」

「……逆もまた然り……」

キャラロは2人の行動に若干戸惑いつつもしつかりと現状を正確に伝えた。

エリオはまだ戸惑っているが、広暁は落ち着いているのか冷静に対応する。

「キャラロ…ちゃんとタオル巻いてるよな？」

「はい。男女一緒に入るならタオルを巻くようにって係の人に言われませんでしたけど…外した方がいいですか？」

「いや、ちゃんと巻いててくれ」

（お、お兄さん！どうしますか！？）

（…諦める。キャラロは戻る気が無いみたいだし）

（ですよねー…）

（それと、ちゃんとタオルは巻くようにな）

（…はい）

色々脱衣所で騒動があったものの、3人は体を洗って湯船に入る。まずはスタンダードに普通の浴槽からいくようだ。

「あ……………」

「気持ちいいですね……………」

「そうですね……………」

3人は足を伸ばして見事に脱力している。六課はお風呂なので、当然その正体は湯。しかし、ここは温泉。

そのお湯に隠される数多の成分が3人の体を確実にほぐしている。

「何か不思議だな……………」　ボソッ

「お兄さん？どうしたんですか？」

「ああ…………ちよつと感慨にふけてた」

「感慨…………ですか？」

「アルバイトから帰ろうと車に乗ったらミッドチルダに飛ばされてガジェットに襲われてたら六課に助けられて保護されることになって。て。

魔力の素質とホルスのおかげで民間協力者として働くことになって。任務の一環で俺がいた地球とは別の地球に来ることになって。俺がいた世界じゃあ、確実に出来ないことだなと思ってさ。

『事実は小説よりも奇なり』ってやつかな」

「お兄ちゃんがいた地球にも、魔法はないんですね？」

「俺の知る限りでは、な。ファンタジーのそれとは別物だろうし」

風呂に入ることまで心が緩んだのだろう、広暁が自分の心情を語り始めた。

自分が世間一般で言う普通の道を歩んでいたらまず足を踏み入れることのなかった世界。

今、広暁はその道のりを歩いているのだ。

終着点があるかどうかはわからない。

しかし、終着点を決めることは出来る。

「俺がいた地球に帰れるかどうか、それはまだ分からない。

だから、俺はミッドチルダで魔法のことをもっと学びたいんだ。少なくとも、管理局の魔導師として認められるぐらいにはな」

「お兄さんなら大丈夫ですよ！」

「そうです！それに、お兄ちゃんには私達がついてます！！」

広暁の決意表明ともとれる言葉を、2人は笑顔で肯定する。

その屈託のない笑顔に広暁も癒されたのか広暁の頬が緩んだ。

「そうだったな。よろしく頼みますよ、先輩方？」

「えっ！？せ、先輩ですか！？」

「ミッドチルダにしる魔法のことにしる、2人の方が俺よりは上だろ？だから先輩」

「私が、先輩…お兄ちゃんの、先輩……ウフフフ………」

「……………あれ？」

エリオは驚いて赤面するだけなのだが、キャロは怪しい笑みを浮かべている。

いや、精神というか魂がトリップしかけている…のか？

横顔を見た広暁は昔テレビの特番で見たどっかの山の痛い人だかステテコだかを思い出したが、すぐに気を取り直してキャロを正気に戻す。

「キャロ？キャロ!？」

「…ハッ!？ご、ごめんなさい…」

「すまん、冗談が過ぎたみたいだ」

「お兄さんでも冗談を言うんですね」

「人を堅物みたいに言わないでくれ…」

ウーンと広暁は両手を上に伸ばして伸びをする。

デスクワークをした後にやっても気持ちいいが、風呂の中でやるとまた格別だ。

「さてと…俺はサウナにでも入ってくるかな」

「私達は外の子供用露天風呂に行かない？」

「そつだね。じゃあ、お兄さん」

「おう。気をつけてな」

ザバン。

3人は浴槽を出てそれぞれの目的地へと向かう…。

「まったく、キャロつたら…」

「アハハ。子供の特権やな」

女風呂に行ったメンバーも、それぞれ様々な湯を楽しんでいた。ヴィータが暗い表情になったり呪詛を呟いていた様な気がするが多分気のせいだろう。

「キャロは広暁にも懐いてるからな」

「そつだね。私としては嬉しい限りだよ」

「ん？どついつ」とや？」

ズイツ。

フェイトの言動に気になるところがあったのか、はやてが尋ねる。その目に修羅を宿しているような気がするが、フェイトはそれに気付かないのか言葉を返す。

「キャラもエリオも、人に甘えたり懐いたりすることが今までなかったからね。」

広暁君はそのきっかけを作ってくれたんだもの。お母さんとしては嬉しい限りです」

「自分で言う分にはいいんやな？」

「うっ…。だってまだ恥ずかしいよ」

(当たり前…じゃなさそうやな。だけど念のため…)

「フェイトちゃんは広暁のこと…どう思う？」

「うん…エリオとキャラにきっかけを作ってくれた人かな？私は感謝してるよ」

「そういうことやなくて。広暁自身のことや」

「色んなことに鋭くて頭の回転の速い人？ちよつと羨ましいかな」

「それは広暁に対するフェイトちゃんの評価やろ。」

フェイトちゃんが広暁のことをどう思ってるかってことや」

「うーん…仲の良い男友達…じゃないか。お兄ちゃんみたいなのかな？」

「お兄ちゃん？クロノ君みたいな人ってこと？」

「真面目でちょっと頭が固くて、それでいて人に好かれる人。広暁と話してるとお兄ちゃんと話してる感じがするの。」

お兄ちゃんが遊びを覚えたら広暁みたいな感じになるんじゃないかな？」

「そっかー…」

「それがどうかしたの？」

「何でもない。ちょっと気になっただけや」

「ふーん？」

(フェイトちゃんにとって広暁は、気軽に話せて頼りになる人…ってところか。

恋愛感情を持ちそうにないからええんやけど…。

こんなにも早くフェイトちゃんを落とすなんて、広暁…恐ろしい子！！！)

「ヘックシュ！」

サウナに入っていた広暁はくしゃみをした。

「サウナでくしゃみ？何故に？…縁起が悪いな、そろそろ出るか」

「ヘックシュ！！」

子供風呂に入っていた2人は同時にくしゃみをした。

「お風呂に入ってるのにくしゃみ？」

「外の空気に当たり過ぎたのかも。キャロ、そろそろ出よつか？」

「そうだね、エリオ君」

「ヘックシュ！」

聖王教会領の自宅で湯船に浸かっていたカリムはくしゃみをした。

「風邪？誰かが噂をしている？…いえ、もっと恐ろしいことが起きているような…？」

カリムは嫌な予感を拭うことが出来なかった。

第24話「地球編2」（後書き）

24話、いかがだったでしょうか？

前半は広暁の性格を再認識する話、後半はお風呂の話でした。

最近広暁の性格がずれてきたような気がするので、確認するために
も書きました。

サジタリウスがよく喋るのは…こういう性格だからですね、うん。

『考える』

人間の特筆技能であり生きていく上で何より必要な力…難しいです
ね。

では。感想、意見、間違い訂正 e t c、お待ちしています。

第25話「地球編3」 (前書き)

第25話です。

今回は…いや、読んでもらった方が早いですね。

第25話、始まるよ

!!

第25話「地球編3」

サウナで異質な寒気を感じた広暁は一足先に湯からあがっていた。女性組はまだ誰もあがってないようであり、湯の傍にある休憩室には誰もいない。

「どうすっかな〜…おっ、あれは？」

時間をつぶす方法を模索していた広暁の目に映ったのはマッサージ機。

別に体が凝っているわけではないが、そんな状態じゃなくても風呂上がりなら気持ちいい。

スルスルとマッサージ機の方へと歩んだ広暁は、モードを「しつかり指圧」にして座る。

「ふああ…何か眠くなってきた…」

心地良い指圧が風呂上がりの体に染みるのか、広暁は睡魔に襲われ…

ワーワーワーワー！！

「んっ…ん〜。何だ？」

何かの音で目覚めた広暁の視界に飛び込んできたもの、それは…

「だぁ！これでシグナムの7連勝かよ！！」

「さて…次は誰だ」

卓球台の前でくやしがるヴィータと得意げなシグナムであった。

この休憩室、実は卓球台もある。

どうやら広暁が眠ってる間に湯からあがってきた六課のメンバーが卓球をやっているらしい。

「次は私が行くよ！！」

「テストロッサか…いいだろう」

ヴィータがシグナムに負けたようであり、次に名乗りを上げたのはフェイト。

フェイトのサーブから試合は始まり…

「5 - 3で私の勝ちだな」

「ハア…ハア…負けた…」

「…ふう。中々やるな、テストロッサ。良い勝負だったぞ」

激戦を制したのはシグナムだった。

オレンジのピンポン玉が卓球台を目まぐるしい速度で移動する卓球。元々2人が何かと速いこともありゲームは早く終わったのだが、3ポイント取れただけフェイトも凄いということだろう。

「次は誰が私とやるのだ？」

「にははは…私は遠慮するよ」

「ぼ、僕もいいです…」

「シグナムって卓球こんなに強かったかな？」

会話から推測するに、どうやら5ポイント先週の勝ち抜き戦らしい。負けた方は交代し、勝った方は残るといふ方式だろう。

（体育の授業でよくやったな…）

感慨にふけっていた広暁だが、そうは問屋が卸さない。猛禽類が獲物を見つけた時の様な目でシグナムがこちらを睨んでいる。

「起きたか、広暁。お前はどうか？」

「ん〜…OK」

マッサージ機から立ち上がった広暁は卓球台へと移動する。ラケットはペンとシェイクの2種類のうちシェイクを選択。その後、屈伸やアキレス腱伸ばし、軽い柔軟運動をした後シグナムと相対する。

「さて…お願いします」

「お前が強いことを願っているぞ…!!」

どうやらシグナムの『バトルマニア』は勝負事なら何でも発動するらしい。

その気迫にシグナムは少し気圧されたが、体勢を立て直してシグナムを見つめる。

「サーブは？」

「サーブは常に挑戦者からだ」

「ならありがたく」

ラケットを器用に回した後、広暁はサーブの構えを取る。

（卓球か…確か夏に卓球部の奴とやって以来だな…）

ポ　　ン…

左手でピンポン球を高く上げ…

カン！！

右手に持ったラケットでスライス回転がかかるように…切る！！

自分のコートで跳ねた後シグナムのコートについた球は、広暁の狙い通り右側に曲がる。

しかし、相手もさすが。

シェイク特有の両面使用により、シグナムは裏面を使ったバックハンドで広暁のバックに返す。

カン！！

広暁もそれをバックハンドで返す。ドライブがかかった球は逆クロス、シグナムのバック側に。

「くっ…！！」

カン。

さすがのシグナムも逆サイドに逃げる様なドライブをまともに返すのは難しいらしく、返された球はロブとまではいかないまでも山なりに飛ぶ。

広暁はそれを好機チャンスと捉え、山なりに飛んできた球を正クロス…

カン…

「なっ！？」

ネット際に落とした。シグナムもこれには意表を突かれたのか、反応が遅れてしまう。

しかし、そこは烈火の将。見事なフットワークと反射神経で球を返す。

「オラア！！」

だが、これこそが広暁の狙い。

球を打ち返すために前のめりとなったシグナムは、体制を立て直すために体を戻す途中。

広暁はその隙を狙い、渾身のスマッシュを右サイドに真っ直ぐ叩き込んだ。

シグナムはそれに反応することが出来ず、飛んで行った球は壁で跳ね返って戻ってくる。

「ウシッ！！」

「まさかあそこでネット際に落とすとは…」

「馬鹿正直に打っても返されそうな気がしたんで」

「フフフッ…」

「クククッ…」

2人は何ともいえない雰囲気を醸し出している。

シグナムはともかく、広暁のこんな顔を見るのは初めてなのか、他のメンバーは若干引いている。

「広暁君…何か怖いね」

「シグナムはともかく…なあ？」

「お兄さんのあんな顔、初めて見ました」

なのはの言っていることは尤もで、はやてはちょっとひどいことを言っているような気もするが、今の2人には聞こえていないようだ。ギャラリーには真っ赤な炎を全身から出しているシグナムと黒炎を見に纏う広暁が見えている。

そう言えば某テニヌのアニメもこんな感じだったような…気のせいだろう、うん。

「ああ、サービスは1本交代なんだな。次は私だ」

「OK」

足元に転がっていた球を拾ったシグナムはサービスの構えを取り…

「俺の勝ち…だな」

「クッ…この私が負けるとは…!!」

余裕の顔で立っている広暁と、とても悔しそうな顔で地に伏しているシグナム。

この現状から分かる通り、試合結果は広暁の勝ちだ。しかも5 - 2で。

「まさかシグナムが負けるとは…賭けは私の負けやないかー!!」

「…ちょっと、はやてさん。あなたは一体何を仰ってるんですか」

「いかん、つい口走ってもうた!

まさかシグナムと広暁どっちが勝つかにお金を賭けてたなんて口が裂けても言えへん!!」

「……これ、現実だよな?」

「…諦める。これが現実だ」

マンガで見る様な展開ではやてが自白したので、広暁は現実と非現実の境界を見失いそうになった。

しかし、シグナムに言われて何とか現実に戻る。

「まあ、賭けごとやるなんてこんな機会ぐらいしかあらへんからな。息抜きは大事やで?」

「…フェイトはいいの? エリオとキャラコの教育上」

「うーん…遊びも大事だし、綺麗なところだけ見てたら将来辛いだろっし…」

「…まあ、いつか」

ちなみに、広暁に賭けていたのはエリオとキャロだけだったらしく、2人が総取りした。賭け金？1人1000円だ。

「…敗者は潔く去るとしよう。広暁は残っている」

「え？まだやるの？」

「さつきも言ったが負けたら交代だからな。ここにいる全員に勝っても交代だ」

広暁がその全員を見渡すと、卓球をやる意欲がありそうなものが2割。残り8割はやる気が無い…というか、今の試合を見て戦意喪失に近い状態に陥っているようだ。

「まあ…いつか。じゃあ、次は誰？」

「ほな、私が行くで」

出てきたのははやて。

浴衣姿が色っぽい19歳の部隊長だが、今の広暁にそんな物は目に映っていない。

ただ戦う相手を見据える、そんな感じた。

「ほな…行くでー！」

カン！！

「5・0で俺の勝ち…」

「ハアハア…広暁、あんた強過ぎるで!？」

「いや、何というか…。まあいいや。次は誰？」

「私は無視!？」

「じゃあ、あたしが行くぜ!！」

「ヴィータか…」

「5・0で俺の勝ち…」

「ハア…ハア…汚ねえぞ、広暁!あんなに左右前後に振りやがって
!！」

「戦術に汚いって言われても…。まあいいや、次は誰？」

「私が行こうかな」

「アリサ？卓球出来るの？」

「舐めてもらっちゃ困るわ。こっつ見えても幼馴染、sの中では一番上手いのよ」

「5 - 1で俺の勝ち……」

「ハア…ハア…。何であんたそんなに上手いのよ！？」

「うーん…慣れ？」

「慣れってなによ慣れって！！」

「慣れは慣れです」

「ワーワーギャーギャー！！」

「お兄さんて卓球強いんですね。初めて知りましたよ」

「お兄ちゃん、運動神経がいいのは知ってましたけど……」

「うーん…何でだろうね？フェイトちゃん、分かる？」

「多分だけど…広暁、ソフトテニスやってたらしいじゃない？」

「確かにそうだけど…それがどうかしたの？」

「中学校の時体育でやった卓球を思い出したんだけどね。」

強いのは卓球部の子だったけど、その次に強いのがソフトテニス部の子だったような気がするの」

ここで1つ、思い出して欲しい。

体育の授業等で卓球をやる時、強いのは当然卓球部の人だ。

しかし、その次に強いのはソフトテニス部の人だったであろう。

陸上部のように、運動神経の良い人が陸上部員の短距離走のタイムを抜くことはある。

しかし、ラケット系の競技は技量を問われる競技。

ひとえに経験値と技量の差が出る。

その中でもソフトテニスをやっていた人は、テニス・バドミントン・卓球等の全てのラケット系競技において平等の真価を發揮する。

何故なら、ソフトテニスは全てのラケット系競技に対応出来るスポーツだからだ。

ましてや、広暁は高校時代ソフトテニスで全国ベスト8まで行った実力者。

いくら運動神経がよくても、経験者でもない限り広暁に勝つのは難しいのだ。

「このまま広暁が勝ってもおもしろいな…広暁！」

「ん？」

「私と一つ、賭けをせーへんか？」

「内容次第だな」

「そこは素直に乗ってほしかったんやけど…まあええわ。賭けの内容は簡単。」

「今から広暁が10人抜きしたらうちが広暁に…せやな、1万円払う。もしも広暁が負けたら、広暁が私達にまとめて1万円払う。どや、結構おもしろいやろ？」

「…で、ハンデは？」

「…もう少し人を信じてもいいと思うで、広暁」

「性分なんで。それで？」

「…広暁は全体を通して5ポイントまでなら点を取られてもええ。広暁ならこれぐらいのハンデで十分やろ？」

「それはさすがにきついな。1人2ポイントまでは猶予が欲しい」

「何や、怖気づいたんか？」

「どう解釈するかはそちら次第」

「ぐぬぬ…!!」

「はやく相手にここまで口で張り合う人間を見たことが無いのか、六課の面子は驚いているようだ。」

アリスとすずかは苦笑いしているが…もしかして心当たりがあるのだろうか？

はやてとここまで口で張り合う人間に。

「だったら1人1ポイントまでや。これ以上は私もまけれへんで」

「交渉成立だな。俺は10人抜きすれば1万円。1人1ポイントまでなら点を取られてもOK」

「そして、広暁が1人に2ポイント以上取られたらその時点で私の勝ちや」

「クククツ……」

2人共黒い笑みをもらし、背後からどす黒い空気が漏れているような気がするが……このことに全員気付いていながらも誰も突っ込まないのは、それが彼女達の領分ではないからだろう。

腹の探り合いや頭脳戦は彼女達の本文ではないのだ。

そんなことを言ったら広暁にもそれが適用されると思われるかもしれないが、広暁は性格的にも経歴的にもそうゆうのが得意であり経験値も多いので、その限りではない。

(あらあら…これは面白くなってきたわね

ヴォルケンリッターの参謀としてしっかり見届けないと)

…シヤマルを除いて。

「最後に1つ、確認したいんだけど」

「何や？」

「日本のお金つてミッドで換金出来るのか？」

「出来るけど…何や、勝負が始まらんうちから勝った時のことを考えてるんか？」

「念のためだよ、念のため。で、最初は誰にする？」

「だったら私がいこうかしら」

「シヤマル？大丈夫か？」

「まあ、見てなさいって」

シヤマルはラケットを片手に前へと出る。

金髪美人のボブカットの浴衣女性…いつもの広暁なら多少は見惚れただろうが、今の広暁は戦闘…ではなく試合を前にした1人のスポーツ選手。

例えシヤマルを上記の通りに認識しても、それが試合に関係しなければほとんど気にしない。

広暁はただ冷静にシヤマルを見据え、その一挙手一動作をつぶさに観察する。

「じゃあ、サーブは私からいくわよ」

「どござどござ」

(私じゃ広暁君には勝てないし、ここは試合を長引かせて出来るだ

けデータを得ましょう。

打つコースを変えれば癖や得意不得意も分かるでしょうし)

ポ　　ン……

人はそれを………

カン!!

「オラア!!」

カン!!

「キャイン!？」

ズボツ!!

死亡フラグという。

「5 - 0で俺の勝ち、だな」

「ハア…ハア…：負けた　　！！」

「シャマル…：あんた、何がしたかったんや？」

「大方、俺の苦手なコースとか癖とか見つけたかったんじゃないの？」

「…その通りです、はい」

「それは相手が分かっていたいなければの話だと思っただけ……。俺がそれを表面に出さずにいたとは考えなかった？」

「だって広暁君、卓球上手いじゃない…：そんなこと考える必要もないって思うわよ！」

「スポーツである以上考えるのが普通だつて。

何も考えずに戦うなんて、猪じゃあるまいしそんなことしません」

ギクツ！！

広暁の言葉に何故かなのはとスバルが反応したが、広暁はスルーする。

ぶっちゃけ突っ込んででもはぐらかされそうなので。

「次は誰？」

シ　　ン……

今の試合を見て広暁の雰囲気呑まれたのか、誰も出て来ない。何故なら、少しでもミスする可能性のあるショットは打たなくして、試合を繋げて相手のミスを誘う戦術に切り替えたからだ。その策の結果、シャマルは1ポイントも取れずに疲労困憊で倒れている。

それに対して広暁が「普段からちゃんと鍛えないからこうゆうことになるんだぞ」と説教している。

筋トレは大事なのだ。

「…私が行くよ」

シャマルが何とか立ち上がって戻ろうとする途中、なのはが手を挙げた。

「はい、球」

ポポポポ　ンー！！

（何、今の効果音？…まあいつか。広暁君強いし、適当にやって負けようかな…）

…変な効果音はともかく、なのははやる気が感じられない。広暁もそれに気付いているようで、ちよつと顔を顰めている。やる気がない相手と戦っても面白くないし、勝っても気分が良いものではないのだ。

「なのはちゃん？」

「何？はやてちゃん」

「もし手抜いたりしたら…」

ギクツ！

「抜いたりしたら…？」

「…夜道には気いつけや。

背後からいきなり…何者かに（主に胸を）襲われるかもしれへんで……？」

シュタツ！！

「さあ、広暁君！全力でいこうか！！」

「……………（突っ込んだら負けだな、うん）」

なのはが覚悟を決め広暁も考えるのが面倒臭くなってきた時。

キュイイイーン！！

「はやてちゃん！」 「フェイトさん！」

クラールヴィントとケリユケイオンにロストログアの反応が表れた。

「1万円…」

「お兄さん、その…」

「今は目の前のことを…」

「…了解」

ロストロギアの反応が出た後の六課の行動は迅速だった。まずはシャマルが探索魔法でロストロギアの詳しい位置を特定し、その周囲に結界を張る。場所は2か所だったのでスターズとライティングに分かれて向かうことになった。

その2か所は埋め立て地の工場街と山の中の開発地区。

広暁は卓球に未練たらたらだが、年下2人に諭されて気持ちを切り替える。

そして、ライトニングであるエリオ・キャロ・広暁は山の中の荒地に行き、そこで見たものは…

ポヨヨ〜ン… ポヨヨ〜ン… ポポポポ〜ン…（！？）

「何でしょう、これ？」

「ちよつと…可愛いかも」

「スライムモンスタートークン…？」

丸くて水色のゼリー状の塊であった。

某RPGゲームに出てくるスライムに似てなくもないが、広暁には永続魔法「スライム増殖炉」によって生み出されるモンスター「スライムモンスタートークン」の方がしっくりくる。

それらが群れとなつて跳ねており、その様はある種の癒しの光景のように見えなくもない。

「これを全部倒せばいいのか？」

『もしも〜し？』

「はやて部隊長」

『そのロストログアのことなんやけど、元々は1個の本体だけや。

そいつが分裂してそれだけの数をなしてるんやけど、本体さえ叩けば分身体は消えるで』

「本体の特徴は？」

『特徴は分らんけど、そっちにいるのは全部同じ反応が出てるか
ら全部分身体や。』

だから全部倒してからスターズの方に向かってな』

「了解」

『ロングアーチと隊長陣は上空で待機してる。ライトニングは任せ
たで？』

ブッン！

「2人共、話は聞いてたな？」

「はい！」「」

「念のため少し距離を取る。その後俺が攻撃。」

エリオは遊撃体勢、キャラはバックスで援護体勢だ」

「了解！」「」

モニターではやての話を聞いた広暁は、エリオとキャラに的確に指
示を出す。

今回の仕事は新人フォワードに任せることになったらしく、他のメ
ンツは上空で待機のようにだ。

「まずは3本……」

広暁は瞬時に矢を生成、その数3本。
それらを全て指の間で挟み、スライムの方に向ける。
そして…

シューイン！ シューイン！ シューイン！

ドガアアアアン！！！！

3本の矢はそれぞれスライムの群れに命中、爆発が爆発を呼んで大きな1つの爆発となる。
煙が晴れた時に彼らが見たのは、水色のゼリーが無数に散らばった光景であった。

((3本も一気に放てるんだ……))

マンガやゲームではよく弓使いがやっているが、実際出来ないこともない。

どっかの映画ではエルフのかっこいいにーちゃんが3本同時に放っていたのだし。
もっとも、広暁も実際にやった時は「出来るもんだな…何故に？」と言ったが。

「案外：あっけなくない？」

「そうですね…ってお兄さん、後ろ！？」

エリオが凄い顔で叫んだので振り返ると、そこにはウネウネと動くスライムの残骸が。

気持ち悪いと広暁が思っていると、それらは段々とくっついていく。
当然、このあとの展開は…

「ホルス！」

「キュイ！」

『ブラック・メガフレイム』

ポオオオオオオ！！

ジュワアアアアアア……

…正にフラグブレイカー。ホルスが吐いた炎はスライムを纏めて飲み込み、蒸発させた。

何故ホルスがいるのかって？元々リムジンの中にいて一緒に出動したのだ。当然フリードもいる。

「お兄ちゃん、速過ぎます……」

「キュクル……」

「一々合体するのを待つ義理はないしな」

自分達の出番が無いことに多少悲しみを感じたのか、キャロがぼやいた。

エリオも似たような顔をしており、何のために僕はここにいるの？といった感じだ。

ところが……

「マジ……？」

広暁が見たのは、気化したスライムが気体から液体(?)になる光景。

段々とそれらは数が増え、また元の形へと近付いていく。

シユイン！

ドガアアン！

広暁が矢を放つてその体を分かつも、またスライムはくつつく。

広暁もこれ以上の攻撃は無駄と判断したのか、この後のことを考えながら静観することにした。

そして合体が終わり、また最初の状況に戻ってしまった。

「キャロ、捕縛だ」

「はい！！」

『アルケミックチエーン』

反撃も考えてキャロをいつでもカバー出来る位置に移動したのだが、反撃してくる様子は無い。

どうやらスライムに攻撃本能は無いようだ。

キャロの詠唱と共にスライムの足元(?)にピンク色の魔法陣が複数出現、そこから数多の鎖が伸びてスライムへと向かう。
しかし…

グニョニョニョ……

「おいおい……」

鎖はスライムの体を通り抜けた。

というより、鎖がスライムの中に埋まった。

見た感じは鎖がスライムを突き抜けているようで若干目の毒だ。

「エリオ、思いっ切り電気を流して」

「了解！」

エリオは自身の魔力変換資質「電気」を活かし、ストラーダに電気を帯電。

スライムに特攻、ストラーダを突き刺す。

「唸れストラーダ！」

バチバチバチバチ！！

電気の放電にスライムはその体軀を揺らし、放電された電撃を受けたスライムも同様の反応を取る。
しかし…

ポヨヨヨ ン…

「くっ…効果無しです！！」

シュイン！ シュイン！

ドガアアン！ ドガアアン！

攻撃に矢を放つが、爆発して体の破片が飛んでもまた合体する。

一体どうすればいい？広暁は考える。

（今まで勉強した限りだと、こつゆつタイプは動きを止めるか再生するためのコアを破壊するか…はやて部隊長が言ったように本体を叩くしかない。

動きを止めても意味無いし、再生するためのコアも無いみたいだし…んー…）

ポヨヨーン…

ニヘラニヘラとしたような表情をしたたくさんのスライムが広暁達を見ている。

正直腹が立つが、広暁はその怒りにそつと蓋をして冷静に考察を続ける。

（最初に全部ぶつ飛ばしてそのあと再生しそうになったのをホルスの炎で蒸発。

それがくっ付いてまた元通りに…ん？）

広暁は疑問点を見つけたのか、目の前のスライムとさっきぶつとばしたスライムを思い出す。

（体積が…最初見たよりも小さいスライムがいる……？
…なるほど、可能性には十分有り得るか）

「エリオ、キャロ。今からスターズの方に向かってくれ。でかいのをあれに放つ」

「お兄さん!？」

「どういうことですか!？」

「あいつは体が破壊されてもまた戻る。

だけど、ホルスの炎をくらう前と後とでは後の方が体積の小さいスライムがいる。

となると、炎で蒸発して大気中に霧散した体の分体積が減ったって
いう仮定が出来る」

「じゃあ、今からお兄さんがすることは…」

「こいつらを広範囲に拡散するようにバラバラにする。

キャロ、あいつらの周りを囲むように簡易的な結界を張つといてくれ。

逃げることはないと思うけど念のためにな」

エリオはそのような技は持ってないし、キャロも同様。

ホルスの炎では一旦は消すことは出来てもまた再生され、フリードも同様。

となると、残されたのは広暁の矢のみ。

「2人はここから結構離れてるから、万が一俺の魔法で何か起きてもそつちまで被害は及ばない。

だったら封印が出来るキャロがスターズの方に向かった方が効率がいい。

エリオはしっかりキャロを守れよ?」

「…分かりました!」

「お兄ちゃん、無茶しないでね!？」

「キユクルー!」

「OK」

シユイイイイン…!!

エリオはすぐに駆けだし、キャロも結界を張った後すぐにその後を追う。

ホルスは広暁と共にいるが、どうせ言ってもホルスは離れないだろうし、広暁も言うつもりはない。

信頼する相棒が共にいた方が広暁にとっても精神的にはプラスになるからだ。

「…いくぞ」

『了解』

「キユイ!」

広暁は空に向けて飛び立つ。スライムはその姿を目(?)で追っているようだが逃げる様子はない。

もっとも、キャロが張った結界のせいで逃げることは出来ないのだが。

『ここまで放れば十分でしょう。結界も有りますから周りに被害も及びません』

広暁はその場で跳ぶのを止め、スライムの方を見やる。

「ホルス」

サジタリウスをホルスに渡し…

パン！！

己のプリシヨット・ルーティン。指を上に向けた両掌を、音を立てて合わせる。

「いくぞ、サジタリウス」

『はい』

パシッ！

サジタリウスを受け取った瞬間、広暁の足元に黒色のミッドチルダ式魔法陣が浮かび上がる。

そう、今回広暁はデバイスであるサジタリウスと初めて共にまとめた魔法を使うのだ。

（空气中の魔力素をリンカーコアで魔力に変換…）

魔法というのは大きく3つに分かれる。

1つ目は魔力をそのまま放つものであり、術式も魔法陣も必要ない。単純に魔力を放つだけなので攻撃が主だ。

2つ目は魔導師が自分で術式を構成して魔法を発動するもので、これも魔法陣は必要ない。

デバイスが術式を構成することも可能だが、デバイスの処理能力を考えたらこれは非効率的だ。

そして3つ目こそ今回広暁が行う魔法、魔法陣を使用するものだ。使用魔力量・効果・指向性等を図式化しておくことで、魔法陣を参照するだけで魔法を発動出来る。

魔法陣の形や模様は魔法形態や魔導師毎に特徴があるため、使用する魔法や形態を特定されてしまうのが弱点だが、発動も早く安定しているので、現在ミッドチルダでは最も普及しているタイプだ。

（殲滅：破壊：速度上昇…）

破壊というだけでは物足りない。

着弾点に大爆発を起こし、攻撃対象を爆散する矢。

サジタリウスから放つことで、それは更なる速度と破壊力を得る。

（魔力を矢に集束…サイクルを繰り返す…）

広暁が右手に構えた矢に、更に魔力が集束される。

総魔力量でなのはやフェイトに劣る広暁が何故これだけの魔力を収束出来るのか？

それは、広暁の資質が物語っている。

矢生成時における魔力集束量と複数同時制御、そして魔力の扱いそのものに対する資質。

そう、広暁は、魔力の制御能力では彼女達2人に勝っているのだ。つまり、

リンカーコアで魔力素を魔力に変換　　広暁の総魔力量で作ることが出来る魔力を生成

魔法陣を介して矢に収束

このサイクルを繰り返すことで、これ程までに魔力を集束した矢を生成することが出来る。

発動自体に膨大な魔力を必要とする魔法ならともかく、今広暁が行っているのは唯の狙撃魔法。

瞬間的に放出出来る魔力量の上限である『瞬間最大出力』量の魔力を集束するだけなら、サイクルを繰り返すことも十分に可能だ。

これによって体に負担がくるが、日々体を鍛えている広暁には大して堪えない。

体を鍛えることは魔導師にとって大切なことであるが、広暁はそれを今まで地で行ってきたのだ。

(体全体を魔力で強化…)

自身の技の反動に耐えるため、広暁は魔力で体を強化。矢を構え、攻撃対象であるスライムの方を見る。

『張力強化、反動防止。伏角30度』

(うまくいってくれよ…!!)

瞬間。

広暁の手から。

矢が放たれた。

第25話「地球編3」 (後書き)

これが…第25話です！

前半は広暁無双。

広暁はソフトテニス部ですが…私の経験上、ソフトテニス部は卓球が強いんですね。

そりゃあ本職の方には負けますが、遊びでしか卓球をやらない人間が集まって卓球をやるとソフトテニス部出身者が無双をしてしまうという…。

そんなこんなで書きたくなって書いてしまいました、すみません。

後半は対ロストロギア戦。

普通の漫画なら最初の爆発の後復活するのを見てるでしょうが…広暁はそんなことしません。

彼はちゃんと現実を見てますから。

そして、第25話にしてようやく広暁がオリジナルの魔法を使います。

私なりの解釈が多々含まれていますが、ご容赦下さい。

あ、ちゃんと技名は決まっていますよ？

では。感想・意見・間違い訂正 e t c、よろしくお願いします

第26話「地球編4」(前書き)

第26話です。

今回は後書きで広暁の魔法の説明をしますので、後書きもしっかり読んで下さいね？

では。第26話、始まるよ !!

第26話「地球編4」

「お？広暁が何かやるみたいやな」

上空でスターズとラインニングの動向をモニターで見ている隊長陣。スターズは本体を発見したはいいものの、その封印方法が無いため困っていた。

そこでキャロに連絡しようとしたころ、キャロからそちらに向かっていてという念話が入ったのだ。

一連の流れに感心し、彼女達は広暁へと視線を向ける。

「魔法陣の特徴からして…砲撃魔法？」

「かなりの魔力量…広暁に制御出来るかな？」

「広暁は器用やからな。

制御能力と総魔力量に占める瞬間最大出力の割合でいったら2人より上や。

だからあんだけたくさん魔力を何回も作り出して制御出来る。

今は2人共経験でそれを補えるけど、後数年経ったらその点では抜かれてるかもしれへんで」

「「うっ……」」

（…はやてもだぜ…）

（主はやて、それはあなたもです）

はやてが言ったことになのはとフェイトはちょっとシユンとなる。

ヴィータとシグナムもそれに苦笑しつつ、心の中でははやてに突っ込む。

「はやてちゃん、チャージが終わったみたいよ」

「そうみたいやな。さて、広暁…ええもん見せてくれよ?」

シャマルの言葉にはやてがそう返した直後。
広暁の手から矢が放たれた。

「ティア、エリオとキャラコがこっちに向かってるって!!」

ティアナとスバルの2人は、数多のスライムと対峙していた。

攻撃してこないとはいえ、これだけたくさんのスライムと対峙するのは精神的にくるものがようで、2人の顔には疲労感が見てとれる。

「もっと早く本体に気付いていればこんなに時間を取ることは...!!」

「今はそんなこと言っても仕方ないよ」

「分かってるわ!!」

ティアナは自分の不甲斐なさに言葉を荒くする。

元々ティアナはこういったところあったが、広暁が加わってからそれが顕著になっていった。

それに気付いてるのかいかいのか定かではないが、スバルはティアナを窘める。

「スバルさん!!ティアナさん!!」

そこにエリオとキャラコが到着した。

それなりの距離を走ったのか息を上げているが、その目からはヒシヒシとやる気を感じられる。

「2人共行ける!? 作戦は念話で言った通りよ!!」

「はい!!」

ティアナとスバルは確認を取った後、すぐに行動を開始する。封印処理を施す本体を孤立化し、封印しやすくするためだ。

「エリオ、向かいから回り込んで!!」

「はい、スバルさん!!」

マツハキヤリバーが回転数を上げ、エリオの移動速度も上昇。

ティアナは全体を見据え、キャロは下がって封印のための詠唱を唱える。

「でやああああ!!」

「せいっ!!」

前衛組2人の行動により1体だけ孤立したスライム、それが本体だ。

「クロスファイアー…シュート!!」

ドガガガアアアン!!

ティアナが放った魔法が本体を囲むように着弾、爆発を起こす。

これにより本体は一時的にその動きを止め…

「封印!!」

キャロによって封印された。

「上手くいったね！」

「そうですね…ティアナさん？」

封印が成功したことに対しスバルは純粹喜んでいますが、ティアナは若干苦い顔をしている。

それにエリオが気付き、ティアナに話しかけた。

「…！？ゴメン、ちょっと…」

「どうかしたの？ティア」

「…隊長や副隊長ならもっと早く出来ただろうなって思っ」

「お兄さんは「身の丈に合ったことをすればいい」って言っていました。

今の僕達はまだまだ未熟ですし、隊長達を目標に頑張っていけばいいと思います」

「そう…よね………」

エリオの言ったことに対し、ティアナは渋々ながらといった感じで了承する。

広暁ならそれに気付いただろうが、まだ純粹なエリオはそれに気付かなかった。

『張力強化、反動防止。伏角30度』

(うまくいってくれよ…!!)

「天…創…塵…!!」

『てんそうじん
天創塵』

広暁が様々な人の意見を聞き、サジタリウスが情報を集めて考えた魔法。

火力・殲滅力で劣る広暁が己の欠点を克服するために考えた魔法。それがスライムの群れに一直線に飛んでいく。

た距離で音より先に爆煙を見る、つまり…

「おいおい、まさか…」

『魔力反応完全消滅。天創塵の速度は音速を超えていますね』

「さすがにこれは……計算間違えたか？」

『サイクルを減らして発動までの時間を短くしましょうか？そうすれば放てる本数も増えますし』

「そつちのがいいな。結構体にくるぞ、これは」

『マスターの体だからその程度で済んでいるんです。』

もしティアナが放っていたとしたら反動で吹きとんでいますよ？』

「マジですか」

広暁とサジタリウスにはもう少し状況を見て物事を言ってほしいものだ。

天創塵の着弾地点には巨大なすり鉢状のクレーターが出来ている。

隕石が落ちたと言われても納得の光景だ。

もしこれが街中だったら……考えたくもない。

もつとも、考えても仕方のないことだったりするのだが。

『元々天創塵は堅い相手用に考えた魔法でしたよね？』

「正確には堅くてでかい相手、だけどな。

俺の戦闘スタイルだと、そういう奴以外は応用次第で何とかなる。だけど、堅くてでかいのが相手だと俺の技も速さも活かせない。

そういう相手を爆散するための魔法だ。

それを初めて放つのが、あんなスライムだとは思わなかったけどな」
技術と速度に優れた広暁が、自身の苦手な堅いタイプを相手する時
のために考えた魔法。

術式はなのはの『デイベインバスター』を参考にし、更に『ブリッツ
アクション』の術式を組み込むことで、対象に当たるまでの速度
を上昇すると共に破壊力を上げる（速度⇨破壊力）。
その結果誘導制御は失ったが、遠距離砲撃魔法『天創塵』が完成し
たのだ。

「それにしても…このクレーターは…なあ？」

『シャマル先生の結界は物質再生効果も有ります。大丈夫でしょう』

「それは分かってるんだけど…これを修復するのって結構疲れそう
だな…」

『マスターが気にしても仕方ないと思いますが？マスターが結界を
張れるなら別ですが』

「そうだな…よし、戻るか！」

「キユイ！」

サジタリウスの言葉に広暁は2秒で思考を切り替える。

考えてもどうしようもないことを考えても仕方ないのだ。

「おっす」

広暁がロツジに戻ると、既に広暁以外の六課メンバーは全員揃っていた。

シヤマルが木の下で伸び切っているが…結界を張るのに疲れたんだろっ、うん。

「広暁君！」 「広暁！」

「はい!？」

「さっきの魔法は何!？」

その中の2人、なのはとフェイトが広暁に駆け寄る。

「何って…何て説明すればいいんだ？」

広暁は返答に困るが、それを2人は猛烈に捲し立てる。

その結果、広暁は天創塵の考案に至った経緯からその本質まで全て話すことになった。

「……とまあ、こんなところ」

「自分の苦手な堅いタイプを相手にする時のために…」

「砲撃魔法にブリッツアクションの術式を組み込んだの…？」

「もしかしたらって思ってな。」

調べた限りじゃブリッツアクションは体の動きを速くするための魔法みたいだけどさ、砲撃魔法に組み込めば速度を上げることも出来るんじゃないかって。

速度はそのまま破壊力に繋がるし」

「簡単な物理の公式だね」

すずかの言う通り、速度はそのまま破壊力に繋がる。

時速10kmで走る車と時速50kmで走る車、どちらに衝突された方が怪我がひどいか？

理屈はそれと同じである。

「盲点だったね…私、全然そんなこと考えなかったよ…」

「私も…」

「やっぱり視点の違いやろうな。」

ミッド生まれの人間はブリッツアクションの使い方がそれで当たり前になってるし、私らも地球出身っていつてもミッドで過ごした期間の方が密度が濃いし。

この間まで地球で生活してた広暁やからこそ考えられるんやろうな」

「それでも、ミッドの魔導師が誰か考えてもよさそうなもんだけど

な」

「うん…いるかもしれへんけど少ないやろうな。既存の魔法をそのまま使う方が楽やし。

魔法を組み合わせることはあっても、大概は同系統の魔法や。

砲撃魔法と移動魔法を組み合わせようなんて考える魔導師はそうそうおらん。

発想に至る想像力とそれを実現出来るだけの応用力を持ってなきや無理や」

「ふん…」

はやての言葉に広暁は納得？しつつ、なのはとフェイトの方を見る。顔に影がかかって自己嫌悪に陥っているように見えるが、まあ大丈夫だろう。

俺なんかよりよっぽどの2人は強いんだしと考え、キャラに話しかける。

「封印はキャラがやったんだってな？」

「はい！初めてですけど…自分を信じて頑張りました！！」

広暁の確認に、キャラは笑顔で答えた。

自分を過去の束縛から解放してくれた人が言った言葉、それを胸に頑張ったと。

広暁は思わず頬が緩むが、キャラは少し不満そうだ。

「どうしたんだ？」

「…トヤク…」

「ん？」

「頭…撫でて下さい……／＼／」

モジモジ……／＼／

(………何だ、この破壊力は?)

10歳の女の子がモジモジしながら上目遣いで「頭…撫でて下さい……／＼／」。

その破壊力に広暁はちよつと理性が飛びそうになったが、自制心で何とか持ち堪える。

「グフツ!!」

フェイトが凄い声を出しながら倒れたような気がするが多分気のせいだろう。

俺も変わったなあと考えつつ、キャロの頭を撫でる。

これは1人で封印をかけることに成功したキャロに対する報酬なのだ、自分に言い聞かせながら。

ナデナデ。

「ん〜」

(いかん、これは癖になる…)

今の広暁の目には、小動物の様な風貌のキャロが頭を撫でられて幸せそうな映像が映っている。

可愛いものは可愛いのだ。

(「そう言えば、どっかの誰かが「可愛いは正義!」って言ったな……」)

広暁達フォワード陣はロッジの掃除をしている。

ロストロギアの封印という仕事が終わった後の、帰るための最後の仕上げだ。

アリサやすずかはそんなのは達を引き止めたが、短期予定の出張とはいえ本拠地であるミッドチルダを長い間空けるのは気が引けるというもの。

仕事が終わったなら早急に帰るのが筋なのだ。

「キャラ口…大丈夫かな？」

「大丈夫…だと思っ」

そんなフォワード陣の中でたった2人の男、エリオと広暁が目を向けた先には…

「うん…／＼」

「キユクル…」

ソファの上で横になっているキャラコの姿が。

何故こうなったのかというと、広暁がキャラコの頭を撫でた後、キャラコは更にお願ひしたのだ。

「先輩って…呼んでくれませんか…？その…一回でいいですから…／＼」

お風呂でそう呼んだ時に何かに目覚めたのかなと考えつつ、広暁は膝を曲げてキャラコを見上げる姿勢になって呼んだ。「キャラコ先輩」と。

キャラコはそのまま仰向けに倒れたが、その顔はとても幸せそうなものであったことを追記しておく。

ついでに言うと、エリオも一瞬間を強張らせて真っ赤になったが広暁は突っ込まなかった。

この年頃は多分こうゆうものなのだろうと自分に言い聞かせて。

（人が変われば常識が変わる。常識が変われば世界が変わる。世界が変われば人が変わる。

こうやって変わっていきまた時代は…何で俺はこんなことを考えてるんだ？）

どんなに変えようとしても、生きてきた人生の中で培った常識はそう簡単には変わらないのだよ。

「お兄さん？」

「ん？どうした？」

「僕はこのゴミ袋を外に出してきますね」

「おう。俺は掃除道具を片付けとくわ」

常識の整理は後、今は掃除をちゃちゃっと済ませるべきだ。広暁はそう考え、テキパキと体を動かす……………。

「もう帰っちゃうのね……」

「もっとゆっくりしていつてほしかったな……」

「にやはは……さすがに、ね」

「これ以上ミッドチルダを空けるわけにもいかないから」

久し振りに会った友人、過ごした時間。

それは何物にも変え難い思い出。

過ごした時間は心のアルバムに仕舞われ、時はまた巡る。巡る時の中で人は何を思い、生きるのか？

「何か今…詩つばいのが聞こえなかったか…？」

「僕には聞こえませんでしたよ?」

(…幻聴?この年で?…帰ったらシャマルに診てもらおうかな…)

人間という生き物は生きる環境が変わると、大なり小なり精神に影響が出る。

それが憂鬱だったり疲労だったりと影響は様々だが、広暁の場合は幻聴だったようだ。

頑張れ広暁、負けるな広暁。可愛い弟と妹のためにも。

「さて…じゃあ、皆。ミッドチルダに帰るよ」

「任務の手際、結構いい感じだったよ」

「まだまだ甘いところもあるけどな」

「明日からまたみっちり練習だ」

「……………はい!」「……………」

澄み渡る夜空にはつらつとした声が響く。それが示すのは……

「行っちゃったわね……」

「次の休暇に期待しよう?」

広暁達が去った後もコテージに残っているのはアリサとすずか。先程まで過ごした時間を名残惜しむように、2人は佇む。そんな風にして物思いにふけっていると、ふいにアリサが話し始めた。

「そういえば……ホルスだっけ?あの竜?」

「広暁君と一緒にいた?」

「そう。最近、大学の講義で習ったような気がするのよね」

「アリサちゃんがとってる講義だと…臨床心理学？」

「一般教養でとった講義って意味では合ってるんだけど…確か歴史系だったと思う」

「歴史系？だったらエジプト文化じゃない？」

「そう、エジプト文化よ！」

エジプト神話に出てくる天空と太陽の神「ホルス神」。
本で読んだのは古い文献だったけど…どことなく似てたわね、あの竜に」

「エジプト神話に出てくる神様と同じ名前の竜…偶然かな？」

「名前がホルスってことしか聞いてないから…はっきりとは言えないわね。」

「けどもしホルスっていう竜がいたとしたら…」

「いたとしたら？」

「古代エジプト文明と現代…いえ、もしかしたら異世界間の関係性を見つけてることが出来るかもしれないわ」

妖艶な笑みを浮かべるアリサを「ああ、またか」という表情で見つめるわずか。

自分が興味を持ったことにはとことん突き進むのがアリサという女性性。

良いにしろ悪いにしろ、それがアリサという女性なのだ。

「私に手伝えることがあったら何でも言ってみてね？」

「ありがとね、すずか」

そんな彼女とこれから親友でいられたらいいな。そう考えたすずかであった。

第26話「地球編4」（後書き）

第26話、いかがだったでしょうか？

前書きで述べた通り、広暁のオリジナル魔法『天創塵てんそうじん』について説明しますね。

この魔法を簡単に説明すると

『魔力を凄く集束した矢を音速でぶつ放す』

です。誘導も付加効果も無い、ただ真つ直ぐ音速で飛ぶ矢です。

音速で飛ぶ矢にで誘導をつけるのは、さすがに難しいでしょうから、矢故に攻撃範囲は狭いですが、着弾点で大爆発を起こすのであまり関係ありません。

近い相手に放つとこちらも爆発に巻き込まれずし、攻撃対象が小さいと外す可能性もありますが。

あえて言うなら『テクニック又はスピードタイプが持つ大技』ってところででしょうか。

発動速度がそれほど遅くないのも、広暁が『器用』だからです。魔力の集束にそれほど時間がかからないということですね。

ちなみに、上記のデータはあくまで『サジタリウスから放った場合』です。砲撃として矢を空中に浮かせた状態から飛ばしたら威力や速度は落ちますのであしからず。

これからもオリジナルの魔法を考えていきますが、さすがにこれはやり過ぎだ、と思われたらどしどし感想で書き込んで下さい。

強いキャラは好きですが、それが過ぎると何の面白みもないですから。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

番外編1「変態という名の淑女」(前書き)

今回は番外編を書いてみました。

タイトルについては：本文を読めば理解出来ると思います！

では。番外編1、始まるよ〜

番外編1「変態という名の淑女」

<カリムside>

カリカリカリカリ…

今日も今日とて私は事務仕事を行う。

聖王協会騎士という立場上、処理しなければならない書類は多い。

カリカリカリカリカリカリカリカリ…

…一体これで何枚目かしら？

簡単な報告やデータはメールで送ればいいのに、重要なことは書類なのよね。

そうする理由も分かるけど、せめて重要度の定義をしっかりとってほしいわ。

どうしてロストロギア発掘チームの備品案に私が目を通す必要があるのかしら？

全体の予算案なら分かるけど、備品程度なら発掘チームの裁量に任せるといふのに。

ロストロギアの管理は教会の仕事の一つ、それに必要な備品ならいくら使おうとも構わないのに。

これは次の会議での議題にするべきね、『重要度の定義付け』。

『騎士カリム、紅茶が入りました』

「ありがとうございます。では休憩にしましょうか」

シャツハが紅茶を入れてくれたようで、私も手を止める。いつも彼女は私の仕事や思考の区切りがついたところで紅茶を入れてくれる。

私としてはありがたいのだけれど…どうしてそのタイミングが分かるのかしら？

コンコン。

「失礼します」

「どうぞ」

ノックの後、シャツハが紅茶と…あれはクッキーね、それらが乗った台車を押して入って来る。

そういえばもう午後3時なのね。

「今日の紅茶はアールグレイを使いました。地球産の紅茶です」

「地球産ですか」

この間飲んだセイロン…じゃなくスリランカの紅茶は美味しかったわ。

アールグレイはどんな味かしら？

スッ…

「……ふう。スリランカよりコクがありますね」

「さすがです、騎士カリム。」

ダージリンは高い山の上で生産しているので、その分味にコクがあるので。」

シャツハの説明を聞きながら私は紅茶を飲む。

合間にクッキーを食べながらこうしてのんびりと過ごすのは至福の時間ですね。

「この間の機動六課の任務ですが、映像がまとまりましたので、今からご覧になりますか？」

本来なら報告書を見るだけで十分なのだけれど、これは私が希望した。なぜなら……………

『天…創…塵…!』

「じ、これは…!？」

「凄…!…!…」

広暁君が戦うのをこの目で見る事が出来るんですもの!!
前の初出勤時の映像も良かったけど、今回の任務の映像もまた良いわね。

掛け声と共に大技を放つ広暁君……たまらないわ

「これはもう…AAAランクの魔法ですよ!？」

「そんなに凄いのかしら？」

「音速で飛ぶ着弾点で大爆発を起こす魔法矢……対物破壊で言ったらかなり上位の魔法になります」

「対物破壊？」

「自身の苦手なタイプと戦う時のために彼は考えたのでしょう。戦闘データを見る限り、彼は高速移動型の狙撃手。

スピードやテクニクはありますが、幾分火力に欠けます。

苦手なタイプ…堅固で巨大な相手を想定して考えたのでしょう。

そういったタイプ相手なら、発動に時間がかかる魔法でもさしてデメリットにはなりませんし。

魔法陣の構成を見る限りでは、攻撃対象に当たらずとも任意で爆発させることが可能なようです。

当たらなかった時の保険でしょうね」

「へえ………ん？当たらなかった時の保険？堅固で巨大な相手に？」

「ある程度は応用が効くようにしたということでしょう。

小さい相手……例えば、ガジェットや魔導師相手に放つことも考慮に入れたということです。

例え対象に当たらなくても、傍で爆発させれば威力はさほど変わらないでしょうし。

それにしても……魔力量A A+でこの収束魔力量……。一体どれ程のスピードでサイクルを繰り返しているのでしょうか？」

シャツハの話聞いた限りでは、彼の総魔力量ではこれだけの威力の矢を放つのは難しいとのこと。故に、魔力を矢に収束する術式を凄いスピードで繰り返していると。なるほど、広暁君は凄い器用なのね。

「こんなことが…出来るんですね……」

「広暁君は一般的な魔導師の方と違って経歴が特殊ですから。出来ても不思議ではないでしょう？」

「確かに…そうかもしれませんが……」

「それよりシャツハ。そろそろ孤児院に行く時間ではなくて？」

「えっ…あ、もうこんな時間！？騎士カリム、申し訳ありませんが……」

「行ってらっしゃい。食器は別の方に片付けてもらっわ」

「ありがとうございます。それでは」

タッタッタッ……。

キィ……。

ボタン……………。

「さて…始めましょうか」

シャツハも行ったことですし…私は私の仕事を始めましょうか…。

ピッピッピッピッ……

『…喜んでいいのか、それは？確かに、モデルの勧誘はあったけど
ね』

……隣を歩いているテストロッサ執務官が邪魔ね。これは保留……
と。

『馬鹿正直に打っても返されそうな気がしたんで』

含みのある笑み…ポイント高いわね。コレクションに追加…っと。

『エリオはキャロをしつかり守れよ?』

幼い同僚に指示を出す広暁君…いいわね。これもコレクションに追加…っと。

『天…創…塵!』

最後はやっぱりこれね。掛け声と共に大技を放つ広暁君…たまたまないわ

「あの…騎士カリム?」

「えっ!?!」

誰かの声がしたかと思って顔を上げたら、そこにいたのは…シャツハ!?!

孤児院に行ったんじゃないの!?!

「受け取る書類を忘れたので戻ってみれば…あなたは一体、何をしているのですか?」

「ええっと…これは…その…」

まずいわ。この状況は非常にまずいわ!何が何でもこの状況を乗り切らないと…!!

「これは…広暁さんの映像の切り抜き、ですか？」

「え、ええ、そうよ！」

民間協力者とはいえ、彼はまだまだ管理局魔導師としては未熟な身！
私が考察して後ではやてにデータを送ろうかと…！」

ちよつとどもってしまっただけ、これなら大丈夫よね！？

言ったことに何の矛盾も無いから…！」

そうよね、シャツハ！？

「…戦闘映像の切り抜きに『笑顔』や『クールさ』という項目は必要ないと思いますか？」

「そ、それは、ほら！戦闘中の心理状態を表すためよ！
自分の心理状態が分かれば分析もしやすいでしょう！？」

今度もちゃんと切り返せたわよね！？

可笑しなところは無いわよね！？

お願いだからシャツハ、もうこれ以上何も聞かないで

！！

「…最後に一つ。」

戦闘映像の切り抜きの前にある映像、これは既に戦闘中ですらありませんが？」

ピキピキピキピキピキ…パリ

ン……………

(…終わったわ…)

〈カリム>>>シャツハ〉

「つまり…広暁さんの映像を集めてコレクションしていたと？」

「……………」

「間違いないですよね……………」

「は、はい！間違いありません！！」

普段のカリムを知っている人が見たら、この光景はまず信じられな
いだろう。

現在カリムは執務室の床の上で正座をしており、彼女の前にはシャ
ツハが。

シャツハの顔は呆れとも怒りとも取れる表情で、それがまた恐怖を
倍増させる。

「ということは…騎士カリム。この間あなたが私に言ったことは嘘
ということになりますよね？」

「この間言ったことと言つと…何だったかしら？」

「……………でも、広暁君を渡す気はないわよ？」

「うつ……………」

この間言ったこととは、広暁が初めて聖王教会に行った時にカリム
が言った言葉。

広暁のことが好きであるはやてに対し、カリムが先制攻撃をしかけ
るよつに言った言葉だ。

シャツハはその意味をすぐにその場で問いただしたのだが、

「ちょっとはやてをからかっただけよ」

と言ってそれ以上話すことはなかった。

それで降カリムがそれを匂わせるような言動をシャツハは察知しなかったので気にしていなかったのだが…今回のようなことが起きてしまったわけだ。

「あなたは一体何をしているのですか…？」

聖王教会騎士、管理局少将の方書きを持つ騎士カリムともあるう方が

「え〜と…その……」

「……惚れたのですか、彼に？」

「はう……………／／／／」

シャツハの一言に、カリムは正座しながらも顔を赤くする。それを見たシャツハは、安堵とも諦めともとれる表情をした。

「騎士カリム…私は幼少の頃よりあなたに仕えてきました。

あなたはその特異なレアスキル故にずっと教会領内で過ごされてきたことは知っています。

ですから、その……こういった色恋沙汰には無縁であったことも……知っています」

「……面と向かって言われると痛い傷つくわね、その言葉」

「事実ですから。とにかく！私が言いたいのは……！」

シャツハは言葉を一旦区切り、改めてカリムの方を見る。
今から言わんとすることが分かったのか、カリムは身構えた。

「じつじつことはばれないようにやって下さい!」

「……………え?」

言われた言葉は青天の霹靂。

てつきり頭ごなしにどやされるものだと思っていたカリムは間抜けな声を出してしまった。

怒られると思ったならばれないようにやれと言われたのだから驚いた
と言えは驚いただろうが…………。

カリムの間抜けな声…………これは貴重だ。

「こんなことをしていると他の騎士や修道士の方にはれたらどうする
るんですか。」

気付いたのがたまたま私だからよかったですけど、他の方にはれたら
誤魔化しがききませんよ?」

「え〜と…シャツハ?怒らないの?」

「…先程も申し上げた通り、私はあなたの境遇を知っています。

ですから、初恋の衝撃にこのようなストーリーカー行為に走ってしまわ
れてもさほど驚きはしません」

「それは言い過ぎじゃ…………」

「本人の許可を得ずに勝手にその人の映像を集める…これがストーリー行為でなくて何と言えば？」

「うっ……」

「本来ならこの行為自体を止めるところですよ？止められないだけまだマシと思って下さい」

「……どうして許してくれるの？」

カリムが疑問に思うところはそこだった。

聖王教会教会騎士団騎士、そして管理局少将であるカリム。

その特異なレアスキルと立場から、彼女には有力者からの縁談も多い。

それらを全て断っていたカリムに対し、シャツハは大なり小なりの不安があったのだ。

このまま縁談を断り続けて気付いたら適齢期を過ぎていたらどうしようとか。

そもそも初恋の経験も無いカリムに結婚が出来るのかとか。

「騎士カリムには幸せになっていたただきたい…ただそれだけです」

それを口には出さないシャツハ……お美事にございます。

「ありがとう、シャツハ！！」

その言葉を聞いて感極まったのか、カリムが立ち上がってシャツハに抱きつこうとした。

しかし、正座の力を侮るなかれ。

足が痺れたカリムはそのままシャツハを巻き込み転倒…

「せいっ!！」

ガシー!!

クルクル……。

スタツ。

「危ないところでしたね」

「広暁君にやってもらいたかったわね」

「贅沢言わないで下さい、騎士カリム」

…しなかった。

それは正しく、走ってくるお姫様を王子様が受け止めて回転、力のベクトルを変える秘儀の如く。

カリムの言葉にシャツハは呆れ顔だが、笑みがこぼれる当たり満更でもないのかもしれない。

「とにかく、騎士カリム!

ストーリー行為は誰にもばれないようにお願いします!!

もし次私が見ることがあれば、このことは広暁さんに報告しますからね!？」

「それは困るわね…分かったわ、シャツハ。次からはもっと周りに気をつけてやるわ」

「頼みますよ、ホントに……」

この後シャツハは書類を受け取って部屋を出ていった。そしてカリムは……

『何か今……詩っぱいのが聞こえなかったか……？』

「ちょっと疲れた顔の広暁君……心がくすぐられるわ」

再び仕事に戻っていた。

番外編1「変態という名の淑女」(後書き)

番外編1、いかがだったでしょうか？

ここ最近空気だったカリムを書いていたら…こうなってしまうし
た。

好きになった人の映像を勝手に集めてコレクション…。

…あれ？これって立派な犯罪じゃ…。

…まあ、教会騎士なら許されるということ(オイッ!!)

では。感想、意見、間違い訂正e t c、お待ちしています。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」(前書き)

またまた番外編です。

タイトルでどこの僧侶と学習塾を想像するかもしれませんが…それは気のせいですよ、気のせい。

では…番外編2、始まります。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」

< 広暁 side >

「オリジナル魔法って結構簡単に考えれるもんだな」

『それ相応の知識があれば難しいことではありませんからね』

あ、どうも。今日も今日とてシグナムにしごかれた墨谷広暁です。いつも通り訓練を終えて、今は夜。

最初はよく分からん呪文みたいな言語だと思ってたミッド語も英語に似ていると気付き、デスクワークぐらいの書類なら作れるようになりまして。

なまじ英語に似てるだけやりやすかったりやりにくかったりしましたが、どうにかなるものですね。

だてにセンターと国立二次を突破しちゃいませんぜ、ハハツ！！

夜の訓練が疲れたのか、ホルスはもう寝ちゃいました。

ちなみに俺は、オリジナル魔法を考察しています。

既存の魔法ならなのは達にある程度教えてもらったけど、自分だけの魔法があるっていいですよね。

弓型のデバイスを使う人が少ないせいか、弓矢関係の魔法は少ないんですよ。

『マスター、テンションがおかしくありませんか？』

「そういう気分の時もあります」

その時々のお気分を無理矢理変えるのは難しい。

ならば、それを理解した上で思考・行動すればいい。
理性で感情を完璧に抑えるなんて無理なんですよ。
そんなことが出来る人間がいたらお目にかかりたいものです。

『……今は何を考えているのですか？』

「原案の続き。対集団戦射撃魔法をな」

今俺が考えているのは、対集団戦射撃魔法。
たくさんいるガジェットを矢で一本ずつ破壊するのは色々手間。
だったら矢を一度に複数展開して誘導制御をつけて放った方が楽だ。
そのために今は、色々な射撃魔法の実践映像や術式を見て考察して
いる。

「アクセルシューターにクロスファイアシユート、ステインガース
ナイプか……」

アクセルシューターの場合だと、なのはが制御出来る最大数は32
だと言っていた。

俺は魔力制御の才能だけで言ったらなのはより上なので、時間をか
ければそれより上はいけるらしい。
だけど……

「機動六課の試用期間は1年もないしな…そんなに時間をかけるわ
けにもいかない、か」

どっかの経営者は「短い人生、短所を補うより長所を伸ばせ」と言
っていたが、1年ではきつい。

ならば、誘導制御の違う形を考えるしかない。

この3つの魔法は放った後から自分の意志で制御することが出来る。ただ当然それに魔力やマルチタスクを持ってかれるし、数に限りがある。
なら……

「最初から攻撃対象にロックオンして放てば楽だな。
ガジェット相手ならずと誘導制御する必要もないし。
魔力消費が減るからその分本数を増やせる」

実はこの間シャマルのもと結界魔法や探索魔法を試してみたら面白いことが分かった。

俺が持つ資質は、この2つの魔法にピッタリだったのだ。

何故なら、結界魔法や探索魔法はどちらも繊細で細かな魔力運用を必要のために苦手とする魔導師が多いらしく、『結界魔導師』という専門職すらあるらしい。

ところがどっこい、今の俺は中衛である動物狙撃型。

後衛も出来る資質を持っているのだ。

シャマルが「今すぐデバイスを変えましょう！！」と凄い目で言ってきたのは驚いた。

サジタリウスが今にも矢を生成しそうだったから断ったけど、あの目は本気だったよな…。

ちなみに俺の資質は『魔力制御能力』というより『魔力運用』といった方が正しいそうだ。

大層な言い方だけど、つまりは俺が『器用』ってことだよな？

要約するとこんなに安っぽくなるのは…言葉って大事だな、うん。

しかし……身体能力は前衛向き、戦闘スタイルは中衛向き、魔法の才能は後衛向き。

何でこんなにはられたんだろうな？
ちゃんと纏まっててくれれば色々やりやすいのに。

……次元漂流者だから仕方ないな、うん。

はなっから魔導師になろうと思っただけじゃないんだし。

まあ、とにかく。

探索魔法で相手の位置を把握・ロックオン。

矢を作って一気にぶっ放せば、俺が考える対集団戦射撃魔法がとりあえずの形になる。

「大概の射撃魔法はスフィアを作っただけから放つけど……俺には必要ないか？」

『その分を矢の生成に回した方が効率的ですし、想定する状況には合っていますからね』

想定するのは、散在するガジェットを一斉に狙う必要がある時。

スフィアから放つって手もあるけど、それでは『連射』という形をとることになる。

連射である以上足を止める時間も長くなるし、発動する時間も長くなる。

ましてや、今の俺じゃあ32なんて数のスフィアは作れないしな。

俺は移動型のセンターガード、足を止める時間は短い方がいい。

もっと言えば、移動しながら発射出来たらいい。

1人で戦うのならともかく、フォワードというチームで戦うのなら自分の領分は弁えるべきだ。

スフィアが必要な魔法はまた考えればいいしな。

その時はフォトンランサー・ファランクスシフトを基にして考えて

みるか。

「探索魔法で攻撃対象の位置を把握・ロックオン。周囲に矢を作つて展開、合図と共に発射。天創塵と同じやり方で矢を作れば時間は短縮出来るな」

『探索魔法も同時に行つてはどうです？』

「俺に出来るか？」

『マスターなら大丈夫です。仮に出来なかつたとしても、私が探索魔法を行えばいいのですから』

「なるほど…じゃあそれを原案にして考えて、細かいところは段々と変えていけばいいか。」

あ、これは忘れるなよ？

射撃魔法に探索魔法の術式を組み込むんであつて、2つを分けてやるんじゃないからな。
あくまで1つの魔法だ」

『分かっています』

さて…考えますか。

「……………こんなところか？」

『とりあえずの形は出来ましたね』

「そうだな。夜中だし、実践はまた今度にするか」

とりあえずの形は出来たし、今日のところはこれで終わるか。

机の上の時計を見ると、時間は午後10時30分。

早朝訓練のことを考えても、寝るにはまだ早い。

……………よし。

『マスター、どちらに？』

「食堂。いい酒があるんだよ」

そう、酒だ。

実はこの間地球に任務で行った時に、何本かお酒を買っておいたのだ。

駄目元ではやてに頼んだらあっさり了承が出たのが驚いたな。

民間協力者とはいえ、しつかり給料は貰える。

隊員寮だから家賃はいらさないし、携帯電話も持ってないし、地球で払ってた車のローンもない。

訓練漬けの毎日だから娯楽に使う暇もない。

給料を貰っても使い道がないから、高い酒をまとめて買うことが出

来た。

成人して1年と経ってないからビールの美味さは分らんけど、日本酒や焼酎の美味さは分かる。

休暇があつたらミッドチルダの街に出てお酒買いたいな。

『何故この部屋の冷蔵庫に入れないのですか？』

「つい飲んじやいそいで怖いんだよ。朝起きれなくなるほど飲んだら困るし」

『マスターが…ですか？』

「用心に越したことはないってこと」

一回経験あるしな。

「これこれ」

食堂のおばちゃんに許可をもらって冷蔵庫に入れておいたお酒。その中から白い曇りガラスの様な色をした瓶を取りだす。

「純米大吟醸…『れいほうせん霊峰泉』」

富士山の湧水を使ったお酒で精米率は40%、醸造アルコールは入っていない。

まさ
正しく純米大吟醸の日本酒だ。

「ゆっくり飲むかな」

「広暁か？」

「ん？」

声を掛けられて振り向くと、そこにいたのは青い狼、ザフィーラだった。

その距離、約10m。今の俺なら一飛びで移動出来る…そんなこと
どうでもいいか。

「ザフィーラ？どうしたの？」

「夜の見回りだ」

「あ、ご苦労様です」

「広暁は何をしているのだ？」

「お酒飲もうと思ってさ」

「それは……日本酒か？」

「そうだよ？この間の任務で地球に行った時に買った奴。純米大吟醸の『霊峰泉』」

「……………（ゴクッ）」

簡単に説明するとザフィーラが何か急に考え込み始めた……もしかして。

「ザフィーラも飲む？」

「いいのか？」

「勿論」

やっぱり飲みたいのね。

見回りのことは……まあいいか。

真面目なザフィーラがそのことを考えないわけないし。

……狼って酒飲んでいいのか？

……別にいいわな、ミッドチルダだし。

「平皿に入れた方がいい？」

「いや、普通のグラスでいい」

「え？いや、飲みにくいだろ？」

「……ああ、広暁には見せたことがなかったな」

そう言ってザフィーラがこちらに近付いて来る。

その過程でなんかよーわからん光がザフィーラを包んで……

「……おお」

そこにいたのは身長190cm、筋肉モリモリマッチョマンの変態……ではなくザフィーラだった。

銀髪に獣耳、浅黒い肌に管理局の制服を押し上げる筋骨隆々の肉体。フサフサの尻尾がチャームポイントだな。

「魔法ってホントすげーな」

「驚かないのか？」

「時代を生き抜けるのは環境に合わせて生きられる人間だけ？」

「一々驚いてたら精神が持ちません。あ、ちょっとしよげたな。耳が垂れ下がった。」

「適当なところに座っててくれない？」

「分かった」

グラスを探しますかね。

く男2人く

トクトクトクトクトクトク……。

「次は私が入れよう」

「どうも」

トクトクトクトクトクトク……。

「では」

「ああ」

スッ……

「乾杯」

チン。

ゴクゴク……。

「…ふう。美味しいな」

「ああ…」

窓際に座った2人は、ただグラスに注がれた日本酒を飲む。つまみが無くとも酒は進み、話題がなくても気まずくなることはない。

2人は窓の外、夜空に浮かぶ星を眺めながら飲み続ける。

「ホルスはどうした？」

「もう寝てる。夜の訓練で疲れたみたいでさ」

時折交わす会話、それが酒のつまみ。

機動六課の中でも貴重な、前線で戦える2人の男は酒を飲む。

「それ程の訓練をしたのか」

「あいつは技の調整。いくら器用でも、考えたばっかの技は上手く使えないし」

「お前の方はどうだ？」

「……クロスレンジの訓練だと言って毎日斬りかかられています」

実際の訓練の意図は近付かれた時にいかに避け、相手との距離を離すかに主軸をおいている。

広暁とて喧嘩ぐらいしかしたことはないし、格闘技の経験もほとんど無い。

そこでシグナムが考えたのがこの訓練方法。

瞬発力・反射神経に優れている広暁が、斬りかかってくるシグナムの攻撃をひたすら避ける。

基礎ぐらい教えるよと思った広暁だが、シグナムは「慣れる!」の一言。

こんなんでどうにかなるのかよと思っていたが……慣れとは恐ろしいもの。

毎日やっていたら自然と体が動くようになるし、避け切れない攻撃はサジタリウスやバリアで防ぐ。

時たまヴィータやフェイトにも相手をしてもらっているので、動きが単調になることもない。

何だかんだで『神速のインパルス』の領域に足を踏み入れそうな広暁である。

「オリンピックの1000m選手でも0.2秒前後だから0.11秒なんて現実的にはあり得ないけどな」

「何のことだ?」

「…すまん、気にしないでくれ(何か変な電波が…)」

二次元は二次元、三次元は三次元だけ、広暁さんよ。

「……そうか」

ザフィーラもそれ以上は追及する気はないのか、視線を月に移して

グラスをあおる。

こういう人間？は貴重だと考えつつ、広暁もグラスをあおる。

「……………」

静かだが気まずくない、そんな空気。

元来2人共お喋りな性格ではなく、お酒もワイワイ飲むより静かに飲む方が好きな2人だ。

美味しい酒、目を癒す星々、共に飲む仲間。

これ程の条件が揃っているなら、まず気まずい空気になることはない。

「ザフィーラはさ」

「何だ？」

「日本酒が好きなのか？」

「地球にいた頃は、主はやてが寝てからよく飲んでいた。

シグナムはビール、シャマルはワインが好きだったな。

ビールとワインはミッドチルダでは生産されているが、さすがに日本酒はなくてな」

「ふーん…ヴィータは酒を飲まないの？」

「酒は苦いから嫌いだと言っていたな」

「…さいですか」

話す内容はとりとめもない過去の話。

3人共お酒は飲むがはやてが小学生のため、起きている間は酒を飲んでいなかったこと。
ヴィータは酒の美味さが分からないから、アイスを食べていたこと。そんな会話をしている、ザフィーラは以前から疑問に思っていたことを広暁に聞いた。

「…気にならないのか？」

「ん？何を？」

「機動六課のことだ。鋭いお前が気付いていないはずがない」

「……気付いているというか、調べて分かったのがちょっとだけ……
なんだけどな。」

民間協力者が調べて分かることなんてたかが知れてるし」

ザフィーラが言ったことに対し、広暁は少し苦い顔をして答える。

広暁が気になっていること、それは機動六課のこと。

少数精鋭部隊の実験、対ロストロギア専門の部隊の設立。

話を聞いただけでは納得出来るが、それは広暁がまだ民間協力者になりたての頃。

時空管理局のことを学んでいた広暁はふと疑問に思ったのだ。

「本当の機動六課の設立目的は何だ？」

時空管理局の大抵の部隊は少数の高ランク魔導師と多数の低ランク魔導師、そして魔導師でない管理局員で構成されているので、実験的な意味で設立されたとしてもさほど違和感はない。

しかし、対ロストロギア専門部隊の設立。

これについて広暁は気になっていた。

ロストロギアは滅んだ魔法文明が残した魔法技術の遺産。

これ程のものを専門とするのに、どうして少数精鋭部隊にする必要があるのか？

そもそも機動課はこの部署もロストロギアを扱っているし、何故専門の部隊を作る必要がある？

少数精鋭部隊の実験という意図も絡んでくるが、必要にかられて設立された部隊とは考えにくい。

何か別の意図が合って設立された部隊、それが今の広暁の出した結論だった。

「それにさ……いくらはやてにコネがないとはいえ、このメンバーはおかしくない？

10年来の友人にはやて所有の守護騎士4人。

フォワードは将来の可能性を評価したって感じだし、ロングアーチも研修を終えた新人がチラホラ。

後見人は教会騎士のカリム・グラシア、クロノ・ハラオウン提督、リンデイ・ハラオウン執務統括官。

全員が全員六課の人間と深い繋がりがある。

何ていうか……あえて繋がり深い人間と新人ばかり揃えた部隊って感じがするんだよな。

そうするしか方法がなかったんじゃない？

「……そうか。じゃあ、広暁は機動六課設立に別の目的があると考えているのか？」

「……素人意見だけど。言ってもいいか？」

広暁の言葉に頷き、ザフィーラは広暁の眼を見る。

それを了承と受け取った広暁は、言葉を紡いだ。

「何か…それこそ今の時空管理局では対応出来ない事件が起きた時に対応するため。」

それが機動六課の『本当の』設立目的じゃないか……って考えた」

「……！？そう考えた理由は？」

ザフィーラの眼に一瞬走った動揺の色を広暁は見過ごさなかった。

しかし、今はそれを問うても無駄だと判断したのか、ザフィーラの問いに答える。

「帰納法だけど、な。」

一回騎士カリムに会いに行った時に、そこでレリックの話聞いたんだ。

その時、「この後に起こるはずの事件も対処を間違えるわけにはいかない」って漏らしたんだよ。

その時は対して気にならんかったけど、機動六課の設立目的のことを考えてたらそれを思い出した。

予言か占いか理由は分からないけど、カリムは何かの方法でそれを知ったんじゃないかって。

地球じゃあ馬鹿にされそんな話だけど、ミッドチルダならそれでも不思議じゃないし」

話す内容に対し、ザフィーラは真剣な目をして話を聞く。

広暁の常識が段々と崩れてきた気がするが、それは気にしない。

「そう考えたら後はトントン拍子で考えが纏まった。」

予言の内容に対応する部隊なんて理由で部隊は作れないから、それ

っぽい理由で部隊を設立する。

新人や将来性を期待した人が多いのも、単に実験部隊だから集められなかったんじゃない。

予言の事件が起きて対応出来なくても、部隊員が未熟だからっていう理由でお咎めを受けにくいから。

どこの世界でも上層部ってのは、部下が企業のことを考えて行動しても結果が出なければ叩くからな。

まあ、企業ってというのは好き嫌いじゃなくて仕事が出来る出来ないで選ぶから当然なんだけど。

好き嫌いで考えてたら企業として成り立たないし、過程じゃなくて結果が大事だからな。

経営者と労働者の観点の違いってところかねー」

(…7割方当たりといったところか。お前は…どこまで観^みえているのだ?)

広暁の言ったことに対し、ザフィーラはその鉄面皮の下では驚かすにはいられなかった。

本当の設立目的を知っているのは、六課のメンバーではやてとヴオルケンリッターの5人のみ。

過程が違うとはいえ、広暁は本当の設立目的をほとんど推論だけで当てたのだ。

「だけどさ」

「何だ？」

「この推論、騎士カリムに関することで色々と不確定要素が多い」

「不確定要素だと？」

「まず騎士カリムが…何てゆーか、占いか予言が出来なきやいけな
い。」

そういう魔法とかレアスキルとかあるならともかく、調べた限りじ
や分からなかったし。

もし本当にそういう能力があったとしても、予言を信じて部隊を設
立つてのも…ねえ？

調べる手段がネット・本・人伝とはいえ、ある程度当たるなら調べ
て分かつてよさそうもんだし。

時空管理局の上層部がそれを信じているならもっと細かいことが分
かるはず。

それが調べても分からないってのは…そういう能力が無いか、あっ
たとしても大して当たらないか。

前者なら推論が崩れるし、後者なら何故当たりもしない予言を信じ
て部隊を設立したってことになる。

そこが分からないんだよな！……」

(……地上本部が騎士カリムの予言に否定的な立場ということまで
は分からなかったか。

民間協力者という立場ではそれが限界か……)

眼の前で頭を捻る広暁に対し、ザフィーラは内心ほつとしながら考
えを纏めていた。

興味本位で聞いたこととはいえ、ここまで深く真実に近付くとは思
っていないかったから。

だからこそ、ザフィーラは考える。

広暁の言った推論に対し、自分はどう答えるべきか。

しかし……それを考える必要はなかった。

「あ、無理して考えなくてもいいよ？」

「…どういうことだ？」

「俺の言ったことにどうやって返したらいいのか…考えてるだろ？」

「……………」

「だんまりですか…まあいいや。

正直な話、俺は誰かにこの推論を言いたかったんだよ。
それを聞いてくれただけでも十分」

「いいのか？」

「言っても本当の理由は教えてくれないだろ？」

それに、ミッドチルダに来て1年と経ってない俺が考えたことだよ？
当たってる可能性は低いだろうし。

仮に当たってたとしても、俺が考えつくようなことなら皆それ以上の
ことを考えてるだろうし。

ただ言わないだけで。

俺はまだまだ勉強中の身だし、どうしても地球にいた頃の常識で考
えちゃうし」

「……………そうか」

「考えるのは好きだけど、それを誰にも言えないってのは結構きつ
くてな」

そう言って広暁は一気にグラスをあおる。

720ml瓶の日本酒とはいえ、男2人が飲むには足りなかったらしい。

同じく空のザフィーラのグラスを持ち、広暁は立ち上がる。

「聞いてくれてありがとうございます。俺はそろそろ失礼するね」

「ああ。私はもう一回りしたら眠るとしよつ」

「そっか。お休み」

「お前は言ったらしいな、世界が変われば常識は変わると。だがそれは違う」

1人食堂に残ったザフィーラはぼやいた。

広暁が言ったこと…それは人間が持つ常識のこと。

世界が変われば常識は変わる。

だからこそ前の世界、地球の常識に囚われてはいけなないと。

「常識とは己が生き様で見につくもの。」

生きる世界など、精々外的要因に過ぎない。
だからこそお前は機動六課設立の真の目的に限りなく近づくことが出来た。

客観的視点と思考を繰り返す用心深さ、何より物事に『気付く』洞察力。

それらがお前の強みだ。

ミッドチルダにいる期間が短いという理由で己を卑下するな」

紡がれた言葉、それを聞く対象である広暁はここにはいない。

しかし、ザフィーラはあえて言わなかったのだ。

彼は守護獣…^{まも}護り見護る者だから。

広暁なら言わずともそれに気付き、自分という存在を昇華させると確信していたから。

「今のお前に足りないものは、魔導師としての経験だ。

もしお前がこのまま訓練を積んで時空管理局という組織をより深く知ったら…あるいは……」

そこまで言っただけザフィーラは口を閉じる。

これ以上言っただけ、まるでそれが実現する可能性が無くなるかのよう。
うに。

「…私も行くか」

そこにはもう一人の男はいなかった。

いたのは一匹の狼…いや、守護獣。

歩を進め、その姿は夜の闇へと消える……………。

『よかったですか、マスター？まだ気になることがあったのでは？』

「何のこと？」

『例えば…何故マスターが機動六課で民間協力者として働いているか…とか』

「…俺？」

『（カマかけにはひっかかりませんでしたか…しかし）私自身が考えたことです。

常識的に考えたら、マスターはどこか管理局保有の保護施設に回されるのが妥当でしょう。

マスターだけならともかく、ホルスもいるのですから。

敵意が無いとはいえ、未知の竜であるホルスに何の拘束も無いというのはおかしいです』

サジタリウスは追撃の手を緩めない。

カマをかけることに失敗したなら別の方法で聞き出せばいい。

「言われてみりゃそうだな。」

どうして俺はここで民間協力者をやってるのか？

あの時は願ったり叶ったりって感じだったけど、今考えるとおかしい話だよな。

次元漂流者の保護も時空管理局の仕事とはいえ、機動六課は試用期間1年の実験部隊。

その前線メンバーに、あの時魔法ド素人の俺を加えた」

『（今の言い方…本当に気にしていなかった？）』

「サジタリウス」

『何でしょう？』

「…カマをかける時はもっと上手くやれよ？」

『（ギクツ！？）…何のことでしょう？』

「言葉通りの意味だよ」

『……ハア。マスターには敵いませんね』

「心理戦のテクがガジェット相手に役立てば嬉しいんだけどな」

『技術を身につけて損はありません』

「へいへいっと……」

自室へと続く長い廊下を歩きつつ、1人と1機は談笑する。

気になることはあっても、それを広暁はザフィーラに話さなかった。

その真意は分からなかったが、サジタリウスもそれ以上問おうとはしない。
以前の広暁ならいざしらず、今の広暁なら近いうちに話してくれると分かっていたから。

「俺が民間協力者として誘われた理由：ねえ。十中八九ホルスが関係してんだろーな」

『カードから現れた存在で、エジプト神話では天空と太陽の神『ホルス神』。
私にはさっぱり分かりませんね』

「俺も分からん。カードが実体化するなんてアニメの中の話だけだと思っただし。
常識離れにも程がある…ってこっちの世界ならそれも有り得るのか？」

『……マスター、さすがにそこまで壊れてはまずいかと』

「バイト帰りに車に乗ろうとしたら知らない公園のベンチに座ってた。」

こんなこと経験すりゃ誰だって壊れるって」

スッ…… ピッ…… ウィーン……

「まあ…その時になればはやてが話してくれるだろ。今聞いても適当にはぐらかされるだけだし」

『その時が遅くなければいいですね』

「不吉なこと言つなよ……」

上着を脱いだ広暁はベットに入る。

そこには既に寝入っているホルスがおり、その寝姿はとても可愛い。つい数時間前は炎をバンバン放出してシグナムと張り合っていた竜の欠片も無い。

「目覚まし頼むな」

『分かりました。お休みなさいませ』

「お休み」

寝入りにつく広暁を見守るのは光り輝く数多の星。

今夜広暁が言った一言が実は……この先を語るにはまだ少し早い。時が来れば自ずと答えに広暁は辿り着くだろう。

広暁がミッドチルダに飛ばされたのは何故か？

ホルスの正体は一体何なのか？

それらを知る者は……今はまだいない。

番外編2「智恵の大海・知識の泉」（後書き）

番外編2、いかがだったでしょうか？

機動六課設立の真の目的…アニメを見ていて思ったんですけど、早い段階から誰か気付いてても不思議じゃないですよね。

そういうわけで、広暁は自分なりに考察しました。

手段があれなのは…現代っ子だからということ。

所々おかしなのは、広暁がどうしても日本にある企業やその風土を
考えてしまうからです。

働き始めて間もない、精々アルバイトぐらいしか経験のない彼に組織の裏や闇まで考えることは難しいと思います…例え知識として知っていたとしても。

なお、ヴルケンリッターの酒の趣味や機動六課設立の本当の目的を知っている面子はオリジナル設定です。

では。感想・意見訂正 e t c、お待ちしております。

第27話「ホテル・アグスタ 知」（前書き）

第27話です。

今回から数話、ホテル・アグスタ編です。

戦闘シーンが多くて大変ですが…頑張れ、私！！

では…第27話、始まります。

第27話「ホテル・アグスタ 知」

この前の出勤の時もそれなりにうまくはやったけど、ただそれだけだった。

毎日の訓練もあんまり強くなってる実感がない。

手の中には優秀すぎる相棒がいて、あたしの周りには天才と歴戦の勇者ばかり。

1人だけ例外もいるけど、彼の能力を考えたらそれも納得してしま
う。

今も疑問に思ってる…自分が何でここにいるのか。

あの人は何であたしを部下に選んだのか…。

毎日の訓練のおかげで、魔法という力にも大分慣れてきた。

どうしてこうなったのか…今の俺には分からない。

だけどころなつたおかげで、俺は自分の道を見つけることが出来た。
今まで生きてきた中でようやく見つけた道だ、進まないわけにはい
かない。

俺の進む道、その先に一体何があるのか？

それはまだ分からないけど…今はただ進むだけだ。

初めて恋というものを知った。

最初はその余韻に浮かれてたけど、そう浮かれてもいられない。

彼を好いているのは私だけではないのだから。

私の権限を使えば彼を困うことも可能だけど…そんなことはしたく

ない。
そんなことをしても、彼は決して喜ばないから。
だから…正々堂々、戦って彼を手に入れるわ。

「うん…」

『どうされました？』

「どうしたのだ？」

「キユイ？」

ここはホテル・アグスタの裏にある搬入口。
ミッドチルダでも指折りの高級ホテルであり、広暁が今いる場所。
今回の任務は、ここで行われる骨董美術オークションの会場警備と
人員警護である。

「今回の任務、ロストロギアをレリックと誤認したガジェットが出る可能性を考慮した任務だよな？」

『なのは隊長はそう仰ってましたね。それがどうかしましたか？』

「警備が固すぎないか？人が多いのはともかくとして、部署が多過ぎる」

「各方面の有力者が集まるからな。警備に成功すれば評価も上がるからだろう」

「…なるほど、ここに管理局員がいなかったのはそれが理由か…」

苦笑しながら言葉を返す広暁に、ザフィーラも似たような顔で頷く。現在の警備体制は、なのは・フェイト・はやての3人が会場内の警備。

ヴィータ・シグナム・シャマルの3人が会場内での警戒。スバルとティアナはホテルの内外を徘徊しており、エリオとキャロは地下に行っている。

広暁は最初エリオとキャロと行動をする予定だったが、それにザフィーラが待ったをかけた。

3人で回ると、何かあった時に反応出来る確立を下げてしまう。

だから私と広暁が外の警護に回った方が効率がいいだろうと。

なのは達隊長陣もそれに同意し、1人と2匹は搬入口にいる。

ここにロストロギアが納入されるので、警護をした方がいいと考えたからだ。

男と竜と狼が来たことに初めは訝しげな視線を向けられたが、事情を話したらやけに素直に納得した。

ここには民間の警備会社の人しかいないらしく、時空管理局の魔導師が来たのが嬉しいらしい。

ついでに言っと…警備員やホテルの従業員にはザフィーラとホルス

は広暁の召喚獣と思われる。

「ちゃんと仕事しろよ……」

『いいところを見せたいたいでしょうね。何か起こらなければ意味無いというのに』

「何も起こらないに越したことはない。仮に起きたとしても、そのために私達がいるのだ」

「だな」

パンー！！

ザフィーラの言ったことに対し、広暁は自らのプリシヨット・ルーティンを行って答える。

いつでも最高のパフォーマンスをするために必要なこと。

それはやるが変わっても、ましてや生きる世界が変わっても変えることはない。

「まあ…前みたいなのが起きなきゃそれでいいさ」

「前みたいなこと…あの3色ガジェットという奴らか？」

「ああ…今度は別のモンスターが来るかも」

『マスター、それはフラグです』

「……お前はどこでそんな言葉を覚えたんだ」

『この間ミッドチルダの回線に潜った時に色々と』

「…さいですか」

(でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合かあ)

(そーね…あなたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長達のこと)

(うーん…父さんやギン姉から聞いたことくらいだけ。

八神部隊長の使ってるデバイスが魔道書型で、その名前が『夜天の書』っていうこと。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だったこと。

で、それにリイン曹長を合わせて6人揃えば『無敵の戦力』ってこと。

ま、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど…)

(レアスキル持ちの人は皆そうよね…)

(ティア、なんか気になるの?)

(別に)

(そう。じゃあ、また後でね)

(うん…)

六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバース。

副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だって…前線から管制官まで、未来のエリート達ばっか

り。

あの歳でもうBランクを取ってるエリオと、レアで強力な竜召喚士のキヤロは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子。

危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバツクアツプもあるスバル。

そして…広暁さん。

民間協力者として六課に来た次元漂流者。

大学生だったらしいけど、スポーツで全国クラスの腕前と身体能力を持つ人。

向こうの世界で言う難関大学に通っていたらしく、知識が豊富で智恵もある。

魔力運用に天賦の才能を持ち、デバイスの補助無しに矢の形状に魔力を集束出来る人。

ホルスという炎を操る竜を従え、戦闘能力は真の姿のフリードを超える。

魔法を初めて2カ月足らずで私と同じ…いえ、それ以上のレベルまで知っている人……。

やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか…だけど、そんなの関係ない！

私は…立ち止まるわけにはいかないんだ！

ホテルの屋上で警備をしているのはシャマル。
身に纏った白衣が風に揺れ、ボブカットのブロンドヘアが風にな
びく。

「まさか広暁君が後衛型の魔導師だったなんて…」

考えていたのはつい最近分かったこと。

広暁に頼まれたシャマルは結界・治癒・探索魔法を教えたのだが、
予想していないことが分かった。

広暁は『魔力運用』に優れており、結界・探索魔法が非常に上手か
つたのだ。

まだ大規模な結界は張れないが、ガジェット相手なら強度は十分実

用クラス。

探索魔法も同様で、今の広暁ならホテル内のどこに誰がいるか、時間をかければ見つけられるだろう。

「魔力集束や自己ブーストはその応用ってわけね…いきなり応用からいくというのも変な話だけど。」

仕方ないことといえば仕方ないことなのかしら…」

いきなり実戦に放り込まれるのだから、必然的に戦闘スタイルは攻撃的なものになる。

ましてや広暁は身体能力に優れており、弓道をやっていた経験もある。

デバイスが弓型で動物狙撃型の砲撃魔導師になっても不思議は無い。

「また今度教える時に誘ってみようかしら…でもサジタリウスが怖いし…」

一人で悶々と考えていたシャマル。その時…

キュイイイイイン…!!

「っ!?! クラールヴィントのセンサーに反応! シャーリー!」

クラールヴィントのセンサーに獲物がかかった。

「はい…来た来た、来ましたよ!」

『ガジェットドローン陸戦?型…30、35!』

『陸戦?型…2、3、4!』

「前線各員へ。状況は広域防御線です。
ロングアーチ1の総合回線と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います」

（スターズ3、了解！）

（ライトニング3、了解！）

（ライトニング4、了解！）

（スターズ4、了解！）

（ライトニング5、了解）

フォワードの5人は連絡を受け、それぞれが戦闘態勢に入る。

広暁もすぐに表玄関の方へ行こうとしたが、続けてシャマルから連絡が入った。

「広暁君は私のところへ来て。他の子はティアナの指揮で防衛ラインを堅守して」

（どういうことですか？）

「私1人じゃこれだけの広さの探索魔法を張るのは難しいの。広暁君は私の補佐を頼むわ」

（ホルスも連れていきますか？）

「そうね…念のためお願いするわ」

(了解)

即座に行動を開始する5人。

ティアナは現場の情報を得るためにシャマルに情報を送ってもらい、ホテルの中にいたスバルは外へ。

地下にいたエリオとキャロも地上へと上がる。

広暁もシャマルのもとへと行くために、ホテルの外側から一気に屋上へと飛ぶ。

(私とシグナム、ヴィータはガジェットの迎撃へと向かう。抜かなよ)

(了解。そつちこそ、こんがり良い色に焼けんようにな)

(ぬかせ…)

ザフィーラが走り出すと同時に、ホテル内にいたヴィータとシグナムは騎士甲冑を纏う。

ヒュン…!!

装着を終えて飛んで行くのは2筋の光。

赤いゴスロリの騎士甲冑を纏ったヴィータと、下半身が大段に露出した騎士甲冑を纏ったシグナム。

「広暁はシャマルの手伝いか」

「あいつは元々そつちに適性があるからな。
ミッドチルダで生まれ育っていたなら補助型の魔導師として花を咲かせていただろう」

「ホントに器用な奴だな。あれで魔力量が多ければ言うことないんだけど」

「天は二物を与えず、だ。もしそうだったら高町以上の魔導師になっ
っているぞ」

ヴィータが新人のところまでガジェットは行かせねえと言えば、シ
グナムはそれを過保護と言う。

雑談をしているように見えても、2人はしっかりとその目にガジェ
ットを捉えている。

今までの戦いから、心理的に余裕が無いと戦闘が厳しくなることは
分かり切っているから。

「ホルスだけでも来てくれたらいいのだが」

「お前こそ贅沢言っな。ホルスがこんな場所で暴れたら森林火災が
起きるぞ」

「…それもそうだな。では、私は先に行く。私が大型を潰すから、
お前は細かいのを叩いてくれ」

「おつよ」

「ガジェットは副隊長達とザフィーラが各個撃破。順調ね」

「今のところは…ですけど」

「不吉なこと言わないの」

そんな会話をしていたのは、騎士甲冑を纏ったシャマルとバリアジヤケットをまとった広暁。

シャマルがホテル周りの森林一体に探索魔法を張っており、広暁はホテル内と周辺に張っている。

シャマルだけでは探索魔法の効果範囲に穴が出る可能性があるらしく、広暁がホテル内外を、シャマルがその外側広域に張ることでの可能性を消しているのだ。

「探索魔法って神経使いますね…」

「慣れれば簡単よ？それに、広暁君は探索魔法を初めてまだすぐ何だから。」

効果範囲が広いだけで十分よ」

「ありがとうございます…っと、ホルス？」

そんな会話をしていると、ホルスの様子がおかしいことに広暁は気付く。

どこかそわそわとしており、その紅い両眼はしきりに動いている。

「何か見つけたのか？」

竜であるホルスの五感は、人間である広暁よりかなり優れている。そんなホルスが魔法でも見つけられない何かに気付いたと思ったのか、広暁はホルスに話しかける。

「キュイ…キュ！？」

ホルスが言葉を紡ごうとしたその時。

「！？この反応は！？」

再びクラールヴィントに反応が表れた。

「…っ！？」

「キャロ、どうしたの？」

「近くで誰かが召喚を使ってる！」

『クラールヴィントのセンサーにも反応！だけどここの魔力反応って…！…！』

『お…大きい…！』

ホテル・アグスタを遠巻きに見る2人の人間。

1人は黒と茶色を基調した服に身を包んでいる男。

もう1人は黒と紫を基調した、ゴスロリ服を纏った少女。

少女が魔法を発動し、彼女の足元の魔法陣から両生類の卵を彷彿とさせる物体が出てくる。

「我が甲、小さき者、羽ばたく者、言の葉に応え、我が命を果たせ
…。召喚、インゼクトツーク」

ミチ…ミチミチ……ズシャアアアン……！！

詠唱が終わると同時に触手が破裂し、中から出てきたのは大量の…
虫？

画鋏に羽が1対生えた様なその姿は、イメージだけは虫と思えても、
言及すれば虫とは思えない。

そんなよく分からない虫が、卵の中から大量に生まれた。

「ミッシヨン、オブジェクトコントロール……いってらっしゃい、気
を付けてね」

少女の言葉に1回点滅することで反応した虫達は、一斉に飛んで行
く…。

「はあ!!」

ガン!!

「何!？」

最初に違和感に気付いたのはシグナムだった。
ガジェット? 型と戦っていた彼女は、順当にそれを撃破していった。
しかし、急に相手の防御反応が良くなったのだ。

(一体どういうことだ…ヴィータ!!)

(こつちも一緒だ! シュワルベフリーゲンが全部避けられる! 急に動きがよくなりやがった!)

(有人操作に切り替わった…!?)

(何があった…?)

シャマルと広暁も念話に加わる。

もしこれが先程反応にあった召喚士の魔法なら、新人たちのところに回り込まれる可能性が高い。

念話内で話し合った4人は行動を決める。

(ヴィータ、お前はラインまで下がれ)

(分かった)

(ザフィーラ、シグナムと合流して)

(心得た)

(スバル・ティアナ・エリオ・キャロ。遠隔召喚の可能性もあるから、常に気を抜くなよ)

(((はい!!)))

それぞれが適切な配置へと移動する。

しかし、この時の彼女達は知る由も無かった：更なる敵が迫っていることを。

そして：それらに対する知識を持ち合わせているのが、広暁だけであることを。

第27話「ホテル・アグスタ 知」（後書き）

第27話、いかがだったでしょうか？

番外編をやったのですが、原作通りのルートにオリ主を混ぜるのって難しいですね…今更ですが。

広暁の魔法の資質に関してですが、要約すると『器用』ということ
です。

または『効率がいい』と言った方がよろしいでしょうか？

こういった才能はなのは二次小説のオリ主には無いのでやってみたくなっちゃってしまいました。

もし疑問に感じるものがあれば感想に書き込んで下さると嬉しいです。

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしております。

第28話「ホテル・アグスタ 散」 (前書き)

ちよつと間が空いてしまいましたが…第28話です。

今回はちよつとした訂正がありますので、後書きもしっかり読んで下さいね？

では…第28話、始まります。

第28話「ホテル・アグスタ 散」

「つまり…召喚士の魔力反応の後、急にガジェットの動きがよくなつたと?」

「そうよ。一体どうして…?」

ホテル屋上、現場指揮をしていたシヤマルと広暁は考察していた。召喚士による大きな魔力反応、その後すぐにガジェットの動きが眼に見えてよくなったのだ。

「召喚士が何をしたか分かりますか?」

「さすがにそこまでは分からないわね…」

シヤマルに分からないことを広暁が分かるわけがない。

だからこそ、広暁は考える。

自分が長所として認め、周りからも長所として認識されている洞察力。

様々なデータを基に、現状で最も可能性が高いことを考察する。

(召喚士…大きな魔力反応…急に動きの良くなったガジェット…)

過程の仮定を考え、召喚士の立場になって。

もし自分が召喚士ならガジェットにどのような魔法を施すか?

(魔力反応……………召喚士?)

キーワードは召喚士。

召喚士がガジェットに施す魔法、それは一体何か？
自分の知識を基に、冷静に、客観的視点に立って考える。

(召喚…魔力反応…ガジェットの動きの向上…まさか！?)

データがデータを結び、それは情報となる。

情報となった広暁の考察結果は、それが現状ではどのような位置づけになるか？

(…他の可能性も否定し切れない。だけど、これが今俺が考える最も可能性的であり得ること)

考察……………終了。考察結果を告げる相手は現状での上司。

「シャマル先生、俺の考えを聞いてもらえますか？」

「いいわよ、言うてみて」

シャマルもそれを快諾する。

経験では広暁は六課の中で一番下だが、歩んできた人生に裏付けされた洞察力を認めているから。

広暁が今の問題をどのように考察したか、シャマルは聞きたいのだ。

「召喚士が何か…例えばガジェットの動きを向上させる小さな物を多数召喚した…俺はそう考えます」

「小さな物？」

「召喚師である以上、何かそういった類のものを召喚するのが自然。魔力反応があっても何が起きたかシャマル先生が分からないのは、

魔法によって召喚された何か小さ過ぎて魔力反応を探知しにくいから。

ガジェットの動きを向上させる…例えばガジェットと融合する小さな機械を召喚したと考えます」

「……………なるほど、可能性的には十分有り得るわね」

広暁の言ったことに対し、シャマルは素直に感心した。

この少ない判断材料を基に、これだけの考察をした広暁に対して。しかし、広暁は更に言葉を続ける。

「ですけど、まだ分からないことが」

「分からないこと？」

「ガジェットの動きを良くすること自体がおかしいんです。

ガジェットの動きを良くするってことは、向こうが本気で何かを狙いにきているということ。

だったら最初から動きをよくした状態でここを襲撃すれば、奪える可能性も上がる。

だけど相手は、途中からガジェットの動きをよくする魔法を使った。何故そうしなかったか…可能性は3つ。

1つ目は召喚士の合流が遅れて、仕方なく途中から魔法を使った。

2つ目は、偶然召喚士が近くを通りかかって、え〜と…へりの中で聞いたのは……………」

「ジェイル・スカリエッティ？」

「そう、そのスカリエッティの要求に承諾して魔法を使った。3つ目は…それ以外の何かです」

「…よくこの短時間でそこまで考えられるわね」

「…そういう性格なんです」

広暁の考察を基に、現場指揮を行っている2人は更に考える。

もし広暁の言ったことが本当なら、ガジェットを叩くのはシグナム達3人に任せた方がいいだろう。

しかしシヤマル達が念話で考えた通り、召喚士なら一気にガジエツトを転送することも可能だ。

ならば現状ではどうするべきか？

その時…

「シヤマル！広暁君！！」

「この声は…リン曹長！？」

「はいです！！」

いきなり目の前に現れたのはリンだった。

どこから現れたのか分からないが、急に現れたのでそうとしか言えない。

突っ込んだら負けだ。

「話は聞かせてもらいました。

もし広暁君の考え通りなら、その小さい何かガジエツトの動きを良くしたのは間違いありません。

しかし、だからといって現状で取れる手段はありません。

このままガジエツトの破壊を続行するということでもいいですか？」

「…そうですね。ガジェットの動きが良くなった今じゃ、取れる手段がありませんし」

「それじゃあ、お願いしますね？」

「リイン曹長はどちらに？」

「召喚士の姿だけでも見に行きます。私1人じゃ叩けません、せめて姿を確認するだけなら…」

召喚士の姿を捉えることも確かに大切だ。

加えて、現状で自由に動けるのはリインのみ。

今後のことを考えても現状のことを考えても、リインが行くのは適切な判断だと分かる。

しかし…

「リイン曹長だけじゃ何かあったときに危険です。ホルスも連れてって下さい。」

シヤマル先生、いいですか？」

「えっ、でもそれじゃあ…」

「いいのよ、リインちゃん。本来私だけでやることを広暁君に手伝ってもらったの。」

それでも十分なのに、ホルスまでいるのはさすがに…ね。

何より、リインちゃんに何かあったら悲しいわ」

「シヤマル…広暁君…分かりました。ホルス、お願いしていいですか？」

「キュー!!」

ホルスは大きく鳴くことでリインに答える。
翼を大きく広げて羽ばたく様は正に竜。

その様子を見た広暁とシャマルも、思わず笑みがこぼれる。

「それじゃあ、行ってきます！ホルス、行きますよ!!」

「キュイ!!」

シュタツ!!

シューイイイイン……。

あつとゆう間に飛んで行った1人と1匹。
リインがホルスの背中に乗っていたような気がするが気のせいだろう。

「…ドラゴン・ライダー？」

「どうしたの？」

「いえ、何でも」

広暁のぼやきについ突っ込んでしまったシャマルだが、すぐに気を取り直して現場指揮に戻る。
ところが…

「そつ……っ!?!この反応は!?!」

「じつなるわな…」

「遠隔召喚、来ます！」

「やっぱり来ましたね…お兄さんからの念話がなければ焦るところでした」

「召喚士ってこんなことも出来るんだね」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもありますから」

「まったく…ぼさつとしてないで迎撃行くわよ！..」

「」「」「おっ！..」

「やはり来たわね…遠隔召喚」

「.....」

「広暁君？」

「……………」

モニターで遠隔召喚を見ていた2人。

シャマルは予想通りといった感じだが、広暁は苦い顔をして熟考している。

まるで、どうしてこんなことをしたのかといった風に。

「広暁君!？」

「っ!?! すいません…!」

「何か気になることでもあるの?」

「ええ、まあ…!」

「だったら言つて。自分1人で考え込むのは良い判断じゃないわ!」

「…そうですね!」

広暁の癖を知っていたシャマルは、諭すように忠告する。

その裏には、「自分1人で考え込んで自滅したら意味無いのよ!」という忠告も含まれているが、広暁はそれに気付いていても今は気付かないふりをして答える。

「忠告した手前、こんなこと言うのも変かと思うんですけど…!。どうしてあいつらの正面に召喚したんですかね?」

搬入口の近くとか…悪くても人気の少ないところに召喚すればいいのに!」

「確かに…一体どうして？」

「本当の狙いが別にあるか、もしくは…っ！？ 罠か!？」

「罠!？」

「俺達の注意をこっちに引き付けて、本当の狙いは警備が薄かった搬入口。もしそうだとしたら…」

「まずいわね。だけど、可能性の話でしょ？」

「それでも、可能性である以上有り得ることなんです。俺に行かせてもらえませんか？」

広暁の言ったことは確かに正論だ。

もしもガジェットが罠なら、搬入口から入ってロストロギアを狙われる可能性もあり得る。

しかし、あくまでこれは広暁が考えた可能性の話。

そんな曖昧なもので動かせていいのか、シャルマルは考える。

「お願いします」

「でも広暁君じゃ…」

「フォワード4人と副隊長2人は防衛、隊長2人と部隊長はホテルの中の警護。

シャルマル先生は現場指揮でザフィーラは迎撃。

ライン曹長とホルスは召喚士の確認。

行けるのはシャルマル先生の手伝いをしている俺だけなんです」

「それでも…広暁君の戦い方じゃ地下では不利よ」

搬入口とはいっても、それはそのまま地下の駐車場に直結している。そして、広暁の戦闘スタイルでは地下での戦いは厳しい。

広暁はセンチガードとしては異例の動物狙撃型であり、広大な大空の空中戦でこそ真価を発揮する。

足を止めるタイプの静物射撃型に変えることも出来るが、如何せん経験が少ない。

広暁はフォワードとして訓練をしているため、フォワードのチームとして足りないものを補うための戦闘スタイルをとる必要があるから。

足を止める静物射撃型より、自由に移動して中距離から援護出来る動物狙撃型の方が都合がいいのだ。

「まだ何か来るって決まったわけじゃないし、あくまで可能性の話です。」

来なければそれでOKだし…来たら来たで適切な判断をします」

「広暁君なら無茶をすることはないでしょうけど…」

「…俺ってそんなに信用されてませんか？」

「普段真面目な人ほど、追い詰められた時に爆発するものよ？」

「……仮にそういう性格だとしてもそうはならないようにしますから許可を下さい」

「……………」

シャルは考える、広暁を行かせていいか。

現状で考えれば、広暁以外に行ける人間はいない。

しかし、広暁の戦闘スタイルでは地下での戦闘は不利。

あくまで可能性の話とはいえ、判断を下す以上熟考しなければなら
ない。

（広暁君の性格から考えて、まず無茶をすることはない。

洞察力や判断力も優れているから、よっぽどのことがない限りは大
丈夫だと思うのだけれど…）

「……………」

判断を焦っても、それは絶対に広暁が望む結果にはつながらない。
そんな子供の様なことを広暁はしないし、しても無駄骨ということ
も分かっている。

だからこそ広暁はシャマルの判断を待つ。そして…シャマルが判断
を下す。

「分かったわ。行くのは認めるけど、決して無茶はしないように。
危険だと感じたらすぐに戻ってくることに、それが条件よ」

「了解。それじゃ…」

いざ広暁が行こうとすると…

キュイイイイイン……………！！

「クラーヴイントに反応!？」

「またですか!？」

「ドクターのおもちやが…増えた？」

「何を考えているのだ、あいつは…」

ホテル・アグスタから離れた所にいた2人が見たのは、更に増えたガジェット。

それらもまたホテル・アグスタに向かっている。

「まだインゼクトツークも十分…ミッション、オブジェクトコントロール」

少女が魔法を唱えると、空中に散開していた虫達がまたもガジェットの中に入っていく。

動きが良くなったガジェットは、ホテル・アグスタへと向かう。

「あいつらには虫をつけないのか？」

「あれは付けちゃ駄目って…前会った時に、試したいことがあるってドクターが言ってた」

男が指差した先にいたのは……

『照準…異常無し』

『装甲…異常無し』

『右腕…異常無し』

『指揮…異常無し』

ガジェットには似ても似つかない風貌をした、4種類の機械達であった。

『ガジェット?型…20、25、30!!』

『ガジェット?型…3、4、5!!』

「更に増えるの!?!」

「おいおい…」

現場指揮に当たっていた2人は頭を悩ませていた。ただでさえ動きの良くなったガジェットに手を焼いているのに、更

に数が増えたのだ。
増えたガジェットもまた動きが良くなると思うと…

『シャマル、広暁君！！』

「リンちゃん！？」

『召喚士の場所に向かう途中で機械っぽい虫を見つけました！今はホルスと一緒に交戦中です！！』

「交戦！？大丈夫ですか！？」

『ほとんどホルスが焼いちゃったので私はやる事がありません…』

「…リン曹長は今からどうしますか？」

『そちらに戻って戦場指揮に務めたいと思います。シャマル、いいですか？』

「勿論。広暁君、地下の方をお願いね？」

「了解、と言いたいところなんですけど…増えたガジェットの対処はどうします？」

広暁が気になるのはそこだった。

今はまだ対処出来ているが、増援として来たガジェットの対処は正直言って難しい。

新人4人は持ち場を離れるわけにはいかず、ヴィータは4人と合流するために移動。

最前線で戦っているのはシグナムとザフィーラだけであり、増援に

は対処出来ないだろう。

「厳しいけれど…2人に頑張ってもらうしかないわ。はやてちゃん達は動くことが出来ないし、広暁君が言った可能性を排除するわけにはいかない。」

私が動けたらいいんだけど、指揮がなくなったら統率を取るの難しい。

だから…今はこうするしかないの。」

「…そうとも限りませんよ?」

「えっ…?」

「俺がここから増援のガジェットを可能な限り叩きます」

「え!?!そんな魔法を使えるの!?!」

シヤマルは驚いた。

シヤマルの知っている広暁の魔法は、ほとんどがなのはやフェイトに教わったもの。

それらは全てが移動魔法や砲撃魔法であり、広範囲に使える魔法を持っていると知らないからだ。

「こうゆう時のために考えておいたんです。」

シヤマル先生が判断に困ったのは、時間がかかると考えたからですよね?

俺が広範囲魔法を使えたら、ガジェットを叩かせてからでも搬入口に行かせることが出来ますから。

だから、今ここで俺が可能な限りガジェットを叩きます」

「それは本当なのね？」

「ちゃんと練習もしましたし、ぶっつけ本番というわけでもありません。」

ガジェット相手に放つのは初めて…ですけど」

「…いいわ、やりなさい。広暁君がやってた範囲は私がカバーするから」

「ありがとうございます」

シャマルの配慮に感謝し、広暁は探索魔法を解く。

ホルスはそんな広暁の背後に回り、まるで広暁を守る様な位置に着く。

広暁の魔法発動を誰にも邪魔させないという空気が感じ取れ、それは広暁にも伝わる。

（ホルスに気を使わせたか…俺も失敗は出来んな）

シュン…！！

パン！！

パシッ！！

左手に持っていたサジタリウスを軽く上空に投げ、音を立てて両手を叩く。

プリシヨットルーティンを行うことで集中力を高め、サジタリウスをキヤッチ…魔法を発動する。

「カードリッジロード」

ガシヤンガシヤン！！

消費するのは2発のカードリッジ。足元に浮かぶは黒色のミッドチルダ式魔法陣。

発動するのは天創塵に続く第2の魔法。発動と同時に広暁の周囲を薄く黒い光が包み込む。

（探索…捕捉…）

探索魔法を使い、攻撃対象をロックオン。

範囲が広いとはいえ、捕捉する短時間のためだけに使うならシャマルと同範囲も広暁に可能。

（？型16機…）

攻撃可能…いや、確実に撃破可能な数は？型16機。

その中に？型は含まれていない。

防御力で？型を上回る？型を攻撃するのは、今の広暁には分が悪い。自分出来ることを、今は確実にやる。

（収束…形成…）

探索魔法を行う過程で同時進行して周りに集束されていた魔力。

それらが段々と矢の形に形成されていく。

遠距離砲撃魔法の天創塵と違い、1対多を想定して考案された対集団射撃魔法。

(展開…展開…)

こなす要領は天創塵と同じ。

異なるのは1本に集束するか数を増やすか？

鍛えられた肉体と類稀なる魔力制御能力を持つて矢を更に生成する。

(何これ…！？多すぎる…！！)

生成される矢、それらは一様に短い。長さは精々天創塵の1/8程度、針といつても過言でない長さ。

収束魔力量も普段広暁が放つ矢と大して変わらない。しかし、その数は異常。

十では足りぬ、百でも足りぬ。16機のガジェットに向けて放つ量としては明らかに異常。

(準備完了)

周囲に展開される矢の数、占めて128本。

あまりに多過ぎる矢、それらが整然と並ぶ様はまるで矢の壁。

「セツト」

広暁の掛け声と共に、それらの矢はそれぞれの攻撃対象であるガジェットの方角を向く。

ガジェット1機につき8本、占めて16機のガジェットが広暁の攻撃対象。

「篠電霰・弍式…！」

ヴィ

ン！！！！！

『篠電霰・弐式』
じゆんでんせん・にしき

弦を弾くと同時に128本の矢がそれぞれの攻撃対象であるがジェットに向かって飛んでいく。

一纏め8本の矢が空中を飛ぶ様は天を奔る流れ星の様だがその攻撃は非情。

虫がついたことで動きが良くなり、自在に攻撃を避けるガジェット。しかしそれは飛んで来る矢が1本だけならの話。

一纏め8本の矢がまるでタイミングを計ったかのように絶妙なタイミングで飛んで来る。

仮に最初の矢を避けることが出来たとしても、第2第3の矢がそれ以上の回避を許さない。

その結果、例え1本1本の矢の威力は小さくてもガジェットは破壊される。

最初から1本で仕留めようなんて考えていない。

8本で1本、質より量。

一方こちらは、10機のガジェットがホテルに向かって飛んでいる。それらが森の中でも開けた空き地に出た所で…

シューシューシューシューシューシューシューシューシューシュー

!!!!!!

ドガン ドガン ドガン ドガン ドガン ドガン ドガン
ドガン ドガン ドガン!!!

10機全てが破壊された。

もしもガジェットが話すことが出来たら、一様に口を揃えてこう言うだろう。

「避け切れない」

天より降り注ぐ矢の雨、占めて80本。

矢が短いとはいえ、その破壊力は普通の矢より少しばかり威力が劣る程度。

AMFといえど破ることは難しいことではない。

仮に角度やAMFの強度等の条件で矢が防がれても、別方向から向かって行けばいいだけの話。

現在知られているガジェットのAMFは一度に1つの面しかAMFを張ることが出来ない。

例え1本防がれても、別方向から突っ込めばいい。

使うのは魔力でも体力ではない…頭脳。

「ふう…」

「広暁君、今の魔法は…？」

「対集団戦射撃魔法…『篠電霰・弍式』」

遠距離攻撃の貫通力と攻撃速度において、広暁は六課随一。

しかし弓矢の性質上、一度に放てる矢は数本が限界。

直接放たずに周囲に展開してもいいが、質と量はたかが知れている。そこで広暁が考えたのが篠電霰。

硬くて遅い相手を想定した遠距離砲撃魔法『天創塵』と違い、複数の相手を数多の矢で攻撃。

矢を長くすれば本数は少なくなるが威力は上がり、逆に短くすれば本数は多くなるが威力は下がる。

誘導制御や本数の関係上、広暁並の魔力制御能力あってこそ出来る魔法だ。

「篠電霰…篠つく電霰ノコデンガン…」

細く群がって生える竹を『篠竹』と言う。

篠竹を束にして地面に付きおろすように激しく降る雨を『篠つく雨』と言う。

しかし篠電霰において振ってくるのは、雨ではなく矢。

その破壊力は…荒れ狂う積乱雲の中で生み出される電霰の如し。

「っ!？」

一瞬眩暈がしたかと思うと、広暁は倒れそうになった。

それを膝に手を当てて支えることで無理矢理体制を保つ。

シヤマルも広暁の傍に駆け寄ると、治癒魔法をかけて広暁の回復を図る。

「カードリッジ2発ロード…結構体にきますね」

「いくら体を鍛えててもこればかりは、ね。徐々に体を慣らしていきかないわ」

カードリッジは自己で作り出せる魔力量より多くの魔力を使いたい時に使用する。

広暁の場合はそんなことをしなくも矢を生成出来るのだが、それは時間がかかってしまう。

1本の矢に収束する天創塵と違い、128本の矢を作るだけのサイクルを篠電霰は繰り返すのだから。

本数を減らしてもよかったが、その分矢に収束する魔力は増えるので要する時間は変わらない。

故にカードリッジを使うことで時間を短縮したのだが、結果としてかなり疲労してしまった。

体を鍛えているとはいえ、限界寸前を繰り返すより1回でも限界を超える方が体にはこたえるのだ。

ティアナやスバルはしょっちゅう使っているので大して問題ないだろうと考えていた広暁だったが、今回のことで考えることになった。もっとも徐々に慣らしていけばいいということなので、練習のメニューをどうしようか、ということに関してだが。

「さすがに8本は多かつたかな…」

「こればかりは経験を積むしかないわね。3〜4本で十分だったと思っわよ？」

「まだまだですね、俺も」

「（それは本心から言ってるのかしら…？）大丈夫？ちゃんと動け

る？」

「コキリ…。」

「大丈夫です、体はちゃんと動きます。それじゃあ、俺は行きますね」

「ええ、気をつけてね」

一通り体を動かした後、広暁は搬入口へと飛んで行く。その後ろ姿を見ていたシャマルはボソリと呟いた。

「日本人の美徳…かしら？」

第28話「ホテル・アグスタ 散」 (後書き)

第28話、いかがだったでしょうか？

篠電霰・弍式の説明は本文中でほとんど言ってしまったので、説明は省かせていただきます。

そして…前書きで書いた訂正のことですが。

地球編4で書いた天創塵てんそうちんの説明、その中でこの技の能力を詳しく数値化したものを消去します。

何故なら、詳しく決め過ぎると後々自由が利かなくなるからです。私の勝手に申し訳ありませんが、ご容赦下さい。

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしております。

第29話「ホテル・アグスタ 現」(前書き)

第29話です。

俗に言う仕事疲れという奴が溜まり、更新が遅れてしまったことを謝罪させていただきます。

もっとこまめに更新出来たらいいのですが…難しいです。

では……。第29話、始まります。

第29話「ホテル・アゲスタ 現」

< 広暁 side >

「おいおいティアナ…」

搬入口に向かう途中で急にシャマルから念話が入ったから見てみれば…何をやってるんだ、あいつは？

カードリッジ4発のクロスファイアーシュート、しかも20発以上同時誘導制御なんて…。

今のティアナには無理だろ、俺にも分かるぞ。

俺はさつき篠霰霰を128本放ったけど、あれは誘導制御じゃなくてロックオン。

8本で1本だから実際は16本みたいなもんだし、実はそんなに難しいものじゃない。

案の定操作を誤った弾は一発がスバルの方へと飛んで行った。

何とかヴィータ副隊長が間に合って打ち返したからよかったけど…

2人共、最後衛まで下げられた。

「そついや…あんまりティアナと話したことないな」

今まで見てきた感じでは、真面目でちょっと皮肉屋で、ひたむきに上を目指す人って感じだった。

自主連も俺以上にやってるし、自分を客観的に見れない人間じゃないと思ってたんだが。

「…ティアナに似た後輩がいたな…」

高校時代、俺の1つ下の後輩にティアナに似た奴がいたことを思い出した。

ただひたすらにソフトテニスが上手くなるために、部活内で誰よりも練習をしていた後輩が。

技術面だけで言ったら俺よりも上だったけど如何せん…今は関係無いか。

あれ？俺って中学・高校とソフトテニス部で、大学はソフトテニスサークルに所属してたんだよな…？

デバイスは弓型だし、ここ2カ月ラケット握ってないし…いかん、無性に打ちたくなってきた。

「一回ティアナと話した方がいいかな。あ、でも…その前になのは隊長に聞いてみるか」

仕事のことを口に出して無理矢理軌道修正する。

さっきの思考は今全然関係ないし、今考えても無意味だ。

ティアナに話を聞きたいけど、念のためなのは隊長に先に聞いてみるか。

どうにも…機動六課は訳ありの人が多いからな。

丁度、俺もなのは隊長に聞きたいことがあるし。

何か起こってからじゃ遅い、『転ばぬ先の杖』だ。

「さてと…この思考はここまで」

搬入口の前に着いた俺は、飛行魔法を解いて地面に足をつける。そ

して俺が見たのは…

「当たり前ですかい……」

搬入口の両脇に立っていた2人の警備員が倒れていた。見た感じ血は出てないし、前向きに綺麗に倒れている。後ろから首筋を手刀で一撃……っていうのが妥当なところだろう。

(……冷静だな、俺……)

人一倍冷静な性格と自負しているが、目の前で気絶している人間を見るのはこれが初めてだ。

普通に地球で暮らしてたら気絶してる人間を見る機会なんてまずないし。

そんな俺が……どうして？

「……考えても仕方ない、か」

今は任務中、ましてやその任務を妨害する奴が表れた可能性がある。やるべきことをやる……それだけだ。

「クラールヴィントに連絡」

『はい』

直接シャマルに念話で聞いてもいいが、さっき聞いた限りでは今は立て込んでいる。

クラールヴィントに連絡して、俺がこの2人を治療してる間に返事を待つというのが適切な判断だろう。

「先ずは…意識を回復させなきゃな」

普段使うフィジカルヒールは、あくまで治癒魔法。傷を直したり疲労を取り除くならともかく、意識を失ってる相手に使ってもほとんど効果が無い。だから今使うべきは…

「マインドリターン」

ブワアアア…。

生物の意識を戻すための魔法『マインドリターン』。人間相手に使うのは初めてだが、思ったより順調だ。そのまま数秒すると、1人目が眼を覚ました。

「ウツ…！あなたは…墨谷さん？」

「はい。時空管理局本局古代遺物管理部機動六課所属、民間協力者の墨谷広暁です。体の方はどうですか？」

「ちょっと首筋が痛いですが…大丈夫です」

「そうですね、良かったです。

そちらの方の意識も戻しますから、その間に記憶を整理しておいてもらえますか？

色々と聞きたいことがあるので」

「えっ？…ああ、そういうことですか」

相手が理解したのを確認した後、2人目にもマインドリターンをかける。

こっちの人のの方が体を鍛えているのか、早く目を覚ました。

1人目と同じ説明をした後、早速話を聞きにかかる。

「では…何が起こったか、説明をお願いします」

「はい。我々は先程…つい10分前までここに立って警備をしていました。

すると突然、紫色の光がここに向かって飛んできたのです」

紫色の光？魔導師が飛んでる時の比喻表現のあれか？

「いえ、それは…人ではありませんでした。

何て言ったらいいのか…まるで昆虫の姿をした人間、いえ、人間の姿をした昆虫のようでした」

昆虫人間？人間昆虫？

一番妥当なのは…召喚士が何かそういった類の召喚獣をこっちに飛ばしたってところか。

「我々が連絡を取ろうと通信デバイスに手を伸ばした瞬間、首筋に衝撃がはりました。

その後は…墨谷さんに会うまで意識は有りませんでした」

「そうですか…地下には見回りの方が何人かいましたよね？」

「はい…ですが……」

この人達がこの調子だと、その昆虫人間だが人間昆虫に警備員は倒された可能性が高い。
さて…どうするか……。

(広暁君)

(シャマル先生?)

グッドタイミングというべきか、シャマル先生から念話 came。丁度いい、支持を仰ぎますか。

(クラールヴィントから話は聞いたわ。詳しいことを教えて)

(はい)

(なるほど…分かったわ、広暁君はそのまま地下のオークション品の確認に行つてちょうだい。

こっちはちよつとトラブルがあつたけど、順調にガジェットは撃破出来てる。

後は広暁君の方を確認したら、全体の状況を把握出来るわ)

(他の部署に連絡をした方がいいですかね?)

(そうね。だけど、応援が来るには時間がかかるわよ? 1人でその虫と闘えるの?)

(逃げるつて選択肢は無くなりましたしね…やばくても時間は稼ぐようにします)

(無茶はしちや駄目よ?)

(了解)

管理局の地上は色々としがらみがあるつてのは本当なんだな…。えっ? トラブル? 今は突っ込む時じゃない。理性ある人間ならちゃんと空気を読まなきゃ。

「局の魔導師の方に連絡をして、そちらの方の指示に従つて下さい。私は下に行つて様子を見てきます」

「はい…気をつけて下さいね? 相手は得体の知れない化け物かもしれませんから」

「了解です」

ザッ。 シュイイイン…。

立ち上がり、サジタリウスを左手に持って俺は再び飛ぶ。

しっかし、昆虫人間だか人間昆虫…ねえ？どんなUMAだろ？

あれか、剣と盾を持ってて無死虫団に所属してるのか？

それとも、「お前は一体何だ？」って言って最後に爆死するのか？

『マスター、一人でボケても意味無いです』

「……………」

…マジでこいつ、俺の思考を読んでるんじゃないか…？

そのまま俺は飛び続ける。

搬入口から地下へと続く通路は緩やかな下り坂になっており、今のところ不審な点はない。

「誰も倒れてないな、警備員は全員地下か？」

『そのようですね。通路を見回らないとは考えにくいですし、見回り箇所の交代か所用で場所を空けたと考えるのが自然でしょう』

「この下り坂に非常口以外の出入り口が無いとはいえ…杜撰だな」

転ばぬ先の杖って諺を知らないのかね？

あ、ここミッドチルダだったな、そんな諺無くても不思議じゃないか。

「到着…つと」

下り坂が終わり、検問所っぽい施設が見えてきた。

日本の駐車場と似た感じで、身分証を示すか駐車料金を払わないとあのバーが上がらないのだろう。

ここが高級ホテルってことを考えると、前者の可能性が高いか。

「探索魔法」

『はい』

サジタリウスに探索魔法を任せ、俺はバーの横、人が1人立って入れるぐらいの建物の中を見る。

「…やっぱり」

案の定そこにいたのは気絶した警備員。

制服はさっきの2人と同じで、同じ会社の警備員と見て間違い無い。見た感じ外傷も無いし、彼には悪いがしばらくこのままでいてもらおう。

今はUMAの確認が先だ。

『マスター、ここから半径80m以内で倒れている人間が3名。』

それと…人間ではない何かの反応が1つ。

体の形状から判断して、人間であるとは考えられません』

「何かそいつについて分かるか？」

『今使っている探索魔法ですと、これ以上詳しくは難しいです。』

精々、体温が人間より多少低いといったことぐらいしか分かりません」

変化が大きいとはいえ、昆虫である蜂の体温はほぼ人間と同じと言われている。

それと同じことを考えると…マジで昆虫人間だか人間昆虫？

「距離は？」

『真つ直ぐ50m、左に10m。トラックに積まれているロストロギアを漁っていると思われます』

もっと詳しく調べたいけど、逃げられたら元も子もない。

多少リスクはあるが、このまま突っ込むか。

確かこうゆう場合…まずは相手に自分の身分を証明して警告。

指示に従わないなら攻撃は許可されるんだっただな。

となると…どうやって気付かれずに近付くか…。

「…っと、その前に。シャマル先生に報告しないと」

途中経過ぐらいは報告した方がいいよね、うん。

『その件ですが、マスター』

「ん？」

『シャマル先生から連絡で、「そっちのことはあなたに全て任せろ。責任は私が取るから」だそうです』

「……………」

あれだな、シャル先生は現場指揮で忙しいんだな。

ここは額面通り受け取るとしよう（断じて責任逃れとか考えてない）。
え〜と…どうやって対象に近付くかってところまで考えたんだっ
な。

「消音魔法はまだ覚えてないし…」

『ソニック・ムーブで一気に跳んでは？』

魔力で両足を強化した状態でソニック・ムーブを使えば、一瞬で移動出来るかと』

「OK、それで行こう」

スウ …… ハア。 スウ …… ハア。 スウ …… ハア。

深呼吸をして、動悸と感情を落ち着かせる。

犯罪者相手に1人で当たるのはこれが初めてだけど…どうにかする
しかないよな。

シャル先生も、俺なら大丈夫だと考えて俺を行かせてくれたんだ。
…… そう考えるとプレッシャー大きいな。

『大丈夫ですか？』

「正直言つと…ちょっと怖い」

『自分を客観的に見られるなら大丈夫です』

「ありがと…3つ数えたら行くぞ」

『yes』

「3…」

冷静に…。

「2…」

落ち着いて…。

「1…」

勇気を出して…。

「0…」

一気に……………跳ぶ!!

『ソニック・ムーブ』

魔力の自己ブーストによる脚力強化と移動速度を速める魔法『ソニック・ムーブ』の併用で…50mある距離を一気に詰める!!

キュイイイン…!!

目標到達地点に着くのと同時に矢を生成、サジタリウスの弦にかけていつでも放てる状態に。

ついでに身分証明書を出現させ、頭の中で反復した言葉を口に出す。

「時空管理局です。窃盗罪、並びに公務執行妨害であなたを逮捕します……!?!」

ある程度は覚悟してたけど……マジでこいつ人間じゃなかったな。いや、疑ってたわけじゃないけど。

「……………」

そこにいたのは……正しく人間昆虫、いや、人間の姿を模倣した昆虫だ。

全身を覆う黒い甲殻、所々に見られる鋭く攻撃的なデザイン。

眼が4つあり、首には紫色の長いマフラーをしている……何で？

……いや、今はそんなことはどうでもいい。

返事が無いとなると……もしかして言葉を話せないのか？

念のため、もう1度言ってみるか。

「もう1度だけ言います。私は時空管理局の魔導師です。窃盗罪、並びに公務執行妨害であなたを逮捕……!?!」

シュン……!

ザッ……!

「っ!?!?何でこうなるかなあ……!?!」

突然UMAが俺に向かって突撃、右手に鋭い鉤爪ものを出現させて俺に向かって突き刺してきた。

避け切れたのはいいとして…こいつ今、俺の心臓を狙ったぞ!?

バリアジャケットがあるとはいえ、あんな一撃を喰らったら意識が飛ぶかもしれない。

一撃が命取りの可能性か…バリア魔法があるとはいえ、防御は回避に専念した方が良さそうだ。

「投降の意思は無し…いくぞ」

『了解』

キュイイイン…。 シュン!

先ずは様子見、矢を1本真正面からUMAに向かって放つ。

しかしそれなりに距離が離れていたこともあり、UMAはそれを軽く右に移動することで避けた。

だけど残念、俺の矢は…

ドガアアアン!!

「っ!?!」

任意のタイミングで爆発させることが出来る。

最初から爆発させるタイミングを決めておくか、俺がそう念じることで爆発する。

今の場合、矢が避けられた時に爆発するように念じておいた。

誘導矢と同じで、普通に矢を放つより若干魔力を使うが、要は使いどころだ。

キユイイイン……！！

瞬時に矢を2本生成し、構え……同時に放つ……！！

シュンシュン……！！

ドガン ドガアアア……！！

さっき放った矢と同じく、爆煙の中、奴がいるであろう場所で爆発する2本の矢。

あまり序盤から手札を晒すのは好きじゃないが、向こうは昆虫。知能は人間程では無いだろうし、こちらの主な攻撃手段がばれたとしても大した問題じゃない。

っていうか、サジタリウスがこんな形してる時点でもうバレバレだ。

ザン……！！

後ろに一飛びし、煙が晴れるのを待つ。

それと同時に周囲に矢を数本展開し、いつでも発射可能な状態に。

ここまで離れば、さっきのような不意打ちでも反応するまでの時間が增える。

その分思考に回せるので闘いを有利に進められる。

「さて……どうなったかな？」

まずは戦力分析の意味で仕掛けたが……。

「……………」

「あらう……………」

UMAは平然と立っていた。

体中が汚れていて所々傷もあるし、マフラーも若干ボロボロになっている。

俺の攻撃は効いてるんだろ？が…平然と立ってるあたり俺なんかよりは痛みに強いようだ。

さすが昆虫、人間とは違うな。

『マスター、どうされます？』

「持久戦なら勝機は十分にありそうだけど…」

見た感じこいつに遠距離攻撃手段は無いし、さっきの不意打ちを見る限りではスピードはエリオ以上フェイト隊長以下といったところ。とっさの不意打ちならこいつのスピードも全開に近いはずだし、十分反応可能なスピードだ。

別に最高速度で張り合う必要はない、要は反応出来ればいい。

反射神経と瞬発力には十分に自信がある。

天創塵を使ったら下手したらホテルが倒壊するかもしれないし、篠霰霰を使う時間はくれないだろうし…地道に魔法矢で体力を削って弱めの天創塵で仕留めるか。

簡単に捕らえられる程俺は強くないし、向こうも弱くないだろう。時間をかけてじっくりと体力を削る。

……こつゆう時に接近戦が出来ない自分が嫌だな。

「誘導矢を主体で攻める。ある程度弱ったらバインドで捉えて天創塵だ」

『バインドの方は任せて下さい。特別強固な術式を構築します』

「ああ……いくぞ」

魔法矢を配置し直し……

ザンー!!

………続きだー!!

第29話「ホテル・アグスタ 現」（後書き）

第29話、いかだだったでしょうか？

マインド・リターンはオリジナルの魔法ですが、広暁が考えたわけではありません。

原作には出てこない魔法、という風に認識して下さい。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第30話「ホテル・アグスタ 察」（前書き）

第30話です。

いや〜……どうしても投稿に間が空いてしまいました。

しかも私の小説は細かな描写が多いので、どうしてもアニメ1話分が長くなってしまっ……。

ホテル・アグスタ編だけでもう4話目ですよ……。

とはいえ、私の作風を無理矢理変えるのは難しい上に不本意なので、この形式のままに進めていきたいと思えます。

そんな私が執筆している小説ですが、これからも読んでいただけたら幸いです。

では……第30話、始まります。

第30話「ホテル・アグスタ 察」

ウイ

ン……ガシャン！……！！

ズガガガガ！

ギン！！ ガン！！ ゴン！！

「…広暁君に聞いた方がいいわね」

それは突然だった。

前線でガジェットを破壊していたシグナムとザフィーラ。

2人から念話が入ったのでその内容を聞くと、また未確認のガジェットが現れたというのだ。

シグナムとザフィーラが闘っていたのは3機の機械。

最も背が高く、遠距離から狙撃してくる黄土色の機体。

右腕についた刀を振るい、シグナムと斬り合っている緑色の機体。

縦横無尽に移動し、他2機への攻撃を阻害する青色の機体。

最初のうちはまだよかった。

前回リニアールで出現した3色ガジェットのこともあり、冷静に対応出来ていたからだ。

しかし、シグナムとザフィーラが3機と戦闘している途中で事態が急展開を迎えた。

突如として3機が合体し……ホルスを上回る巨体になってホテル・アグスタへと進攻を始めたのだ。

質量保存の法則を完全に無視しているが、ミッドチルダなのでシャルは突っ込まない。

「……まずいわね……」

今のところはまだ引きとめられているが、余り長引かせるわけにもいかない。

新人4人はガジェットと奮戦中であり、最前線でガジェットと闘っているのはヴァイターだけなのだ。

いくら元が空戦AAA+とはいえ、2・5ランクダウンで数十機のガジェットを破壊するのは骨が折れる。

「任せると言った手前こつちから連絡するのは気が引けるけど……仕方ないわね」

自分の中で考えを纏め、シャルは広暁へと念話を送信する。しかし……

ザ……ザザ……ザ……。

「これは……ノイズ？」

念話にノイズが入り、広暁へと繋がらない。

念話も魔法の一種であり、狭いところで複数人が同時に念話をする
とノイズが入ることがある。

しかし、ここはホテル・アグスタ。

敷地は広く、シャル程補助魔法に長けた魔導師の念話にノイズが入るとは考えにくい。

「……ん？繋がったわね」

気になるところであるが、今は広暁に現状を伝えるのが優先だ。シャマルはそう考え、広暁に現状を話す。

（どうしました、シャマル先生？

オークション品を漁っていた人間昆虫と戦闘中なんで、手短にお願
いします）

（分かったわ。今、シグナムとザフィーラが初めて見るガジェット
と戦闘中なの。

映像を送るから何か知っていることがあったら教えてちょうだい）

（了解……………ってこいつ!?!）

（知ってるの!?!）

分かっていたこととはいえ、やはり本人の口から聞くと驚きも一入
だ。ひとしお

しかし、ここで広暁の話の途切れさせるわけにはいかないので、無
駄な口を挟まないようにする。

（マシンナーズ・フォーヌって言って、3種類のマシンナーズが合
体して出来るモンスターです。

いるのはこいつだけなんですか?）

（ええ。最初は3種類の…モンスター?だけだったんだけど、途中
でいきなり合体したの）

（多分それは『督戦官コヴィントン』ってモンスターの能力です。
赤い色のモンスターがいませんでしたか?）

森の一角に黒炎のドームが形成された。

「大丈夫か？ホルスに任せて」

「今はホルスに任せる他ない。何より、現状であいつの相手に最も適しているのはホルスなのだからな」

「制限時間付き…だがな。私達が戻るまで頼んだぞ……ホルス！！」

『バーニング・インフェルノ』

立ち上るは漆黒の炎。

地獄の業火と比喻しても納得のそれは、瞬く間に2匹の周囲を包み込む。

「……………」

対峙するは2つの巨体。

鋼鉄の機械兵『マシンナーズ・フォース』と天空と太陽の竜『ホルスの黒炎竜 LV8』。

炎の結界、バーニング・インフェルノを物ともしない機械兵は、ただ冷静に銃を構える。

…ガチャーン!!

動作は一瞬、反応は刹那。

マシンナーズ・フォースが銃を構えたと思ったその瞬間、ホルスは既にその場にはいなかった。

10m以上はあろうかというその巨体を一瞬にして横に移動、銃の軌道上から離れたのだ。

『フレイム・スピア』

1本5mはあろうかという炎の槍を生成、その数4本。それらがマシンナーズ・フォースに向かって放たれる。

ドガガガガガガガガガガ!!

「!？」

放たれた極太の矢をマシンナーズ・フォースは全て銃弾で撃ち落とす。

しかしその銃弾は、鉛玉ではなく魔力弾。

広暁が放つ矢より速度も遅い。

ホルスもそれに気付いたのか、攻撃を直接的なものに変える。

『フレイム・ソード』

両手で持つは炎の大剣。

ホルスの身の丈に合ったその剣を両手で握りしめ、相手の体目がけて……振り下ろす!!

ギイイイイン!!

まるで金属同士がぶつかったかのような音を立てる炎の大剣と武器な銃。

ホルスが作り出す炎の大剣、それは鉄さえも容易に溶かし切り裂く灼熱の剣。

それをマシンナーズ・フォースは易々と受け止めた。

ギギギギギギ……!!

ガン!!

ドガガガガガ!!

これ以上押し合っても無駄と判断したのか、ホルスは距離を取る。その過程でフレイム・ソードをフレイム・アローに変えて放つが、

ドガガガガガ！！

シュウウウン…！！

ゴオオオオオ！！

例えば穴が開いたとしても、一瞬にして修復されてしまうのだ。固く作れないのなら作らなければいい、故に修復能力を高めた炎の結界。

そして、これこそがホルスの動きに繊細さが欠けている理由。ただ結界を張るだけなら容易。

結界の中に対象を閉じ込めるにしても、自分が外からそれを制御するのなら難しいことはない。

しかし今のホルスは、その結界の中で戦闘を行っている。結界を維持しながら時には肉弾戦を、時には間接攻撃を行っているのだ。

この状況が、ホルスの動きから繊細さを欠いている。ましてや、ここは『炎』の結界の中。

時間が経つごとに結界内の酸素は消費されていく。

機械であるマシンナーズ・フォースはともかく、呼吸をせねばならないホルスには酷過ぎる環境。

それに加え、炎を生成することは出来ても、炎が燃焼し続けるには酸素が必要。

段々と技の威力も落ちてくる。

フレイム・ソードがどこか不安定に見えたのもそれが原因だろう。

だからといって、バーニング・インフェルノを解除するわけにはいかない。

この結界を解いてしまったら、マシンナーズ・フォースがホテル・アグスタへと進攻してしまう。

それを防ぐ為に、今はホルスが足止めをする。

主人である広暁がUMAを倒し、機動六課のメンバーが他のガジェットを全て破壊するその時まで。

ホルスが考えた限りでは、それが終わるまでに大して時間はかからないはず。

故にホルスは結界内でマシンナーズ・フォースと戦う。

その時が来た時、より確実にマシンナーズ・フォースを倒すために出来る限り戦って疲労させておく。

『やるべき事をやれ。難しかったら別の方法でそれを成し遂げる。目的は1つでも、過程は1つじゃない』

シャマルから聞いた広暁の伝言を頭の中で反復し、ホルスは今後の行動を考える。

今ホルスがやるべきはマシンナーズ・フォースの足止め、それ以外の何物でもない。

ならば、どうやって足止めするか。その答えがこの技、バーニング・インフェルノだ。

単純に戦闘をしては森林火災を起こしてしまい、かといって肉弾戦だけでは限界がある。

ならば森の中でも開けた大地であるここで、炎の結界、バーニング・インフェルノを使ってマシンナーズ・フォースを閉じ込める。

必要なのは足止めであり、この馬鹿でかい機械兵を倒すことでは無い。
時間をかけてこいつを引き止め、尚且つ自分の疲労は最低限で済ませられるようにする。

それが今ホルスのやるべき事であり、現状だ。

可能なら倒してもいいだろうが、それはあくまで可能ならの話。
現段階では、ホルスは足止めを主軸に戦闘をすると決めた。

この結界の中では、ホルスの飛行能力も翼も役に立たない。
相手は銃を持っており、防御力と手数では向こうの方が上。
互角であるのは攻撃力、勝っているのはスピード。

戦闘する上での手札を確認し、与えられた任務をこなすためにホルスは考察する。

ガチャン…！！

牽制しながらも考えを纏めていると、マシンナーズ・フォースが体を反転して走り出した。

ホルスもその意図するところを理解し、その背中に十八番の技であるブラック・メガフレーム…高熱の黒炎を口から吐き出すことで行動を阻害しようとする。

しかし、相手もさるもの。
まるで最初からホルスの行動が分かっていたかのように体を移動させ、灼熱の炎を避ける。

ここでホルスは、奴には何か策があるのではないかと考えた。背を向けて走り出し、背中に来るであろう攻撃を最初から分かっていたかのように避けてみせる。

間接攻撃を防がれて冷静さを失った自分が直接攻撃：例えば先程使ったフレイム・ソードのような直接攻撃を仕掛けさせるために。

確証は得られないが、その可能性が高い。

そう考えたホルスは、走るマシンナーズ・フォースに向けて大量のフレイム・アローを発射する。

「……！？」

ホルスの行動が想定外だったのか、マシンナーズ・フォースは足を止め、銃から魔力弾を連射することでフレイム・アローを相殺する。しかし、放たれた量が先程より多く、且つ範囲が広がったために数本の矢を被弾してしまった。

フレイム・スピア程ではないが、ガジェット？型のAMFを容易く貫通するフレイム・アローだ。

被弾した箇所は多少削れており、黒い焦げ跡も見てとれる。

「グオオ……」

どうやらマシンナーズ・フォースは、策を張ることは出来る。

しかしそれも単純なもので、自分が簡単に見破れる程度のものだ。

ここで新たに「頭脳」という言葉が勝っている手札に加えられる。恐らく機械兵であるが故に、柔軟な発想・思慮深い考察というものが出来ないのだろう。

主人が主人なので、何だかんだでホルスは考察が得意になってしまったのだ。

少し頑固なところも似ているのは内緒だ。

無論、自分がこのように考察するのを見越した上でわざとあのよう
な行動を取った可能性もある。

可能性が低いとはいえ、そのことも考慮に入れながら足止めをしな
ければならないだろう。

そのように考えながら、ホルスは再びマシンナース・フォースに向
き合っていた。

第30話「ホテル・アグスタ 察」（後書き）

第30話、いかがだったでしょうか？

今回ホルスが使った技の中で『バーニング・インフェルノ』というものがありませんか？

実はこの技、昔やっていたアニメで出てきた技です（間に『・』は入っていませんでしたが）。
分かる人はいるのでしょうか？

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第31話「ホテル・アグスタ 倒」(前書き)

第31話です。

戦闘シーンの描写が難しかった…おっと、ここで愚痴ってはいけませんね。

では…。第31話、始まるよ〜

『駄目です。魔法を阻害する何か…AMFの様なものに阻害されているようです』

実はさつきから対象を分析に長けた探索魔法を発動してるんだけど、全然上手くいかない。

俺は戦闘に集中し、サジタリウスはUMAの分析をする。

そういう考えだったんだけど、何故か探索魔法が発動出来ない。いや、発動は出来るんだけど…全くといっていい程探索範囲が広がらない。

「シャマル先生に聞きたくても念話が繋がらないしなあ…」

ついでに言つと念話も繋がらない。

念話は話したい相手を頭に浮かべ、それを念じることで発動出来る。しかし、何故かノイズが入ってシャマル先生に繋がらない。

他のメンバーにも試してみたが、誰とも繋がらなかった。

もしかして…俺が外部とコンタクトを取れないようにしてる？

「探索魔法が使えないのは、情報が漏れるのを防ぐため。

発動者は…多分あいつを召喚した魔導師。だとしたら…」

『AMFの様なものを発動する生物を召喚してこの地下に飛ばした、といったところでしょうか』

「最初から使わなかったのは、俺の存在が想定外だったから。

あいつを通して俺のことを知って、そういう能力持ちの生物を飛ばしたってところだろうな」

『と言っても、その生物を探す暇は無いですね』

「だな。最悪ロストロギアが無事ならそれで良いし、あいつを倒した方が早い」

俺達がこの会話をしているのは駐車場にある柱の陰。

戦闘のせいで少し酷いことになってるけど、人1人隠れるだけのスペースなら十分にある。

UMAはさっきの攻撃で距離を開けてきたし、俺も疲れたから今は動かない方が無難。

疲れをとるのが、俺が今やるべきこと。

こんなへ口へ口の体で動いても、一撃くらってポポポポ〜ンって吹っ飛ばされるのがオチだ。

「一撃ももらってないとはいえ、さすがに疲れたな…『フィジカルヒール』」

ポワアアアン……。

ああ〜……気持ちいい。

『マスターの瞬発力は凄いですからね。後は持久力さえあれば…』

「贅沢言つな。これでも同年代では上の下ぐらいの持久力があったんだぞ」

陸上部や水泳部の「俺には肺が4つある!!」みたいな奴らと比べられても困る（確かテニス部のブラジル人とのハーフの奴もそんなこと言ってたような…）。

……戦闘中だったのに何考えてんだ、俺は。でもまあ…不思議だな、ホント。

民間協力者として2ヶ月も経っていないのに、こんな荒事に巻き込まれるってことが。

『事実は小説よりも奇なり』か、よく言ったもんだ……いかん！危ない危ない危ない……。
あやうく現実逃避するところだった。

「あと何本か打ったらバインドをかけるぞ」

『了解です。術式構築中はフォロー出来ませんので』

「OK。全部避け切る」

他の部署の援軍は正直言っただけ期待してない。

地上の面倒臭さははやて部隊長から聞いてるし。

分からないって言ったなら嘘になるし、分かる以上考えても仕方ない。素早く思考を切り替えられる人間程仕事が出る、これ、社会人の常識。

キュイイイイイイイイン……！！

さて……ラストパートといくか……！！

「森の中」

「ガリユーが手こずっている…だと？」

「うん…」

森の中、バーニング・インフェルノを見ながら2人の魔導師は話していた。

ドクターと呼ぶ科学者から奪取を依頼されたロストロギア、それを

探しに行かせた彼女の召喚獣『ガリユー』から連絡が入ったのだ…
「戦況が思わしくない」と。

「相手は…あの民間協力者か。竜を従え、異世界から来たという…」

「彼は…強い。精神とか肉体とか…そういうのじゃない」

「信念…か？」

「……（コクリ）」

壮年の男が言った言葉に対し、少女は無言で頷くことで答える。

その顔には、幼いながらも哀愁が漂っており、少女は年齢不相応の
秀囲気を醸し出す。

そんな彼女の心情を分かっているにも、壮年の男は何も言わず、ただ
少女を見つめる。

「ガリユーが危ない目にあつのは…嫌。危なくなったら戻って来る
ように伝える」

「いいのか？」

「いい。ドクターの頼みも大事だけど、ガリユーの方がもっと大事」

そう言った少女は、右手の手袋型デバイス、その紫色の結晶部分に
そっと念を込める。

すると結晶部分が光り始め、そのまま数秒経つと光は終息した。

「あつちは…どうする？」

「あればっかりは俺には無理だ」

「私も…虫を召喚するには魔力が足りない…」

「ならば…もう少し離れるか。今はまだ大丈夫だが、巻き添えをくらうかもしれない」

「うん…」

ガリユーのことを話し終えた2人はホルスとマシンナーズ・フォー
スの戦闘を話し始めた。

しかし、それに介入するには無理だと判断したのか更にバーニング・
インフェルノから離れるようだ。

「異世界の竜…か」

ドガアアアン！！

「っ!？」

バアアン!!

ザンザンザン!!

「そろそろだな…」

広暁が放った魔法矢をまともにくらったUMAは大きく吹き飛び、駐車場の壁に叩きつけられた。

地面に落ちるその様を眺めながら、広暁は距離を取って魔法陣を展開する。

近くで放つと天創塵の余波が飛んでくるかもしれないし、まだUMAが余力を残していて奇襲を仕掛けてくる可能性があるからだ。

「バインドは？」

『95%…96%………100%。リングバインド、バイフォー×4!!』

バシユンバシユンバシユンバシユン!!

「っ!？」

(……鬼畜だ……)

サジタリウスがUMAに発動したのはリングバインド。

バインドの初歩中の初歩、対象をリング状に構成された魔力の捕縛

輪で拘束する魔法。

そんな簡単な魔法でも、構築密度を上げてその数を増やせばたちまち上位の捕縛魔法に変わる。

発動に時間がかかるのが難点だが、上位の捕縛魔法を発動するより簡単で魔力消費が少ないのが利点だ。

「天創塵チャージ率… 91%… 92%…」

もう少しでチャージが終わると言ったところで、広暁は再度UMAの方を見やる。

体は傷だらけで、首に巻いていた長い紫色のマフラーはほとんど首回りを残すのみ。

地面に倒れ伏したまま動かないので、ここで攻撃を止めるというのも1つの手段だろう。

（念には念をだ、用心に越したことはない。石橋を叩き過ぎて壊しても、別の橋を探せばいい。

なんか… 2カ月前の俺じゃあ考えられんな、こんなこと。

『朱に交われれば赤くなる』… 人に拳銃を向けて撃つのもこんな感じなのか…？

…いや… 今更にも程があるか。もう何本こいつに向けて放ったんだよ…（

心の中で攻撃に対する葛藤もあつたようだが、その意味するところを汲み取って理解した上で広暁は天創塵を放つ覚悟を決める。

覚悟無き攻撃に意志は宿らない、まるでそう考えているような目をしながら。

（熾烈）

ホルスとマシンナーズ・フォースの戦いは熾烈を極めていた。圧倒的な防御力と銃による手数でごり押しするマシンナーズ・フォースを、豊富な技と主人譲りの洞察力で的確に捌き、迎撃するホルス。

マシンナーズ・フォースの攻撃をホルスが捌き、迎撃するというパターンが続いていたが、ここで闘いに変化が現れる。

「っ！？」

攻撃のため銃口をホルスに向けたマシンナーズ・フォースだが、その先にホルスはいなかった。

すぐに周囲を確認するが、ホルスはどこにもいない。

一体どこにいったのだ？マシンナーズ・フォースは更に搜索範囲を広げるが…その必要はなかった。

シュン！！

ブオオオオオ……グシャアアアーン！！

ズザザザザザザザザザザザザザ！！

攻撃をまともにくらい、マシンナーズ・フォースは吹き飛んだ。

視線を戻したその先には、炎の大剣『フレイム・ソード』を握りしめるホルスの姿が。

プスプス…バチ…バチ…。

右脇腹部分にフレイム・ソードをくらったようで、その箇所はえぐ

れており、火花が散っている。

しかし、今のマシンナーズ・フォースの脳の中を交錯する思考にその様なことは1ミリもない。

「……………（スチャツ）」

そう、今この機械兵の脳の中を交錯しているのは、どのようにしてホルスがこの身に攻撃を当てたか？

視界には捉えられず、正しく攻撃をくらってから気付いたといった感じだった。

インプットされたデータを探しても、ホルスが高速移動や瞬間移動を使えるといったデータはない。

データとしてあるのは、ホルスが炎を自在に生みだし、操る。

そして、戦闘時にこそ巨大化するが、普段は小さい姿でいること…

……………小さい姿？

ウイ　ン……………！？

気付いた時にはもう遅い。ホルスは再びシンナーズ・フォースの視界から消えていた。

足元に気配を感じて視線を移動させれば…そこには小さい姿のホルスが。

「……………（ニヤリ）」

『無明逆流れ』

スパアアアアン…！！

一瞬にして巨大化、炎の大剣『フレイム・ソード』を作り出したホ

ルスが、真下からの切り上げの要領でマシンナーズ・フォースの正中線を切り裂いた。

マシンナーズ・フォースも咄嗟にバックステップで避けたものの、まるで刀が伸びたかのようにして体を斬られ、その体には縦一直線の傷が出来た。

プス…プス…プス…。

そう、ホルスは高速移動をしたのでも瞬間移動をしたのでもない。小さい姿になってマシンナーズ・フォースの視界から外れることで、擬似的に姿を消していたのだ。

移動速度では、ホルスはマシンナーズ・フォースを上回っている。

しかし、ホルスの体長は優に10mを超えているのだ。

幾ら速く移動出来ても、目で追える以上防いだり避けたりするのは難しいことではない。

だが…もしもホルスの体が戦闘時のそれより小さかったら？

例えば…時速160kmで走って来る自動車と時速160kmで飛んで来る野球ボール、どちらが避けやすいだろうか？

恐怖を感じるのは自動車だろうが、避けやすいのもまた自動車である。

自動車は人間より大きく、避けるまでの間目で追うのも容易だ。

しかし…もしもそれが野球ボールだったら？

ましてや、今まで自分と同等の大きさだったのに、速度はそのまま1/10以下のサイズになったら…？

目で追うことは勿論、攻撃を避けるのはより一層困難になるだろう。

何より、小さくなることで、体が必要とする酸素の量は大幅に少な

くなる。

ホルスにとってこれ程好条件の戦い方はない。

「…………グオオ」

ホルスがこのような攻撃的な行動に出た理由、それは説明するまでもないだろう。

足止めより破壊する方が適当、もしくは簡単であると判断したからだ。

その考えは当たっていたようであり、戦闘の序盤で見られた固さは今のホルスにはない。

相手を観察して得られた情報から、勝つための手段・方法をシミュレーション。

それを実行に移し、相手を追い詰めるという手法を取っている。

いかに堅固な肉体と高水準の演算能力を持つ機械兵であるマシンナーズ・フォースといえど、大した策もたてることが出来ず、ましてや柔軟に状況に対応することが出来なくてはただの木偶くわくわくの坊と同じだ。

「……………（ボウツ）」

フレイム・ソードを拡散し、ホルスは頭上に炎を集める。

集束される炎、そこにあるのは曲線の芸術。

巨大化状態のホルスの身の丈に合ったその武器の大きさ、直径約8m。

生成されし武器は…………チャクラム。

黒炎を極限まで圧縮し、研ぎ澄ました武器は、古代インドで用いられたという投擲武器。

本来は中央に指を入れることで回して投擲するものだが、ホルスは自分の手の長さ分チャクラムの炎刃を潰すことで、投げて使うことを可能とする。

「……………!？」

あれはヤバイ。

本能的？にマシンナーズ・フォースはそう感じたのか、ホルスに向けて銃を構える。しかし…

ポオオオオオオオ……………!! シュンシュンシュン!!

「っ!？」

『フレイム・バインド』

気付いた時にはもう手遅れだった。

マシンナーズ・フォースの体には幾重にもわたって炎の拘束輪が出来ていたのだ。

しかもそれを作った炎は…バーニング・インフェルノの炎。

唯の炎の壁だと思っていたものが、いきなり炎の拘束輪を生成したのだ。

そう…マシンナーズ・フォースは知らなかった。この壁の本当の意味を。

バーニング・インフェルノは、使用目的こそ対象を閉じ込める炎のドームだ。

しかし、本来の用途はそれだけではない。

中に閉じ込めた敵を360度全方位無死角の炎で攻撃出来ることにこそ意味がある。

綺麗に言えば反撃を許さない。汚く言えば髑り殺し。そんなことを可能にする大技なのだ。

だがしかし、ホルスはその手法を取らなかつた。より確実に足止め（最初の目的）を遂行するために。

そして、足止めから破壊に目的を変えてもその手法を取らなかつた。マシンナーズ・フォースに植え付けた「バーニング・インフェルノは修復能力が高い唯の炎のドーム」という意識を変えさせないために。

自身が相手を確実に屠れる大技を繰り出せるための準備をし、相手の反撃の芽を摘むために。

ホルスはただこの一瞬、この技のためだけにバーニング・インフェルノの炎を使ったのだ。

グギギギ……！！

いくら力任せにフレイム・バインドを解こうとしても、それが解けることはない。

今回使ったフレイム・バインドにおいて強化されているのは、『強度』ではなく、『修復能力』。

今のバーニング・インフェルノの特性そのままのそれは、力任せに解こうとして炎の結合を弱めようとも、すぐに再生・補完される。それに気付けばまだ解く方法はあるだろうが、マシンナーズ・フォースにそれは無理な話。

所詮は機械、臨機応変な判断力では生き物であるホルスには到底及

ばないのだ。

スツ……………。

チャクラムを生成し終えたホルスは、それを右手に持ち背中に背負うように構える。

体全体を使って投げ、遠心力によって速度が増したそれをくらったら……………どうなるだろうか？

『せんりゆう・えんおうじん
旋竜・炎王刃』

第31話「ホテル・アグスタ 倒」（後書き）

第31話、いかがだったでしょうか？

車とボールの件ですが…これは私の私見です。

時速160kmで向かってくる自動車と野球ボール…。

それなりに離れた場所からなら、自動車の方が避けやすい気がするんですよね。

ずっと目で追えるわけですから。

広暁の葛藤と決意…これは後々大事になってくる…かもしれません。

…っといけない、忘れるところでした。

前回の話でホルスが使った技、『バーニング・インフェルノ』。

これは『クラッシュギア』というアニメで迅キョウスケが使うクラッシュギア『デインノフランクス』の技です。

本来のこの技はスピンによって起きた摩擦熱を纏ったまま相手にぶつかる技ですが、ホルスの技を考えた時に何故かこの名前が頭をよぎったのでそのまま採用しました。

こんな感じで技を考えたりオマージュすることが多々あると思いますので、これからよろしくお願いします。

では。感想・意見・間違い訂正等、よろしくお願いします。

第32話「ホテル・アグスタ 収」（前書き）

第32話です。

もうすぐお盆休みに入るので、そうなたら書き貯めが出来る…と
思います。

そうすればもう少し間隔短めに投稿出来るので…頑張れ、私!!

では……。第32話、始まります。

第32話「ホテル・アグスタ 収」

（終息）

「……………報告は以上です」

『そつか〜……………まあ、ロストロギアは奪われへんかったし、それだけで十分や。』

そんなに気に病まんでもええ、ちよつと休んだら現場検分に合流してや』

「了解……………」

報告を終えた広暁は、隣に控えているホルスをチラ見する。

マシンナーズ・フォースとの戦闘で怪我を負ったものの、幸いにも重症と呼べるような傷は無い。

広暁は戦闘による疲労だけなので、少し休憩したらすぐに現場検分に参加出来るだろう。

「ホルス、こつち向いて」

「キュイ」

『フィジカルヒール』

ブワアアアアアン……………。

「キュ……………キュイ……………」

(色っぽい声だな、おい)

回復魔法が気持ち良かったのか、ホルスは何ともいえない色っぽい声を出す。

竜の色っぽい鳴き声は初めて聞いたが、人間のそれと大して変わらないことに感心し、また1つ雑学が増えたことに僅かな喜びを感じる広暁である。

(フリードも同じような鳴き声出すのかな?)

「フェイト隊長」

「広暁!? 大丈夫だった!？」

現場検分のため、広暁はホテル前、ガジェットの残骸が散らばっている所に移動した。

なのはを呼んでもよかったが、自分はライティング分隊であることを考え、フェイトを呼んだのだ。

「駐車場で召喚獣と闘ったって聞いたけど…」

「探索魔法は使えず、サジタリウス付属の録音・録画魔法も使えませんでした。」

駐車場の監視カメラに映像は残ってましたけど…それだけだと情報が少ないので、はやて部隊長の知り合いのアクセス査察官が魔法で俺から直接情報を引き出すらしいです」

「そう…ってそういうことじゃなくて！怪我とかしてない!？」

エリオとキャロの相手をする時の癖だろうか、フェイトはやけに広暁を気にかけている。

本人にしてみたら悪気はないのだろうが、幾ら上司とはいえフェイトのような金髪巨乳美人に数多の管理局局員の見ている前でこんなに心配されるのは恥ずかしい。

そう思った広暁は、とっとと話題を変えることにした。

「大丈夫です、怪我はしてません。それより、俺は何をすればいいですか？」

こういったことは六課ではまだ勉強してないので」

「えっ？うん…はやてのところに行くのはいつ？」

「30分後です」

「だったら大丈夫だね。ユーノと会っておこうか？」

「ユーノというと…無限書庫司書長のユーノ・スクライア司書長ですか？考古学者でもある」

「そう。私やなのは、はやての幼馴染なの。
ユーノと知り合いになっておけば管理局で仕事をする上で色々と便利だよ」

ここ2カ月で勉強した知識を引つ張り出して答えたことに、フェイトが上乘せして答える。

その知識では、無限書庫はミッドチルダだけでなく、他の管理世界に関するありとあらゆる情報が載っている書物が無限に存在する施設だ。

そこのトップである人間と知り合っておいてまず損はないだろう。

「了解です。スクライア先生はどちらに？」

「正面玄関の当たりにいると思うよ。緑色のスーツを着た金髪の男の人だからね」

「分かりました」

フェイトからユーノの居場所を聞いた広暁は、正面玄関へと歩を進める。

正直な話フェイトに付いて来てもらって紹介を頼みたかったが、彼女にも立場というものがある。

六課では一尉扱いの執務官である彼女が現場検分に不参加、というわけにはいかないだろう。

そう考えた広暁の頭に、ここで1つの不安が過よきった。

(…スクライア先生って年幾つなんだ？フェイト隊長の幼馴染だと…下手したら年下？)

いや、M A S A M A)

この時、フェイトにも1つの不安が頭を過った。

(あつ…ユーノ今、なのはと一緒だったんだ…。なのは……………「めんー!!」)

〔 査察官と部隊長 〕

「消えた機械兵と召喚獣…ね」

「広暁とホルスが上手く相手してくれてたんやけど…な」

ここはホテル・アグスタ上層階にある喫茶店。対峙して話すは1組の男女。

男はアコース・ヴェロッサ。時空管理局本局の査察官。

女は八神はやて。時空管理局本局の特別捜査官にして機動六課部隊長。

「地球出身でありながら地球出身でない次元漂流者。従えるは天空と太陽の竜…」

「広暁自身はそんな気全然ないみたいやけどな。従えるっていうより共に闘う。」

どっちかって言うとパートナーみたいに考えてると思うぞ」

「そうだろうね。映像を見る限りでは真面目な好青年みたいだし」

「ヴェロツサとちごうてな」

「おいおい…ひどいな」

仕事の話をしているとはいえ、その雰囲気は穏やかそのものだ。それもそのはず。

ヴェロツサがカリムの義弟ということもあり、この2人、それなりに面識があつて仲もいいのだ。

「カリムもはやても詳しいことを教えてくれないけど…時機が来たら教えてくれるんだろう？」

「…せやな。今はまだ、あまり人に言うことも出来ん。」

時機…いや、その時が来たら言うことになると思う」

「彼ならもう勘づいていそうだけどね」

「いや、さすがにそれは…うん…でも、広暁鋭いからなあ………」

「おいおい…本当なのかい？冗談のつもりで言ったのに」

「何て言ったらえーのか…観察力というか、洞察力というか…とにかく広暁は鋭いんだよ。」

私達ですら気付かないことに気付く力を持つてるんや。
今はまだそれを活かしかるだけの知識が無いけど、後数年もしたら
凄いことになると思うで」

「ふん…（彼がミッドチルダに永住するのは決定事項なのかな…
？）。

それで？彼はいつ頃来るの？」

「さつきフェイトちゃんに聞いた限りでは、今はユーノ君と会って
るはずや。

もう少ししたら来ると思うで」

広暁がはやてとヴェロツサに呼ばれた理由：それはマシンナーズ・
フォーアスとガリユアの行方にある。

マシンナーズ・フォーアスを倒そうと旋竜・炎王刃を投擲したホルス。
ガリユアにとどめを刺そうと弱めの天創塵を放った広暁。

ホルスは正に旋竜・炎王刃が当たろうとした瞬間。

広暁は天創塵が当たって爆発が起こり、爆煙が引いてきた時。

そこには攻撃対象の姿は無かった。

いや、無かったと言うと語弊があるか。

マシンナーズ・フォーアスは召喚士により強制的に遠隔送還され。

ガリユアは爆煙が引いていく中、一筋の紫色の光となって逃げて行
った。

ホルスは戦闘専門のため遠隔送還を防ぐ術すべをホルスは持っておらず。
広暁は瞬間最大速度（瞬発力）ならともかく、単純な飛行速度では
ガリユアに負けていたのだ。

つまり………最初から逃げようと思えば簡単に逃げられたのであ
る。

ガリユーが飛んで来たことを考慮に入れて考えれば、飛んで逃げることも想定出来る。

その飛行速度が、自分の飛行速度より上である可能性も。

そのことに気が付かなかった自分自身に心底腹を立てた広暁は、六課の人間の前ではまず見せたことが無い様な苦虫を噛み潰す表情をしていたらしい。

サジタリウスがこっそりとはやてに知らせた限りでは、広暁の体内で魔力の奔流が起きて一気に放出され、地面を半径数mにわたって陥没させたとも。

魔導師としては上の下程度の魔力量とはいえ、魔力運用に天賦の才能を持つ広暁だ。

被害がこの程度で済んだのは広暁の理性がまだ感情に負けていなかったからだろう。

サジタリウスはやてに諭されて落ち着いたものの、まだそのことが思考のスパイラルとなって頭の中を渦巻いているかもしれない。はやてはそんな広暁を想像し、辛い表情を見せる。

「大丈夫かなあ…広暁」

「さっきの通信を見る限りでは大丈夫そうだったじゃないか」

「それはそうなんやけど……」

「…本当に広暁君のことが好きなんだね」

「うん……って！何を言うてるんや、ヴェロツサ!？」

はやてが慌てて自分の言ったことを否定すると、そこにはとてもい

い笑顔をしたヴェロツサが。

これは…そう、大好きなおもちゃを見つけた子犬、いや、いじる対象を見つけた遊び人の目だ。

「いや、まさかシャツハが言っていたことが本当だったとはね。そうかそうか、広暁君は我が麗しの姉と妹に同時に好意を持たれているわけか。

これはこれは……」

「シャツハか！？シャツハがこのことをヴェロツサに言ったんか！？」

ヴェロツサに詰め寄るはやての表情は先程までの落ち着いた表情の微塵の欠片も無い。

それはどう見ても、隠していた秘密を暴露されて大慌てしている1人の女性だ。

「査察官を舐めてもらってはこまるね。

気付く力…それなら僕だって十分に持っているよ。

カリムとシャツハが話してる時の空気と行くか距離感というか…そういうのが変わった気がしてね。

気になってシャツハを問い詰めてみたら案の定…というわけさ。

シャツハは分かりやすいからね」

「シャツハ…あんた…頼むで…ホンマに……」

2人共まだ広暁に対してアプローチはほとんどしていないので、ばれたとしてもさしたる問題にはならなかったりするのが実情なのだが。

はやてにしてみたら、自分の純情？を知る人間が増えるのは良い気

分ではないのだろう。

(まあ…カリムのそれとはやてのそれはちょっと違うみたいだけど…僕が言うことじゃないしね。

僕は…影でこっそり見守ることにしようかな)

ピュイン。

『はやて部隊長』

「うわっと!?! 広暁!?!」

『どうされました?』

「いや…何でもないで。何かあったんか?」

急な広暁のモニター連絡にはやては一瞬動揺するが、すぐに姿勢を正して座り直す。

広暁も多少は気になったようだが、さしたる興味も無いのか早々に連絡事項を伝えた。

『スクライア先生との面談が終わったので今からそちらに向かいます。』

ホテル最上階の喫茶店でしたよね?』

「そやで。ユーノ君とは何話したん?」

『簡単な自己紹介と魔法のこと…読書魔法や結界魔法など色々。』

それと、無限書庫閲覧の許可をもらいました」

「読書魔法を教わったんか。あれは便利やからな」

『はい。では、今からそちらに向かいますね』

「了解。待ってるで」

シユン…。

広暁の後ろにどことなくふくれっ面のなのはがいた様な気がしないでもないが多分気のせいだろう。

はやてはそう自分に言い聞かせ、広暁との会話を終わらせた。

「広暁がいたのは正面玄関やから、あと5分もすれば来ると思うで」

「了解。僕も軽く準備をしようかな」

〈葛藤〉

(……………気持ちわりい……………)

現場検証を終えた六課の面々は、へりに乗って帰路へと着いた。
今は今日の午後・夜の訓練は無しであることを告げられ、隊舎へと
続く道を歩いているところだ。

「お兄さん、どうしました？」

「アコース査察官に魔法で直接脳内の記憶を引き出してもらったん
だけだな。」

俺が思い出せる記憶だけだと限度があるし。

その時の感覚がまだ残ってて……ちよっと気持ち悪い」

「大丈夫ですか？何か薬を……」

「寝りゃ直るらしいから、今日はもう寝るよ。読書魔法試してみた
かったけど、また今度だな……」

この後キャラが回復魔法をかけてくれたが、さしたる効果は無かった。
そんなキャラを慰め、フォワード女性陣と別れた広暁は、エリオと2人男子寮を歩く。

「それじゃあ、お兄さん。また明日」

「ああ。んじやな」

スッ……。ピッ……。ウイーン……。

「ふう……」

『お疲れのようですね』

「そりゃあ……な。あんな戦闘したわけだし。お前はどんなんだ？」

『特に私は……いつも通りスリープモードに入れば修復されます』

「便利だな。ホルス、お前は……」

スッ……。スッ……。

「…疲れたみたいだな。部屋に着くなり爆睡とは…」

『あの巨大な機械兵をあと少しで倒すところまでいったそうですからね。』

体力だけでなく、精神も相当磨り減らしたのでしょうか』

「そうだな…よっと」

広暁はホルスを抱えると、そのままベットの上へ。

掛け布団をかけてやり、いつも通りの体勢にセットする。

「風呂は…もういいや。明日の朝シャワー浴びよっと……」

シユル…。　　パサツ…。

「目覚まし頼むな………」

『了解です。ゆっくりとお休み下さい』

ボスン…。

（ティアナの奴…別れ際に自主練するって言ってたし、今頃一人で練習してるんだろっな…）

ホントなら話を聞きにいつて道を示すのが年長者の務めつてもんだけど…。

部活やサークルの後輩じゃあるまいし、俺はほとんどティアナの過

去を知らない。

大した知識…ましてや別世界出身の俺が聞きに行ったって、ただ話を引つ掻き回すだけ…。

いや…だからこそ…気付くこともあるんじゃない………だ

っ、もう！！全然考えが纏まらない！！

………考えるのは止めてもう寝よう。こんな頭で考えたっていい考えは浮かばん。

なのはかフェイトあたりに聞いてからの方がいい。また明日、リフレッシュした頭で考えよう………)

眠りに落ちる途中の頭で考えるのは、今日無茶をしてミスをした1人の仲間のこと。

この様に考えてしまうのは、中学・高校と部活動に励み、大学でサークル活動をしてきた経歴からか？

それとも……生来の広暁が持つ性格故か？

転ばぬ先の杖…それを実行するために…広暁は意識が遠のきながらも考え続けた。

(最悪の事態…は……避けない………と………)

「あたしとティアはコンビなんだから。一緒に頑張るの！」

「もう誰も！傷つけないから！！」

「少し…頭冷やそうか……？」

第32話「ホテル・アグスタ 収」（後書き）

第32話、いかがだったでしょうか？

長くなってしまうホテル・アグスタ編もようやく終了し、この後は遂にあの話となります。

どうゆう風に変わるかは…私の好み？腕？次第。

とりあえずは…書くという楽しさを忘れずに話を続けられたらなと思います。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第33話「己という存在」 (前書き)

第33話です。

今回の話は、ある意味で私の思想と言いますか…好きな考えを書き込みました。

その思想とは……………？

前置きはこれぐらいにして。

第33話……………始まります。

第33話「己という存在」

く魔王の影く

「少し…頭冷やそうか……？」

ガバツ！！

「ハア…ハア……。何だ今のは………！？」

ベッドから勢いよく起き上がった広暁は、まだはつきりしない頭で辺りを見回す。

時計を見ると、現在の時刻は午前5時丁度。

いつもは目覚ましを午前5時半にセットしているので、30分も早く目が覚めた計算になる。

「スウ ……ハア。落ち着け…クールになれ…俺は冷静だ…」

深呼吸と自己暗示により、興奮し切った頭を無理矢理クールダウン。

つい先程起きた出来事…夢の内容を冷静に思い出す。

「バインドされたスバルに…遠距離砲撃魔法を撃とうとしたティアナ…。」

んで…それを撃墜しようとしてたなのは。

全員バリアジャケットを着てたから…20n1の模擬戦か…？」

自身の記憶と経験を頼りに、つい先程見た夢の内容を冷静に考察。感情を一切シャットアウトし、客観的に考える。

「俺の記憶が確かなら…今までこんなことはなかった。唯の夢…？いや、もしかすると…」

広暁は理系人間だ。

得意な科目は理系に偏っているし、高校も理系。大学も理系の学部に通っていた。

しかし…科学万能説を公言する程科学を盲信しているわけではない。科学が発展して精々数百年、人間はそれ以前よりもっと長い期間を生きてきた。

その期間、世の理を解明しようとしたり、未知の分野の知識を得ようと世界中を回った人間はいるが、科学で全てが解明出来ると思ったり、科学こそ全てでオカルトなど存在しないと考えていた人間はほとんどいない。

だからこそ宗教は存在するのだし、だからこそ人間は自然を恐れ、敬ってきた。

そして…だからこそ広暁の頭の中を過るよぎ1つの単語。それは…

「予知夢…？」

「どうしよう…誰かに相談した方がいいか？」

…馬鹿にされるだけの気がするな、ちよつと表現変えるか…」

こうなる夢を見たのでそれに対する対策を考えましょう…聞いた限りでは普通に馬鹿にされる話だ。

『予知夢』のようなレアスキルがあるならともかく、今のところ広暁にそのようなレアスキルはない。
故に……

「最悪の事態が起きる前に…起きてからじゃ遅い。その前に、必ず…」

自身が見た夢を参考に、寝る前に考えた最悪の事態を改変、性急かつ確実に事態を収束。

広暁はその様に自分の中で結論付けた。

「…黙っててくれてサンキューな」

『いえいえ』

「キュー！」

実に空気の読める1機と1匹であった。

<広暁side>

「キング・クリムゾン!!」

『マスター、まだ医務室は開いていますよ?』

「何となく言いたくなっただけだ、病気じゃない」

『…そうですか』

今の時間は午後9時。

夜の訓練も終わり、いつもなら風呂に入っただけのんびりする時間。

だけど今朝の夢…もとい最悪の事態を防ぐためにも、ティアナに話を聞かないといけない。

最初の予定では先になのはかフェイト当たりに報告して、その後でティアナと話し合っつもりだった。

だけど…

「ティアナって自分の中に溜め込むタイプだからな…」

『そういう人を相手に理路整然とした正論で攻めると逆効果ですか
らね』

「攻めるわけじゃないけどな」

ティアナみたいに自分を律する力が強い人間は、良くも悪くも感情
を外に出さない。

日常的なものならともかく、例えば、自分の将来に関する事などは
他人には相談しないタイプだ。

ちなみにこの知識、去年買った『これで君も今日からテレパスだ！
！』っていう本に書いてあった。

題名はともかく、内容的にはまともな心理学の本なので、それなり
には信用してる。

よくテレビに出てる脳科学者が出した本んだけど…追及は止めよ
う、うん。

「まあ、とにかく。先にティアナに話を聞いて、引き出せるだけ引
き出す。

なのは相談に行くのはその後だな。

場合によってはティアナも連れて行った方がいいかも」

『マスターで大丈夫ですか？そういった事が得意には思えませんが』

「…傷つくぞ、おい」

『マスターなら、「放っておけ、あいつ自身の問題だ」と言いそ
うですから。

「俺が口出ししていいようなことじゃない」もありですね』

「それで済むならな。とてもじゃないけどそれで済むとは思えないし。それに……」

『それに?』

「……何回か経験してるんだよ、ああいう人間の相手は」

『?』

中学・高校・大学と……。

「……やっぱりね……」

『そうですね』

ティアナを探して六課の敷地内を歩いていたら、案の定自主練していた。
自分の周りに無数のスフィアを配置し、光ったスフィアに銃を向ける。

瞬発力と正確性を鍛える訓練…ターゲットトレーニングだったかな？

「動きは正確だけど…何か鈍いな。どんだけやってるんだ？」

「4時間だよ、4時間」

「…ヴァイス陸曹、驚かさないで下さい」

「全然驚いてる様には見えねえが」

振り向くとそこにいたのは、六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニツク陸曹。

まだ制服を着ているところを見ると、ヘリの整備でもしてたのかな？民間協力者としてお世話になって以来、年が近いということもありよくしてもらっている人だ。

この前は一緒に日本酒を飲んだけど、味が気に入ったらしく、一本譲った。

何でも疲れた日の夜に熱燗で飲むと、翌朝疲れが吹き飛んでるとか。

「おいおい、敬語は止めてくれ。仕事ならともかく、今はただのヴァイス・グランセニツクだぜ？」

「…確かヴァイス陸曹、26歳でしたよね？俺は20歳ですし、年上の人には敬語で話すのが礼儀かと」

「そんなかてーこと言うなって。じゃあ、あれだ。これは先輩命令
つてことで」

「…分かったよ」

女の人だけじゃなくて、男の人もフランクだよな、ミッドの人って
2カ月近く経つけど、日本人の俺には未だに馴染めない…愚痴って
も意味無いな、止め止め。

「4時間も練習してるって言ったけど、あの訓練を4時間も？」

「休憩を挟まないでぶっ通しでな。体が資本なんだから休めって言
つたんだが、まるで効果無しだ」

…この人はティアナの練習を4時間ずっと見てたのか？
いやいや、例えばヘリの整備の傍ら時たま見てただけだ。

さすがに4時間もずっと見続けるなんてあまりにHENTAI過ぎ
る行為、ヴァイスはしない…と思う。

「じゃあ、次は俺が行ってみるかな」

「おいおい、大丈夫か？ティアナは結構頑固だぜ？」

「慣れてるってわけでもないけど…昔何回か経験してるんで。あの
手の手合いは」

「そっか。ほんじゃまあ、お前に頼むわ。ティアナにガツンと言っ
てやってくれ」

「努力はするけどな、期待はすんなよ？」

「へいへいっと。ほんじゃなあ〜」

「おう」

後ろ手に手を振りながらヴァイスは帰って行った。さて……とりあえずシミュレーションしとくか。

……
……

「……こんなところか。さて……行きますか」

「通りのシミュレーションは終了。」

シミュレーションをするのとしないのじゃ、成功率が段違いなんだよな。

漫画の知識だけど、これが本当なんだよ、マジで。

ザクザクザクザク……………。

草を踏みしめる音が、俺の鼓膜を震えさせる。

ティアナの耳にも聞こえてると思うけど、ティアナは一向に練習を止める気配が無い。

気付いてないのか、気付いていて放っておいているのか…。

「ティアナ〜？」

「……………」

カン！ カン！ カン！ カン！

「ティアナ〜？」

「……………」

カン！ カン！ カン！ カン！

……………無視ですかい。んじゃ、まあ……………

「…そんなに今の教導が不満？」

ピタッ！

おっ？止まった。

「……何のことですか」

そのセリフ自体、「あたしは今の教導に不満があります」って言うてるようなもんだぞ。

言葉は選んで使わないと相手にちゃんと意味は伝わらない、その逆も然り。

「ちよつと休憩しない？教導のメニューのことで話したいことがあるってな」

ポイ。

俺は缶飲料を投げ、ティアナはクロスミラージユを待機状態に戻して見事にキヤッチ。

まずは軽くジャブ…というより話すきっかけを作る。

一方的な忠告は、今のティアナには拒絶されるだけだ。

「…いいですよ」

「どつも〜」

まずは第一段階クリア…っと。

ティアナが傍の木に寄りかかって座ったので、俺もその隣に腰を下ろす。

ついでに自分の分の缶飲料のプルタブを開け、軽く一飲み。

ゴクゴク……。

「ふう……」

「それで、教導のことで話というのは？」

「ティアナさ……今の教導のメニューに不満があるだろ？なのはが組んでるやつ」

「……………」

沈黙は肯定と受け取るよ？

「……広暁さんはどう思ってますか」

……質問に質問で返してきたよ、この子。
女性の専売特許と言えば専売特許だけど、やられるとこれ、結構腹が立つ。

普段なら「先に聞いたのは俺だけど？」って言い返すところだけど、ここは引くか。
下手に刺激して聞きたいこと聞けなかったら意味無いし。

「素人意見だけど。それでもいいか？」

「構いませんよ。実力でいったら広暁さんは私よりも上ですしね」

ティアナは陸士訓練校で2年学んでるし、その後陸士隊に勤務してた経験もあるらしいし。

俺みたいなぼつと出の意見を聞いてくれるか不安だったけど、すんなり聞いてくれそうでしたよ。

……後半の卑屈っぽい言葉はしっかり覚えたからな、ティアナ（多分これも原因の1つだろう）。

「基礎固めが多過ぎる気がするんだよな。

機動六課設立の目的はある程度はやてに聞いたんだけどさ。

ロストロギアの確保、そしてそれを狙うガジェットとの戦闘が主な俺達の仕事。

いつ出勤がかかるか分からない職務内容にしては基礎固めが多過ぎると思う。

基礎は軽く確かめる程度で、後は実戦形式ばかりの方がまだ現実的じゃない？

フォワード陣がまだヨチヨチ歩きの新入で全然使えないってんなら話は分からんでもないけどさ。

俺はともかくとして、スバルとティアナは陸士訓練校を卒業して陸士隊で働いてたし。

エリオは本局の保護施設にいたとはいえ、フェイトの個人指導を受けてた。

キャロも竜魂召喚はともかく、それ以外のスキルなら自然保護隊にいた時に一通り勉強したらしいし。

基礎の確認で1〜2週間使うならともかく、ここ2カ月の訓練ほとんどそれに使うのはやり過ぎだと思う。

基礎をやるなら各訓練の最初の方の時間を使えば十分じゃない？」

「……………」

まだ喋らないか。だったらもう少し……。

「チーム戦の練習もそう。」

チームで闘うなら、下手に短所を補うより長所を伸ばすのに時間を使った方がいい。

それはいいんだけど、チームで闘うってことにこだわり過ぎな気がするんだよな。

人っていう生き物は、他人ひとに頼らないと生きられないんじゃない。人として独立してこそ他人ひとを頼ることが出来る。

チームで闘うことに意識を置き過ぎて個人の力量を上げることが忘れたら意味が無いと思う。

チームっていう枠組みがあっても、それを意識し過ぎたら本末転倒だろ。

個々人の力があってこそ、チームってのは意味がある。

個々人の力があってこそ、自然にチームとして纏まる。

そうやっていくうちに出来あがるものが、ホントのチームプレイじゃないか？」

さて…どうくる？」

「…それは…広暁さんの考えですか？」

「……………自分の経験と考察、プラス得た知識に考察をして俺の中に糧として蓄えたもの…かな」

「……………」

「ティアナはどう思うんだ？」

……そろそろくるかな？

「私は…もっと強くなりたいんです。

なのはさん達から機動六課へのお誘いを受けたのも、ここでなら私の夢を変えるために良い勉強が出来ると考えたからなんです。

フェイトさんは現役の執務官ですし、なのはさんも航空戦技教導隊所属の教導官ですから。

その考えは間違っていないませんでした。

フェイトさんからは執務官試験の試験問題や実際の仕事内容を聞かせていただきましたし。

なのはさんからは今まで以上に厳しい訓練を受けることで自分の技術を向上させることが出来ました」

見た感じ・聞いた感じでは全然問題なさそうだな。となると…この後に核心がくるか？

「ですけど……」

「ん？どうした？」

一旦話すのを止めたと思ったたらさっきまで下を向いて話してたティアナがこっちをチラッと見た。

今の目は…何かを決意する時の目だな、久し振りに見た。

「…聞いてくれますか？」

「……勿論」

…ようやく核心に辿りつけたか。ここからが本番だな…。

「…怖いんです、自分がいつか埋もれてしまふんじゃないかって。どうして私はなのはさんにこの機動六課へ誘われたのか。

最初は浮かれていましたけど、ここで過ごしていくうちに段々とその怖さが増していくんです。

隊長陣は2人共Sランクオーバーの魔導師ですし、副隊長陣もニアSランク。

部隊長であるはやてさんにいたってはSSランクですし…。

私を除いたフォワードメンバーもそうです。

スバルは可能性の塊で先天魔法を持っていますし、キャラも「竜魂召喚」という稀少技能^{レアスキル}を。

エリオは魔力変換資質「電気」持ちで、まだ10歳なのにBランクを取っています。それに……」

そこまで言ったティアナは再び俺の方をチラ見する…ああ、そういうことね。

「あなたもです…広暁さん。

魔力運用に天賦の才能を持ち、矢の生成だけでなく結界・探索魔法まで僅かな時間で習得しました。

これだけならまだあなたは「魔力量はそこそこだがその運用に才能がある」天才肌の魔導師程度で済んだと思います。ですけど…」

それって程度で済むのか…？ いや、褒められて悪い気はしないんだけど…。

何だろ、この微妙な感情は…。

「あなたにはホルスという竜がいます。小さい時ですら戦闘力は言うに及ばず、巨大化したらその戦闘力は何倍にも膨れ上がります。それほど力のある竜を、あなたは何一つ苦勞することなく従えている。キャロですら数年は制御出来なかった竜魂召喚という似たような前例があるにも関わらず……です」

……そういうことね。つまりティアナは……

「稀少な才能を持った人間の中で、何の才能も持たない自分が埋もれるのが怖い……ってことか？」

「……その通りです」

しかし、それにしても……。

「よく俺に話す気になったな。恥ずかしいとか、自分の弱いところを見せたくないとか言って話さない人がほとんどっばい内容なのに」

「それは……／＼／」

俺がそう言ったら、ティアナは下を向いて何かモジモジでした……えっ？ いや、まさか……。

「広暁さんなら、その……話してもいいようか気がしたんです。」

何ていうか…広暁さんなら真摯な態度で相談に乗ってくれそうな気がして」

「……俺が聞きにこなかったら、ティアナは俺の所に相談に来てた？」

「可能性は高いですね」

どうして俺ってこう…昔っから人に相談されるんだ？

いや、俺の性格を考えると分からないでもないんだけど…何か納得いかない。

あれか？俺はそんなに年とって見えるのか？若年寄ですか？

どっちかっていうと俺は冷たい人間だし…今はこんなこと考えてる場合じゃない、止め止め。

「……………」

「……どう思いますか？」

「…ティアナが埋もれるか埋もれないかってことに関して？」

「……………（コクリ）」

ちょっと冷たい言い方になったけど、向こうも本音を話してくれたんだ。

こっちも下手に言葉を選ぶより本心…俺らしい話し方で喋った方がいい。

さて……いきますかね。

「俺は

」

第33話「己という存在」 (後書き)

第33話、いかがだったでしょうか？

チームの在り方：これは私が読んだ漫画、そしてとあるスポーツ選手が言った言葉を基にしています。

チームを意識し過ぎてもいい結果は生まない。

個々人が己の力量を上げてこそ、自然にチームプレイが出来る。

もし元ネタが分かる方がいらっしたら、感想で書き込んで下さると嬉しいです。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第34話「可視不可視」(前書き)

第34話です。

どうにかして8月中に投稿したかった、後悔はちょっとしている。

……というわけで。

今回の話では、今まで私が書いてきた広暁と感じが変わります。

しかし……私の作風と広暁の境遇、性格を考えていただければ納得いただけると思います。

では……。第34話、始まります。

第34話「可視不可視」

<広暁side>

Good evening、墨谷広暁です。

話を終えた俺達は、早速なのは所へ行くことにしました。と言っても、なのはに割り当てられている寮の部屋に直接行くわけじゃありません。

この時間はまだ空間シミュレーターにしているとフェイトから聞いたので、今は隊舎のロビーにいます。

データを纏めるためにオフィスルームに戻るはずですからね、そこを捕まえる算段です。

もし今夜が無理ならまた時間を作ってもらえばいいし、そんなに切羽詰まってないのが現状だったりするんですけどね。

ワーカーホリックっぽいし、ほぼ確実に捕まるとは思っただけど……。

チラッ。

「……………／／／／」

それより問題は……どうしよう、この子？

話を終えた辺りからずっとこの調子だよ。

顔赤くなってるし、時たまチラッとこっちを見ては慌てて顔逸らすし……。

これは…アレだよなあ……。

ミッドチルダに来てから、何かが俺の中で狂い始めたなあ……。

俺ってこんな人間だったっけ……？

ティアナが風邪を引いてるかもしれない？

可能性として0とは言えないけど、そんな可能性が低い事が真っ先に頭に浮かぶのは二次創作オリ主最強系小説の鈍感主人公、もしくはハーレムアニメの何事にも中途半端主人公だけで十分だ。

頭が良くて機転も利くくせに恋愛や自分に向けられる感情には鈍感？

そんな都合よく人類の進化の軌跡から外れたバカがいるかボケ。

リアルにいないからこそ憧れを二次元の世界で表現したいってんなら気持ちは分からないって言ったら嘘になるけど、あそこまで露骨だと気持ち悪いだけだったの。

俺のイメージに合わない？

失礼な、俺だつてついこの間までは大学生だったんだぞ。

パソコンで二次創作の小説を読んでたし、『歌ってみた』とかの動画も某動画投稿サイトで見てたわ。

罵詈雑言言葉を言う俺の姿が想像出来ない？

もう1回言うけど、俺はこの間まで大学生だった。

友人と話す時は普通に使ってたし、テレビのニュースを見て使うことも普通にあつたぞ。

ただ、ミッドチルダに来てからは使う機会が無かっただけ。

同年代どころか、年下の人間の方が圧倒的に関わった人間は多いわけだし。

ましてや、俺はここでは一番下っ端に当たるわけだし。

大体……………

「に…広暁さん？大丈夫ですか？」

「っ！？…すまん、ちょっと思考回路がショートしてた」

「そ、そうですね」

いかん、冗談じゃなく思考回路がショートしかけた。
考え過ぎる癖：直そうとは決めたものの、簡単には直らんなあ…。
まあいい、なのはが来るまで静かに待つとするか…。

<ティアナside>

「に…広暁さん？大丈夫ですか？」

「っ！？…すまん、ちょっと思考回路がショートしてた」

「そ、そうですね（よかった、ばれてないみたいね…）」

に…じゃなかった、腕を組んで考え事をしていた広暁さん。
段々と表情が強張ってきたから話しかけてみたけど…いつものこと
だったようで安心した。

エリオとキャラ口から聞いた話だけど、広暁さんは考え過ぎる癖があ

るらしい。

きつと、さっきの話し合いの事を頭の中で整理していたのだろう。

チラッ。

「……………」

「…………… / / / /」

まただ……広暁さんの顔を見ると凄くドキドキする。
いつからだろう、この感情は……。

初めて会った時は、如何にも苦勞を知らないで育った年上の男の人
って感じだった。

次元漂流者ってことには驚いたけど、ただそれだけ。

魔導師としての素質、そしてホルスという竜。

それらのことを考慮に入れて民間協力者として働くことになっても、
大した感情は湧かなかった。

魔法のことを知らない人が、六課でそれを学ぶことは効率的じゃな
いぐらいにしか考えなかつた。

だけど、私の考えは簡単に打ち碎かれた。

魔法のことは知らなくても、勉強・練習のプロセスは人並みどころ
かずば抜けて知っていたようで、あっという間に実戦でも動けるよ
うになった広暁さん。

本人の才能だけでなく、『努力』という言葉を人一倍知っている強
さを、私は彼に感じた。

だからこそ、私も一層努力した。

魔法を知って一月と経っていない人に負けたくなかったから。けれど……あの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが変わった。

「過去を振り返ることはあっても、過去に縛られちゃ絶対に駄目だ。人が生きるのは今、そして未来。人は決して過去に生きることには出来ないんだからな」

広暁さんが訓練中に倒れ、そのお見舞いにスバルと医務室に行った時だった。

話はここからしか聞こえず、ここから前の会話の内容も知らない。で前後関係は分からない。だけどこの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが崩れた様な気がしたのだ。

「人は決して過去に生きることには出来ない」

私は兄の……ティード・ランスターの幻影を追っていたのではないのだろうか？

両親が早くに死に、年の離れた妹である私を管理局で働きながら育ててくれた兄。

兄の葬儀で局員が言った、兄を馬鹿にするような言葉を私は許せなかった。

だからこそ、私は今まで努力してきた。

兄が叶えることが出来なかった、執務官になるという夢。

そして…ランスターの弾丸は全てを撃ち抜くということを証明するために。

けれど、広暁さんの言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが崩れた様な気がした。

一緒にいたスバルにはばれなかったと思うけど、正直不安だった。私が今まで培ってきたもの、歩んで来た道が否定された様な気がして。

そんなモヤモヤとした感情が私の中に燻ったまま起こった、ホテル・アグスタでの誤射。

ランスターの弾丸は無能じゃない、ランスターの弾丸は全てを撃ち抜く。

それを証明するためだったのに……自分の能力を客観的に把握していなかったのだ、私は。

なのはさんに諭されて一応は納得出来たけど、私の中では未だにあの燻った感情が存在していた。

それが気持ち悪くて、寮に戻ってからは一心不乱に自主練を続けた。訓練が基礎的なものばかりで強くなった実感が湧かないっていうのもこれに拍車をかけたのだけけれど。

スバル・エリオ・キャロからは無茶するなと言われ、広暁さんからは効率的なトレーニング方法を聞いていたけど、そんなものは関係無かった。

この燻った感情を消し去りたい、ただその一心で自主練をしていた。

そして、燻った感情が消えないまま自主練を続けていると、広暁さんが現れた。

いることには気付いていたけど、大方エリオ・キャロ当たりおおかたに言われて私の自主練を止めるように頼まれたのだろうと思ひ、無視することにした。

だけど、聞こえた言葉は…

「…そんなに今の教導が不満？」

あたしの自主連とはあまり関係の無いことのように、よく考えれば私の自主連と関係あること。

予想していなかった言葉に、私は思わず言葉を返してしまった。

「……何のことですか」

半ば喧嘩を売る様な口調だったと思う。

だけど広暁さんはそんなことを気に留めずに言葉を返してきた。

「ちょっと休憩しない？教導のメニューのことで話したいことがあるな」

今思えば、全て広暁さんの思わく通りだったのだろう。

あまり関係の無い話題から話を始め、自分の考えを少し曝け出すことで相手に安心を与える。

安心感を与えた後は、自分の知りたい情報を少しずつ聞き出し、いけばいいだけ。

案の定と言うべきか、私は悩んでいたことを広暁さんに話した。

スバルにも話したことがないのに…どうしてだろう？

…いえ、私は…その答えを知っている。

彼と話している時…いや、彼といるだけで私の中の燻った感情が消えるのだから。

(兄さん…みたいなのよね…)

勿論、私の兄さん『ティード・ランスター』と広暁さんは別人だ。

性格面で言っても、明るくて話すことが好きだった兄さんと比べて、広暁さんはどちらかと言うと物静かで、一人で読書するのが好きなタイプだろう(本人もそう言ってたし)。けれど…

(2人共…人を引き付ける力を持っている…)

加えて、包容力…とでも言うのだろうか。

兄さんがフンワリと上から包み込む感じであるのに対し、広暁さんは下からしつかり支えてくれるような…そんな優しさがあるような気がするのよね。

そんな包容力があるからこそ、私は広暁さんに、その…惹かれていたのだと思う。

恋愛感情とは違う、自分が一緒にいたいと思える人。

憧れ…こうありたいと思えるような人…。

(まったく……とんだ回り道だったわね……)

私はこの…燻った感情を消し去ることは出来ないと思う。
それを消してしまつたら、私という存在が消えてしまふかもしれな
いから。

だけど、それを別のもの…別の形に変えることは出来る。

兄さんの夢を叶えなくないと言つたら嘘になる。

だけど、私ティアナ・ランスターが生きてるのは過去ではなく今、そ
して未来なんだ。

私は私のために…執務官になるという夢を叶えたい。

そして、その先にあるものを掴めるよう努力したい。

よく考えたら私は、執務官になつて何をしたいってことすら考えて
いなかったのだから。

兄さんの夢だけど……私は私なんだ。

いいよね、兄さん………？

〈魔王襲来〉

「あれ？広暁君にティアナ？」

「ホントだ。2人してどうしたんだ？」

作業を終えたなのはとヴィータが見たのは、ロビーで座っている広暁とティアナだった。

広暁は腕を組んでジッと目を閉じており、ティアナは膝の上で手を握ったまま思案顔をしている。

傍目には恋人同士……に見えないと言ったら嘘になるが可能性的には限りなく低いだろう。

「うーん…私達を待ってたとか？」

「だったら早く行ってやらないとな。行くぞ、なのは」

「あっ！？待ってよーヴィータちゃん！」

決戦の火蓋が今……切られた。

第34話「可視不可視」（後書き）

第34話、いかがだったでしょうか？

話の冒頭では、広暁の口悪いバージョンを初披露しました。

どんなに真面目な性格でも、リアルな世界では、悪口を言わない人間はいないと思います。

故に、私の小説の作風、広暁の性格の多面性という観点から、彼には悪口を言ってもらいました。

そして…ティアナの心情描写。

『自分の人生は自分のもの』

この言葉を忘れずに生きていきたい…そんな自分勝手な願望から今回の話に書かせていただきました。

今回の話は、読者の皆様によって好き嫌いが分かれるかと思えます。感想はどんとこいですが、誹謗中傷はなるべく書きこまないでもらえると嬉しいです。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第35話「相違と合意」(前書き)

第35話です。

いよいよ、広暁となのは O H A N A S H I I が始まります。
はてさて、どういった展開になるのでしょうか？

では……。第35話、始まります。

第35話「相違と合意」

くなるようになるだろ」

「「「「……………」」」」」

「「……………」」

ここはなのはとフェイトにあてがわれた寮の部屋…ではなく、食堂の一角。

教導のことで話したいと言った2人に、なのはとヴィータは少し怪訝な顔をしながらも快く応じた。

ロビーでそのまま話すということに決まったのだが、そこに通りかかったのがフェイトとシグナム。

執務官の仕事を終えたフェイトと交代部隊の仕事を終えたシグナムはたまたま鉢合わせしたらしく、食堂で一服しながら雑談でも交わそうか、という話になったらしい。

故にその流れで、6人は食堂に移動して話すことになった。

「……………以上です」

自分達を感じた教導の疑問点を簡潔に話したティアナと広暁。話を聞き終え、一様に顔を伏せるなのは達隊長・副隊長陣。

そんな彼女達が醸し出す空気を疑問に思ったのか、長き沈黙を広暁が破った。

「え〜と……どうした？」

無論、広暁とて、ただこの空気に耐え切れず言葉を発したのではない。

彼女達が「何と説明したらいいか？」と頭の中で考えていることは想像に難くない。

しかしこのままでは、何となく嫌な方向に（主に話が進まないという意味で）進みそうな気がしたのだ。

とあるスポーツで全国級の元高校生として、幾度となく部活で行なったミーティングの経験が。

学生生活に勤しんでいた元大学生として、いつの間にか身に付けていた『空気を読む』という技能が。

20年とはいえ、今までに培った経験に基づく直観が、広暁に『沈黙を破る』という手段を取らせた。

「……なのは」

「うん……」

「……………」

フェイトの言葉で覚悟を決めたのか、なのはは顔を上げて2人を見る。

その顔は、どこか儂げながらも決意に満ちた目をしていた。

「いい、2人共。今から話すことを黙って聞いて。聞き終わったら

…感想を聞かせてくれるかな？」

「……はい」

「……以上、なのはさんの失敗談でした」

(なのはさんに……そんな過去が……)

(まあ……大体予想通りか……考えたのよりは重かったけど。
ある意味当然なのかねえ……エリオ・キャロっていう前例もあるし)

話し終えたなのはは悲哀な笑顔、聞き終えたティアナと広暁は無表情と言つ名の悲しげな思案顔。

フエイトとヴィータもなのはと似たような表情をしており、シグナムは話の途中から目を閉じたまま。シグナムは未だに目を開けないが……………。

「それじゃあ、感想を聞かせてくれるかな？」

「あ、はい…広暁さん？」

「…考えがまだ纏まってない。先に頼めるか？」

「はい……………」

<広暁 side>

なのはの話を纏めると……………

? 9歳で魔法に目覚めて、類い稀な才能と命懸けの実戦でPT事件

や闇の書事件を解決

？魔導師として働いて2年、11歳に死亡寸前の怪我を負う。原因は2年間で溜めた無茶と負担のツケ

？復帰不可能とまで言われたが、半年間の過酷なりハビリの結果、復帰

？故に俺達には無茶をしてほしくなくて、訓練は基礎と対隊長・副隊長の模擬戦が中心

要約すると……こうなるよなあ。

何て言うか……大体予想通りと言うか……。

あんまり軽い気持ちで調べるもんじゃなかったなあ……。

……現実逃避してる場合じゃないな。

とりあえず、ティアナが話してるうちに考えを纏めておくか。

「それは人として」

「なのはさんが私達のことをそんなに考えているなんて……本当にすみませんでした。」

これからはもう、無茶な自手練はしないようにします」

「うん。ありがとう、ティアナ」

なのはの過去、そして彼女が行う教導の意味。

それを知ったティアナは、半分泣きながら感想を述べていた。

フェイトは神妙な面持ちで、ヴィータは苦虫を噛み潰したような表情をしている。

シグナムは未だに目を開けないが………。

「じゃあ、次。広暁君、お願い出来るかな？」

「オッケー」

スウ

ハア……………。

大きく息を吸って吐く広暁。

それを話し始める合図だと悟ったのか、ティアナを含めた4人は何故か背筋を正した。

それに「何でそんなことを？」と疑問に思った広暁だが、特に興味もないので話をすることにした。

「ティアナの言った通り、俺達のことをそこまで考えて教導のメニューを組んでいたことには素直に感謝、いや、敬服って言っても言い過ぎじゃない。だけど……」

「え？ え〜と…何か問題があるのかな？」

「問題というより……疑問点かな」

「疑問点…？」

「疑問点」

自分の教導に対して素直に疑問点をぶつけてくる人間が今までいなかったのだろうか、なのは広暁の返答に対しおっかなびつくりと言った感じで言葉を返した。

そんななのは対応を見て、広暁は改めて言葉を選びながらなのはに話す。

「1つ目は前提条件。

俺達が簡単に壊れないように、基礎と模擬戦重視の教導っていうのは理解出来た。

だけど、それはなのはみたいに魔法を実戦の中で学んできた魔導師だけに通じる理論じゃない？

俺ならともかく、俺以外の4人には少し無理のある言葉だと思う。スバルとティアナは陸士訓練校を卒業して陸士隊で働いてたし。

エリオは本局の保護施設にいたとはいえ、フェイトの個人指導を受けてた。

キヤロも竜魂召喚はともかく、それ以外のスキルなら自然保護隊にいた時に一通り勉強したらしいし。

だよ、フェイト？」

「えっ？ あ、う、うん。そうだね……」

「そういう意味では、ティアナとスバルは言うに及ばず。エリオとキャラも、それなりに体は出来てるわけだよな。だったら、模擬戦はともかく、ガジェットを使った実戦形式を増やしてもいいと思う」

「ひ、広暁君。それは……」

「2つ目が」

なのはが口を挟もうとしても、広暁は構わず話を続ける。交渉ではなく、これはある意味では討論である。

自分が言っていることが全て正しいとは、広暁は思っていない。しかし、相手に付け入る隙を与えては、今回の場合においては話の流れを断ち切ってしまう。

故に広暁は、更に言葉を紡ぐ。

「2つ目が、俺達に教導の意味を教えなかったこと。成長する為とか俺達の為にとってことで、今までみたいな教導の形をとってたのは分かった。」

「ただ俺達は、なのはがさっき言った教導の『本当の』意味を全く知らなかったし、考えなかった。」

俺は性格がこんなだから、ある程度考えてこうやってなのはに疑問点を言うことは出来る。」

「ただ……」

チラッ。

「っ……………」

「ティアナはそれを疑問に感じて、聞くことが出来なかった。もしもティアナがもっと自主練をして体を壊したら元も子もないと思わない？」

断言するのではなく、判断を委ねる。

訪問販売で用いられる手法であり、聞き手が判断を下すことで発言者の言葉が正しいと思わせる手法。

「過去の失敗談を言えとは言わないけど、教導の意味ぐらいは言っておいてもよかつたんじゃない？」

そうすれば、今回みたいに俺とティアナが態々聞きにくることもなかっただろうし。

勿論、単純に何か疑問を聞きにくることを除いてだけど」

「……………」

(あれ？ 何か間違えたか？)

広暁は困惑していた。

教導の疑問点を述べ、なのはの反論を聞いた後、お互いに意見をぶつけながら話を纏めていく。

その予定だったのだが……なのはが下を向いたまま、さっきから頭を上げようとしないのだ。

(言い過ぎた……わけないよな？ 男同士の口喧嘩じゃあるまいし、言葉はちゃんと選んだ。

俺の言ったことが間違ってた？ いや、少しぐらい間違ってたとしても、芯は間違ってたない。

となると……男に何か言われるのに慣れてない？
いや、教導官っていう立場なら、年配の教導官とかに色々言われることもあるはずだし……)

いつも通り頭の中で考えまくり、盛大に悩む広暁。

下を向いて『上半身が震えている』なのはを、心配するように見守るフェイト。

何をしているのか分からず、プチ右往左往状態のヴィータ。
未だに目を開けないシグナム。

「なのは……さん？」

空気を讀んだのか読んでいないのか、なのはに話しかけるティアナ。
しかし……結果としてこれが、状況を変えるための一手となった。

「これなの

！……！！」

「……！？」

「これよ、これ！ 教導官は若き魔導師を導く者！
そのためには、力と力、技と技、速さと速さ！
何より、腹を割ってお互いに気の済むまで話し合うのが一番なの！」

（どこで間違えたんだ……？ いや、今はこの暴走状態のなのはを
何とかしないと……）

「さあ、広暁君！ 私と気が済むまで話し合いましろう！
教導のことでも私生活のことでも恋のことでも！
何でも私が相談に乗ってあげるからね！」

（……最後の一つは置いておくとして。ここはとりあえず……）

「なのは、落ち着いて。教導のことで話し合うなら落ち着いてる方がいいから。教導のことで話すのは本望だけど、今のなのはじゃ話し合うのは難しいから」

「これが落ち着いていられるかなの！

ここ数年は！ どの部隊に教導に行っても！ 皆私の言うことを素直に聞くだけで！

誰一人！ 私に対して！ 意見しようとしなかった！

そりゃあ私だって、巷では『エースオブエース』なんて言われてるよ…だけど！

憧れてくれるのは嬉しいけど！ ただ私の言うことを素直に聞くだけの子なんて！ 全然面白くないの！

私は！ もっと！ 教え子と闘いたいの

！…！」

(…なのはに対する認識を変えたほうがいいかな…)

(なのはさんが壊れた…)

そのままテンションが上がったのはと終始冷めていた広暁は議論を交わし。

フェイト・ヴィータ・ティアナは置き去りにされ（シグナムは相も変わらず）。

気がついたら時刻はすっかり0時を回っていた。

ちなみにこれからの教導は、もう少し実戦的にし、対ガジェット戦の割合を増やすことに決まった。

強くなった実感が湧かないと訓練に不満を感じると広暁から聞いたのはは、そのへんをもう少し考えていくことにもしたらしい。

「しかし……自分の教導の意味を教えるのが恥ずかしいって……」

「いや、その……教えなくても分かってくれると思っていたと言いますか……」

「言わなきゃ分からないこともあるからね？

何かあってからじゃ遅いんだからね？

ってか、元を正せばあんたの性でこんな時間まで議論する羽目になったんだよ？

実際もう起こったんだよ？」

「それは分かってるけど……」

「人は目に見えないものを求めたがるって言うけどさ？」

第35話「相違と合意」（後書き）

第35話、いかがだったでしょうか？

魔王降臨を期待していた方は御免なさい。

ですけど、アニメ的にはともかく、私の作品的にはあの展開は無理があります。

広暁なら無茶な練習をしているティアナを止めるでしょうし、教導のメニューに疑問を感じたらほぼ確実にそれを言いに行きますから。

今回も少し広暁が壊れました。

どんなに真面目な人間でも、壊れる時は壊れるものです。

ちなみに。なのはが言った「私はもつと教え子と闘いたい」。

これは私が通っていた大学の外部講師の教授が言った言葉です。

学生には積極的に意見を言ってもらい、それに自分が全力で応えたいということなのでしょうね。

無論、肉体的な意味では闘いませんよ？ もう70近い高齢の方ですからね。

他にも伏線っぽいものは仕込んでおきましたが、これは後々明らかになりますので。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第36話「invisible chain, it is forever」

第36話です。

今回は久方振りの英語の題名です。かっこいいですね。

それでは。だい36話、始まります。

（埠頭）

「風が気持ちいいですね……」

「……そうだな」

海からの風が2人の肌を撫で、ティアナのオレンジ髪のスインテールが風に靡く。
話し合いを終えた広暁とティアナは、埠頭を歩いていた。もうすぐ夏を迎えるとはいえ、まだこの時期の夜は涼しい。ましてや、海辺に建っている機動六課の隊舎なら尚更だ。

「それにしても、さっきは驚きました。あんな広暁さん、初めてみましたよ？」

「色々と溜め込む性格でさ。偶に吐き出さないと、後々めんどいことになる」

「そ、そうだったんですか……」

普段落ち着いている人程、感情が爆発した時は手がつけられなくなる。

世間一般ではそのように言うことが多い。

広暁もその類に漏れず、話し合いが終わった後、なのはに心ゆくまで愚痴をぶちまけた。

言っていることが的確で筋も通っていたため、なのははまともに反論することすら出来ず、ただ頷くことしか出来なかった。

社会人10年目のなのはを論破する社会人経験僅か2ヶ月の広暁……中々にシユールだっただろう。

「ま、これで明日からの訓練も変わるし。結果オーライかな？」

「そうですね。本当にありがとうございました、広暁さん」

ペコリ。

ティアナは広暁に頭を下げる。

それを見た広暁は、右手を軽く顔の前で振りながら言葉を返した。

「いいのいいの。どうせ俺一人でもやってたことだし」

「ム……。あたしはついですか？」

「否定は出来んな」

「……ハア。今更言っても仕方のないことだったんですけどね……」

そう言ったティアナは、埠頭に腰を降ろした。

もうこれ以上はこのことで話さないという意思表示なのだろう。

広暁もティアナの隣に腰を降ろし、海に向かって投げ出された両足をブラブラと揺らす。

「子供っぽいですよ？」

「ティアナ達が大人なだけだ。俺はまだまだ子供なんだよ」

「そもそもさ。俺っていうイレギュラーがいなければ、フォワードはティアナ達4人だったわけだろ？」

フロントアタッカー
高い突破力と防御力を持つ、FAのスバル。

魔力変換資質と抜きん出たスピードの一撃離脱戦法、ガードウィングGWのエリオ。竜召喚による大型火力と豊富な補助魔法を持つ、フルバックFBのキャロ。んで……」

一旦言葉を区切った広暁はティアナを見る。

どこか期待しているような、それでいて諦めているような顔。それを確認した広暁は言葉を続ける。

「射撃と幻術を駆使して仲間を活かした戦い方をする、センターガードCGのティアナ。

その4人のうちの1人なわけだろ、ティアナは。埋もれる要素なんて見当たらんのだろ」

「ですけど、私には他の3人のような才能も素質も……」

「だーから。そこが間違いなんだって」

「どういう……ことですか？」

「才能っていうのは、目に見えるものだけじゃないってこと」

「目に見える……もの？」

「ティアナが持つてるのはな、統率力っていう才能なんだよ。味方のことを把握して、意図を汲んで、指示を出して。」

チームのリーダーや司令塔が持つべき才能。

それをティアナは持つてる」

「統率力……………」

「俺が混ざった、最初の訓練もそうだったろ？」

作戦を考えたのは大体俺だけど、それをちゃんと理解して全体に指示を出したのはティアナだった。

俺もエリオやキャロに支持は出したけど、あれは所詮後付け。

ティアナが元々持つ、統率力のおかげなんだよ。

俺はそれを後押ししただけ」

「……………」

「目に見えるものを追うのは当然っちゃあ当然だし、それは至極当然のこと。

だけど、人間が内に持つ才能……統率力とか、洞察力とか？

そういう才能に目を向けてもいいと思うぞ」

言い終えた広暁は一息吐き、空を仰いだ。

空には星が輝いており、地球とは違う2つの月が2人を明るく照らす。

「まっ、考えてみて。答えを出すのに悩みすぎなんてことはないから」

「……………」

「どうしてこうなった」

あれからティアナは一頻り考え、広暁に隊舎へ行こうと促し。広暁はそれを承諾し、2人は隊舎へと向かい。話し合いを終えた広暁は、ティアナに誘われて埠頭に至る。

「……答えは出たのか？」

「いえ、まだです……ですけど」

広暁はティアナの過去のことを知らない。大体予想がつく上、調べればある程度のこととは分かると確信しているから。

「私は私……ティアナ・ランスターとして、これからも努力していきたくと思います。執務官になるという夢を叶えるためにも、まずは六課（ごく）で経験を積んで。

後々後悔しないために……今はしっかりと学んでいきたくと思います」

「……そっか」

フッ……。

ティアナの言葉を聞いた広暁は、一瞬笑ったよ……ようにティアナには見えた。

あまりに一瞬だったので定かではないが、初めて見た、広暁の笑顔……。
……。
ついついティアナの顔は赤くなる。

「夢に向かってひた走る若者……いいねえ」

「そんな年寄り臭いことを言わないで下さいよ……」

秀囲気台無しじゃないですかと溜息を吐くティアナ。
それに対して、広暁はごく自然に言葉を返す。

「いや、単純に羨ましいんだよ」

「羨ましい……ですか？」

「前の世界……地球にいたころの俺はな。

夢なんてなかった……というより、全然分からなかった。
決められた線路レールの上をずっと歩いてきてさ。

部活で良い成績を出しても、それなりにレベルの高い大学に通つても。

20歳はたちの大学3年生になっても、将来進みたい道が決まらなかった。
だからかな……ティアナ・スバル・エリオ・キャロを見てると、凄

羨ましくなる時があるんだよ。
俺が何となく過ごしてた時から自分の将来のことを考えてる4人を見てるとな」

そう言った広暁は、再び足をブラブラとする。
自分はまだまだ子供である、そんなことを証明するかのように。

「でも……今は見つけれられたんですよね？」

「……まあね。まだこの先、何が起きるか分からないけど」

誰から聞いた？ と広暁は聞き返さない。

大方の予想はつくし、今ここで聞き返しても大して意味はないから。

「まっ、頑張るしかないよな。とりあえずは、ティアナ達に認められる魔導師にならないとな」

「えっ？ いえ、実力なら広暁さんの方が上じゃあ……？」

今のティアナにしてみたら、広暁と闘って勝てと言われたら、まず無理ですと言うだろう。

それほど広暁は一気に実力をつけたし、闘い方というものも心得ている。

何より、広暁にはホルスがいる。

広暁と1対1で闘うだけでも無理難題であるのに、ホルスが加わったら無理を通り越しているという次元ではないのだ。

「俺には、圧倒的にミッドチルダっていう世界での経験が足りない。経済・思想・風土・流通・歴史、どれをとっても俺の知識はこの世界のとは違う。」

どんなに戦闘力が上がっても智慧をつけても、こればっかしはどうにもならん。

少なくともこの世界を第二の故郷位に考えられるようにならんな」
自分で決めた道、そして自分で決めた将来とはいえ、まだ地球に帰ることを諦めたわけではない。

しかし何度も言うが、これは初めて広暁が『自分で考えた将来の進路』なのだ。

地球には未練があるし、まだまだこれからのミッドチルダでの生活には不安がある。

しかし、一度道を決めた以上は妥協したくない。
臨機応変な対応をとることはあっても、道を進む為に必要な手段を模索するにしても。

手段として妥協はしても、自分自身に妥協はしたくないのだ。

「まあ、これからも頼むな。下手したらあと10カ月足らずの付き合いかもしれないけど」

「……………」

そう言っただけで広暁は空を仰ぐ。

そこにあるは2つの月、そして数多に瞬く星々。

地球とは異なる夜空に、広暁は改めて異世界にいることを体感した。

「んじゃ、そろそろ戻るか」

「あ、あのー！」

「ん？」

睡眠のために寮に戻ることを提案して立ち上がった広暁に、ティアナが待ったをかける。

ティアナは勢いそのまま立ち上がり、広暁を見上げる形になった。身長差が30cm程あるのだから当然と言えば当然だが。

「お願いを……聞いてもらえますか……？」

「内容によるんだけど……」

「いいよ」と快諾することもなければ、「嫌だ」と拒絶することもしない。

内容次第、まずは話を聞いてからだ。

それこそ人からの頼みを聞く時の受け答え。

「え、えーと……その……」

モジモジ……／／／／

(あゝ……これってあれか?)

ティアナのモジモジする態度を見た広暁は、ティアナが言うのである

言葉が予測した。

そうだった経験がないわけではないが、如何せんそれも過去の話。受け答えの言葉はある程度思いつくものの、後ろめたさと恥ずかしさから口を閉ざしてしまふ。

(何て返せそう……?)

(……よし!)

悩む広暁の姿に触発されたのが、ティアナは下げていた顔を上げる。そして……言葉は発せられた。

「に、兄さんって呼ばせてください!!」

「……………えっ? 兄さん?」

まだあまり広暁を知らないティアナから見たら、今の広暁の顔は実に新鮮に映るだろう。

驚愕や興奮、呆然が入り交じったような表情。

真面目で冷静、常に先のことを考えて行動するというイメージを広暁に持っていたティアナからすれば驚き以外のなにものでもない。

「え〜と、その……何故に兄さん?」

「……………//」

「……エリオやキャラ口みたいなもんか？」

「そ……それをお願いします…… / / /」

(甘え…尊敬…憧れ…そんなとこか？ ……ハア、俺ってこんな人間だったっけ？)

ミッドチルダに来てから何度目かの「俺ってこんな人間だったっけ？」。

生きる世界が変われば人の見られ方も変わる、それは広暁も同様。地球にいた頃とはもかく、ミッドチルダに来てから年下に対して定着しつつあるお兄さんキャラに、さすがに今回は戸惑いを隠せない。

「呼ぶ分には構わんけど、大丈夫？ スバルとかシャーリーあたりにかからかわれるんじゃないかねえか？」

「……大丈夫です。私、負けませんから！」

(……早く戻って寝よう……)

テクテク……。

「あつ！ 兄さん、待って下さいー！！」

兄妹？ の真夜中の「コマ」。

もしかしたらこれからも機会があればありえたりする……のかもしれない。

第36話、いかがだったでしょうか？

書いていたら、何故かティアナも妹ポジションになってしまいました。
た。

でもまあ……仕方ないよね、うん！！

ある程度年上の男性なら、ティアナは大抵の主人公の娘or妹ポジションになるような気がします。

フォワード陣の中ではリーダー格ですが、そんな彼女が甘える姿が
いいのですかね？

それでは、今回はここまで辺で。感想・意見・間違い訂正等、お待ち
しています。

第36・5話「準備6割・判断2割・運2割」（前書き）

第36・5話です。

調子がいいのでいつもより間を置かずに投稿しました。

今回の話は、ちょっととした裏話的内容になります。

では。第36・5話、始まります。

第36・5話「準備6割・判断2割・運2割」

「賽は投げられた」

「俺ってお兄さんキャラだっけ……？」

『よかったですね、マスター。弟1人に妹2人。立派な4人兄妹の長男ですよ』

「……お前なあ」

ティアナと別れた広暁は、1人男子寮の廊下を歩いていた。

明日の早朝訓練が中止ということはストラードとケリュケイオンにサジタリウスが伝えてあり、マツハキャリバーにはクロスミラージュが伝えた。

もう0時を回っているが、今夜は多少夜更ししても問題はないだろう。

そんな風に考えている中、サジタリウスが広暁に話しかけた。

「4人兄妹の長男……ねえ」

『マスター？』

「いや、姉ちゃんを思い出したただけだ」

『姉ちゃん……姉あねですか？』

「そつ。俺の姉ちゃん」

話してなかったっけ？ といった風にサジタリウスに話しかける。サジタリウスが聞いたことがないと言うと、広暁は過去を振り返る。記憶の糸を手繰ると、両親のことは話したが、姉のことは誰にも話していないことに気付いた。

もつとも、両親のことを話したといっても、いるというだけでどんな人かまでは話していないのだが。

「まあ……俺の状況を考えると話さん方がいいかもな。変に気を遣われると俺も対応出来んし」

『そうですね。でも、私は聞いてみたいです。マスターのお姉さんの話を』

「姉ちゃんのこと？ うーん……」

話すことは吝かひんかではないが、何て説明したらいいか、そんな空気。そんな空気の中、広暁の名前を呼ぶ高い女性の声。

「広暁。今いいか？」

「シグ…ナム？」

「それで……俺に聞きたいことって？」

「お前と違って腹の探り合いは苦手なのでな、単刀直入に聞く」

(いや、俺も別段得意ってわけじゃないんだけど)

場所は変わって、ここは階段の踊り場。

広暁の部屋は寮の2階にあり、ここは1階と2階を結ぶ階段の踊り場である。

ここに着いて再び階段を登ろうとした矢先、広暁はシグナムに声をかけられた。

恐らくシグナムは、広暁の部屋の前で広暁が帰ってくるのを待っていたのだろう。

「お前は……高町の教導の意味を知っていたのか？」

「……ずっとあの姿勢だったのはそういうことね。情状酌量の余地は？」

「ない」

「ですよね」

「……………」

「気づいてたのか」

シグナムが話したこと、それはなのはの身に起きた事件のこと。それを広暁は既に知っていたのか？ ということだった。そして……この会話の流れでいくと……………。

「結論から言うと……知ってたっていうより、一番確立の高い予想だった。」

「つか、何でシグナムは俺が知ってるって考えたの？」

「高町が事件のことを話終わったあと、お前とティアナに感想を求めただろ？」

その時のお前の顔がどうしても引っかかってな。あれは何かを考える顔じゃない。予想が当たって、当たったことに後悔している時の顔だった」

（女性は怖いね。ポーカーフェイスの練習でもするか？）

人間の表情の変化からその人の感情・思考の変化を読み取る。

言葉で言うのは簡単だが、これはそう簡単に出来るものではない。広暁のように元々観察力・洞察力に優れた人間なら気づきたくなくても気づいてしまうが、本当に出来ない人は出来ないし、表情の変化にすら気づかないことも多々ある。

男性より女性の方が優れているこの力、シグナムはそれに加えて魔導師としての経験があるのだろう、自分の表情の変化に気づいたのだろうと広暁は考えた。

「ずっと目を閉じて腕を組んでたのは？」

「最初は話を聞くだけの予定だったのだがな。」

途中で少し目を開いたら、お前の表情の変化に気付いた。

すぐに聞こうかどうか迷ってるうちに話は終わったのでな、今こうして聞きに来ただけだ」

どんだけタイミングいいんだよいうツツコミを心の中に封印しつつ、広暁は考える。

別に話しても問題はないし、シグナムの性格から考えて深く追求することもないだろう。

しかし……自分が勝手になのはのことを調べたことに対してはどうだろうか？

公開情報とはいえ、どうにも話すのが憚る。

そんな風に悩む広暁を見て何か思うところがあるのか、シグナムは言葉を繋ぐ。

お前のことだから間違った方法で調べたわけではないだろう、だから私は何を聞いても驚かないと。

そもそも、一民間協力者で調べられることに正しいも間違いもなくどこまで閲覧出来るか出来ないかの違いなのだが、考えるのが少し

面倒臭くなってきた広暁はもう話すことにした。

「人に教える立場の人に多いんだけどな。

ああゆう人は大体、自分の過去の失敗を教え子に繰り返させないように……って考えてる人が多い。

だからとりあえず、なのはの経歴を調べてみた。

管理局員の経歴ぐらいなら、俺でも六課のネットワークから普通に入れるからな」

「高町の経歴を……？」

「9歳の時にユ……スクライア先生に会って魔法を知ったのは、こないだ会ったときに聞いたからな。

それから色んな事件を解決して、2年後。

詳しい事件の詳細は載ってなかったけど、半年間入院したって載ってた。

後はそこから推測を立てただけだ」

「たったそれだけで……分かったのか？」

シグナムが驚くのも無理はない。

今広暁が言った限りでは、広暁の持つ情報はデータとして載っていったなのはの経歴のみ。

ホテル・アグスタでユーノと会ったとはいえ、そこまで詳しくなのはのことをユーノが話すとは考えにくいからだ。

「馬鹿げた魔力量を持つ9歳の女の子が、ずっと実践を続けてきたんだよ？」

途中から管理局に入ってそれ相応の訓練を受けたとしても、体に疲労が溜まるのは自明の理だろ。

んで11歳の時に、詳しいことは知らないけど何かの事件で重傷を負った。

それが今までの実戦で溜まったガタや疲労からきたものかどうかは知らん。

だけど半年間のリハビリの末に復帰ってことは、よっぽどの重傷を負ったか、それプラス今までに体に溜まったものの影響でリハビリが長引いたって可能性が高い。

あと、なのはの性格を考えると、教え子には自分と同じ失敗をしてほしくないって考えるだろ。

だからあそこまで徹底して基礎と模擬戦を中心とした訓練メニューを組んだ。

俺はそう考えた」

つまり広暁は、ユーノからなのはが魔法を知った経緯は聞いたが、詳しい実状は知らない。

判断材料は、なのはの過去の経歴と現在のなのはの性格のみ。

それだけで広暁は、なのはの教導の意味と真意を当てたのだ。

それを考えると、シグナムは身震いした。

別段、広暁が教導の意味を知ったことに対して驚きはしない。

身震いしたのは……広暁がなのはの経歴を調べ、教導の意味を考え、意見を言いに来たこと。

普通……というより、ある程度普通の人間がこのような行動を起こすとする、教導の意味を考えてもそのバックグラウンドたるなのはの経歴まで調べたりはしないだろう。

仮に調べて教導の意味が分かったとしても、態々物申しに上司であるなののところへ行きはしない。

しかし広暁は、経歴を調べ、教導の意味を考え、なのはに意見を言いにいった。

普段は大人しい印象が強い広暁だけに、シグナムは身震いしたのだ。

「お前にそこまでの行動力があつたとはな……驚きだ」

「行動してから後悔しろ、ってわけでもないけどさ。行動して問題無さそうだから行動した、それだけだよ」

「問題無さそうだからだと？ お前にしては随分と曖昧な理由だな」

「気になることや間違ってることでも、馬鹿正直に言えばいいってことはそうそうないだろ。」

「そんなのが許されるのはテレビとか漫画の2次元の世界の話だけだ。そもそも行動していいのか？ 行動したとして、それが周りに与える影響は？」

「行動するにしても、そのプロセスは？ 行動するために必要な準備は？ 考えたらキリがねえよ。」

「……まあ、まだ民間協力者歴2ヶ月の俺が言っても、全然重みがないけど」

自分の意見を、最後に自嘲気味の一文で終わらせる広暁。

言葉だけでなく、顔もどことなくそれっぽい顔をしているので本心から言っているのだろう。

シグナムはそれに気づいていながら、然さも気にしないかのようにして言葉をつなぐ。

「そんなことはない。お前のように、最初から最後まで考えて行動出来る人間は必要だ。」

テストロツサはともかく、高町は『当たって砕ける精神』が抜けていないからな。

こればかりは、どんなに教導をしても魔導師として経験を積んでもどうにもならん」

「当たって砕けるって……いや、それよりも。
俺みたいな次元漂流者で民間協力者の人間にそこまで期待されても、
正直困るんだけど」

「……それは本心か？」

「（やっぱりばれるよねえ……）自分を守るための日本人的謙虚精神です」

「謙虚なのは結構だがな、あまり謙虚すぎると周りの人間を貶めることになる。」

「そこは重々承知しておけよ？」

「……分かった」

「分かればいい」

「あっ……そういやさ、シグナム」

「どうした？」

「……はやてのことなんだけどさ」

「主はやてがどうかしたのか？」

さっきまでとは打って変わって、広暁は言いにくそうに話を切り出した。

内容が内容だけにシグナムも真面目な態度になるが、広暁の様子を見ると違和感が拭えない。

そもそもシグナムは、こんな風に物事を言いにくそうな広暁は初めて見た、と思っっていたりする。

「はやてってさ……俺に気がある？」

「確か…そんなことを言っていた様な気がするが？」

家に帰るとシヤマルと2人でいつも盛り上がっているぞ」

「（その割には全然アプローチがないな……）はやてに伝えたいほしいことがあるんだけど……」

「構わないが？」

尚言いにくそうに言葉を紡ぐ広暁。

しかしそれでも、はやてに言いたいことがあるのだろう。

シグナムの眼を見て、広暁は会話を続ける。

「はやてが俺に気がするのは確かだろうけど、それは愛とか恋とかからくるものじゃないと思う。」

焦りとか物珍しさとか……とにかく、はやてが考えてるものとは違
うと思うんだよ。

だからもつと良く考えて……いや、『俯瞰的に』考えるように言っ
てくれない？

こんな理由ではやての仕事に支障が出たら俺も嫌だし」

「……分かった、伝えておこう。

私はこの手のことには疎いからよく分からないが、お前が言うのな
ら間違いはないのだろうな」

俺も経験が多いわけじゃないけどな、と補足して広暁は嘆息する（
それでもはやてより多い自負は何となくあるが）。

アプローチこそ少ないが、はやてが自分のことをそういつた対象と
して見ているのは分かっている。

それは別段迷惑なことではなく、男として普通に嬉しいことだ（そ
のやり方はともかくとして）。

しかし、彼女が愛とか恋とかと考えているものは、傍から見たら全
然異なるのだ。

広暁1人が勝手にそう思い込んでいるのならともかく、周りの誰が
見てもそう分かるような。

それに浮かされているはやてを見るのは良い気分ではないし、周り
に悪影響を与える可能性もある。

その結果、自分勝手だなと思いつつも広暁は行動に出た。

直接言ってもいいのだが、こうゆうことは間接的に伝えたほうが効
果がある。何故なら、

本人に直接言いにくい 他の人に伝言を頼む 信憑性が高まる

といった風になるからだ。

なまじいつでも本人に言える環境にあるので、より信憑性が高まる。ましてや、頭がいい人ほどこの図式が成り立つだろう。ある程度頭のいい人は先を考えて思考が出来るし、自分で出した結論なら尚更疑いはしないだろう。

「頼むね。どうにもはやては、焦ってる様な気がするんだよなあ……」

「主はやては小学生の時から管理局員として働いているからな。中学を卒業してからはずっと働き詰めだ。そついった色恋沙汰にはほとんど無縁と言っていいからな」

「……はあ。良くも悪くも俺が六課こくの人達に影響を与えちゃってるのか……」

はやて・フエイト・エリオ・キャロ・ティアナ・なのは。六課に来てから広暁の影響で変わった人間はまだまだいる。広暁が辿ってきた人生が、彼女らにとっては異質だったから。彼の元いた世界では『優れている』程度の過去であり、歩んできた人生。

それを蓄積し考察して己の糧とした人間『墨谷広暁』が、六課の人達を変えたのだ。

「まあ……お前の故郷のことは我々でも調べている。」

安心しろとは言わんが、あまり悲観的にならないでくれ。
お前には過ぎた忠告かもしれんが」

「……OK。とりあえず、明日からの訓練を頑張るよ」

「高町も気合が入っていたからな。私も、明日からは更^{しこ}にたっぷり扱^{しこ}くぞ？」

「お手やわらかに頼むよ……んじゃ、御休み」

「ああ、御休み」

フウ……………。

後ろ手に手を振りながら広暁は去る。

「お疲れさ〜ん」とでも聞こえてきそうな程哀愁が漂った背中を見たシグナムはため息を漏らした。

「……ザフィーラの言っていた通りだな。

まさか六課設立の本当の目的だけでなく、高町の教導の本当の意味まで探り当てるとは。

見える……いや、観^みえるのか？」

心に宿るは淡き期待、口から漏れるは感嘆の一言。

一度生まれた感情は彼女の脳内をグルグルと回る、それは結論へと続く思考の過程。

(……それだけではない。
物事に気づく力、それを調べる積極性、自分が起こす行動が周りに与える影響を考える用心深さ。

全てを考えた上で行動し、自分が思い描く結果を導き出す。

観察力・洞察力でなく、本当に優れているのは……オーガナイズ……計画実行力。全体を見据えて動く力が……これは偶然なのか?)

足りなかったピースがカチリ、と音を立ててはまる。

力としては十分でも、技術としては足りないとところが多々ある機動六課。

それも含めて機動六課を作ったはやてだが、それは所詮成り立ちの話。

目的が目的とはいえ、組織として運営していく上では、少々心許ない部分もある。

全てにおいて完全などない。

不完全を含めた完全こそが人間が理想とすべきあり方。

足りないところはあってはいけませんが、良いところ取りでは組織は成り立たない。

全てを含み内包してこそ、人間としても組織としても最高と言える。それにシグナムが気づいたかどうかは……今は誰も知る由もない。

第36・5話「準備6割・判断2割・運2割」（後書き）

第36・5話、いかがだったでしょうか？

主人公設定と第12話にも載っていますが、広暁の本当に優れている能力は計画実行力オーガナイズです。

他の、例えば観察力や洞察力も優れているわけですが、それはこの力の遂行する上での必要材料的な要素が強いんですね。勿論……全ての力には裏があるのですが。

はやてについてですが……これは本当に申し訳ありません。

私の腕がまだまだ未熟な面もあり、広暁に好意を寄せる人間が2人以上だと話が中々進まなくなってしまう恐れが浮上しました。

そのため、はやての恋愛フラグは折ることになりました。

私自身、ハーレム（2人以上）が苦手という意識があるのも、恐らくは影響していると思われます。

誠に申し訳ありませんが、ご容赦ください。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第37話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」(前書き)

第37話です。

。タイトルがあれなのは気にしないでいただけると助かります(懇願)

では。第37話、始まります。

第37話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」

「それは突然に」

「ってなわけで。広暁にはBランク昇進試験を受けてもらうので」

「何が「ってなわけで」かは知らんが、早くバインド解け」

いつもは怒りを外に出さない広暁もこの時はかりは怒っていた。強化された訓練メニューを消化して昼食を食べた後のことだ。

以前会った時にユーノから無限書庫閲覧の許可をもらった広暁は、早速いくつかの本を借り、郵送で送ってもらった。

午後のデスクワークまで時間があるのでそれらの本を外で読もうと思いい中庭に出たのだが、そこでいきなりバインドを（2桁ぐらい）かけられたのだ。

ホルスが近くにいればよかったが、あいにくホルスはフリードと散歩に出かけている。

辺りを見回しても局員は見当たらないので、このタイミングを見計らってバインドをかけられたらしい。

魔力や術式構築の特徴からしてはやての魔法だと判断した広暁は抵抗を諦めた。

魔力運用の技術差や魔力量のリミッターはともかく、自分とはやてとでは10年近くキャリアの差があり、それ意外にも負けている面は多々ある。

抵抗しても無意味だし、無駄に疲れるだけだ。

しかし、バインドを避けられなかったこととは話は別だ。

瞬発力と反射神経の良さを自負しているだけに、バインドに反応出来なかった自分には腹が立った。

「なのはちゃんと違って私は中・遠距離からでも相手に気づかれずにバインドをかけれるんや。結構集中力必要な上に術式の構築がめんどいからよー使わへんけどな」

「聞いてもないのに態々説明ありがとう。早くバインド解け」

反応出来なければ、どんなに瞬発力に優れていても反射神経が良くても無意味ということだろう。

そこまで考えて、広暁は再び目の前のはやてを見る。

人を弄って遊ぶのが好きそうな、どこの学校にも会社にもいそうな種類の人間。

相手をするのは面倒臭いが、このままではもっと面倒臭いことになるのでとりあえず頭を働かせる。

「そんなに怒らへんでもえーやんかあ。これも部隊長と隊員のコミュニケーションの一つやで？」

「……………念のため言うておくけどな。9割5分方はやての為だぞ」

「はっ？ それはどついう……………」

スパアアアアアン……………！！

「な、何や!？」

ズル……。ズル……。ガシャアアア……。。

「……………(グゴゴゴゴゴゴゴゴ!)」

(思ったより早かったな……………)

2人が目を向けた先にいたのは、右前足にフレイム・ソードを持ったホルスだった。

金属製の扉を容易く切り裂く摂氏1000度を軽く超える研ぎ澄まされた炎。

炎を研ぎ澄ますという原理は広暁には分からないが、実際に目の前にそれを具現化した武器があるので、まあ考えても無駄だろう。

「ど、どうして!？ どうしてここにホルスが来るんや!？」

理由を説明する義理は無い。

そんな暇があるならとつととバインドを解かせるか、これからのことを考えた方がよっぽど有意義だ。

スパパパパパパパパアアアーン!!

はやてが慌てている間に、ホルスの一振りにより広暁のバインドは全て切られる。

主人の安全を確認したホルスは、すぐにはやての方に向き直った。

ボウ…ボウ…ボウボウ…ボウボウボウボウ…!

「え、えくと…ホルスさん？」

あなた様の背後に浮かぶ、その炎の輪っかは一体何でしょうか？」

「『旋竜・炎王刃』^{バイ}×8つてところか。ちょっと多くないか？」

「キユイキユイ…!」

ボウ…!

1個増えた。

「（…まあ、いつか）ホルス、頼んだ」

「キユイ…!」

『旋竜・炎王刃』^{バイナイン}×9

「アッ

「!!」

「そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

両手両足に2本ずつ、首に1本炎のリングで固定されたはやては、はやてが解けないはずもないが、それよりもホルスの反応速度の方が速いのは自明の理。
故にはやては何も出来ずにいた。

「いやな、広暁。先にこの炎、解いてくれへん？」

「だ、そうだが？ ホルス」

「キユイ!!」

両前足を組んでバットのポーズを作った。まだ解く気はないということだろう。

しばらくその格好で反省しているということか。

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「こんな張り付けの格好で話しても、私のプライドが削られるだけ
や」

「分かった。そんじゃまあ、話を聞かせてもらいましょうか」

「……………なあ。この炎、解いてくれへん？」

「だ、そうだが？ ホルス」

「キユ！」

ギユツ！

「アツ

！！」

「広暁が六課に来て、もう2ヶ月以上経つやる？
元々はあるたの故郷への帰還方法が分かるまで民間協力者やってもらうつもりやったんだけど……………」

「帰還方法が中々見つからない。
これ以上働くにしてもそれ相応の資格がいる。
だから現状で一番妥当なBランク試験を受ける…………ってこと？」

無駄な会話が続くこと一刻、ようやくはやてが非を認めたので、ホルスはバインドを解いた。まだ警戒心剥き出しではやてを睨んでいるが、広暁に嗜められ、今は広暁の横に佇んでいる。

「話が早くて助かるわ。試験は今日の夕方や」

「……いきなりすぎねえか？」

「しゃーないやろ？ 急に決まったんやし、上からの命令やし」

「……分かった。試験の場所と内容は？」

「試験の場所は空間シミュレーター。せやから、今日の午後の訓練は全面的に中止や。」

試験の内容はまだ私も聞いてないから、多分その場で聞かされると思うで。

あ、広暁は午後のデスクワーク免除やからな」

「事前の対策はとりにくいつてことか……。」

でもまあ、空間シミュレーターでやるってことは、戦闘をすることは間違いないか。

それじゃあ、俺はこれで」

「空いてる人は応援に行くと思うから。頑張るんやで」

「了解つと」

ウィーン……。ガシャン。

「『俯瞰的に』か……。あなたの方がよっぽどか大人やで、広暁。ただ、あなたには経験が足りないだけや。

もしもあなたが後数年でも管理局で働いたら……。やめややめ、こんな考え。

私の勝手な願望を広暁に押し付けたらあかん。

……。私も、もっと遊んどけばよかったなあ……。……」

「……。……ってことなんだけど。スバル達の時はどうな試験だった？」

「あかし達の時か……。ティア、どんな試験だったっけ？」

「もう忘れたの？ まだ3ヶ月しか経ってないのに」

広暁・スバル・ティアナの3人は食堂にいた。

午後の訓練が中止ということは既に伝わっており、本来ならデスクワーク業務の時間。

試験のことを聞きたい広暁は、監督していたのはから許可をもらい、2人を食堂へと連れ出した。

ちなみに、広暁のデスクワークは免除である。

「あたし達の時は、各所に配置されたスフィアを撃破しながら時間内にゴールする方式でした。

ですけど、あれはツーマン専用試験ですから。

兄さんは1人で受けるでしょうし、別の試験の可能性が高いですね」

「兄貴なら大丈夫だよ！ あたしやティアより強いんだから！！」

「……確かに事実だけど、そこまではつきり言われると結構傷つくんだけど？ スバル」

ティアナがジト目でスバルを睨んでいるが、広暁は軽くスルー。

ちなみに、何故スバルが広暁のことを「兄貴」と呼んでいるかという、

ティアナ、広暁を「兄さん」と呼ぶ

だったらあたしもと乗ってくるスバル

広暁断る、しかしスバルはしつこい

相手がめんどくなくなった広暁は折れた

ということがあった為である。

ヴァイスからは「やるね〜、この色男」と言われ。

エリオからは「僕達全員兄弟ですね!!」と言われ。

いつから弟の俺が兄属性を持ったんだと考えたが、広暁はそれについて深く考えようとはしなかった。

考えても現状が変わるわけではないし、『兄』として慕われるのが結構気持ちいいから。

広暁は何か危ない属性に目覚めてしまったのかも知れない。

「ネットで一通り調べただけど、試験の内容は載ってなかったんだよな」

「試験自体は毎年変わりますが、幾つか種類があってローテーションしてたと思います。

でも、その内容は公表されていないんですよ。

あたし達も386部隊の先輩や同僚から話を聞く程度でしたし」

「いつもなら試験内容は試験日の1月以上前に受験者に発表されるんだけどね〜。

兄貴の場合は事情が事情だから、発表もなかったのかな？」

「情報を集めようにも時間がかかりそうだし……。

下手に情報収集するよりも、自分の力を確認した方がいいかな」

「その方がいいかもしれませんね。あたし達も手伝えたらいいんですけど……」

「まだデスクワークがあるんだろ？」

本音を言ったら手伝って欲しいけど、2人はまだ仕事があるし。話を聞かせてもらって、試験までの時間の過ごし方を決められただけでも十分だよ」

「受かってね、兄貴！！」

「無論、そういつつもりで試験には望む。ほんじゃまあ、2人共。ありがとな」

「Bランク試験か。兄貴はどういう試験になるんだろ？」

「基本は変わらないと思うわよ。スフィアの種類と配置、制限時間が変わるぐらいかしらね」

「そっかあ〜……でも、兄貴なら大丈夫だよな？」

「ええ、兄さんならきつと。……そういえば、スバル」

「うん？」

「あんたはどうして兄さんのことを『兄貴』って呼ぶの？」

「だって、ティアもエリオもキャラ口も皆、広暁さんのことを『兄』

として慕ってるし。

あたし1人だけ仲間外れみたいで嫌なんだもん」

「本音は？」

「年上の兄弟っていいよね！ 頼れる『兄』なんて特に！！

『兄貴』って呼んでるのもそれが理由なんだ」

（あんたも……あたしと同類だったのね……）

3年来の友人の知りたくない秘密を知ってしまったことに、ティアナは心の中で嘆息した。

「あれ？」

『どじみれました？』

「キコイ？」

空間シミュレーターは試験まで使用中止なので、広暁は六課近くの林に来ていた。

攻撃魔法でないならここでも問題はないし、術式の確認をするにしてもここが丁度いいからだ。

「いやさ。俺が試験を受けるのはいいけど、ホルスはどうするんだ？試験の内容がああ2人に聞いた通りなら、ホルスがいると一瞬で終わるぞ」

『それは……そうですね。ガジエットのAMFを簡単に破壊しますからね、ホルスは。』

その気になれば空間シミュレーターを丸ごと火の海にすることも出来ますし』

「キユイ！」

(じゃあ、試験は俺1人で受けるのか？)

一旦気づき出すと止まらない。

今まで気付かなかったこと・考えなかったことがグルグルと広暁の頭の中を巡る。

「はやてはホルスのことを何て説明したんだろ？」

俺は平行世界にあるかもしれない地球出身、ホルスは遊戯王のカードが実体化したもの。

……バカ正直に言うわけないよな？」

『私からは何とも……。部隊長のことですから、抜かりは無いと思います。』

「……そうだな。まあ、今は考えるだけ無駄か」

「キユー!」

(何でお前はそこでそんなにいい返事をするんだ、ホルス。お前の問題なのに……)

気にしたら負けだよ。

(……釈然としないけど、今は目の前のことを考えよう、うん)

ブオオオオオオン……。

広暁は足元に魔法陣を展開し、形成された魔法陣の確認をする。

展開する魔法陣は、対集団戦専用魔法『篠電霰』。
今のところ全部で参式までである対集団戦狙撃魔法。

「式式はともかく、問題は参式だな。壹式はその都度量と速さと攻撃範囲を変えればいいし」

『そうですね。』

それと、式式は探索魔法との併用が基本ですから、今回の試験では使う機会はないでしょうね。

そこまで悠長に魔法を発動までの時間があるとは思えません』

「探索魔法なくても出来るけど、捕捉が難しいからな。

見えなかったり速く移動してる奴はまだ無理だ」

魔法の特徴柄、式式は魔方陣がなければ使用は困難である。

どこにいるか分からない相手を探索魔法で捕捉し、誘導矢で狙い打

つのが式式の本質だ。

しかし、狙撃魔法に探索魔法の術式を組み込んだため、術式はそれなりに複雑である。

今の広暁に式式の術式を構築することは出来ないわけではないが、時間がかかってしまうのだ。

「問題は参式かあ。あれを使う状況ってかなり限定されるよな」

「そもそも、何故マスターは参式を考えたのですか？

制圧力なら天創塵以上ですが、時間がかかる上に準備中も攻撃される危険がありますよね？」

「うーん……かつこいいから」

「……はい？」

「かつこいいから。正しく『篠^{しの}つく電霰』って技じゃん、参式は」

「……時たまマスターは私の予想の斜め上をいくことを言いますね」

「人を『俺、頭堅いから』人間みたいに言わないでくれる？」

「マスターは考えが固いのであって、思考は柔らかいんですね。

時たま顔とイメージに合わないことを言いますが」

「悪口を言わない人間なんていないし、顔と性格が一致するなんて妄想は信じてないぞ、俺は」

軽口を叩きながらも、広暁は魔法発動の確認を、サジタリウスは魔法陣の確認をしている。

その様子は正にお互いを信頼しきったパートナー！

ツンー！！

「痛いって」

「キユイー！！」

ホルスがやきもちを焼くのも仕方ないと言える。

そんな感じで魔法陣の確認を行い、ユーノに送ってもらった本に載っていた魔法を実践していく広暁。

幾つかの新魔法を試したところで、はやてからの通信が届いた。

ピュン！

『ひるる〜あ〜き〜。そろそろ空間シミュレーターの方に向かってくれへん？』

「ん？ もう始まる？」

『そういつにっっちゃ。き〜つけてな〜』

「（……………何か裏がありそうな気がする）OK」

プツン……………。

「行きますか」

『了解です』

「キユイ！」

第37話「本日の天気は晴れ時々大荒れ」（後書き）

第37話、いかがだったでしょうか？

民間協力者とはいえ、それなりの資格も必要はず。

そう考え、広暁には試験を受けてもらうことにしました。

試験内容は次話で分かりますので、それまでお待ち下さい。

スバルも広暁の妹的ポジションになりました、ちょっと後悔している。

スバルだけ普通の呼び方では違和感があるような気がして、気がついたらこのような話になっていました。

あくまで呼び方の話ですから、他の3人と大した違いはないということ念頭に入れて下さると助かります。

……内に秘めたる思いはしりませんがね？

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしております。

第38話「いいね！ いい試験だよ！」（前書き）

第38話です。

題名の通り、今回から広暁のBランク昇進試験が始まります。何回目かの戦闘シーンですが、よろしくお願いします。

では。第38話………が始まります。

第38話「いいね！ いい試験だよ！」

〈空間シミュレーター〉

ワーワー！！ キャーキャー！！

(……………どうしてこうなった)

既にバリアジャケットを展開し、サジタリウスを弓の形態に展開した広暁。

戦闘の準備は万端、しかしその心は風雨が吹きすさんでいた。

確かに空いている六課の人間は応援に来ると聞いていたが、どう考えてもおかしい。

人数的にもおかしいが、その面子的にもだ。^{メンツ}

陸士隊や本局の局員だけでなく、中には聖王協会の騎士すら見える。

「俺は見世物か…………？」

『次元漂流者・類い稀な魔力制御能力・ホルスの黒炎竜。目立つなという方が無理ですね』

「キュイ？」

「…………カリムがさっきからこっちに手を振ってるんだけど」

『気づいてらしたのですか？ 二重の意味で』

「あの中じゃカリムの服装は浮くし、そういう対象として見られることは何となく分かってた。

鈍感どころか敏感だからなあ…俺は。気づきたくなくても気づいちゃうし」

「キユイ！」

ポン！

ホルスがやけにいい笑顔で広暁の肩を叩いたが、広暁はその意味を深く考えないことにした。

それにしてもこの竜、ノリノリである。

ちなみに、試験が始まるまであと15分。

試験会場である空間シミュレーターにはホルスと来るようにはやてから連絡があつたので、恐らくはホルスと一緒に試験を受けるものと思われる。

しかし、ホルスと共に試験を受けるのならば、色々と変わることは必然。

ホルスの巨大化が禁止されたり、スフィアの数が増えたり、ガジェットが異様に強くなったり。

考えられることは考えシミュレーションをした広暁だが、それでも一抹の不安は残る。

というか、そもそも……

「どこにもスフィアやガジェットが見えないよな。まだ試験内容も聞かされてないし。

始まるまでは出てこないのか？」

『もしくは、そもそも試験にそれらを使わないか……ですね』

「あと考えられるのは、試験官の魔導師と闘って試験官に認められ
たらってやつか、それとも……はやてはもう知ってるけど、俺に伝
える気がないか。」

対策取られるのが嫌だったのが、そういう場合は理由になるな」

一通りのシミュレーションはしたし、もう考えても無駄だと判断し
た広暁は考えるのをやめた。

あとは時が来るのを待つだけ、そう考えて。

「一方こちらは」

「何をしてるのかな？」

「瓦礫に座って腕を組んで……精神統一？」

「一流のスポーツ選手は最高のパフォーマンスをするために、自分

の精神と肉体の状態を最高の状態にもつてくるためのプリシヨット・ルーティンがあるって聞いたことがある。

今広暁がやってるあれは、その精神の方やろうな。

精神統一をすることで、自分の心の平静を保とうとしてるのかもしれん」

「ですす〜」

「だけどあいつの心があれ以上平静になるって……」

「少なくとも我々の中では一番だろう。

もつとも、あれ以上に心を平静に保てる奴などまだまだ武装隊にはいるがな」

「それでも、今の広暁君が落ち着いているのはよく分かるわ。

初めての試験なのに、本当にすごいわねえ」

「あれが本来のあいつの姿なのだろうな。冷静沈着を絵に描いたよ
うな奴だ」

「兄貴なら……絶対に大丈夫だよな？」

「絶対とは言い切れないわ。そもそも、兄さんなら「絶対」なんて
断言はしないわよ」

「お兄さんなら「ベストを尽くす」とか「全力でいく」ですね」

「それがお兄ちゃんですから。」中途半端な勝利宣言は心を曇らせる
「って言いそうですね」

今回は聞いたのがたまたまスバルとティアナ1セットだけやからよかつたけど、スバルかティアナ1人だけだったら確実にゲロってるで？」

つまるところ、今回の試験方法は広暁が対策をとりやすく、なおかつ、それをやられるとまずい試験であるということである。

恐らく、対策をバリバリにとってきたのでは広暁の力を測れないとはやてはふんだのдарう。

「あ、あたしは！ そんなこと…ないと……思います……」

「それだけ沈んだ声で言っても説得力がないわよ、スバル…」

あたしも隠し通せる自信はありませんけど、と付け足すティアナ。広暁の知らないところで、広暁の評価はどんどん上がって？ いま
す。

く一方こちらは？」

「広暁君、気づいてくれたかしら？」

「彼なら気づいていると思うよ。何しろ姉さん、もう15分位手を振ってたからね」

なのは達とは離れたところにいる、聖王教会教会騎士団御一行。

その集団のトップである教会騎士カリムと、義弟にして本局査察官であるヴェロッサはのんびりと話していた。

「でもさ、姉さん。彼を好きなのはともかくとして、アプローチはしたの？」

「それが……全くできないのよねえ。私の立場柄、広暁君に会うことは簡単には出来ないから」

「姉さんの権限を使えば簡単じゃないか」

「そんなことをしたら『強引な女』って思われるかもしれないじゃない。

広暁君にはもつと奥ゆかしいところを見せないと！」

（まったく……変なところで奥手だねえ、我が姉は）

広暁に気があるカリム、それを見てちよっかいを出して楽しむヴェロッサ。

女性の騎士は呆れ顔であるが、男性の騎士はどこことなく怒り顔である。

仮に一段階進んだとしても、まだまだ波乱はありそうだ。

「シャツハの調子はどうかしら？」

「万全だよ。今はもう、待ちきれなくてウズウズしてるんじゃないかな」

「まあまあ落ち着いて」

試験開始まで、残すところあと5分。

各々それぞれの開始位置に立ち、お互いの姿を確認。

ホルスは審判団の所へと行っている。

少し心配した広暁だが、はやたとヴォルケンリッターもいるのでまあ大丈夫だろうと考え、再び目の前の教会騎士を見て軽く会話をする。

「つまり、模擬戦をしてシスター・シャツハに認められればいいんですね？」

「要約するとそうなります。あ、シャツハで構いませんよ？」

「……せめてシャツハさんにしていただけませんか？」

「駄目です。それと、出来れば敬語も止めていただきたいですね」

「（……どうしてこうなった）分かったよ……シャツハ」

試験の内容は簡単である。

シャツハと1対1の模擬戦を行い、その内容を見たシャツハが合否を判断するのだ。

更に、この試験には追加ボーナスのようなものがある。

観客…もとい管理局員+教会騎士の一定数が広暁をBランク以上だと認めれば、例えシャツハの判断が不合格でも合格することが出来るのだ。

なお、試験時間は1時間。それなりに長期戦である。

だったら何故ホルスと一緒に来いと言われたのか謎であるが、広暁は考えないことにした。

大方の予想はつくし、それ以上に、考えても答えが纏まりそうになりから。

期待と予測、その2つが必ずしも重なるとは限らないのだ。

ちなみにシャツハには魔力リミッターがかけられており、今は2ランクダウンでAランク相当にまで力を下げられている。

広暁を相手にするには、それで十分…というより、Bランク昇進試験にAAAランクの魔導師が実力そのまま出るわけにはいかないのだろう。

「ただしこのボーナスは、あくまで私の判断が『曖昧』だった時に限ります。

明らかに不合格であると私が判断した場合は、例え一定数いっていても不合格ですから」

「了解。それはそうと、俺が敬語じゃなくていいならシャツ八も敬語じゃなくていいんじゃない？」

「私はこちらの方が話しやすく……申し訳ありません」

「いや、無理なら別にいいよ。話し方を強制するみたいな言い方になつてごめん」

「構いませんよ（なるほど、ちゃんと相手のフォローも出来るようですね……）」

試験方法がこのようになったのは、単純に広暁の境遇にある。

次元漂流者に正規のBランク昇進試験の内容をそのまま、というわけにはいかないという上層部の判断らしい。

広暁が聞いたら「古い習慣を変えれんだけじゃん」と言いそうだが、ともかくにもそのようなことがあり、広暁の試験内容は試験官との模擬戦形式になった。

ここで問題になってくるのが試験官だ。

いくら急激に力をつけたとはいえ、広暁は世間一般の魔導師から見たらまだまだひよっ子扱い。

そんな魔導師相手に本局も地上本部も人員を割くわけにはいかなかった。

というより、割くことは出来るが、そこは大きな組織。

色々しごひと柵しかいやら慣例じかんやらがあるらしく、なかなか試験官が決まらなかった。

そこに出てきたのが、聖王教会教会騎士にして管理局少将の肩書きを持つカリム。

彼女の鶴の一声で試験官はシャツハに決まり、現在に至るといっわけだ。

(なんか……カリムの「計画通り!」って声が聞こえてきそうだな……)

『マスター、気にしたら負けです』

「俺って分かりやすいか?」

『いえ、マスターの考えていることを分かる人は少ないと思いますよ?』

私はマスターと四六時中一緒にいるのですから、きつと慣れたのでしよう。

マスターの考えていることは大方予測出来るようになりました』

「何それ怖い」

『気にしたら負けです』

「いい目してんねサボテンね」

『へっへ、3歳か』

「何故そのネタを知ってる」

『気にしたら負けです』

「(……普段こいつが何してんのか無性に気になるな……)」

『ネットの海は深いですよね』

「（……………気にしないようにしよう）……………」

（あれ？ 私は無視ですか……………？）

く弓対剣く

ガキン！！

試合の始まりは唐突だった。

試合開始のアラームが鳴った瞬間、シャツハがソニックムーブで加速。

両手に持ったアームドデバイス『ヴィンデルシャフト』のうち右手に持っている方を、広暁に向かって思い切り叩きつける。

普段の広暁ならこれを避けるが、ここはあえて『受ける』を選択。

シャツハの実力を計るためであり、今からの闘いの参考にするため。サジタリウスの上でシャツハのヴィンデルシャフトの一撃を受ける。

(重い……！！)

ザン……！！

シュイン！ シュイン！

ドガアアアーン！！

ザン！ ザン！

「速い……シグナム以上、フェイト以下ってところか？」

単純な速さなら同じぐらい、魔法をプラスした速さでは向こうのが

上かな。

今のが最速ならまだ対処できるんだけど……。

Aランクでこの速さなら、AAAランクだとどれだけ速いんだろ…

…？」

「私のソニックムーブに焦ることなく反応した……！？」

中・遠距離型の中でも異質というわけですか…なるほど、思ったより楽しめそうですね」

このままでは力押しされると感じた広暁は、シャツハの勢いを利用してそのまま後方へと飛翔。

瞬時に矢を2本生成し、シャツハに向けて放った。

広暁が後方に飛んだことよって体勢が崩れたシャツハなら、当たらないまでも爆発の範囲から逃げられないはず。

そう考えた広暁だったが、シャツハは再びソニックムーブを使うことによりそのまま前方へと加速、広暁の後ろ下へと移動することにより矢の爆発の圏外へと逃げた。

（武器はトンファアっぱい剣、スピードを活かした近接戦闘型。

矢を放つても簡単には当たらんし、大技を使うにしても時間を作るのは難しそうだし……。

誘導矢主体でいくか……この間の人間昆虫と同じ戦い方になるけど、あれよりは確実に強いな）

（私のスピードについてくる反応速度、瞬時に矢を生成して寸分違わず私を狙う狙撃能力。

それだけでなく、AAAランクの大技『天創塵』を持っている。

矢を避けるのは容易いですが、固いバインドをかけられて天創塵をくらったら終わりですね……）

2人は思考する、どのようにして相手を倒すか。

広暁がシャツハを倒すに一番堅実な方法は、バインドをかけて天創塵を放つこと。

しかしシャツハのスピードでは普通の矢は避けられる可能性が高いので、魔力消費が若干多い誘導矢主体で攻めることになる。

最初から天創塵を放つという手もあるが、シャツハがその隙を逃すとは考えにくい。

また、例えシールド等の防御魔法を展開して耐えたとしても、近くにいられては天創塵を放てない。

あの技をシャツハが近くににいる時に放てば、広暁まで爆発に巻き込まれてしまう。

一方、シャツハが広暁を倒す方法は至極単純。

中・遠距離技を持たないシャツハにとつて、広暁を倒す手段は『近づいて叩く』、これしかない。

しかし、それには広暁の戦闘スタイルがネックになる。

広暁は動物狙撃型、高速で移動しながらも的確な中・遠距離攻撃が出来るため、近づくのは容易ではない。

仮に近づけたとしても、即座に距離をとるだけの瞬発力が広暁にあることは分かっているため、近づけたとしても油断はできない。

（勝てる可能性は低いだろうし、どうやってこの人に喰らいつくかなだ。

あんまり手札を晒すと行動を読まれるだろうし、戦闘の経験値は圧倒的に向こうのが上。

様子見ってわけにもいかないし、アドを活かして闘うか……時間は稼いだほうがいいしな）

（空間シミュレーターの外に出られないとはいえ、飛行能力をもつ彼の方が圧倒的に行動範囲は広い。

負ける気はしませんが、正直今まで闘ってきた中でもかなり厄介な部類の相手ですね……。面白い……思わず当初の目的を忘れそうですよ……！！）

瞬間、広暁の足元に魔方陣が展開、矢を番える動作をする。シヤツハは魔法矢が飛んでくると考え移動を開始しようとするが…
…矢が飛んで来ることはなかった。

『朧月』

ウイ

ン……！！

「っ！？」

グラッ…！

『朧月』……弓状のデバイスならではの魔法であり、広暁がユーノから無限書庫の閲覧許可をもらうことで見つけた本に載っていた魔法。

弦を弾く音を起点とし、音が届く範囲にいる全ての生物に対して不

快な音を発する音撃を放つ魔法。

加えて高周波の音を出すことで生物の三半規管を揺らし、平衡感覚すら失わせる魔法だ。

広暁とシャツハの距離は約10m、十分に音が届く距離。

たまらず吐き気を覚えるシャツハだが、うかうかしてはいられない。焦点がハッキリしない眼を開けたまま魔力で両足を強化、一気に広暁との距離を取る。

(この状態で闘うのはまずい、せめて今は距離を……!!)

シュイン……!!

広暁が追いつけないであろう速度で逃げるシャツハ、広暁はそれを追うことはしない。

もう既にシャツハは広暁の視界内にはおらず、攻撃のしようがないのだ。

しかし……シャツハはこの時考えるべきだった。

どうして広暁が矢を一本も放たなかったのかを。

既に視界内にいないとはいえ、それは『頭脳がそれを認識したら』の話。

広暁の反射神経なら、シャツハが逃げようとした瞬間にも矢を射ることが出来たのかもしれない。

仮に反応出来なかったとしても、朧月を使った後すぐに矢を射るといふ攻撃パターンもあったはず。

それでも広暁が矢を放たなかった……その理由を考えるべきだった。朧月を発動し終えてなお、未だに広暁の足元に魔方陣が広がっている意味を。

『準備完了まで、残り99%』

第38話「いいね！ いい試験だよ！」（後書き）

第38話、いかがだったでしょうか？

少しネタ的な要素を入れましたが、分かる人はいるのでしょうか？

そしてもう一つ、またまたオリジナル魔法です。

近々広暁が使用した魔法のリストをあげる予定ですので、よろしく
お願いします。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第39話「民間協力者だろ…!？」 空戦魔導師だろ！」（前書き）

第39話です。

まだまだ戦闘シーンが続きます。

そして相変わらずの広暁クオリティ。

こんな戦闘シーン、他の作者様の戦闘シーンでも無いような気がします。

前置きが長くなってしまいましたね、ここらへんにしておきましょう。

では。第39話、始まります。

第39話「民間協力者だろ…!? 空戦魔導師だろ！」

（加速と停滞）

（勝ってる手札は射程と行動可能範囲。だけど……）

シューシューシュー……！！

ザン……！！

ドガアアアーン！！

ガラガラガラガラ……！！

（全然意味ねえ

！！）

闘いは膠着していた。

広暁が遠距離から誘導矢を放ち、シャツハがそれを避ける。

隙を見てシャツハが広暁に近づき、迎撃しながら距離をとる。

このような攻防が、もう15分以上続いていた。

もつとも、『攻撃を当てる』という意味では広暁のほうが分が悪い。誘導矢は確かにシャツハを追うが、それは遮蔽物が何もない空間でこそ真価を発揮する。

荒廃した都心を想定したこのフィールドでは、誘導矢の通り道に幾らでも遮蔽物があるので、それを利用して防がれてしまう。

また、朧月を使おうにも、使おうとすればシャツハは音が届く範囲から回避してしまうのだ。

（よっぽどかシグナムの方が闘いやすいぞ、これじゃあ。あの人基本飛んでるし。）

対陸戦魔導師がこんなにやり辛いなんてなあ……単純なアド差はあんまり意味ないのか？

……いや、このフィールドだからこそか。思い込みは駄目だ、臨機応変に対応しないと）

（攻撃を防ぐのは容易いですが……やはり近づけないのがネックですね。）

私のスピードに簡単に反応しますし、何より近づこうものなら矢の弾幕が飛んでくる。

威力は大したことないですが、あの数と追尾機能は厄介です。

このままじゃ私の方が先にスタミナが切れますね……）

シャツハも、『攻撃が届かない』という意味では分が悪い。

誘導矢を避けているうちに段々と広暁との距離は離れていくし、仮に近づこうものなら矢の弾幕が飛んでくる。

幸いにして直接被弾してはいないが、数本は爆発に巻き込まれてダメージをくらっている。

元がAAAランクとはいえ、やはり空戦魔導師相手では分が悪いのだろう。

（『あの技』をまだ使うわけにはいかない。

彼の能力と性格から考えて、一度見たら對抗策を考えるはず。

何より、彼の反応速度から考えて確実に仕留め切れるとは考えにくい。

確実に仕留められる状況で使わないと意味がない。

本当に……頭脳派と闘うのは骨が折れますね……！！）

頭の中では愚痴りながらも、その顔は非常にいい笑顔のシャツハ。

感情の赴くまま、本能の従うままに闘うシグナムとの模擬戦とは違う。

頭脳をフル回転し、策を張り巡らせ、相手の一挙手一投足から情報を得る頭脳戦。

久方振りとも言える頭脳戦に、シャツハは興奮を隠せずにした。

（なんか……凄いいい笑顔だ……）

その笑顔を向けられた広暁はたまったものではないが。

「難しいよね」

「全然進まないね？」

「戦闘スタイルが真逆だから仕方ないわよ。

魔導師ランクは圧倒的にシスター・シャツハが上だけど、彼女は陸戦魔導師。

空を飛べる兄さんとは行動可能範囲に差がありすぎるわ」

「なんやシグナム、広暁を応援せえへんのか？」

「客観的に考えた結果です。」

どんなに急激に力を付けたとしても、広暁はまだまだひよっ子の域を抜け出せていない。

体に刻まれた戦闘の経験値は、圧倒的にシスター・シャツハの方が上なのですから。

どんなに反射神経がよくても、瞬発力に優れていても、洞察力に優れていても、魔力運用能力に天賦の才能があっても。

あいつには圧倒的に経験というものが足りないのです。」

「ボロクソ言うなあ……でもまあ、シグナムの言う通りかもな。」

空を飛べるっていう圧倒的なアドバンテージを含めたとしても、ただそれだけや。

長い年月をかけて磨いたわけでもない、必要に迫られて身に付けた能力。

生まれ持った洞察力と身体能力を入れたとしても難しいかもな。」

必要に迫られて身に付けた力。確かにその通りだが……果たしてそ

れだけが広暁の力だろうか？

いや、違う。広暁の力の本質は、そのような目に見えるものではない。

その本質は……目に見えない才能。

生まれつきの才能であり、学業・スポーツ・趣味のカードゲームの各分野において、平等に好成績を残した広暁が持つ才能。

「もつとも……広暁の力の本質はそこにはあらへんけどな。」

「そうです。それに何より……。」

「勝てないだけで負けるわけではない」「

「才気煥発」

（準備は上々……後は貯まるのを待つだけか。
発動できれば8割方俺の勝ちは決まるけど……そう上手くいくはず
ないよなあ。

スピードとパワーは俺なんかよりはずっと上だけど、それじゃあ精々AAAランク止まり。

シャツハをAAAランクに押し上げた、何か切り札…いや、十八番敵な技が必ずあるはず。

現段階で不利な状況のシャツハがそれを使わないってことは……その技が連発出来ないかそれとも…一度使ったら対抗策を簡単に立てれるか。

まだ断言は出来んけど、シャツハはほぼ確実に戦闘特化型。シグナムやヴィータ、フェイトやなのはと同じタイプだ。

……あれ？ 隊長・副隊長陣は全員戦闘特化型？ それでいいのか？
……って危ない危ない、また思考が別方向に行くところだった)

マルチタスクを使って思考を終えた広暁は、シャツハを探すために探索魔法を発動する。

現在広暁はビルの屋上に足をつけており、空は飛んでいない。空を飛べるのは確かに便利だが、当然飛ぶのにも魔力を使う。ただでさえ持久戦であるのに、余計な魔力は使いたくない。

例えシャツハがどこかビルから飛んで来ても、屋上を突き破って出て来ても。

広暁はそれを躲せる自身があったので、今は空を飛んでいない。

(探索範囲、10m…20m…40m…80m…)

段々と探索範囲を広げながら、広暁はマルチタスクを使って先程の思考を再開する。

シスター・シャツハが持つ十八番の技、それは一体何であろうか？

(単純に考えるなら、スピードやパワーをもっと上げる魔法。

後は……何だろ？ いかん、全然アイデアが浮かばん。

ゲームなら一っただけ遠距離砲撃用の技を持ってたりするんだけど…

…それじゃあシグナムじゃん)

さすがにトンファーから砲撃は無いだろうと考え、広暁は思考を再開する。

しかし…何か引つかかる。

(確かにシャツハは近接戦闘型だけど…何であんなにたくさん攻撃をしかけてきたんだ?)

俺がシャツハのスピードに反応出来るのは分かってるはずだし、もつと隙をついたり搦手を使ってもいいはず。

正面から正々堂々ってタイプ…でもないよな、あれは戦闘を楽しむ人の顔だ。

攻撃がそうなりがちなだけで、戦闘に卑怯なんて言葉は存在しないって言いそうだし。

俺に何か…意識を植え付けたい? 近接戦闘しか出来ないイメージとか?)

仮に近接戦闘しか出来ないイメージを植えつけたとしても、裏なんて簡単に読める。

広暁が予想した通り、想定外のスピードで攻撃を仕掛けるか、遠距離攻撃を使うか。

ならば、彼女が考えているのは…自分の考えの上に行く何か。

「いいねえ…予想通りになるほどつまらんことはないからな。

俺の考えの上に行く策略…一体どんな手でくるのか…」

自分にはない圧倒的な戦闘経験を持つ、シャツハが考える策略。

それにどう対応するか…広暁の心は知らず知らずのうちに高揚していた。

(全然網にかからん…俺の探索魔法に穴が？
それか…対探索魔法用の魔法でも使って網にかからんようにしてる
のか？

とりあえず探索魔法は終了して、空に飛んでみるか……)

ズオオオン……。

「っ!？」

クルツ!!

「ハアアアアア!!」

ズゴオオオオオン……!!

< シャツハ side >

さうて……どうでしょうか？

近づけたのはいいですけど、確実に彼を仕留めるには頭を……しかし
も一撃で昏睡出来るような一撃を叩き込まないといけない。

あまり近くに出てはそれだけの威力を出せるだけの勢いがつきませ
んし……かといってあまり離れすぎても彼の反射神経からして確実
に反応するでしょう。

賭けに出るのは嫌いじゃないですが、彼相手ではそれも分が悪い。
仕方ありません……多少不安は残りますが、近づいてやる他ないで

すね。

遠くから仕掛けて反応されるよりはマシです。

「いいねえ……予想通りになるほどつまらんことはないからな。俺の考えの上に行く策略……一体どんな手でくるのか……」

なるほど……彼は本当に頭脳戦を楽しむタイプですね。元の世界にいた頃はスポーツで全国クラスの腕を持ち、それなりの難関大学にも通っていた。

趣味のカードゲームとはいえ、全国クラスの腕前を持っている。これだけ多彩な分野で好成績を収められたのも、その好戦的な性格故というわけですか（どれか一つに絞ればもっと上も目指せたでしょうに……）。

……好戦的という誤りがありますね、彼は単純に、闘って勝つのが好きなのでしょう。

それも肉弾戦闘ではなく、頭を使って闘い、勝つのが。ですが、今はその性格が命取りですよ。

この隙…私が逃すとお思いですか？

ズオオオン……。

「っ!?!?」

クルッ!!

「ハアアアアア!!」

ズゴオオオオオン……!!

〈油断大敵〉

それは、正に一瞬だった。

背後に何かを感じた広暁が振り向いたら、もう既にヴィンデルシャフトの打撃をくらって吹き飛ばされていた。

隣のビルまで吹き飛ばされてビルの壁を数枚貫いてようやく止まった広暁は、何とか壁にもたれかかりながら立ち上がる。

「っ！？　これがバリアジェットの上からの一撃かよ……！？」

バリアジャケットは、なにも服の部分だけバリアが張られているわけではない。

魔導師の体全体を覆うように防御膜が張られており、それは首から上も例外ではない。

広暁の場合、更に額を守るようにバンダナが巻かれているのだが、シャツハの打撃は見事にそれを避けて広暁に当たった。

意識が飛ぶとまではいかないが、それは余りに強すぎる一撃。

シグナムとの近接戦闘訓練で慣れはしたもののやはり痛い、そして気持ち悪い。

頭の中を思いつきりシェイクされたような気分だ。

『申し訳ありません、マスター。咄嗟にバリアを張りましたが、強度が足りませんでした』

「意識があるだけ十分だ……準備はどうなってる？」

『残り約10%です』

「OK、後は俺がシャツハの攻撃から逃げ続けるだけだ」

軋む体と揺れる脳にフィジカルヒールをかけて回復させながら、広暁は結論を出す。

マルチタスクのおかげで、シャツハの力の大体の目星は付いている。後は、その力をくらわないようにするだけ。

「多分だけど、シャツハは空間跳躍系……もしくは物質透過系の魔法に精通してる。

テレポートとか通り抜けとか、出来る可能性が高い。

だから今も、俺がほとんど反応出来ない位置にいきなり出てこれたんだと思う」

『探索魔法にかからなかったのも、ビルの中……コンクリートと同化していたか、空間転移魔法を使ったからだ？』

「あの攻撃の角度からして、屋上のコンクリートをすり抜けた可能性のほうが高いけど。

これからはもっと上位の探索魔法を使えるようにならんなあ……またシャマルに教わるか」

そこまで行って広暁は、シャツハがいるであろうビルの方を見る。しかし案の定と言うべきか、そこにシャツハはいなかった。

既に退去し、こちらの隙をうかがっているか。
もしくは、またレポートなり通り抜けなりをして広暁に不意打ちをするか。

「頭いてえし、気持ち悪いし……今飛んだら吐きそうだな……」

『しかし、早くここから逃げないとまた不意打ちの可能性が……マスター、まさか!?!』

「その方が確実だろ」

『しかしそれではマスターの体が……!!』

広暁の言葉を聞いたサジタリウスは、必死になって広暁を止めようとする。

広暁が今からするであろう行動、それを止めるために。

「だけど、このままじゃほぼ確実に俺の方が先にばてる。
シャツハはフラフラしながら逃げる俺をあと一回殴るだけでいいんだし。」

だったらこのままここにいて、向こうが攻撃してくるのを待ってるほうが効率がいい。

いや…念には念をだ、屋上に行くぞ」

『……私は急いで準備を終わらせます。それまでばてないで下さいよ?』

「善処する……これが本当に戦場なら一目散に逃げるのになあ……。
いや、そもそも戦闘すらしないか…会った瞬間逃げるな」

『あいにくとこれは試験です。最後まできっちり闘って下さい』

「きつい言葉、ありがとうございます」

『礼には及びません』

仮に人間だったならとてつもなく気持ちの悪い笑顔を浮かばせながら言ったであろうサジタリウス。
広暁もサジタリウスを持つ左手に何故か力が思いつ切りこもるが今は気にしない。

(さて……あと一撃頭にくらわせれば終わりですが、どうしましょっ?)

一方シャツハは、既に広暁がいるビルに侵入していた。
それも普通にはない、ビルを構成するコンクリート壁の中を泳ぐように移動して、だ。

(仮に私の能力がばれたとしても、もう問題ではありません。)

こうしてコンクリートの中に潜っていれば、彼が使える探索魔法では私は発見できない。

もし私の能力が分かかって逃げるにしても、あれだけ強力な一撃をくらわせたのだから立っているので精一杯のはず。

仮に反撃の方法があるとするとするなら……私に狙われるのを覚悟でビルの外に逃げるか、私が攻撃した瞬間にカウンターを合わせるか。もしくは……天創塵でビルごと破壊するか。

いずれの手段にせよ私の方に圧倒的に分があるわけですから、ここは確実にいきましよう)

ビルの壁の中を泳ぎながら、丁寧に各階を探していく。

一通り探しても見つけれないので、恐らく広暁は屋上にいるのだろう。

そう考えたシャツハは屋上の床から顔だけを出し、広暁を探す。

「……………」

(あれは……臙月の構え?)

シャツハが屋上で見たのは、臙月の構え……弦を引いた状態で屋上に佇む広暁の姿だった。

先程の一撃が効いているのか、体が時たま不規則に揺れている。立っているだけで精一杯という感じだ。

(私が先程と同様の手段で攻撃してくると踏んで、の構えでしょう

か。

しかし、それにしておかしいですね……)

そう、この方法は広暁が满身創痕の現状では意味がない。

確かに朧月は有効だが、ただバリアを張ったり攻撃を避けるよりは
僅かに時間がかかる。

ましてや今の広暁は、立っているのがやっとの状態。

一撃昏睡を狙う必要がないので、先程より近づいて攻撃しても何の
問題もない。

(一体何を考えて…いえ、これ以上考えても意味がありませんね。

やはり私には、頭脳戦は不向きのようなのです。

近づいて叩く、ただそれだけ……)

そこまで考えて、シャツハは考えるのを止めた。

あとは、たった一撃、至近距離から広暁の頭に一撃仕込めばいいだ
けの話なのだから。

そしてシャツハは進んでいく、広暁の近くへと。

段々と距離が近づき、広暁までの距離は残すところ約5m。

(いきます……!!)

ズオオオン……。

「ハアアアアア！」

ズゴオオオオオン……！！

第39話「民間協力者だろ…!? 空戦魔導師だろ!」(後書き)

第39話、いかがだったでしょうか？

広暁君：油断してしまいましたね。

自分が決めた目的の為に最良の方法をとる広暁ですが、同時に上手いきすぎることに対して多少の不満を感じることがあります。まだまだ甘いですね、彼も。

では。感想・意見・訂正 e t c、お待ちしております。

第40話「篠電殿・参式」 (前書き)

第40話です。

タイトルの通り、広暁の新技のお披露目です。

では。第40話、始まります。

第40話「篠電撃・参式」

く篠つく電撃く

ズオオオン……。

「ハアアアアア……！」

ズゴオオオオオン……！！

「っ！？ これは……！！」

ジャキイイイイイン……！！

確かにシャツハは広暁を攻撃した……しかし。攻撃をくらったはずの広暁はまるで実体がなかったかのように消えてしまったのだ。

そして今、彼女の体を縛っているのは……

『ディレイドバインド』

指定した空間に侵入した者に対して発動する設置型捕縛魔法『ディレイドバインド』。

それが彼女の体を縛っていた。

「ふう……引つかかったか」

「くっ!？」

シャツハが振り返る。

その視線の先にいたのは、屋上へと続く階段がある小さな建物、その上に建てられている給水塔の上に座っている広暁だった。

その眼は正に、畏にかかった獲物を見る狩人の眼。

「……屋上は何もまっ平らじゃない。

屋上へと続く階段はほぼ確実にこうゆう建物があつて、雨風を凌げるようになってる。

その上に給水塔があるのも常識かな」

「しかしこの程度のバインド、簡単に解いて……!!」

そう言つてシャツハは力任せにバインドを解こうとする。

満身創痍の状態の広暁がかけたバインドなら簡単に破壊できる、そう考えて。

しかし……その考えは甘かった。

「……………封^{ふう}」

シューイイイイイン……………！！

ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！ ヒュン！

シューイイイイイン……………！！

たった一言。

たった一言広暁が言葉を放った瞬間、シャツハの体は拘束されていた。

それはバインドとは違う。

シャツハを囲うように出現した、それは三角錐の結界魔法。突然のことにシャツハは戸惑うが、そこは歴戦の魔導師。

冷静にバインドと結界魔法の術式を解析しようとしながら、破壊する手段を探る。

（そんな…魔法が使えない……………！？）

だが、シャツハは破壊出来ない。

力任せに破壊できるバインドはともかく、この結界魔法は破壊できない。何故なら……………

『封印結界：ETP（エクスクルージョン・トライアングラー・ピラミッド）』

「ETP…完全に魔力素を排除した封印結界。魔力結合を阻害するAMFとは違う、魔力素が内に存在しない空間に相手を閉じ込める封印結界だ」

いつもの広暁ならこんな説明はしない。

シャツハがETPにかかった瞬間、即座に次の動作に転じていただろう。

ならば、何故態々こんな負けフラグのようなことをするのか？

それを説明するには、この試験の合否方法を思い出してほしい。

『シャツハが合格と認めずとも、観客の一定数が認めれば合格となる』

つまり…広暁は見せつけているのだ、『自分はこんな結界を使える』ということ。

ETPを説明することで、自分がこんなに難しい結界を使えるということを見せつけているのだ。

もっとも、これはあくまで『合格』という2文字を勝ち取るために行なっている手段であり、一切の感情は無視して行なっている。

『戦闘に下らんパフォーマンスは不要』と言っても全く違和感が無い広暁にとって、このパフォーマンスは気持ち悪い行為以外のなに

ものでもない。

「ETP……噂に聞いたことはありますが、まさか私がこれにかかるとは……。」

しかしこの魔法は、下手したらSSランクの魔法。どうしてもあなたが使えるのですか？」

当然、普段の広暁なら、これにも返答することはないだろう。

しかし、『合格』という2文字を勝ち取る可能性を上げるため。

そのために広暁はシャツハに懇切丁寧に説明する。

「それは『結界が大きくて発動に時間がかからなくて遠距離からでも発動できる場合』だ。

今使ってるやつはシャツハ一人分の大きさしかないし、発動にも20分ぐらいかかってるし、発動するには俺がシャツハと直接接触する必要があった。

だから俺みたいな新人で魔力量が少ない魔導師にも発動できた、それだけだ」

「発動に20分……私と直接接触……まさか!？」

覚えているだろうか？

広暁は一度……いや、正確には二度だが、ここでは一度ということにして。

広暁はシャツハと一度だけ接触している。

それは……戦闘開始直後、シャツハの攻撃を受けた瞬間。

ヴィンデルシャフトの攻撃をサジタリウスで受け止めた時、この時に一度だけ接触しているのだ。

「……つまり私は、ずっとあなたの掌の上で踊らされていた、とい

うわけですか。

私が戦闘開始直後すぐに攻撃するような性格と知った上でわざと攻撃を受け、ETPの設置場所を決め。

この結界の準備が終わるまで適度に反撃をしながら逃げ続けて。

私の攻撃を態わざと受けることで私の油断を誘い。

あなたが作った幻影を倒したと思った瞬間、バインドをかけられ。

そして私はETPをかけられたと」

「御明察…とりたいところだけど、当たってるのは6割ぐらいかな。

最初からこうする目的ではあったけど、攻撃をくらったのは俺の不注意だし、幻術魔法を使ったのはその場の思いつきだ。

何も目的達成の手段まで俺は細かく決めないよ？ ある程度考えはするけど。

戦闘に細かい手順を決めてたら視野が狭くなって簡単に不意を突かれそうだし。

おかげでもう魔力が底をつきそう…魔力量AA+の人間がここまでやるもんじゃないな」

話しながらも、広暁はシャツハへと近づいていく。

その歩みはどこかぎこちなく、見ていて危なっかしい。

シャツハの強烈な一撃と、もうすぐ魔力が底をつくという兆しなのだろう。

「最後に説明しとく」

「……何をですか」

「俺が朧月を使った後、俺の足元にはまだ魔法陣が残ってた…シャツハは見えてないだろうけど。」

それがどういう意味か……分かる？」

「どういう意味って……まさか、2つの魔法を同時に!？」

「正解。正確に言うと、あれは朧月の魔法陣じゃない」

つまり広暁は、脳内で術式を構築した朧月、そして魔法陣を展開して発動した別の魔法を使ったということになる。

となると気になるのは、広暁が魔法陣を使用して発動した別の魔法。

そこでシャツハは思い出した。

逃げる間際に感じた、頬をかすめた風の感触を。

サワツ……。

「あの時、私の頬を風が掠めたのですが……それが？」

「あれがシャツハを今から倒す魔法……『篠電霰・参式』の準備だ。

本当は見えないようにする必要はなかったんだけど、保険として迷彩魔法を使つといた。

まあ、おかげでばれずに力を貯めれたけどな。

シャツハの傍を通つた後、あれを上軌道修正して準備開始……つてわけ。

シャツハの方に飛んでいったのは俺のミスだけど。

朧月との兼ね合いのせいで仕方ないとはいえ、な」

スッ……。

そう言って広暁は人差し指を天へと向ける。

その先を追うように上を向くシャツハだが、そこにあるのは澄み切

後はここから飛んでいったらほぼ確実に魔力切れだ。
ホント…魔力量が多い人が羨ましい」

そこまで言って広暁は、息を整えるかのように大きく深呼吸をする。
数回の深呼吸を終えた広暁は、再び話を始めた。

「俺が使ったETPはまだ不完全でさ。

中からの衝撃には強いけど、外からの衝撃には結構弱い。

矢を数本くらったら破壊されるから、ETPを解除した瞬間に逃げようなんて考えない方がいいよ。

同時に発射される矢はショットガン以上、連射速度はマシンガン以上だからな」

「本当にあなたは…最後の希望まで持っていてくれますね……」

「一応、な。そんじゃ……っと、そういうば。どうして俺の探索魔法にかからなかったんだ？」

コンクリートの中に潜ってる時はともかく、俺の位置を確認する時は顔を出す必要があっただろ？」

「……そこまではれているなら、もう隠す必要はありませんね。

私はただ、対探索魔法用の結界を、私を包むように使っただけです」

「そういう魔法もあるのか……試験が終わったら調べてみようかな」
フワリ……。

そう言っただけで広暁は飛んでいく、篠電霰・参式の有効射程外…いや、爆煙すらも届かない場所へと。

第40話「篠電殿・参式」 (後書き)

第40話、いかがだったでしょうか？

今回は4つ、広暁が新しく魔法を使いました。

使用魔法のほうも更新しますんで、そちらも是非読んでください。

それと：広暁が喋りすぎなことに違和感を感じられる人もいるかもしれません、これにもちゃんと理由がありますよ？

では。感想・意見・間違い訂正 e t c、お待ちしております。

第41話「始めは広く、終りは狭く」(前書き)

第42話です。

ちよつとばかり間が空いてしまい、申し訳ありません。

今資格試験の勉強をしまして、これからも投稿に間が開く可能性が高いです。

私の小説を読んでくださっている読者の方には申し訳ありませんがご容赦ください。

では……第41話、始まります。

第41話「始めは広く、終りは狭く」

「目覚めたらそこは」

パチツ。

「……知らない天井だ」

ムクツ。 キヨロキヨロ。

「……知らない部屋だ」

『目覚めて第一声がそれですか』

テンプレ乙と言うべきか、広暁は知らない場所での目覚めにぴったりの言葉を言った。

サジタリウスがとてつもなく呆れてる気がするが、それを華麗に無視して広暁は、簡潔に言葉を紡ぐ。

「おっはよ〜。どんぐらい寝てた？ ここはどこだ？」

『寝ていたのは4時間程、今は午後9時です。』

ここは聖王教会の一室……以前訪れた、騎士カリムが勤める教会の一室です。

ちなみにホルスは、シャツハと模擬戦をしています』

「……倒れた後聖王教会系列の病院に連行されて治療、治療が済んだら教会に戻ってぐっすりってか？」

『それを説明するのは』

ニヨキッ。

「私の仕事ですね」

「……通り抜けフープ？」

『（突っ込んだら負けだ突っ込んだら負けだ突っ込んだら負けだ……！！）』

そんなこんなで広暁が寝ている部屋に聖王教会の人間が集まった。と言ってもシャツハにカリム、ついでにヴェロツサの3人だけであるが。

ホルスも戻ってきており、今は広暁の腕の中で気持ちよさそうに撫でられている。

よっぽど広暁が心配だったのだろう（何だかんだで2度目だし）。

「それでは、まず私が現状を説明します。

広暁さんはBランク試験に合格となりました。後は教会の者と軽い面接をするだけです、それだけ伝えておきます」

「よかった〜……受かってたか」

「私と引き分けておいて何を言っているのですかあなたは……。
陸戦と空戦の差があるとはいえ、私はこれでも陸戦AAAランクな
んですよ？」

それがAランクまで下げたとはいえ、Bランク昇進試験の相手に引
き分け…引き分け……。
ひ…き…わ…け…。

ズウ

ン……………。

「……………」

「ごめんなさいね、広暁君。放っておけば治るから」

「下手に慰めると逆効果だからね。しばらくは放っておいてもらえ
ると助かる」

部屋の隅で体操座り& a m p ;片手で膝をかかえて片手で床に「の
の字を書く」という強烈なコンボを発生中のシャツハは軽く無視され
ました、はい。

「マルチタスクの複数並列高速使用による弊害が確認されたわ。
今夜一杯は頭が重く感じるでしょうけど、しっかり養生すれば明日
には治るわよ」

「いくら元が器用でも、マルチタスクの使い過ぎは褒めた行為じゃ
ないね。」

「まだまだ経験が浅いんだから、これから着実に伸ばしていったほうがいいよ」

「身に染みて理解しました」

適度に会話を進めながら3人。

そうしているうちに、広暁は何故か素直に受け入れていることに疑問を感じて質問をした。

「引き分けらしいけど……最後のほうの記憶がないんだよね」

「記憶が？ どうして？」

「ちょっと失礼……」

「ブワァァン……」。

ヴェロツサがそう言って広暁の頭に右手をかざし、脳内を探索。

一通り探して答えを見つけたのか、納得顔をしながら右手を離す。

「最後の一撃が効いたみたいだね。」

「今から僕があの子のことを説明するから、それで思い出すと思うよ」

一秒間に数十発どころの話ではなく、その連射数は既存の質量兵器で及ぶものはないほど。

圧倒的なまでの連射をほこる、天創塵以上の制圧力をほこる魔法。それがたつた一人、シャツハ・ヌエラという魔導師に向かって放たれる。

その威力は、シャツハがいたビルだけでなく、その周囲のビルも瞬く間に破壊。

上空からの無慈悲な矢の雨は、ただ無情に降り注ぐ。

「……気持ち悪……」

それを離れたビルから見るのは、この魔法を発動した魔導師、墨谷広暁。

既にボロボロでフラフラの体を気合いで支えつつ、事の顛末を見守る。

「どうなるかなあ……?」

『高確率でマスターの勝ちです。ですが、油断は禁物ですよ』

「だよなあ……つと!？」

ズオオオン……!!

スカッ……!!

『フラグでしたね』

「うつぶ……やっぱりきたか……来ないでほしかったけど……おえ」

「ハア……ハア……ハア。この事態を想定していたのですか……！？」

ヨロヨロの広暁の目の前に現れたのは、案の定シャツハだった。髪はボサボサでバリアジャケットはボロボロ、ヴィンデルシャフトは一つしか持っていない。ぶつちやけ髪型がアフロっぽいのが、それに突っ込むと色々と面倒そうなので無視して話を続ける。

「物質透過……攻撃をくらってビルが崩れたとしても、崩れるビルの破片と融合しながら落下して、最終的に地面に潜れば受けるダメージは減らせる。

問題はそれをやるだけの魔力と技量が有って、俺の矢に耐え切るだけの耐久力が残ってるかどうか。

賭けは俺の負けだな……」

話しながらも2人は移動を続ける。

自分と相手の距離を計り、攻撃しやすい位置を見定めるために。

「そこまで計算に入れて……ですが、まだ構えるということは」

「降参する気はないよ」

魔力はほぼゼロ、頭は気持ち悪い、体はフラフラと三拍子揃っても、
広暁は降参しない。

シャツハもバリアジャケットはボロボロ、ヴィンデルシャフトが二
つなくても、まだ闘いを続ける。

「……………」

2人…いや、広暁が足を止め、それに合わせてシャツハも足を止め
た。

季節と時間帯の影響か、広暁から伸びる影は非常に長く、輪郭が光
って見える。

ピュン！！

ブワアアア……………！！

スッ！！

「なっ……………！？」

シュン……………！！

ドガアアア……………！！

それは、今シャツハと対峙している広暁の声ではない。
その声を発したのは、シャツハがいるビルから通りを一つ挟んだビ

ルの上にいる広暁。

驚きも束の間、気がついたら広暁はシャツハに後ろを取られていた。先程までシャツハと対峙していた広暁はもういない。

「……………どうして分かった」

「完璧すぎるのですよ、あなたは」

「完璧……………過ぎる？」

褒め言葉のような、貶し言葉のような。

聞かされた答えのような、自分で出した答えのような。

相反する2つの解答、それらが広暁の頭の中でぶつかり合う。

「ここまで完璧に策を張っておいて飛んだら魔力が切れる？ 冗談

じゃありません。

あの言葉を信じるほど、私は素直ではありませんよ」

「……………余力が残ってるだけじゃなくて、あれがシルエツトだって見抜いたのは？」

「あなたは完璧過ぎるのです。

自分の性格や私の性格だけでなく、能力・魔法・特性。

戦闘に関する全てのことを網羅、頭に入れて、勝つためのプロセスを踏んでいく。

もしも仮にあなたが戦闘員ではなく、司令官として私を倒す任務についていたとしたら、私は簡単に倒されていたでしょう」

「……………」

広暁の首筋にヴィンデルシャフトを突きつけながらシャツハは言葉を紡ぐ。

それはまるで、死刑囚に言葉を投げかける古の執行官いじしえのように。死刑囚に生きる絶望と死ぬ絶望、その両方を味わわせるように。

「ですがそれも、『シャツハ・ヌエラ』という一人の人間であればの話。

一歩引いて考えたら簡単に気がつきました、これはフェイクだと。私をE T Pで閉じ込めて長々と演説したのは、観客に「自分はこんなに凄い魔法が使える」ということを自慢して合格する確率を少しでも上げるため。

篠電霰・参式をばらしたのも、ばらしたとしても私は防ぎようがないし、E T Pと同じで合格の確率を上げることに繋がる。

ほぼ魔力切れと言ったのは、もし仮に私が攻撃を耐え切ってあなたに攻撃を仕掛けても、あなたを倒せるという慢心を抱かせるため。そういう考えにいたれば、あなたの姿がシルエットとは思いませんいでしょうから。

もしそう考えていなかったら、先程の矢をくらって私の負けでしょうね。

シルエットと逆光のせいで、矢を構えるあなたを見つuckerのは不可能に近いでしょうから」

「……シャツハはもつと突撃思考だと思ってたけど」

「失礼ですね。思考がそうなりがちなだけで、私は騎士。頭で熱くなっても心は冷静です」

「……これが経験の差かねえ……」

ふざけたセリフを真面目な顔で言う広暁、その顔に曇は無けれど晴

れてはおらず。

「一体どこまでが計算でどこからが計算でないのか。」

「一体どこまでふざけていてどこからふざけていないのか。」

まるでコロコロと天気を変える山のように、広暁の顔は色々な考えを彷彿とさせる。

「……………ドカン」

ジュン……………！……

「……………」

ドガアアア……………！！……

く褒められた行為じゃないく

「……つてところだね。最後の最後で矢が一本飛んできて2人は吹き飛ばされ、気絶。

シャツハは10分ぐらいで目覚めたけど、広暁君は4時間夢の中」

「そういえば……そんな作戦だったな」

「作戦？ あの最後の矢が？」

「奥の手って言ったほうが正しいかな。

最悪でも負けはしないように、篠電霞・参式をほんのちょっとだけ残して待機させといた。

引き分けに持ち込めるだけの魔法矢を放てるようにな」

「……とてもじゃないけど、褒められた行為じゃないわね」

「どづい意味で？」

「そこまでして勝ち負けにこだわる必要があるの？
これは昇進試験、シャツハに認められることが重要なよ？」

それはカリムの本心。

目的のために尽力するのは広暁らしいと言えば広暁らしいが、どこか抜けてる感が否めない。

それを明らかにするため、カリムは言葉を紡ぐ。

「性……かな。」

負けたくないと思っただら負けたくない。

別に負けてもいいと思っただら負けてもいい。

シャツハ一人が判断するならともかく、観客のボーナス点があったからな。

そっち方向にいったほうがいいと思っただけ」

「……全ては計算の上での行動、ってこと？」

「負けるぐらいなら引き分けのほうがいいし。」

「つか、最初からそっちのほうが目的だったかな。」

勝てたらいいなぐらいしか勝てる確率はなかったし、引き分けに持ち込めただけで上々だ。

勝率が7割ぐらいの賭けを何回も繰り返して、あそこまでいったよ
うなもんだし。

まあ途中から視野が狭くなったせいで、後半の賭けは勝率5割を切
ってたけど。

演技のつもりだったのに、後半になるほど演技じゃなくなってきた
やつたし。

数ヶ月で完璧な戦闘思考になれるもんじゃないな」

「……はあ」

広暁の言葉を聞いたカリムとヴェロツサは、盛大にため息をついた。広暁の腕の中にいるホルスと首からかけられているサジタリウスもため息をついたような気がするが気のせいだろう。

「……そうよね、それが広暁君よね」

「君との付き合いはまだ短いけど……君という人間がよく分かったような気がするよ」

「?????」

(真面目な人って考えてたけど…違ったわね。世間一般に対して真面目というわけではない。自分自身に対して真面目なのね)

(守ると決めたら守る。やると決めたらやる。

ルールだから守るんじゃない、それがたまたまルールであっただけ。まったく……今時こんな子がいるもんだねえ……)

それが広暁という人間であり、広暁という人間の生き方。

どちらかと言えば古臭い人間の生き方かもしれないが、それが広暁という人間なのだ。

「そつえばさ」

「どつしたの?」

「結局、ホルスは何のために俺と一緒に来させたの? 管理局のお偉いさんに改めて説明するため?」

「広暁君……分かってて言ってるね？」

「8割方」

「それは私から説明するわ」

ピュン！

カリムの前に現れたのは空間ディスプレイ、それに呼応するように大きなディスプレイが出現。

それはホルスに関する詳細なデータのようで、広暁が分かる単語も多い。

さすがにミッドチルダ語を完璧に読めるわけではないのだ。

「平行世界の地球、そこで流行っていたカードゲーム。

それがこのミッドチルダという異世界に来て実体化。

圧倒的な戦闘力と知力を持ち、マスターである広暁君には服従……いえ、従順の意を示している。

間違いは無いわね？」

（従順……間違いじゃないか。ホルスが言葉を話せたら楽なんだけどなあ）

「広暁君？」

「間違いない。このデータがどうしたの？」

「さすがにこれをそのまま報告するわけにはいかないわ。だから……」

……」

そう言つてカリムがディスプレイを操作すると、そこに現れたのは報告書のようなもの。

映像から考えると、広暁が初めてミッドチルダに来た時にいた海浜公園であるつ。

「幸いにも広暁君が発見された場所は、六課の管轄の範囲。

他の部署は手を出していないから、報告だけで済ませることが出来る」

「次元震に俺とホルスが巻き込まれて、そこに同時に現れたつてことにするつてこと？」

「データじゃなくて、報告するのは報告書よ？ 多少のデータ改竄はばれないわ」

「俺がホルスのマスターだつてことはどう説明したの？」

「見ず知らずの人間に、ホルス程強い竜が簡単に懐くとは思えないけど」

確かにそうだ。

ホルスの強さはなのはが認めるほどであり、加えてその知能は人間である広暁の言葉を理解するほど。

制限時間があるとはいえ、大きくなるも小さくなるも自分の意思で決められる。

それほどに竜としてハイスペックなホルスが、元民間人の広暁に何故従順の意を示すのか？

「それは…うっうううとよ」

ピ。

データの一部分が拡大され、広暁はそれを読む。

「え」と……『マスターとしての高い資質を墨谷広暁に見出したため』?」

「ホルスはアルザス出身の竜ということにしてあるわ。自分を託すに足るマスターを求めてアルザスを放浪する竜、っていう設定ね」

「……ちょっと調べたらばれないか?」

「希少種ってことにしておけば大丈夫。管理世界といっても、別に全てを把握してるわけじゃないのよ?」

「うん……了解(これ以上聞いても分からなそうだし)」

「それじゃあ、この話はこれで終わりね」
ピュイン。

ディスプレイが消され、部屋に静寂が訪れる……。

(え？ 何故に静寂？ あれ？ 何だこの空気は？)

広暁が俗に言う鈍感な人間だったとしたら、精々「静かだな」とか「何で黙ってるんだ？」とか言っているか、そもそもこの状況の不気味さに耐えられなかっただろう。

先程まで部屋の隅でウジウジしていたシャツハはいつの間にかいなくなっていて、カリムは落ち着きがないのかソワソワしており、ヴェロツサはそれをどこか見守るような眼で見ている。

それら全てを引っ括めて敢えて言おう、「この空気は不気味である」と。

嵐の前の静けさ、御用改め前の火付け盗賊改めの心情を広暁は感じ取った。

「それじゃあ…姉さん。成功を祈ってるよ」

「……………ありがとう」

「(……………デジャブ?)」

デジャブとは違う。

デジャブは一度も体験したことがないことを、さも体験したことがあるかのように感じるからだ。

しかしこれから起きるのは、広暁は過去に体験したことがあること。ただ単純に思い出していないだけで、一度だけ体験したことがあること。

「広暁君」

「な、なんででしょう?」

自他共に認める冷静な性格ではあるが、病み上がりでいつもより回らない頭。

そして、カリムから滲み出る何とも言えない覚悟のオーラ。

その他の要因も合わさり、広暁は間拔けな口調で返答をするが、カリムはそれを気にすることなく言葉を紡ぐ。

「私と……交際をしていただけませんか？」

第41話「始めは広く、終りは狭く」（後書き）

第41話、いかがだったでしょうか？

広暁の敗因は幾つかありますが、最も大きかったのはこれです。

『自分の考えに疑問を感じなかったこと』

初めての上級魔導師との本格戦闘・増えてきた使用魔法。

戦闘開始時は問題なかったのですが、時間が経つにつれて『戦闘を楽しむ』『予想外の出来事が嬉しい』のような感情が広暁の心の中に芽生えてしまいました。

それらの感情を疑問を感じることなく受け入れ、自ら考えた策にも疑問を感じなかった。

これが私の考える広暁の敗因です。

目的と手段がごっちゃになってしまったのですね。

…………… 20歳の元大学生に、そこまで冷静になれと言つのは無理があるかもしれません。

人間、理性が感情に打ち勝つのは不可能なのでしょうか？

では。感想・意見・間違い訂正等、宜しく願います。

第42話「需要が高いのはこのタイプ」(前書き)

第42話です。

ちよつと間が空いてしまい、申し訳ありません。

今回の話は前回の続きということとで……これ以上は本文で

では。第42話、始まるよう？

第42話「需要が高いのはこのタイプ」

（感情と理性）

「……俺の出身は知ってるよね？」

「可能性として最も高いのは、平行世界の地球。

異世界を横の次元とするなら、平行世界は縦の次元。

交わることはなく、行き来する技術も確立されていない……」

「戻れるにしろ戻れないにしろ、ミッドチルダに骨を埋める覚悟はある。

だけど、まだ俺のいた地球に戻る手段が絶対に存在しないって決まったわけじゃない。

もし戻れるなら戻りたい……その後どうするかはまだ決めてないけど。

そんな俺と付き合うことになっても、良いことはない……よ？」

「重々承知の上です。私のこの恋心……それをもう、止めるのは不可能なのです。

私はあなたに一目惚れをして……それ以来、ずっとあなたという男性に心を惹かれています。

あなたと初めて会って以来、あなたのことを考えなかった日はありません。

身勝手は承知の上です……どうか、私との交際を受けてはいただけませんか？」

（凄いストレートに告白された……俺の何がいいのか？）

外見にはそれなりに自信あるけど、中身に少し癖が………)

20歳の青年らしく、広暁も過去…中学生の頃に女性と付き合ったことはある。

その時も女性のほうから告白されたのだが、気がついたら関係はなあなあになつて破局してしまった。

今思うと周りに無理矢理くっつけさせられたような気がしないでもないが……今はこのことについて深く追求しないでおこう。

「あゝ、その……俺の何がいいの？」

「そうですね……一言で言うなら『安心感』でしょうか。

最初会った時は全身に電気が流れたような衝撃でしたが、その後ずつと感じていたのは安心感でした。

一緒にして安心できる、広暁君になら私の全てを曝け出せる。

あなたのことを考えると、興奮する以上に安心感がこの体を包むのです」

(俺がカリムに感じてたのとほとんど一緒じゃん……カリムの方がオーバーだけ)

カリムの感想を聞いた広暁は安堵した。

何故なら、広暁がカリムに対して持っていた印象、それとほとんど一緒だったからだ。

良くも悪くも、カリムという女性は広暁より年上である。

それでいて教会勤めが長いため、優雅な仕草や言葉遣い、醸し出す雰囲気は堂に入ったものがある。

そんな、女性として理想的なカリム・グラシアという人間に惹かれないほど、広暁は唐変木ではない。

(……両思いから始まる恋愛なんてそうそうない、ほとんどの恋愛は片思いから始まる。それから段々とお互いのことを知って……合うか合わないかを決める。

遊びで付き合う人が多いのも事実だけど……俺、頭堅いからなあ)

幼馴染から発展する恋愛などそうそうない。

不良にからまれていた学園のアイドルを助けてそこから始まる恋愛は存在しない。

妹との禁断の恋愛？ 寝言は永遠の眠りについてから言え。

世の中トントン拍子に行くものではないが、可能性という名のきっかけはそこら中に転がっている。

それに気づかないか、気づいていながら無視するか……どちらがより悪いとは言えない。

しかし両方に言えるのは、可能性を放棄していること。

些細な日常に潜むきっかけ、そこから始まるまるで樹形図の様に広がっていく未来。

その道を進む為に必要なのは……気づき、判断すること。

(平行世界・魔法・ホルス……俺の人生、劇的に変わりすぎだろ……)

それもまた人生。

何が起こるかわからないから面白い、簡単に予測できる未来などつまらない。

計画通りにいくのは気分がいいが、同時に障害がないことにつまらなさを感じる。

それは広暁が度々考えていたことであり、今回シャツハに一本取ら

れた原因でもある。

『気づく』才能を持ち、『オーガナイズ計画実行力』に長けた広暁だからこそ持つ悩みであり、聞く人が聞いたら妬むかもしれない悩み。

そんな広暁に訪れたこの転機、彼はどんな判断を下すのだろうか？

(返答を先延ばしはできなそうだし……今結論出さなきゃ駄目だよなあ……)

考える。考えるんだ広暁。

自分はカリムの申し出を受けるべきなのか。

仮に受けたとして、自分はちゃんと付き合っことができるか。

そもそも断ったら、自分は五体満足でこの教会から出ることができ
るのか。

(いやいや、そういう問題じゃないだろ……有り得ない話じゃない
けど。

うーん……カリムは魅力的だけど、やっぱり格差がなあ。

教会騎士で管理局少将のカリムと、魔導師ランクBで民間協力者の
俺とじゃ差がありすぎるし……)

「……………(ウルッ)」

「(今にも泣き出しそうなんだけど!?) 少し……考えさせてく
れない?」

「はい……もとより急かすつもりはありませんから」

< 広暁 s i d e >

よし、気持ちをまとめよう。

? カリムの気持ちは嬉しい

? カリムは美人で性格よし

? 俺は次元漂流者、ついでに機動六課民間協力者

？と？は全く問題がない、寧ろ嬉しい。
美人で性格もいいカリムに告白されるんだから、文句の言いようがない。

問題は？だ。

さっきもカリムに言ったけど、俺は次元漂流者。
ミッドチルダに骨を埋める覚悟があるとはいえ、もし元いた地球に戻れる方法が見つかったら気持ちが揺らがないと言い切れない。

カリムもそこを分かった上で俺に告白したんだろうけど……………あれ？

だったらそれを理由に断ることを考えても意味なくね？
それを言ったらカリムの覚悟を無駄にすることになるし。
大切なのは…………俺がカリムを好きかどうかってこと？

何だ、だったら答えは決まってる。

俺の気持ちをそのまま言えばいいだけだ、馬鹿正直に。

……………単純だな、俺。

〈結論〉

「カリム」

「は、はい!？」

「(何故そこまで驚く)俺は子供だ」

「子供……?」

「20歳になるまで実家で暮らして、外で働いた経験なんてアルバイトとボランティアぐらい。

一人暮らしをしたこともないし、精々大学受験で都心に行った時に一人で泊まったぐらいだ」

「……………」

「小さい頃から弓道とかソフトテニスとかやってたけど、ただ親に言われてやったり、打つのが楽しいからって理由だった。勉強をしたのも、知識が増えるのが嬉しいからだとか、将来損はしないからだとか。

遊戯王にいたっては、完全に趣味だしな」

それは言う必要があったのか？ いや、ないだろう。

カリムの申し出に返答をするという意味では、全く言う必要のない言葉。

それを言う理由？ そんなものは簡単だ。

ただ言いたいから言う、それだけの理由。

そこには理性も感情もない。

自分が言いたいから言う、言葉を発したいから発する。

本能には、如何なる生物も逆らえない。

「大学3年生になっても将来やりたいことが決まらなくて、ただ毎日を過ごしてた。

そんな時に、このミッドチルダへの次元漂流。

最初のうちは戸惑った、異世界が存在するなんて信じられなかったし」

紡がれる言葉、それは正に立て板に水。

淀みなくスラスラと語られる言葉は、山から海へと流れる清流の水のよう。

詩吟とは違う、落語とも違う。

聞くのではなく聴く、それが今の広暁の言葉を比喻するのに最適の言葉。

「だけど俺も、何だかんだでこの世界に適応しちゃったんだよな。地球出身にしては珍しいらしい、それなりに高い魔法適正。

自分で言うのもなんだけど俺は努力家だから、ある程度のところまでは早く到達できた。

あとは……………」

そこまで言って、広暁は一息吐いた。

再度思案顔で言葉を考えているようだが、その顔に陰りはない。

恐らくは…………『男のプライド』的な問題であろう。

広暁にプライドがあるかだと？ 当然ありますよ。

それを上回る理性と目的意識が普段は邪魔をしているだけです。

「……………俺がこの世界で魔導師として生きていけるだろうか。

幸いにも俺は、最初の一年を機動六課で過ごすことができる。

教官として優秀なのはと、執務官として活躍してるフェイト。

性格はともかく、はやくも部隊長・捜査官として優秀するのは分かった。

吸収できるものは吸収して、将来の糧にしたい」

「……………」

「これから先の未来をどうしたいか、今はまだ決まってる。

だけど…………機動六課にいるうちに決めたいと思ってる。

だから……………」

スツ…………。

今まで掛け布団の中にしまっていた両腕を外に出して握り拳をつくる。

背筋を伸ばしてカリムを見据える目は濁りがなく、止水の瞳と言つ言葉がふさわしい。

「こんな……まだ子供が背伸びしたぐらいの俺でいいなら……宜しくお願いします」

「……………(クスツ)」

「……………あれ？ 笑われてる？」

「広暁君、分からない？ 今の言葉、プロポーズの返事みたいよ？」

「へ……………？ ……っ!？」

威風堂々？ 何それ美味しいの？

冷静沈着？ 誰かの財布のことですか？

明鏡止水？ そんなカードがありましたっけ？

「いや、これは、あの、その、つい考えすぎたといいますが、本能に任せた結果といえますか？

あまり深く考えないでいただけると嬉しいのですが。

いやそれよりもさすがにそれは段階を飛ばしすぎではないかとおm」

「広暁君」

フワリ……。

「おう！？」

広暁の左手を、カリムが両手で優しく包み込む。

（見方によっては倒錯した精神病患者を宥める看護婦に見えないもないがそんなことを言ったらあとが怖いので）その様は迷える人間を正しき道へと誘う天使のよう（と言っておこう）。

とても絵になる光景である（広暁とカリムの表情が180度真逆でなければ）。

「広暁君のことだからもう分かっていると思うけど……私は卑怯な女よ？」

自分の性格と容姿ぐらいはちゃんと把握してるし、広暁君がどんな人間かも大体分かっているつもり。

このタイミングで言えば広暁君が断らないってことも分かってたわ」

「何で態々……このタイミングで言ったんだ？」

「前にも言ったかもしれないけど……広暁君といると安心するの。

自分が自分でいられる、そんな感じがね。

だからかな……あなたとこうしていると、隠してたことも言ってしまうの。

私の全てを受け入れてくれる、そんな包容力のせいかしらね。

本当に……罪な人よ、広暁君は」

「買いかぶりすぎだと思うけどな。俺はそこまで広い心を持ってな

いぞ」

「人の心は自分ですら分らないもの。勿論、他人からも。大切なのは自分がどうありたいか、そして周りからどう認識されているか。」

広暁君は後者を大切にすべきよ？

第一、広暁君の心が狭かったら、フォワードの新人メンバーが広暁君に懐くわけないじゃない」

「……よくご存知で。周りからどう認識されてるか、かあ……」

「これから考えていけばいいと思うわ。私が傍にいるんだもの」

ギュッ！

「……そうだな。それじゃあ……」

スッ。

「これから宜しくお願いします」

ペコリ。

「ええ、こちらこそ」

ダキッ！

「ちよっ！？ 何故にいきなり抱きつく！？」

「いいじゃない、恋人同士なんだし」

「まだ早いわ!!」

こうして、新たな一組のカップルが成立した。

この後色々あったのだが、R - 18 的な描写が無かったことだけはここに記しておく。

また、終始広暁がカリムに押されっぱなしであったことも記しておく。

ギユ

ッ!

「俺は怪我人だ

!!」

スウ ツ。

「ああ………これが広暁君の匂いなね」

無論、物理的な意味で。

第42話「需要が高いのはこのタイプ」（後書き）

第42話、いかがだったでしょうか？

今回の話で分かった通り、広暁のカップリングの相手はカリムに決まりました。

いいですよね、大人の女性！！

ここで1つ裏話を。

カリムを広暁のカップリングの相手にしたのは、他の作者様がやっていなかったというのが単純な理由でした。

ところが。

とあるサイトで、占う人の名前を入力すればそのアニメ・マンガに出てくるキャラの中で嫁度が高いキャラが順位付けされるサイトを発見いたしました。

それを墨谷広暁でやってみたのですが……なんと、1位がカリムだったのです。

ついでに私こと夢月の本名でやってみましたが、これもまたカリムが1位でした。

偶然なのでしょうか、これは？

世の中には面白い偶然があるものですねー、ハハッ！！

では。感想・意見・訂正etc、お待ちしております。

第43話「ザ・ワールド!」(前書き)

第43話です。

この話から数話、舞台は聖王教会へと移ります。

では……第43話、始まります。

第43話「ザ・ワールド!!」

<カリムside>

スウ ……ハア。

今私がいるのは、聖王教会に数ある客室の中でも一際大きな部屋。ここにいるのは機動六課民間協力者、墨谷広暁君。

この間行われたBランク昇進試験で彼はシャツ八相手に引き分け、見事Bランクになった。

リミッターをかけてAランクになったとはいえ、元々AAAランクのシャツ八に。

最大のパートナーにして圧倒的火力を持つホルスがいないにも関わらず。

広暁君は自身の力、何より頭脳を駆使してシャツ八と引き分けることに成功した。

ただどその引き分けの方法というのが、シャツ八諸共自分を魔力矢の爆発に巻き込むというものであり、試験の後すぐに病院に搬送。マルチタスクの複数過剰使用と肉体のダメージ過多により、すぐに病院で治療が行われた。

体の方はすぐによくなっただけど頭の方はまだよくなってなくて、マルチタスクはまだ使えない。退院してもまだ六課に復帰出来ないということ、聖王教会で療養ということになった。

そしてこの扉を開けたら……

「広暁君が眠っている……!!」

ど、どどどど、どうでしょう!?! この間は勢いで告白してしまっただけ……

「私……広暁君の恋人なのよね?」

私の告白を広暁君は受け入れてくれた。

その後はあまり動けない広暁君に色々とやっちゃったけど……広暁君、可愛かったわね。

……つといけない、当初の目的を忘れるところだったわ。

「こ、恋人なら、朝起こすくらいか、構わないわよね?」

そう、私は広暁君を起こしに来た。

本当なら昨日のうちにもつとやりたいことはあったんだけど、仕方がないものは仕方がないわね。

広暁君の寝顔を見ることが出来るならそれもちやらよ!!

「さつきシャワーも浴びたし、髪の毛もちゃんと梳いてきた。

服も……大丈夫ね、汚れも皺も無い。香水は……どうしようかしら?」

仕事柄香水はつけないのだけれど、広暁君のためなら私はつけるわ! だけど寝起きの広暁君に香水はきついのかもしれない。

軽めの香りの物を持って来たけど、やっぱり付けない方がいいわね。よし……今こそ行くのよ、カリム!

コンコンコン。

「広暁君、起きてる？」

意を決して私は扉をノック。まだ寝てるはずだから返事は……

「……………」

ないわね。いざ……突入！

ガチャツ。

扉を開けて広暁君がいるであろうベットを見た。けれど、

「広暁君……？」

ベッドに広暁君はいない。

念のため部屋の中を見回してみたが、どこにも広暁君はいない。

「一体どこに行ったの？」

パジャマは脱いであるから服を着替えて外に出た？

過去に来たことがあるとはいえ、広暁君はこの教会の地理に詳しくないはず。

……………パジャマ？ 広暁君がさっきまで着ていた？

私の足は無意識のうちにベットのの上に置まれて置かれたパジャマの傍に。

それを取ろうとして……

「つていけないわ！ そんなことをしたら私のイメージが…！！」

まったく……広暁君は罪な男ね。

聖王教会教会騎士団騎士、そして時空管理局理事官の私をここまで狂わせるなんて。

もしこのまま狂ったらどうなるのかしら？

でも広暁君がいれば私は別に………

「騎士カリム？」

「きゃっ！？」

後ろを振り返るとそこにいたのはシャツハだった。

扉の所で呆然とした様子で立っている。

もしかして…：今までの全部見られてた？

「み、見てた？」

「何をですか？」

「ううん、何でもないの」

「はあ…」

良かった、見られてなかったみたいね。

告白のお膳立てをあいってくれたのはシャツハだし、例え知られてもいいのだけど。

出来ることなら今の行動は見られてないほうがいいわね……主に私の名誉のために。

「シャツハ、どうしてここに？」

「扉が空けっぱなしでしたので、念のため確認を」

「そう……そういえば広暁君がどこに行ったか知っているかしら？」

「彼ならホルスと一緒に聖堂の裏に行かれましたよ」

「聖堂の裏に？」

「体を動かしたいそうぞで。」

「簡単なトレーニングなら問題はないと判断し、許可を出しました」

「そう……ありがとうございます」

聖堂の裏ね。

あそこは普段から人は通らないし、体を動かすなら絶好の場所だけぞ……。

今の広暁君がいきなり体を動かして大丈夫かしら？

広暁君なら無茶なことはしないでしようし、シャツハもそれを分かっていたから薦めたのでしょうけど……私が行って確かめればいいだけの話ね。

「騎士カリム、どちらに？」

「聖堂裏に。広暁君の様子を見えます」

「……朝食には間に合つようじにお願いします」

「分かつてるわ」

シャツハの許可も出たことだし……いざ！

ここを曲がれば聖堂の裏に出る。

広暁君はどんなトレーニングをしてるのかしら？
的を撃つのが一番妥当だけれど……

「見れば分かるわね」

色々と気になるけど考えても分からないし、見た方が早いわね。
私は角を曲がり、そこにいるであろう広暁君に声をかけようとした。

「広暁く……ん？」

けれど、私の声は広暁君に届かなかった。

いや、私の声が存在しなかった。

私は見惚れてしまったのだ、その光景に。

〈聖堂裏〉

「ホルス」

「キュイ」

広暁の合図に応じ、ホルスが直径約30cmの炎の的を生成。それを遠くに飛ばし、100m程離れた所で停止。

スツ：キュイイイイン。

弓を構え、右手に矢を生成。

そのまま矢を弦にかけ、スコープを展開することなく狙いを引き絞る。

「……………」

そのまま手元で微調整……放す。

パツ。

シューイイイン……。

シュン！

「……………ふう」

広暁は構えを崩し、ホルスに指示を出す。

指示を出されたホルスは矢が貫通した炎の的を手元に戻し、広暁に見せる。

それを見た広暁は落胆の息を吐いた。

「ハア……………やっぱりずれるなあ」

矢が通ったのは中心から約10cm外側。つまり中心より円周に近いのだ。

「本来なら100mは当たってラッキー！

だけど弓道と違って真っ直ぐ飛ぶから狙いを定めるだけでいい。

その条件下でここまで外すってのはなあ。

矢の速度は問題ないんだけど……………ハア」

六課で鍛えた広暁の腕なら、構えてから矢を放すまでここまでの時間はいかからない。

そして、中心を外すこともない。

それが出来ないということは、やはり先日のBランク昇進試験の影響が頭と体に残っているのだろう。

「……仕方ない、今日はここまでにするか。ホルス、ありがとな」

「キューイ」

そう言つて広暁がホルスの頭を撫でると、ホルスは嬉しそうに鳴いた。

ホルスもひとしきり撫でられるのを楽しんだ後、的を消す。

「さて、部屋に戻りますか」

広暁が部屋に戻ろうとして体の向きを変える。するとそこにいたのは……

「カリム？」

「えっ！？ひ、広暁君……」

カリムだった。丁度聖堂の角のところに立っており、呆然としている様に見える。

「おはよう、何してたの？」

「お、おはよう。えーっと、その……」

「ん？」

広暁の問いにカリムは口をつぐんでしまう。その理由が、

(弓を構える広暁君がかつこよくて見惚れてたなんて言えない…！)

これである。

昨日は体があまり動かない広暁に抱きついて匂いを嗅いだ人間とは思えない。

一時いっときの感情の乱れとは恐ろしいものだ。

シャツハから広暁君がここでトレーニングしてるって聞いたから様子を見に来たの。

無茶をしてないかどうか確認するためにね」

「そうなの。まあ、御覧の通り無茶はしていないから安心して」

「ええ……部屋に戻るの？」

「うん。その後誰かに朝ご飯のことを聞こうと思ってた」

「だったら私が案内するわ。付いて来て」

「サンキュー。だったら部屋に戻らなくていいな」

(誤魔化し成功！)

カリムは心の中で小さくガッツポーズをした。

そのまま広暁を先導するかたちで聖堂裏を出る。

ホルスはパタパタと飛びながら広暁の隣を飛んでいるが……その顔がカリムを見ているのは気のせいではないだろう。

「療養とは言われたけど……俺はここで何をすればいいんだ？」

「特に決められているわけじゃないわよ。激しい運動をしなければ」

「そこは弁わえてますおつて」

他愛もない雑談をしながら2人は歩く。

話す内容は教会での過ごし方について。

また、聖王教会が集めた遊戯王関連のデータについて話し合う予定が午後に入っていると。

「あとは孤児院の子供達の相手をお願いしたい……かな」

「孤児院の？ 俺に？」

「教会の職員には広暁君みたいな若い男性はいないから」

「あ……なるほど」

つまりは『お兄さん』みたいな存在が欲しいということだろう。

男性の職員は年がいった人が多く『お父さん』。

女性はある程度年がばらけているものの、それでも『お姉さん』や『お母さん』のような存在だ。

「子供の相手か……俺に出来るかな？」

「苦手なの？」

「得意でもなく苦手でもない。経験が少ないって言った方が正しいな」

「経験豊富だったら驚くわよ……でも、キャロには『お兄ちゃん』って呼ばれてるらしいじゃない？」

「……キャロがそう呼びたいって言ったからな」

広暁も「誰から聞いた？」とは突っ込まない。

誰が言ったか想像がつく……というより確証があるから。

「お兄ちゃん」

「止めて下さい」

「む〜」

カリムの可愛らしい「お兄ちゃん」にも、広暁は努めて言葉を冷静に返す。

広暁には『まだ』そういう趣味はないのだ、『まだ』。

……大学でできた彼の友人なら話は別かもしれないが。

(目覚めるわけにはいかないんだよ……!!)

その自制心がいつまでもつか、見ものだ。

(話せたのは嬉しいけど……やっぱり恋人っぽいこともしたいな……)

カリムもカリムで考えていた。

もっともこちらは、当たり前といえば当たり前前の悩みだが。

(恋人っぽいこと……恋人っぽいこと……)

カリムは悩む、恋人っぽいことをするために。

広暁に抱きついて匂いを嗅ぐという、ある種変態行為をしたにも関わらず。

感情の暴走というのは、まったくもって恐ろしいものだ。

「カリム？」

「な、何!？」

「その……恋人っぽいことしたい？」

「え?あ、うん……ってどうして知ってるの!？」

「声に出てた」

「……嘘」

「ホント」

「うー……」

可愛らしい顔で拗ねるカリム。

その表情を見ることが出来るのは次元世界広しといえども広暁だけだろう。

カリムは聖王教会の騎士として、そして管理局理事官として働き続けて来た。

そんな彼女に押し掛かる重圧は、決して少ないとは言えない。
はやてやシャツハのように『心を許せる友人』はいても、『頼れる異性』というものはいなかった。

今のカリムは、その『頼れる異性』という存在を得たのだ。

向かうところ敵無しの状態と言っても過言ではないのかもしれない。

「恋人っぽいことね……そりゃーやっぱり」

「やっぱり？」

「腕を組むとか？」

「腕を組む……こっつ？」

「な!？」

モニユン

今まで異性と腕など組んだことのない広暁にとって、それはあまりにも衝撃的だった。

カリムが両腕を広暁の右腕に絡めてきたのだ。

何がと言わないが、右腕に柔らかいものが2つ当たっている。

何気なく言った言葉をカリムが実行するとは思わなかったのか、その動揺ぶりは傍目にも明らかだ。

(当たってる! 当たってるって!!)

「あ、当たってるのよ?」

「心を読まないで!? っていうか、誰から聞いたのそんな言葉!」

「昔はやてが貸してくれた小説に書いてあったわ」

聖堂横の通路で何というか……一種の喜劇が行われているが、そこに誰も通らないのは幸か不幸か。

実際は幸なのだが、そのうち不幸になるかもしれない……主に2人が。

何故かですって? それは人間の心のダークサイドを知っている人なら誰でも分かります。

「でも……これなら広暁君を近くに感じられます」

そう言うってカリムは広暁の腕に頭を預ける。

身長差のせいで肩に頭を乗せられないが、カリムは幸せそうだ。

(心臓の鼓動が早くなりましたね……フフ、女としては嬉しい限りです)

先程の慌てっぷりはどこへいったのか、広暁をからかう余裕が生まれている。

広暁も広暁で、そんなカリムを見て生来の冷静さを取り戻した。

「……座る?」

「……ええ」

広暁が指差したのは、聖王教会の中に数多く設置されている長椅子。広暁の提案をカリムは受け入れ、2人は長椅子へと向かう。

「……………」

そこに訪れるのは至福の時。

広暁はカリムの肩を抱き、カリムは広暁に身を寄せせる。

腕を組んでいた時とは違う、広暁に包みこまれるような感覚にカリムは身を委ねる。

（幸せって……こういうことをいうのでしょうか……）

（幸せって……こういうことをいうんだろうなあ……）

2人共考えることは同じ。

「キュー……………」

約1匹、不満そうな竜を除いてだが。

大丈夫だ、ホルス。きっと2人は君のことを忘れていないはず……だから。

それまで君は、マスターと将来第2のマスターになる女性を観察しておくといいかもしれないぞ？

そうすれば君は、聖王様の加護を得られるかもしれない。

「なるほどね……………」

「信じられないか、やっぱり？」

「信じる信じないの問題じゃないわ。

情報が少ない以上、それを仮定として考えを纏めていかないよ」

あれから何時間か時間は経ち、現在は夕方前の実に中途半端な時間。ベンチでのんびりしていて朝食に遅れたことでシャツハに怒られたことは秘密だ。

その後行った孤児院で、純真無垢な子供に「2人はお父さんとお母さんになるの？」と言われ、カリムが真っ赤になって広暁に抱きついたのも秘密だ。

「これが、私達が彼ら……遊戯王のモンスター？ についてまとめたデータよ。

私達が調べても荒れ果てた惑星といった感じだけど、広暁君が見たら違うと思って」

「サンクス」

「え？」

「『ありがとう』って意味の英語」

「日本語以外も話せるのね」

「Because I studied writing English
at a high school, studied
speaking English at an university.
」

「え？」

「『高校で書く英語を、大学で話す英語を勉強したからな』って意味。

高校の英語の授業はほとんど受験英語だったからな……あ、文法は中学英語レベルでも海外の人と話すぶんには問題無いよ」

「へ、へえ……（ごめんなさい、広暁君。学校の話は私、全然分からないの……）」

「ちょっと集中したいからさ、最初寝てた部屋でやっていいかな？」

「そうね……1時間ぐらいで戻ってくれる？ 広暁君分を補充しないといけないから」

「……………OK」

ギャップを感じるにはまだ早いぞ、カリム。

学生としてそれ相応の立場にいた広暁は、君が幼き頃より聖王教会で働いて培ってきた経験とは全く異なるベクトルの経験を持っている。

それを理解して許し合うことで男と女の仲は段々と深まっていくのだから。

せっかくの年下の恋人だ、年上の女性として引っ張っていったほうが広暁は喜ぶかも……ね。

第43話「ザ・ワールド!」(後書き)

第43話、いかがだったでしょうか？

幕間っぽい話ということで、会話分を増やして全体的に軽めに仕上げてみました。

説明の文章が多くて違和感を感じられるかもしれませんが、新しい試みということで許していただければ幸いです。

では。感想・意見・間違い訂正 e t c、お待ちしております。

第44話「森林のハンター」（前書き）

第44話です。

題名の意味？ それは本文を読んでいただければ理解できますよ

では。第44話、始まるよ〜

第44話「森林のハンター」

（考察）

「んじゃまあ、纏めるか」

『了解です』

「キユイ！」

広暁にあてがわれた聖王教会の一室。

そこで広暁は備え付けの椅子に座り、机の上に置かれた資料と睨めっこしていた。

資料と言っても、自分が今までに纏めた次元漂流と遊戯王の纏めであるのだが。

どうにも画面の中だけでは見にくいので、先程カリムに頼んで印刷してもらったのだ。

デジタルよりアナログのほうがいい場合もあるんだね、うん。

「紙は言っている、もっと印刷しろと」

『その幻想をぶち殺す』

「だから何で知ってるかな」

『気にしたら負けです』

カリムから得た情報通りだとすると、ミッドチルダが存在する時空の世界には、かつて何か文明が存在していた痕跡のある惑星が存在

する。

問題は、それが広暁のいた地球に存在する遊戯王カードとどのような関係があるかということだ。

広暁のいた地球では某企業が販売しているカードゲームであり、それには元ネタが存在する。

無論オリジナルもあるが、世界各国に伝わる神話や古代文明からカード名を引用していることも確かだ。

それはホルスも例外ではなく、エジプト神話に登場する『天空と太陽の神』。

それが『ホルスの黒炎竜 LV8』の原案である。

「ガジェットの中にいた機械族のモンスター」。

全ての種族の中で唯一意思を持つてなさそうな機械族。

マッドサイエンティスト・機械・生命。

かつて遊戯王の精霊が住んでいた可能性がある惑星。

今は荒廃したただの惑星ってことは、滅んだか惑星の外にでたか、絶滅したか」

ピピピピピピピピ……。

空間に出現したキーボードを使い、考えうる全てのことを入力していく。

それが正しいかどうかは分からない。

しかし、ミッドチルダに存在する人間の中で遊戯王カードのことを知っているのは、確実に広暁だけ。

ならば、広暁が考えることが他の何よりも有益な情報となるのは確定事項。

（そもそも俺は、バイトが終わって車に乗ろうとしたらこっちの世

界にいた。

その後ガジェットに襲われそうになって、カードから実体化したホルズに助けられた。

ホルズが俺をこの世界に飛ばしたのか……？

一応聞いてみるか。「キュイ？」って言って頭捻って終わりそうだけど)

そんな馬鹿な、と一蹴するのは簡単。

しかしそれは同時に、可能性を捨てることに繋がる。

考えの一つとして、とりあえずは記録しておけばいい。

(もしモンスター達が滅ばずに、別の世界……異世界や平行世界に移動したとしたら？

その行き先が俺のいた地球だったら……それじゃあ魔法・畏カードの説明がつかん。

そもそも、何で移動したんだ？

別の未界の惑星に移動したほうが楽そうな感じだけど……いかん、こんがらがってきた)

原因を考えるべきなのか結果を考えるべきなのか。

始まりを考えるべきなのか終わりを考えるべきなのか。

思い浮かんだことを羅列するだけとはいえ、そこには必ず書き手のルールというものが表れる。

段々とそれに囚われ始めたことに気がついた広暁は、頭を切り替えるためにも休憩をすることにした。

『飲み物ですか？』

「カフェオレ頼む」

『了解』

ポフツ！ パシツ！

「一服……と」

パシユツ！！ ゴクゴク……。

「ふう〜……美味しい」

『戦闘以外で私が魔法を使うことになるとは……』

「戦闘にしか魔法が使えないっていうわけじゃないだろ？ 色々できたほうがいいじゃん」

『そうなの……でしょうか？』

「そうそう」

弓形態のサジタリウス、そのカードリッジ排出部分から排出されたのは缶飲料だった。

いつも通りユーノから教わった魔法であり、これは収納魔法である。収納する物を最適な状態で保存するので、例えば熱々のカップラーメンを入れたら温かく麺が伸びない状態で保存されるため、とても便利なのだ。

ちなみに……カードリッジ排出部分から出ているが、その広さ以上のものも収納できたりする。

原理を説明すると長くなるのでここでは省くが、その様子を見た広暁が、

「〇イージマンションの掃除機みたいだな」

と言ってサジタリウスを怒らせたのはつい先日の話。

「読書魔法に収納魔法、その他諸々ユーノに教えてもらった魔法。ホント便利だな。

魔法が社会に根付いてるってのがよく分かる」

『マスターほど短期間で手広く魔法を覚える魔導師もいないと思いますが』

「環境が環境だからな。ユーノと会わなかったら戦闘用の魔法しか覚えてなかったと思う」

ニヨキッ。

「それは光栄だね」

「……………いつからそこにいた」

「あれか？ ユーノは覗きの趣味でもあるのか？」

「あるわけないじゃないか、そんな趣味。ただ、君の驚く顔が見たかっただけさ」

「期待には添えたか？」

「全然。もっと驚いてくれてもいいんじゃない？ フェレットが急に出てきたら普通は驚くよ？」

「そついう性格だから無理だと思う」

休憩がてら、広暁はユーノと外……教会内を歩くことにした。

ユーノは教会の資料室に所用があったらしく、そこで広暁が教会で療養中のことを知りつて寄つたらしい。

何故フェレット姿で侵入したかという……ただ単純に広暁の驚く顔を見たかったという、とてもきれいな悪戯心が生まれたからだ。

結果は見事に玉砕だったが、本人は久しぶりにフェレット姿に変身できて満足のようである。

ホルスですか？ あの竜なら今頃、カリムにグルーミングをしてもらっているでしょう。

「そついや、フェレットの時のユーノをホルスが凄い目で見てたな」

「確か神話の世界では、隼の頭をした人間で表されるんだっけ？」

「そつ。それがこつやってカードゲームの基になって、あまつさえ実体化するんだもんな。

わけが分からんなんでレベルを超えてるよ、ホント」

「僕のほうでも色々調べてるんだけど……悪いね、まだ有益な情報が見つけられないんだ」

「仕事の合間を縫って調べてもらってるのに謙遜されてもな。

俺なんて、自分の記憶を引っ張り出して考察してるだけなんだから
まるで10年来の友人のように話す2人。
その様子はとてもついこの間知り合ったとは思えない。

「それも……そうだね。そういえば、この間送った本は役に立ってる？」

「結構な。術式組みやすいのもあるし、ETPは前提条件が厳しいけど発動できた。
せっかくだから、防御魔法とか結界魔法をもうちよつと覚えたいかな。」

フォワードメンバーのバランスを考えるとそれが一番いい」

「ETPを発動できるなんて……勿体ないね、広暁は結界魔導師のほうに向いてるんじゃない？」

「資質的にはそうなんだろうけど……生憎と、体はフェイトみたいな高速機動型なんで。
弓道じゃなくて剣道とかフェンシングやってたら、サジタリウスも剣型だったかもなあ」

「私が剣型……想像できませんね。」

私が製作された時には、既にこの形状と性格でしたから」

「そういえば、お前の性格ってどうやって決められたんだ？」

「マスターと対等に話せる性格と、シャーリーは言っていましたね」

「何だそりゃ（シャーリーは俺の性格をとくに分かったのか……

…恐ろしい」

「人を説得するのが得意みたいだからね、広暁は。対等に話せる性格ってというのはそういう意味じゃないかな？」

「……念のため聞いてく。誰から聞いた？」

「なのはから。この間「広暁君にお説教された」って連絡があったよ」

「俺としては、どうしてもあの程度の討論も出来ないのか不思議なんだけど。」

大学の講義でやったディスカッションのほうがよくばか齒応えがあつたぞ」

「うーん……討論っていうより、広暁が男だからじゃないかな？」

そういうことをするようになるのってある程度経験を積んでからだし、経験を積み終わった頃には『エースオブエース』って言われていたからね、なのはは。

下積み時代は長い付き合いの人が多く、同年代で異性な広暁と討論するのは慣れてないのかも」

「ん？ ユーノは確か、なのは達と同じ年じゃなかったか？」

「うーん……僕は討論とか説教とか、そういうキャラじゃないからね」

「自分で言つなよ……っーか、俺はそういうキャラだったことか？」

「フェイトの5歳上の義兄おにでクロノっていうのがいるんだけど、そ

れに近いかな。

広暁から遊びを抜いたらほとんどクロノだと思つよ」

「……仕事人間で生真面目で頑固者？」

「そんな感じ」

「で、話戻すけどさ」

「うん？」

「フェレットの時のユーノをホルスが凄い目で見てたよな」

「……僕は美味しくないよ？」

「普段は飛んでる鳥とか野良猫とか見ても反応ないんだけどな。ただ単純に珍しかっただけかも」

「まあ、確かに。フェレットはそこら辺にいる動物でもないし……
そうだ、広暁」

「ん？」

「変身魔法、覚えてみない？」

「……念のため聞いとく。理由は？」

「面白そうだから」

「よし、ユーノ。ETPの中で一生を終える覚悟はできたか？」

「遠慮しておくよ。第一、発動時間はいいとこ10分ぐらいだろう？
この間の試験を見た限りでは」

「……チツ」

「まあ、それは置いておくとして。

広暁は自分が異質だってことは分かっているだろう？」

「器用さって意味でか？」

「そう。魔法を学び始めて、広暁ほど手広く学んでいく人はそうそういない。

魔力運用に長けているのに加えて、恐らくは生来の器用さっていう
のがあると思うんだ。

異なる系統の魔法を同時に学ぶことが出来る、思考の柔軟さと応用
力がね」

「だから変身魔法を試して遊んでみたいと」

「あつたり〜。広暁がどんな生物に変身できるのか見てみたいんだ

「

「……はあ。分かったよ」

そんなこんなで2人は、聖堂近くの芝生へとやって来た。

ここへ来る行程の間で広暁がユーノから聞いた話によると、人にはそれぞれ変身適性というものがあるらしい。

これは『どの種類の生物に変身しやすいか』というものであり、それがユーノの場合はフェレットだということだそうだ。

「僕達の一族は遺跡捜査が主な仕事だからね。

狭いところでも入っていける生物……フェレットに適性が高くなっ
ていった、というわけさ」

「なるほど。俺はどんな生物に適性があるんだろうな？」

「それは今から僕が調べるよ。ちょっとそのままじっとしててくれ
ない？」

「了解」

そう言っつてユーノは芝生に腰を降ろす。

同時に幾つかの空間ディスプレイが表示され、広暁の前に魔力球の
ようなものが出現した。

ビィ　　ッ。

魔力球は広暁の体を調べるように光を発射し、上から順番に広暁の
体に光を当てていく。

頭から足元へと光が照射し終わると、ユーノは空間ディスプレイを叩き始めた。

ピピピピピピピピピピピピピピピピ。

「ふむふむ……」

（俺の変身適性か……何だろ？
犬とか猫とかならまだいいんだけど、さすがに鰯とかゴキブリは嫌だぞ……）

一般的な哺乳類ならまだいいが、魚類や昆虫は嫌なのだろう。
広暁の頭の中を様々な動物が駆け回る。

「……………分かった!!」

「早かったな？」

「大体こんなものだよ。それで、広暁が変身適性のある動物は……………」

「カリムの執務室」

「いい子ね」

「シュツシュツ。」

「キュイ」

カリムの執務室、ここでは毛繕いが行われていた。

もつとも、ホルスの体は強靱な銀色の鱗に覆われているので、グルーミングのほうが正しいか。

ともかくにもそういうわけで、ホルスはカリムにいいように体を弄ばれているのである。

「私が広暁君の彼女……ホルス、この意味が分かる？」

「キュイ？」

「今まで一方的に私が彼を好きだった……でもこれからは違う！」

私は広暁君が好き、広暁君も私のことが好き！！

相思相愛、誰にも遠慮することなくこの気持ちをぶつけることができるのよ！！！！（昨日十分にフライングしたけどね！！！！）

「キュ……キュイ……」

妄想彼女、爆走街道乙。

頑張れホルス、その女性は未来のお前の第2のマスターかもしれないのだから。

コンコン。

「騎士カリム、入っていいですか？」

「スクライア先生ですか？ どうぞ」

ギ
……ッ。

そんな彼女の部屋に入って来たのはユーノ・スクライア。

広暁と一緒に外にいたユーノがここへ来た理由は……これである。

「あら？ その魔力でコーティングされた右腕に止まっているのは……」

「キユイ？」

「鷹です。『オオタカ』と言って、森林での狩りを得意とする猛禽類。」

『森林のハンター』と呼ばれている鷹ですよ」

「そのオオタカがどうしてここに？ 迷い込んできたのですか？」

彼女がそのように考えるのも無理はないだろう。

この協会は山の中に立っており、周りは山林に囲まれている。

故に鷹や鷲といった猛禽類も多数住んでおり、教会職員の中では餌付けしている人もいるらしい。

「いえね、この鷹は……それ」

バサバサ！ ス ツ……。 カツン。

「もしかして……誰かの使い魔ですか？」

「キュ……キュイ？」

「聞いて驚かないでくださいよ？ その鷹は……」

「俺だよ俺」

「……………え（キュイ）？」

カリムの机の上、そこに着地した鷹が……喋った。

それはカリムの愛しい恋人の声。

それはホルスの尊敬するマスターの声。

そんな2人に共通する人間の声を持つ鷹。

つまりこの鷹は……………

「……………あれ？ もうちょっと驚くかと思ったのに」

「……………（プルプル）」

「ん……………？」

カリムはそんな2匹を朗らかな笑顔で見つめており、ユーノはソファに腰掛けてゆったり。

実に和やかな時間ですね、はい。

「しかし、俺の変身適性が鳥だったとはな」

キョロキョロ。

自分の体を見回しながら、広暁は何度目かの驚き混じりの声で話す。自分が鷹に変身できるなど、考えてもいなかったのだろう。

「その中でも猛禽類……鷲とか鷹とか梟に適性が高いみたいだね」

「猛禽類ね……こつゆづのって何か理由があるもんなの？」

「本人の性格や個性が反映されるっていうのが一般的だね」

「猛禽類……肉食……ハンター……もう、広暁君のエッチ／＼」

「（……うわぁ）」

「キユイ……」

妄想彼女、爆走街道乙（2回目）。

そしてこの後なんやかんやで時間は過ぎた。

鷹に変身した広暁とホルスがランデブー飛行を楽しんだり、フェレットユーノを見た鷹広暁が野生の本能にかられ、ついユーノを捕獲しそうになったり。

ついでにカリムの変身適性を調べ、その結果が思ったより一般的で

カリムが若干悲しんだり。

あっという間に時間は過ぎ、広暁はいつもより早い午後10時半には眠ってしまった。

しかし、この早い就寝時間が広暁にとってまた新たな思考の課題を与えることになるとは……………この時の広暁に気付くよしもなかった。

「一かけ…………二かけ…………三かけて…………仕掛けて…………殺して…………日が暮れて…………」

第44話「森林のハンター」（後書き）

第44話、いかがだったでしょうか？

ところどころネタ要素がありますがつい書いてしまいました、後悔はしていません。

収納魔法についてですが、これは無印なのはでフェイトが使っていた収納魔法、その応用・上位交換版と考えると幸いです。

戦闘用の魔法もいいですが、こういった日常生活で使える便利魔法もいいですね。

では。感想・意見・間違い訂正等、お待ちしております。

第45話「神速の剣・幻惑の弓」(前書き)

第45話です。

少々長く間が空いてしまい、申し訳ありません。

では……第45話、始まります。

第45話「神速の剣・幻惑の弓」

くん??

「……………あれ？」

明晰夢……………という言葉をご存知だろうか？

夢が夢であることを夢の中で認識することであり、本来は傍観者である夢の世界で主役であること。

それが明晰夢であり……………今広暁が置かれている状況である。

「ここは……………どっかの道場か？」

今現在広暁がいるのはどこぞの剣道場の門前。

何故か左手にはサジタリウスと同じ形状をした洋弓の大きさの和弓が握られており、腰には矢が大量に収納された収納ケースが吊るされている。

肩からも収納ケースがかけられており、矢の数は合計で40は下らない。

服装はどことなく時代を感じさせる服装であり……………ぶっちゃけ着物を戦闘服にしたような感じだ。

「……………こんな服装のSAMURAI、どっかの漫画で読んだな」

どうでもいい記憶を辿りつつ、今からの行動を決める。

周りの風景を見る限りでは、自分がいるのは恐らく日本。

家屋は日本風であるし、遠くに見えるスーパールの看板はどう見ても日本語だ。

時代も自分がいた国と大して変わらないだろうし、この装備のまま

外を歩いたら確実に職質を受ける。

(装備をここに置いて外を歩くか……それとも、この道場に入るか。選択肢は2つだな)

と言つても、ここは夢の中。

現実か夢か分からないならともかく、確実に夢の中と分かっているなら選択肢はほぼ一択。

(せつかくの夢だ、楽しませてもらうか)

握られた弓の張力を確認し、右手で矢を即座に取ることが出来るか確認する。

肩も腰も問題無いと考えた広暁は、いつものプリシヨットルーティンを行い……

「(スウ ……) た の も ……」

一歩を踏み出した。

「墨谷流弓術師範代、墨谷広暁です。今日はよろしくお願いします(何故か頭の中にあつた知識です、夢ってホント便利)」

「小太刀二刀御神流師範代、高町恭也だ。今日はよろしく頼む(こいつ……気配が読めない……?)」

中央で軽く握手した2人は、牽制の意味をこめて軽く視線を合わせる。

しかし双方、共に動じる様子はない。

握手を終えた2人は戦闘開始のスタート地点である白テープのところまで戻り、準備を始める。

(……もしかして、とは思ったけど。

高町恭也って名前、あっちにいる眼鏡の女子高生。んで……)

チラッ。

「なのは……本当にいいの？ これは真剣勝負なのよ？」

「大丈夫……だよ、お姉ちゃん」

(……その隣にいるサイドアップの小学生。

どう考えてもここ、なのはの実家だよな……?)

つか、あの小学生がなのはだよな……?)

なのはの実家が喫茶店をやっていると聞いたことはある。

兄と姉が1人ずついるというのも聞いたことはある。

しかし……実家に道場があり、その兄が師範代というのは聞いたことがない。

(いや、そこまでは普通話さないか。それより問題は……)

シュン。

抜き身の刃を確認している恭也を見つつ、広暁は思案する。

今から行うのが、正真正銘の真剣勝負ということである。
小太刀二刀流の名の通り、恭也は小太刀を二本使う剣術家。
対してこちらは、竹製の弓とおおよそ50本の矢を使う弓術家。
無論、鏃は金属製であり、刺さりどころが悪ければ命を落とすだろ
う。

（命をかけた闘い……俺にできるのか？

いや、これは丁度いいチャンスかもな……向こうさんには悪いけど。
どうせ夢の中だし……いや、油断は禁物か。

だけど、刃物相手の喧嘩なんて2、3回しかやったことないし……
まあいつか。

これ以上考えても堂々巡りだ）

ホテル・アグスタで感じた疑問点を解消するチャンス。

そう考えた広暁は、改めてプリシヨットルーティンを行い、道場の
中を見渡す。

縦25m、横10m程の道場は、丁度25m6レーンのプールぐら
いの広さ。

天井の高さは目算で5m以上あり、随分と立派な道場であるとい
うことが分かる。

（この床の感じたと……矢は刺さらんか。

天井には刺さりそうだけど、壁も刺さりそうにない。

射て外した矢はそのまま床に転がることになる……）

恭也の戦闘スタイルは分からない。

しかし小太刀を二本使うということは、まず居合のような技術は使
ってこない。

それでいてリーチの短い小太刀を使うということは、打刀一本には
ない利点……例えば手数。

そっちの知識は聞きかじった程度だが、ある程度推測してシミュレーションすることはできる。

自分の中で他数種類のシミュレーションを終えたところで……恭也から声がかかった。

「準備はできたか？」

「ええ、大丈夫です（何で俺は敬語なのに、この人は敬語じゃないんだ？）」

「それでは両者。よろしいですか？」

「ああ」

「はい」

眼鏡の女子高生……高町美由希が間に立って声をかける。

抜き身の小太刀を両手に構えた恭也と、既に矢を1本弦に番えた広暁。

2人の間に僅かな緊張が走り……

「……始め！」

死合が始まった。

第45話「神速の剣・幻惑の弓」（後書き）

第45話、いかがだったでしょうか？

次回への区切りがいいということで、今回は少々短くなりました。

広暁の服装ですが、エグザムライ戦国のTAKAHIROをモデルにしました。

最初はネタ漫画だと思っていたのですが、今では単行本を全て読んでいるという始末。

何やかんやではまっています。

では。感想・意見・訂正等、お待ちしております。

第46話「全ては我が掌中にある」(Attrium625)「(前書き)

第46話です。

年末年始ぐうたらしてしまい、間が空いてしまって申し訳ありません。

タイトルの説明？ それは……後書きで。

では……第46話、始まります。

第46話「全ては我が掌中にある」(A t r i u m 6 2 5)「

↓決着↓

「……………何で俺は縁側で、貰った日本酒をお冷で飲んでんだろ？
いや、酒は美味いんだけどさ……………こんなノホホンとした空気でもいいのか…………？」

つい数時間前まで本気の死合をしていたとは思えないのんびりとした空気。

無論、死合とは言っても、本当にとどめをさせそうになったら寸止めするというルールではあった。

しかしその実、広暁は体の各所に切り傷を負っているし、恭也にいたっては太腿に矢が刺さった。

その状態で死合を続けたのだから、俺も恭也も狂ってるなと考えたものだ。

「出たつちやあ出たのかねえ……………」

「何がだ？」

「……………驚くので気配を消して後ろに現れないで下さい」

「これがデフォだからな。というより、どう見ても驚いているようには見えないが」

「これが地の性格なので。右足は大丈夫でした？」

「2週間もすれば治るそうさ。それはそうと、君は確か20歳はたむだっ
たよな？」

「（治るの早くね？）そうですけど？」

「だったら僕より年上だ。敬語はやめてもらいたいのだが」

「……OK、俺もそっちのが楽だ（ようやくかい）」

そこまで言っつて、恭也は広暁の隣に腰を降ろし、お盆を置く。
お盆には湯飲みと煎餅が乗せられており、湯のみに並々と注がれて
いるのは日本茶だろう。
それを手にとった恭也は軽く吹いた後、湯飲みに口をつける。

ゴク……ゴク……。

「……ふう」

「恭也さんは19歳？」

「恭也で構わない。確かに19歳だが？」

「だったら俺も広暁でいいよ。20歳はたむの俺より年上に見えたからさ」

「分かった。年不相応に見えるとはよく言われるな」

「落ち着いてるし、凜としてるもんね。何か俗っぽい趣味ある？」

「読書と……鍛錬と……鍛錬と……鍛錬と……」

「……すまんかった」

こんな、現代に生きる侍っぽい人もいるんだな。そう考えた広暁だったが、恭也がこちらを鋭い目で見たのですぐに気持ちを切り替える。鋭いながらも殺気はなく、ただ問い詰めるような目だ。

「さっきの死合だが」

「ん？」

「あの形での決着をどう思う？」

「あの形って……ああゆうのもありなんじゃないの？こんな決着のつきかたもあるんだな。ぐらいにしか考えんかったけど」

「……柔軟だな、広暁は。僕はあの形での決着に納得がいかない」「んなこと言われてもな……」

結論から言うと、死合は引き分けだった。

広暁は大小含めて様々な切り傷を負い、恭也は右足に矢が刺さった。そんな状態にも関わらず、いや、そんな状態など関係なく2人は死合を続けた。

そして、広暁の矢が残り1本となり、恭也の握る小太刀が一本になったところで……。

ザン！ シュン！

クルッ！ ガッ！

「……………」

恭也の小太刀が広暁の首筋にあてられ、広暁の矢も恭也の首筋にあてられる。

弓に番えられていないものの、鏃は頑丈で鋭い金属だ。人の首を切り裂くことなど容易いだろう。

「それまで！！ この勝負、引き分けとします！！」

「まさか直接矢を首に突きつけられるとは思わなかったぞ」

「とつさの行動だったんだよ。あそこで弓に番えてたら俺の負けだったな」

「広暁こそ、態々首筋を狙わずに僕の顔を狙っていたら勝っていただろう？」

「そっちだって……………これじゃ堂々巡りだな」

「この話は終わりにするか……………」

剣士として、矢を直接突きつけられるのは恥だと感じたのか。それとも、ただ単に頭が固く、柔軟な発想ができないのか。

どちらにせよ今回は結論が出なかったようで、2人は会話をやめてそれぞれ飲み物に口をつける。

「……………」

そこに訪れるは静寂の時。

元来2人共お喋りな性格ではなく、ワイワイ過ごすより静かに過ごすほうが好きな2人だ。

美味しい飲み物、目を癒す星々、共に飲む仲間。

これ程の条件が揃っているならまず気まずい空気になることはない。

（恭也はお茶だけだな…………ん？

確か前ザフィーラと飲んだ時もこんな感じだったような…………）

「どうした？」

「いや…………人と静かに飲むの、久しぶりだからさ」

「大学の同級生が飲み会というのをやっているが…………騒がしいものなのか？」

「大体はな。酔いやすい奴に限って飲みすぎるから面倒臭い。

全員が全員節度を守ってくればまとめやすいんだけどね…………」

「ということとは…………広暁は酒に強いのか？」

「一升瓶数本で酔わないくらいには」

「十分強いと思うが」

「母さ……母方の家系が皆強くてな。」

「こればっかしは遺伝的なものだからどうしようもないと思う」

「ふむ……うちも父が酒に強いから、僕も強いのかもしれんな」

「飲みすぎないに越したことはないけどな。」

「いくら酔わなくても、飲み過ぎたら大抵は腹壊すし」

左手に持った透明なグラス、そこに注がれるは同じく透明な液体である日本酒。

下弦の月の光を透過したグラス、そこから漏れるは分散された月光。夜は白にしか見えない月光も、グラスを通して見れば僅かに色がぶれる。

それを見るもまた一興、今宵の肴は恭也との会話。

「……………ふう」

「トッ……」。

「聞いてもいいか？」

「答えられることなら」

「さっき「出たっちゃあ出たのかねえ……………」と言っていたが……………？」

「……………少し悩んだことがあってな。その答えが出たような気がしてな」

「ふむ……………」

恭也が広暁に問いかけると、広暁はグラスに残った日本酒をグイと飲み干す。

一気に飲み干したことで今まで飲んでいたより強くアルコールの匂いが鼻を抜ける。

軽く息を吐いて呼吸を整えた広暁は、質問に答えるために口を開いた。

「殺してさ……どう思う？」

「……は？」

広暁はそのようなことを口に出す人間ではないと考えていたからだろうか、広暁の口から出た言葉は恭也にとって衝撃だったのかもしれない。

彼の体は固まり、目はまるでこの世のものを見たとは思えない程硬直している。

「いやさ……俺達がやってた死合も、下手したらどっちか……最悪2人共死ぬ可能性もあった。ただ、俺達は死合った。お互いに考えていたことは違っただろうけど」

「……」

それはすなわち倫理の根源。

弱肉強食の自然世界を生きる生物にはまず現れない感情。生きるか死ぬか、食うか食われるか。

そのような世界を生きる生物にはまず現れない感情。

「例えばだけども」

「うん？」

「殺せはしないけど莫大な力……そういう力があつたらどう思う？」

「抽象的すぎてよく分からないのだが」

「そうだな……漫画とかであるような、魔法が日常にある世界。それを効率的に使うには杖が必要で、どんなに強大な魔法でも人を殺さない『非殺傷設定』つてものがある。

この設定にしておけばどんなに傷ついても人を殺すことはない。だけどその力を使える人は生まれながらに決まっっていて……言うなれば一種の才能みたいなもん。

使えない人は一生努力しても使えない。

しかもその世界は魔法万能の世界で、拳銃や刀みたいな部器は淘汰されてる。

魔法ならどんなに強大でも人を殺さずにすむからって理由でな」

「ふむ………」

話を聞いた恭也は顎に手を添えて考える仕草をとる。

広暁の話がやけに具体的なのは気になるが、自分にとってもこれは興味深い事例だと思っっているのだろうか。

そのまま数瞬した恭也は、広暁の口調とは逆の軽い感じで口を開いた。

「分からないな」

「……へ？」

「もし僕がその世界で生まれ育って……仮に魔法を使える側の人間としようか。もしそうなら力を持ったことを嬉しく思うし、使いこなすために研鑽を積むだろう。」

魔法を使えない側に生まれたとしたら、最初のうちは魔法を使える側の人間を恨むかもしれない。

だが、恨んでも仕方ないとして別の道をすぐに歩むだろうな。

刀や銃が禁止された世界なら、武道の道を歩むか……そもそもそっち方面の道に行かないのかもしれない。

うちの父や母のように喫茶店を開くこともあるのかもしれないな」

「……強いな、恭也は。俺はそんな簡単に割り切れんと思う」

「所詮は生まれ育った地域・国の価値観だ。」

別の国に言つてギャップに悩むことはあるかもしれないが、受け入れて進むしかないさ」

「価値観の違い……か」

納得がいったのかいかなかったのか。

予想通りだったのか予想通りでなかったのか。

相も変わらずこういった時の広暁の表情は分かりにくい、そして心情を読み取りにくい。

光と影、相反する2つの心。

人間が本来持つはどちらの心か。

正義が光とは限らない、悪が闇とは限らない。

2つが混ざり合った混沌カオスこそ至高と言ったのは一体誰だったか。

「だが」

「うん？」

「もしこの世界にそんな力があつたとすれば、僕はその力を嫌うだろうな」

「この世界に？」

「広暁も分かっているだろう？」

使う武器が刀か弓矢かの違いだけで、僕達が使っていたのは人を殺すための武器だ。

精神鍛錬や己を鍛えるためとってこの道に入る人もいるし、今では剣道や弓道のような武道……より安全化されたスポーツとして大衆に広まっているのは事実とはいえ、それは変わらない」

「……………」

「そんな殺しの道具を使っている僕だ。

この小太刀を握るには生半可な覚悟では駄目ということが分かっている。

だけどさつき広暁が例に出した魔法はどうだ？

人に向かつて放つても死にはしないから、力を使うという意味での覚悟は僕より少ないだろう。

それでいて生まれながらに使えるか使えないか決まっているから、使えない人は努力のしようもない。

剣の道も才能の有無で優劣はあるが、それ以上にものを言うのは努力だ。

努力すら出来ずに道が決まるなんて、不公平じゃないか」

「努力の有無か……（そういう見方もありだな）」

トクトクトクトク……グイ。

「……………ふう」

再度日本酒をあおった広暁、既に瓶の中に日本酒はない。最後の酒であるにも関わらず躊躇いもなく一気に飲んだ広暁は、そのまま黙りこくってしまった。

「……………」

かと言って、気まずい雰囲気になるわけでもない。

20歳と19歳の青年2人が夜の縁側でポーツとしていても、特におかしいことは起きない。

腐女子の君、変な想像をしたら駄目だぞ。

「ありがとな。確証が持てたような気がする」

「役に立てたようでは何よりだ。僕はそろそろ戻るが、今日はゆっくりしていつてくれ」

「本当に泊まってるのか？」

「死合った仲だ、それぐらいの面倒は見させてもらいたい」

「ありがと。お言葉に甘えさせてもらっわ」

スクツ……………テクテクテクテク……………。

時刻は間もなく午前零時、縁側で1人月見の青年。胸に秘めるは黒き輪廻の獄炎、派生するは己が境遇への妬み。されどその心を闇が支配することはない、濃霧が立ち込めていると言ったほうが正しいか。

(ミッドチルダに来ることがなきゃこんなこと考えんかったよなあ。誰でも使えるけど、簡単に人を殺せる武器。使う人は限られるけど、人を殺すことはない武器。勿論殺傷設定で使うこともあるだろうし、非殺傷設定でも余波や二次災害で結果として殺すことになるかもしれない)

世の中結果のほう的大事という風潮であるが、過程や方法のほうが大事という時もある。

結果としてどうなるかが問題ではなく、何故そのような過程になったか、どうしてそのような方法をとったかなど。

(所詮は生まれ育った世界の常識の違い。極少数……いや、それよりもっと少ない人だけが持つ悩みってところか。

なのはもはやても小学校3年生の頃からミッドチルダを行ったり来たりしてて、中学卒業と同時にミッドチルダに完全移住って前に言ってたから……俺のほう悩むのは必然っちゃあ必然か)

誰に相談できるわけでもないわけでもない悩み、だがその相手を見つめるのは面倒臭い。

1人で考え込んで結論を出す性格の広暁にとって、誰かに相談するという選択肢はないのだろう。

(まっ、これ以上考えても結論は出そうにないし。こんだけ1つのことで悩むのも久しぶりだ、どうせならもっと悩んで結論を出したいね)

ゴロン……。

寝転がって全身に月の光を浴びる。

さすがにここで眠りにつくつもりはないが、寝転がりたい気分になったのだから仕方がない。

寝転がる際に感じた自身の体の痛みを確認しつつ、広暁は双眸を月へと向ける。

(これは夢……覚めたら聖王教会に戻ってるはず。多分だけど、寝たらそのままこの夢とはお別れだ。

……まあ、名残惜しいわけじゃないけど)

ガラッ……………。

(…………誰だろうね、こんな時間に)

縁側で寝転がっていた広暁は玄関の扉を開ける音に気付いた。

先程の足音を考察するに、恭也は自室である2階へと向かったはず。恭也の両親である土郎と桃子も寝ているはずだし、残るは長女の美由希と次女のなののみ。

この2人のうちどちらかが出ていったのだろうか……生憎と、それ

に気付いた人間がここにいた。

（音から判断すると、今のは玄関を開けて出ていく音だ。この時間に出て行くってことは……知られたくないからか、突発的なことが起きたか。

にも関わらず、俺が気づく可能性を考えてなかったか、俺がここにいることを忘れてた人。

んで、昔聞いた話を加えて総合的に考えると………なのはだな）

詳しくは聞いてないが、なのはは9歳の時から魔法に目覚めたと言っていた。

もしかすると、それに関係することなのかもしれない。

今日は見ていないが、フェレット姿のユーノも一緒に出ていったのだろう。

そう考えた広暁は、これ以上このことで考えるのを止めた。

（追いかけるのもめんどいしな、もうちょっと月の光を浴びたら寝るか）

風流っぽいことを言った自分をちょっとキザかなと思いつつ、広暁は再び相貌を月へと向ける。

夜空に浮かぶ月、それは満月から新月へと向かう過程の半月、下弦の月。

（いかん……マジで眠くなってきた。そろそろ起き上がらないと………）

〜遅いよ〜

チュンチュンチュンチュン……。

(……………朝チュンなんていつ以来の経験だろ?)

目覚めたらそこは聖王教会の一室。

広暁が寝泊りに使っている客室であり、昨日確かに広暁が寝た部屋。

朝起きたら部屋には暖かい日光、そしてチュンチュン鳴く鳥達。

俗に言う朝チュンである。

(夢の内容をここまで正確に覚えているの、初めてかもな。とりあえず記録しとくか)

ブワアアア……。

キーボードを出現させ、夢の内容を時系列で打ち込んでいく。いつもは広暁が起きると挨拶をするサジタリウスは黙っており、ホルスはまだ夢の中。

ただキーボードを叩く音だけが客室に響く。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。……。

(恭也にいいヒントは貰ったけど……まだ答えは出てない。

これから働いてく中でゆっくり考えていけばいい)

「……………と。 終りよ〜」

『おはようございます、マスター。どのような夢を見たのですか?』

広暁の行動が夢で見た内容故と分かっていたのだろう、サジタリウスは広暁の行動が一段落したところで声をかけた。

付き合いの当初から息の合っていたこのコンビ、最近ではもはや阿吽の呼吸レベルと言っても過言ではないのかもしれない。

「悩んでたことを解決……とまではいかんけど、結構助けになった夢だ」

『それは僥倖です』

「ああ……………ん？」

『どつとれました？』

「ちよつと考える」

『了解しました（何か夢に矛盾点でもあったのでしょうか？）』

残念ながらそうではない。

矛盾点などという粗探しのような問題ではなく、この夢の根元に関する問題。

（俺は話に聞いただけで、なのはの家族の詳しい容姿までは知らない。

なのに夢に出てきたなのはの家族に、全く違和感を感じなかった。それだけじゃない……………今日見た夢も、どつかで見たことがあるような気がする）

広暁がなのはと教導について話すことになったきっかけ、それは夢が原因であった。

そして、その時見た夢もまたどこかで見たことがあるような内容であり、その夢がきっかけとなって前のような行動に出た。

だがしかし。前回の夢と今回の夢、明らかに違つところがある。それは……………

（前の夢は傍観者だったのに、今回の夢は思いつきり主人公だった……………）

そう、立ち位置の違いだ。

前回の夢は完全に傍観者であり、なのはがスバルを打つのをただ見

ていただけだった。

しかし今回の夢は、完全に主人公であった。それだけでなく、明晰夢と分かっていて主人公を演じていたのだ（夢の中では主人公という認識はなかったが）。

（いや、夢での俺の立ち位置はどうでもいい。

問題は……またどっかで見たことのある夢を見たってことだ。

なのはの昔のことなんてほとんど知らないのに、今日見た夢は見覚えがある……怪しすぎるぞ、おい）

今の広暁にとって考えるべきは、見た夢に見覚えがあることであるらしい。

もっとも……

（……………どこで見たか全然思い出せねえ……………）

全然思い出せないのだが。

見覚えがあるのに思い出せない、本当に歯痒い。

今の広暁の顔を見れば誰でもそのように読み取れるであろう。

コンコン。

「!？」

「広暁君、起きてる？」

「おゝ。今起きた」

「朝食の用意ができたから、着替えたら食堂に来て。皆待ってるわ」
「了解」

どうやら思考はここで中断せねばならぬようだ。
カリムの挨拶に答えた広暁はベットから出て窓へと向かい、朝日を浴びて体をリフレッシュする。

「ん〜……………まっ、のんびり考えてくか」

「キュイ〜……………」

「おはよう、ホルス。今日もいい天気だぞ」

「キュイ……………キュ？ キュイ〜」

どうして自分はここにいるのか？

見覚えのある夢、それが意味するものは？

現実と空想、二次元と三次元。

本来交わることのない2つの世界、何故それが交わったのか？

その結論に段々と近づいているのを認識しつつ……………広暁は朝食をとるため食堂へと歩みを始めた。

「たまには白米と味噌汁の朝飯が食べたいなあ……」

第46話「全ては我が掌中にある」(Attrium625) (後書き)

第46話、いかがだったでしょうか？

念のため記しておきますが、この作品はアンチ管理局ものではありません。

リアルに存在するある程度年のいった人間が魔法を使えるようになった場合、必然的に本文中のようなことを考えると、執筆しました。

そして……前書きで記したことを説明しましょう。

このサイトで『とある魔術』関係の小説を読むことがあり、『広暁に魔法名をつけるとしたらどうなる？』という考えのもと、タイトルが完成しました。

『Attrium』はラテン語で『神算』。

三桁目の6は機動六課。

二桁目の2は1をスターズ、2をライトニングとした場合。

一桁目の5はライトニングの五番目、ライトニング5。

これらが合わさり、Attrium625が広暁の魔法名として考えられました。

神算は『人知では図り得ない謀』^{はかばかし}という意味で、少々オーバーですが広暁にはぴったりにかと思えます。

では。意見・感想・訂正etc、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9458o/>

リリカルなのはStrikerS ~ 黒炎竜を従える者 ~

2012年1月6日19時10分発行